眠狂四郎無頼控 (三)

柴田錬三郎



新潮文庫

眠狂四郎無頼控（三）

柴田錬三郎



カバー　中尾進

新潮文庫

眠狂四郎無頼控（三）　柴田錬三郎　し 5 8　新潮文庫　520

9784101150086

1910193005203

定価520円（本体505円）

狂四郎に挑戦し、その高慢の鼻をみごとに打ち砕かれた高姫の指嗾（しそう）する覆面の男たちによって捕われの身となった病軀の狂四郎が、地下牢で公儀勝手方組頭の兵堂掃部（かもん）から聞いた奇怪な事件……。六十貫の輸入金のありかを記した二枚の薄い玻璃（はり）を眼にはめ込まれ、一夜のうちに盲目になった娘……。江戸市中に連続して起る怪事件に巻き込まれて妖気と殺気を呼ぶ狂四郎——。

ISBN4-10-115008-7

C0193　P520E

新潮文庫

柴田錬三郎の本

- 剣は知っていた（上・下）
- 江戸群盗伝（正・続）
- 美男城
- 眠狂四郎無頼控（一〜六）
- 眠狂四郎独歩行（上・下）
- 眠狂四郎殺法帖（上・下）
- 孤剣は折れず
- 赤い影法師
- 運命峠（前・後）
- 剣鬼
- 眠狂四郎孤剣五十三次
- 眠狂四郎虚無日誌
- 眠狂四郎無情控
- 眠狂四郎異端状
- 徳川浪人伝（上・下）
- 御家人斬九郎
- 邪法剣
- 人間勝負（上・下）
- 一の太刀
- 孤独な剣客
- 浪人列伝
- 最後の勝利者（上・下）
- 無念半平太
- 眠狂四郎京洛勝負帖
- 決闘者 宮本武蔵（上・中・下）
- 隠密利兵衛

カバー印刷　錦明印刷　　デザイン　新潮社装幀室

新潮文庫

眠狂四郎無頼控

（三）

柴田錬三郎著

新潮社

新潮文庫

眠狂四郎無頼控

（三）

柴田錬三郎著

新潮社版

1431

目次

眠狂四郎無頼控

（三）

二人狂四郎

一

美保代は、広い桟敷殿（さじきどの）の片隅（かたすみ）に、ひっそりと坐（すわ）っていた。

正面に、巨大な竜胆紋（りんどうもん）を染抜いた浅葱（あさぎ）幕が重々しく垂れていた。やがて、それがするすると開くと、仄暗（ほのぐら）い舞台に、脇息（きょうそく）に倚（よ）って、片手で額を押えて、苦患（くげん）に悩む武士の姿が浮き出た。

——ああ、これは『土蜘蛛（つちぐも）』なのだ。

美保代は、思った。

武士は、源頼光（みなもとのよりみつ）であった。

固唾（かたず）をのむいくばくかの静寂が過ぎて、頼光が、額から片手をはなした。

瞬間、美保代は、あっとなった。頼光は、眠狂四郎その人であった。血の気の全く失（う）せた蒼白（そうはく）な顔色、空虚なまなざし、肩のあたりの孤独の翳（かげ）……。

美保代の乳房の下は、遽（にわか）に音急がしく喘（あえ）いだ。

女房が一人、典薬の頭（かみ）よりの薬を持って、しずしずと舞台に登場した。

〝……浮き立つ雲の行方をや、風のここちに尋ねむ〟
「これは、頼光の御内に仕え申す胡蝶と申す、女にて候」
と名のったが、こちらへ向いた顔は、まぎれもなく美保代自身のものであった。
胡蝶は、頼光にむかい、
「おん心地は何んとお入り候ぞ」
と、問う。
「昨日より心地も弱り、身も苦しゅうて、今は末期を待つばかり——」
呟きすてる頼光を、胡蝶はやさしく慰めて、立つ。
そのあとに、
〝……月清き、夜半とも見えず雲霧の、かかれば曇る心かな〟
と、歌につれて、頭巾を眼深に被った怪しい僧形——すなわち、土蜘蛛が出現した。
「いかに頼光、おん心地は何んと御座候ぞ」
「不思議やな、誰とも知らぬ僧形の、夜陰に及んでわれを訪う。その名はいかに、おぼつかな」
「おろかな仰せに候や、悩みたもうも、わが背子が、来べき宵なりささがにの——」
衣通姫の詠んだ歌を、謎のように云いかける。
頼光は、じろりと僧形を見やり、
「蜘蛛のふるまい、かねてより、知らぬと云うに、なお近づく、姿は蜘蛛の如くなるが——」

「かかる千筋の糸すじに」
「五体をつづめ」
「身を苦しむる」
〝……化生(けしょう)と見るよりも、枕(まくら)にありし膝丸(ひざまる)を、抜き放ち、丁(ちょう)と斬(き)れば――〟
と見た美保代は、
あっ！　無想正宗(まさむね)！
と、心に叫んだ。
〝……背(そむ)くるところをつづけさまに、足もためず薙(な)ぎ伏せつつ――〟
白刃の光芒(こうぼう)が、舞振りを超えて、舞台を凄(すさま)じく走るさまは、稲妻のはためくに似た。
一刹那(せつな)、正体あらわした土蜘蛛が、ひらっと宙に翔(か)けあがり、頼光は、よろっとよろめいた。
「狂四郎様っ！」
美保代は思わず絶叫して……はっと、目ざめた。
びっしょりと、全身に盗汗(ねあせ)があった。
夜具をはねて、しずかに身を起した美保代は、ほっとふかい溜息(ためいき)をついた。
この時、美保代は、いつの間にか部屋が仄かな明るさでつつまれているのに気がついた。
何気なく、視線をまわし、雨戸が一枚はずれているのを見出(みいだ)すや、急に、身うちに鋭く反応する殺気がそこにひそんでいるとさとった。

公儀隠密(おんみつ)に、いつかは襲われる覚悟はできている美保代であった。

そっと床を抜け出て、黒棚(くろだな)の文箱(ふばこ)の中から、雛屋杜園(ひなやとえん)が入魂の男雛女雛(おびなめびな)の首をとり出して懐中し、床柱を背に立った。

すると、それを待っていたかの如く、一枚だけ、しろじろと月光を吸った障子に、おぼろに一個の黒影が映った。

美保代は、懐剣の鯉口(こいぐち)をきった。その嫋(たお)やかな肢体(したい)には、並の婦人には想像もつかぬ武技が鍛え秘められてある。なまなかの腕前の攻撃者に対して、ひけをとらぬ備えは、すでに充分の修得がしてあった。

障子が、さらりと開かれた。

頭巾で顔をつつんだ、黒衣着ながしの姿が、月光を背にして、佇立(ちょりつ)したなり、濛(もう)として剣気を漂わせた。

「何者です？」

その誰何(すいか)をあびて、音もなく、一足畳へ踏み込んだ。

「お小直衣雛(このうしびな)の首を貰(もら)いたい」

ぞっとする程陰気な声音で、まず、そう云いはなった。

美保代が、かたく口をひきむすんで、睨(にら)んでいると、対手(あいて)は、さらに一歩、ゆっくりと寄った。

「そなたが、いま、ふところにした――」

それをきくや、美保代の背すじを、氷のような戦慄が走った。
この敵が、外で、わざと時間を置いたのは、こちらにそうさせるためだったのだ。どこにも、覗き見する隙間はない筈であったから、これは、野性のけもののような敏感な聴覚をそなえている証拠であった。たとえ覗き見する隙間があっても、この敵には、それが不可能であることは、美保代が床柱から壁へと身を移すにつれて、糸を引いたごとく廻した顔が、月光をあびた時、あきらかとなった。
——盲目！
美保代は、はっと息をのんだ。
その双眼は、無慚にも、目蓋に真一文字の刀痕をのこして、永久にふさがれていたのである。
左馬右近であった。しかし、美保代には、何者とも判じることは出来なかった。
ただ、美保代に直感されたのは、この男は、公儀隠密ではないということであった。
「欲しい理由をききましょう」
「おれのものだからだ」
「あらぬことを！」
「眠狂四郎が、そなたに、なんとごまかして渡したか知らぬ。が、その雛の首は、水野越前が呉れた品とはちがうぞ。人形師雛屋杜園が復元したしろものだ。おれは、杜園を斬って手に入れた。そのおれから、眠が奪い去った。……おれが、また奪いかえすのに、なんの不思

議がある！」

とうそぶくうちに、醜くつぶれた双眼が、いまにもかっと裂け瞠くのではないかと思われるくらい、びくびくっと烈しく痙攣した。

二

美保代は、右近の言葉を信じなかった。

——盲目ならば、遁れる隙がある！

そのことのみを考えて、翻転の刹那をねらいつづけた。

対手が、なみなみならぬ手練者であることは、美保代も、充分に察知出来た。だが、盲目という最大の不利の条件をもつ敵だと見た瞬間から、美保代は、心に余裕を生んだのである。

その余裕が、実は、はかない錯誤でしかなかったことが判明したのは、その直後であった。

右近は、美保代が襖へ伝い寄って、引手へ指先をかけるや、冷然として、

「逃げようとするのは無駄だ。……おれは、目あきの時より、対手の動きが、よくわかるようになって居る」

と云った。

かまわず、美保代が、さっと襖をひき開けた——その軋りに間髪の呼吸を合わせて、右近は、腰間から、白刃を放っていた。

ぱっと、美保代の細胴から、扱帯が散った。

女の本能で、片手が前をおさえて、膝を折る——。

次の一瞬、美保代は、背後から、咽喉へがっきと鉤腕をかけられ、懐剣を持つ手をねじあげられていた。

そのまま、ずるずると一間余ひきずり戻され……呼吸の止まる苦しさに、夢中で鉤腕へ、前をおさえていた手を掛けた。

寝衣は、しどけなく、左右へすべり落ちて、男雛女雛の首が、畳へころころところがった。

「むむっ……むっ……」

呻きつつ、美保代は、身をねじって、あらわになった屈辱の裸形をかくそうとした。そのもがきは、かえって、右近の残忍性をそそることにだけしか役立たなかった。

背中の急所稲妻へ拳をひと突きして、美保代を当て落した右近は、そのしなやかな肢体を、どさっと投げ出しておいて、片膝をつくと、見えぬ目をじっと注いだ。

仲春の冷たい夜風が、月光にさそわれて、寂寞たる部屋へ流れ入り、右近のそそけた鬢をなぶった。

「眠め！」

ひとこと、右近の口から、憎悪に満ちた声音が吐き出された。

狂四郎のために、永劫の暗闇の世界へ送られた右近は、爾来、夢寐の間にも、この敵に勝つ術を考えつづけて来た。世間に名の通った流派を修業した兵法者ならば、盲目となることは、生ける屍と化すのを意味したろう。右近は、そうではなかった。自ら編んだ法形につけ

たその名も無眼唯心流といった。すなわち、彼の秘術は、まずその構えの奇怪さによっても明らかなごとく、爛たる眼光をもって対手を威圧するのではなかった。衣冠束帯者が、笏を持ったごとく、刀身を顔前二寸と離さずにひきつけて、切先を天に突き立てる構えは、あたかも、おのれがいずれは盲目になることを予測して、かかる工夫をしたかとさえ思われるものであった。

実は、狂四郎が右近の両眼を斬ったのは、無眼唯心流に視力は無用だろう、という皮肉な処置であったと考えられる。

その嘲弄を、右近が、倍にして狂四郎へたたきかえすべく、この一年間、いかばかり心魂を削ったか、想像にあまりがある。

そして——ついに、右近は、盲目が、目あきにまさる秘剣を使う術を会得したもののごとくである。

——お小直衣雛を奪っておけば、必ず、狂四郎が、取りかえしに来る。その時こそ、おれの秘術を見せてやる！

その肚でやって来たのだ。

ところが、一歩、この部屋へふみ込んだ時から、右近の復讐心は、さらに狂暴な獣欲を加えたのである。

——この女を犯してやる！

雛の首を奪われ、愛人を犯された狂四郎が断腸憤怒するさまを想像して、右近の五体は、

もうその憎悪の炎に炙られたように熱くなったのである。いかなる時も水のごとく冷徹な思念を失わぬ狂四郎を、もの狂おしく惑乱させるのには、まさにこの女を犯すことこそ——と、右近は、心中どす黒い歓喜を沸かせたのである。

かすかに痙攣する十指が、意志を喪った清楚な女体へのびた。

鱗と化した厚い裏皮をもつ爬虫のようなてのひらの片方は、白綸子の襟をすべって、ふっくらとあたたかな柔肌を、ぬめぬめと撫でつつ、甘肉の盈ちた白桃の一顆をねらった。もう一方の淫指は、柳腰を包んだ紋縮緬を透してその円やかな盛り肉の感触を愉しみつつ、そろそろとその下着をしわめて、手繰りあげようとした。ほっそりとした滑石のような白い脛が、膝が、紋縮緬を畳にすべりおとして、月光に妖しく濡れつつ、あらわになっていた。

と——。

爬虫の十指が、はたと蠢きを停めた。

雨戸のはずされたそこに、ひとつの影が、すっと出現したからである。

右近は、その気配へ、全神経をあつめて、いつでも抜打ちのとれる姿勢を整えた。

その影が、しずかに、二足あまり畳をふむや、右近の感覚は、何者であるかを素迅く察知していた。

「貴様は、おれの後を尾けて来たな」

それにこたえようとはせず、右近の背後にまわったその影は、ころがった二個の雛首をひろいあげた。

「この雛の首は、わたくしがお預りいたします。……戻りましょう」
感情をいっさい断った冷やかな声音だった。すると、右近の面相が、夜目にも凄じくひき歪んだ。
「おい、静香！　貴様、そこで見物せい。おれが、この女を犯すさまをな――」
「お止しなさいませ」
静香は、心を遠くに置きすてたように、抑揚のない口調で、たしなめた。
「貴様は、この女を憎んでいる筈ではないか！」
「いいえ。憎しみも怨みも、なにもかも過ぎ去ってしまいました」
「おれは、狂四郎を逆上させてやりたいのだ！」
「雛の首を取りあげれば、狂四郎様をおびき寄せる目的は、はたされるではありませぬか」
「それだけではものの足らぬ。おれは、彼奴が猛った野獣のように襲って来るのをのぞむのだ。いや、是が非でも、そうさせねばならぬ。……見るのがけがらわしければ、庭へ出て居れ」
右近は、矢庭に、美保代の上へのしかかろうとした。
刹那――右近は、背中に、静香が、畳からひろいとった美保代の懐剣を擬すのを直感した。
「おれを殺すというのか？」
「貴方は、わたくしなどに殺されるお人ではございますまい」
右近は、いまいましげに舌うちした。
いまでは、静香は、右近にとってはなくてはならぬ伴侶であった。もはや、右近は、静香

に見すてられたならば、乞食(こじき)にでもなるよりほかはなかったのである。

静香は、右近がひるんだと見るや、さらに冷やかに云った。

「わたくしは、狂四郎様から、貴方の身柄(みがら)をお引受けしたのでございます。そのことをお考えなさいませ。わたくしをお断りになった後で、どのようなむごたらしいご所業をなさろうとも、それはご自由であろうと存じます」

「うるさいっ!」

ぬっと立った右近は、振り向きざま、静香の頬(ほお)へ、力まかせの一撃をくれた。

どどっとよろめいて、床柱へしたたか胸を打ちつけた静香は、しばらく息も出来ぬ苦しさに、柱の裾(すそ)に蹲(うずくま)っていたが、右近が立去る跫音(あしおと)に、ようやく身を起した。

ぐったりとなった美保代のからだを、床の中にはこび入れておいて、静香は、ふかく俯向(うつむ)いて外へ出た。

春雪がところどころに消えのこった庭の中程に、右近は、悽愴(せいそう)の孤影を長く這(は)わせて、待っていた。

世にも陰惨な悪縁に結ばれた夫婦は、一言も交さずにより添うて、夜靄(よもや)の中を遠ざかって行った。

三

西丸老中(ろうじゅう)水野忠邦(ただくに)の側頭役(そばがしらやく)武部仙十郎(たけべせんじゅうろう)が、ひょっこり、この古寺の離れをおとずれたの

は、次の日の午すぎであった。

障子を開いて、両手をつかえた美保代を眺めて、仙十郎は、眉宇をひそめた。

「そなた、すっかり加減がよくなったと金八が申して居ったが、大層顔色がわるいの。まだ本復ではない模様じゃな」

「…………」

美保代は、ただ、黙って頭を下げただけであった。仙十郎は、この時は、その血の気の失せかたを病気のせいとばかり思って、座に就くと、常のごとく好々爺然とした明るい表情で、

「早速じゃが、狂四郎はいま頃、どこをさまようて居るか――便りでもないかの？　去年の春頃までは、京にいたことは知って居るが、その後、とんと音沙汰なしじゃ。路銀の請求もして参らぬし……どうして居るものか？」

と、訊ねた。

美保代は、立って、文箱から、一枚の詩箋をとり出して来て、仙十郎の前に置いた。

「ふむ――」

仙十郎は黙誦した。

狂夫明月の下

沈酔歓を成さず

猛気何に依って散ぜん

剣鳴って孤影寒し

「十日あまり前に、八幡船（ばはんせん）の水主（かこ）が届けてくれたのでございます」

「八幡船？」

「はい」

美保代は、水主政吉の話をつたえた。

仙十郎は、美保代が口をつぐんでからも、しばらく、何事かを黙考していた。

やがて、ぽつりと、

「あの男は死なぬ。いや、死んでくれては困る」

と、云った。そっけないその言葉の中に、限りない愛着が含まれていた。

それから、あらためて、深い憐憫（れんびん）の眼眸（まなざし）を、美保代に注いだとたん、仙十郎は、そのあお褪（ざ）めた顔の色がただならぬ苦悩に堪えようとしているものであるのをみとめた。狂四郎の安否を気づかう不安の気色とは、おのずからちがったいたいたしさである。

「そなた、どうした？」

問われて、美保代は、両手を膝から畳に落した。

「申すがよい。気が楽になる。きくのが余人ではない。狂四郎の後見を自任して居るわしだ」

促されて、美保代は、こみあげる嗚咽（おえつ）を鎮（しず）めるのに、数秒を費してから、

「昨夜、曲者（くせもの）のために、お小直衣雛の首を奪い去られたのでございます」

「隠密かな？」

「いえ――」

目蓋に刀痕をとどめた盲目であったときくや、仙十郎は、

「左馬右近じゃな」と、呟いた。

その名をきいて、美保代は、あっとなった。昨夜は、顔をつつんでいたが、それをとれば、半面に不気味な痣をもっている人物であったのだ。

曾て、この寺に出現して、狂四郎の額へ、浅傷を与えて去ったおそろしい強敵である。

「よいわさ。狂四郎が戻って来れば、さっさと取りかえすじゃろうて。そのためにも、狂四郎が、早く戻ってくれねば困る。……実は、この一月あまりのうちに、江戸で屈指の町道場主が、三人まで、何処の何者とも知れぬ刺客に、夜の外出をねらわれて、斬られて居る。刺客が、堂々と正面から挑んで居る証拠には、道場主は佩刀も抜き合わせて居るし、斬られたところは、いずれも面を縦一文字――。そしての、その胸に、血汐で、狂の一字が記されてあった。……下手人は眠狂四郎、とみせかける巧妙な手段じゃ。すでに、街なかでは、狂四郎が江戸へ戻って、また妖剣をふるいはじめたと噂して居る。左様さ、左馬右近も、この噂を信じて、狂四郎をおびき寄せるために、そなたから雛の首を掠めて行ったものだの。……わしは、しかし、この兇行を、狂四郎に対する挑戦と読んだ。斬られた道場主は、いずれも、技倆、胆力ともに衆を抜いた人々であった。これを一太刀で、しかも同じく面を縦一文字に斬った神技は、まさに舌をまくにあたいする。狂四郎ならば、あるいはやるかも知れぬが、狂四郎を除いて、ほかに、これだけの手練者が、江戸にいるか――と考えた時、わしは、は

っと思いあたったのじゃ」

仙十郎が語るのを、美保代は、項垂れて、身じろぎもせずに、きいた。

「わしの記憶の中に、ただ一人、それだけの腕が立つ男がいた。やはり、公儀隠密の一人での、白鳥主膳——そやつに相違ない、とわしは睨んだ。数年前より、密命をおびて、九州へ潜入して居るときいて居ったが……どうやら、帰途、京に寄って、狂四郎のことを耳にしたに相違ない。……そなたにきかせなかったが、狂四郎は京において、隠密の中でもさらに一段の使い手ばかりを選んで組ませた親不知という党と、たたかって、その半数を仆して居る。白鳥主膳は、これをきいて、自ら狂四郎を斬る役を買って出たに相違ない。すでに、その時、狂四郎の姿は、京阪から消えて居ったために、主膳は、この江戸へ帰るや、狂四郎をまた江戸へ戻す工夫を肚にめぐらした。主膳は、狂四郎の行方を、この武部仙十郎が知っているに相違ない、と本丸老中の腰巾着どもから教えられた。そこで、名のきこえた剣客たちをつぎつぎと斬って、狂四郎のしわざとみせかけた。わしが、黙っている筈がない。早速に、狂四郎を、何処からか呼びかえして、主膳に対決させる——。その思う壺にはまって、わしは、こうして腰をあげて、そなたに、狂四郎の在処をききに来た——という次第じゃて」

仙十郎は、淡々たる語気で、語り継いだ。

「狂四郎のやつ、漂流船にたった一人で乗って居ることが気に入ったとは——いかにも、あいつらしいが……ちと、このたびだけは、わしも、狂四郎の気まぐれに腹がたつわい。しかし、行方がつかめぬとあれば、やむを得ぬ。わしはわしなりの手段をとるといたそうかの。

豺狼を噛ませるにあに虎豹のみにたよらんや、時に盲蛇をそそのかしてたたかわせ、駑犬はその弊をひろう、かの。ふっふっふっ」

仙十郎が、いっそ面白そうに笑い声をたてた時、美保代は、思いつめた面持を擡げた。

「武部様——」

「なんじゃの?」

「わたくしのような女が、人知れず、そっとくらしてゆく終の栖を、どこかご存じありませぬか?」

「む——?」仙十郎は、じっと、美保代を凝視した。

——そうか!

直感があった。美保代の苦悩は、雛の首を奪われたことではなかった。

——左馬右近に犯されたのか!

たとえ将軍が殺されようとも顔色ひとつ変えぬ筈のこの老人が、ふっと、熱いものが胸中に動くのをおぼえたのである。

美保代が、意識をとりもどしたのは、夜明け前であった。床の中にあるじぶんを知って、はっと起き上ると同時に、脳裡に矢のように襲って来たのは、凌辱を加えられた絶望感であった。

乱れた姿態のままに、床の中に仰臥させられていたこと。障子も雨戸もきっちりと元通りに閉められてあったこと。

美保代は、瘧（おこり）のような悪寒で、全身を鳥肌たてて顫（ふる）わせつつ、長い間、惘然（ぼうぜん）と虚脱していた。何かを思い泛（うか）べようとしたが、甦（よみがえ）って来る記憶の断片は、昨日までの希望をもったじぶんの上に起ったことだったという悲しみを呼ぶだけであった。昨夜のことを考えることは、それよりもさらに堪えがたい苦しさをともなった。ただ、茫乎（ぼうこ）として動かずにいることが、唯一のすくいとなった。

やがて、のろのろと起きあがって、裏の井戸端で水垢離（みずごり）をとって、いっさいの衣類をきかえた美保代は壁につるした古びた黒羽二重の着物の前に、ふかく頭を垂れて、そのまま、朝を迎えたのである。

雛の首を奪われるとともに、じぶんの幸せも足早やに、手のとどかぬ遠方へ去ってしまった——その悲愁は、しかし、美保代をして、畳に落ちていた懐剣でおのがのどを突く衝動をおしとどめる力があった。というのは、もしいつの日にか、雛の首が戻って来ることがあるとすれば、あるいはその時なにかの希望が起るのではなかろうか——じぶんの操（みさお）が、けがされずにいた奇跡があったと判明するのではなかろうか。

絶望の淵底（ふちぞこ）で、美保代が、惑乱の発作から辛うじてじぶんのいのちを守ったのは、賢明であったといわねばなるまい。

仙十郎は、そのけなげさを読んで、ひとり頷（うなず）いてみせてから、云った。

「鎌倉（かまくら）に尼寺がある。そこの離れがよかろう」

「有難う存じます。……それから、もうひとつのおねがいがございます。主人が戻りました

ならば、雛の首のことのみおつたえおき下さいませ」
「そなたの在処は秘しておいてくれ、というのじゃな」
「はい――」
仙十郎は、
――哀れな！　と、遽(にわか)にこみあげて来るものを、ぐっとのみ下して、合点(がてん)した。
武部仙十郎が、眠狂四郎の名をもって、同じ文面の果合い状を、若年寄林肥後守(ひごのかみ)上屋敷内の白鳥主膳と、茅場(かやば)家の左馬右近に送ったのは、その日のうちであった。

四

夜来の雨が漸(ようや)くあがり、乱層雲が天を掩(おお)い、その下を千切れ雲が低く飛んでいた。ぼうっと一個所、雲が光っているのは、幻日で、それがすこしずつ輪をひろげているのは、晴れる証拠であろう。遠く地平には、まだ雨があるらしく、模糊(もこ)としてけむっている。
未(ひつじ)の下刻――。
青山百人町の広い往還に面した、教学院と梅窓院観音にはさまれた数千坪の明地(あきち)のただ中で、宗十郎頭巾の左馬右近が、雨を追う春の風に痩軀(そうく)をなぶらせて、佇立(ちょりつ)していた。背後には、青山大膳亮(だいぜんのすけ)の宏大(こうだい)な下屋敷の高い築地塀(ついじべい)がつらなっている。足もとには、黄色なたんぽぽがひらき、虎杖(いたどり)が黒土から芽をふいていた。
伐(き)り残された古樹の枯幹のように微動もしなかった右近が、わずかに、首をうごかした。

ゆっくりと近づいて来る跫音を——その跫音がひそめている鋭いものを、全身で察知したのである。

跫音は、三間のむこうに停まった。

と——すぐに、

「眠狂四郎が、盲目(めしい)とはきいて居らぬが——」

爽(さわ)やかなその声がひびき、愕然(がくぜん)としたのは、右近の方であった。

「おれは、眠狂四郎と試合に来た者だ」

「ほう——」

対手は、この奇妙な出合いに、ちょっと首をかしげる様子であったが、急に、明るく、ははは、と笑った。

「お互いに一杯食わされたことです。御免——」

踵(きびす)をまわそうとするのへ、

「待った！」

と、右近が鋭く声をかけた。

「おぬしは眠狂四郎以上の腕前と見た」

「…………」

「何者がこの細工をしたかは知らぬが、せっかくの趣向を流すのは惜しい。やろうではないか」

「いや、そうなることを、これを仕組んだ狸爺はちゃんと見通していたとすると——これはお互いに、出会わなかったことにする方が利口というものだが——」

「云うなっ！　抜けっ！」

右近は、左手を栗形にかけて、右足をすっと引いた。

その構えから放射される殺気をあびて、対手も遽に剣気が動いたようである。

「よかろう！」

同時に、二本の白刃は、抜きはなされた。

もしかりに、この対峙を見まもる者があったとするならば、天地を一瞬一颯のために凝聚して、ひそと五体を真空の中に置いた双方が、それなりに、半刻を移すのに、息詰まって堪え得なかったろう。

まさしく、勝負は、一瞬一颯によってきまった。

「やあっ！」

「えいっ！」

満身の気合と、全生命の闘志が虚空を裂いて噛みあった。

右近は、心眼に、血煙りたてたてのけぞる敵の姿を映して、にやりとした。次の刹那、形容のつかぬ絶鳴を宙に撒いて、その顔面を縦一文字に割られて、撞っと仆れたのは、右近の方であった。

右近は、たしかに勝ったのである。しかし、右近が、両断したのは敵の白刃であった。敵

は、鍔元(つばもと)よりほぼ一尺のところを斜めにすぱっと切りとばされたその白刃を、鶺鴒(せきれい)の尾のように、ぴっと刎(は)ねかえして、右近の顔面を顎(あご)から額まで、裂いたのであった。春の野花の上へ横たわった右近を、じっと見下ろして、

「殺すのは惜しかった」

と、独語したのは、まだ三十前の、神があやまって男にしたかとさえ疑われる、艶(つや)やかな白い肌理(きめ)と、切長な澄んだ双眸(そうぼう)と、臙脂(えんじ)を塗ったような唇(くちびる)をもつ、妖しいまでに美しい風貌(ふうぼう)の武士であった。

ちょうど、この時刻——。

何処へ流れ着き、何処を辿(たど)って江戸へ戻って来たのか——眠狂四郎は、美保代のもとへ帰るべく、業平橋(なりひらばし)を渡って、西尾隠岐守(おきのかみ)の下屋敷脇(わき)を過ぎ、押上(おしあげ)村の堀川(ほりかわ)に沿うた街道をひろっていた。

彼方(かなた)から一梃(ちょう)の駕籠(かご)がやって来るほかに、街道に人影は絶えていて、駕籠がすれちがって行くと、あとはただしらじらとまっすぐに、目路(めじ)の果てまでのびていた。

神ならぬ身の——狂四郎は、そして、その駕籠の中に、ひっそりと坐っている美保代も、互いに、近づき、行き交い、遠ざかるのにすこしも気がつかなかったのである。

紅の花

一

水色の蹴出しから、白い脛をちらつかせ乍ら、からころと、柳橋の橋板を鳴らして来た素足の駒下駄が、ふっと停められた。

両袖を胸でかさねた常磐津文字若であった。いつも変わらぬきりりっと水際立った艶姿である。町方女房とみせかけた黒ちりの無垢が、かえって仇っぽく柔肌を浮きたたせている。

「おや？」

——あいつ！

文字若をして、はっと目を据えさせたのは、橋袂をつと横切って、河岸づたいにゆっくりと行く一人のさむらいであった。

むかしかたぎの老人が眺めたならば、思わず唸らずにはいられないであろう華奢ないでたちであった。茶返しの小袖に緋どんすの帯、変り八丈の長羽織をぞろりとひっかけ、紫縮緬の亀屋頭巾をすっぽりかぶって目だけをのぞかせている。ふところ手の袖口からは紅裏をこぼして、これはもう、役者以上と見えた。大小も、その細腰がようやく堪えるだけの、思い

きりの細身であった。

――あいつにちがいない！

文字若は、確信した。やや左肩を下げて、踵を摺るように歩む後姿は、かなり特長のあるものであったし、長羽織の比翼紋にもおぼえがあった。

文字若にとって、忘れられる筈のない男であった。色里がよいの柔弱な遊冶郎と思ったら、とんでもないのだ。おそろしい奴なのである。

「畜生っ！」

口のうちで呻いた文字若は、女掏摸素通りお仙の本性を、その険のある眦のあたりに耀かせて、さむらいのあとを尾けはじめた。

やがて――。

さむらいが、入って行ったのは、升屋という料亭であった。江戸の割烹界にひびいていて、騒客が踵を接している店であった。もとは洲崎にあって、望陀欄の絶佳な眺望、さびた茶味に充ちた座敷、幽邃な庭園など――「いり蠣や藻しおのけむり打ちしめり」の風趣を誇っていたが、寛政期の大海嘯で崩壊して、のち久しく音絶えていたのを、つい二年あまり前に、ここに再築したのである。洲崎のそれよりもさらにひとまわり大きな規模で、鞠場まで造り、池泉廻遊式の結構は、まさに日本一と称してもさまで誇張とはいえぬ巨費が投じてあった。

奇怪なのは、代替りをしたとの噂であったが、誰も、そのまことの経営主を知らなかったことである。

さむらいは、玄関から入らず、女中の案内で、苑路を辿り、平安神宮の水上の渡殿を模した廊下をつたって、泉中に組まれた寝殿造りの亭へ入った。ひっそりして、池のほとりに白鳥が一羽、優雅な静止をみせていた。

さむらいは、女中がさがると、はじめて、亀屋頭巾をとりはらった。

妖艶というに足りるその美貌は、先日、青山百人町の明地において、左馬右近を一颯で仆した人物のものにまぎれもなかった。しかも、あの神速の腕の冴えをみせた剣客らしい鋭いものは、こうして華美ないでたち姿のどこにも、微塵も見出せないのである。白い貌には、むしろ慎み深い、静かな人柄を思わせる柔和な明るい色が刷かれていた。

血すじも育ちも、立派な格式の家のものらしく、座敷に入って、待たせた者へ、かるく会釈してみせた鷹揚な挙措に、自然にそなわる品位があった。

「わざわざ、お呼びたていたしまして――」

鄭重に挨拶したのは、すでにわれわれにお馴染の備前屋であった。

「おぬし、近頃は抜荷買いのほかに、大阪商人どもをあっと云わせようと、大きな仕事をたくらんで居るそうだな」

ほのかな微笑を泛べ乍ら、白鳥主膳は云った。

「もうお耳に入りましたか。ははははは」

備前屋は、平然として笑った。

「日本中の米を一手にとりしきろうと申すのか」

「それは、ちと大袈裟でございますな。なに、ただ、二、三個所の米立会所を合併させて、手前にやらせて頂ければ、冥加金もたっぷり御公儀へさしあげることができるのではないか、と考えたまででございます」

江戸に、米相場が隆盛になったのは、つい数年前のことである。米価釣上げのために、伊勢町に米立会所が設立されたのが発端で、ついで水戸家が本所一つ目石置場の同家蔵屋敷内に米立会所をつくった。これを嚆矢として、仙台、越前、尾州、紀州の諸家が、あいついで払米捌所をつくったのである。いずれも空米相場であった。

これに倣って、いま、浅草諏訪町に、諸家収納米引請元（武州会所）というのが設立されている。勝手向き不如意の武家方の知行米を引きうけ、米前金の名目で金子を貸している。但し、ここは、正米の直売買であった。

備前屋は、これに目をつけたのである。江戸へ入る米は、上方筋から来る下り米、奥州筋から来る奥筋米、関東諸国から出る地廻り米である。これらの米を取扱っているのは、伊勢町、本船町、小船町、小網町、堀江町、堀留町のいわゆる米河岸であった。

備前屋は、武州会所をのっ取って、米河岸問屋をおさえて、大規模の立会所を設立して、空米相場をやろう、という陰謀をめぐらしているのであった。

主膳は、盃を幾杯かかたむけ乍ら、備前屋の莫大な金儲けの皮算用をきいていたが、

「ところで、わしに用とは、なにか……」

「おっと、これは失礼いたしました。商人というやつは、つい、金勘定のこととなりますと

目の色が変わりますもので……肝心のお願いを忘れました。……白鳥様、お待ちかねの眠狂四郎が、江戸へ舞い戻りました」

二

はじめて、主膳の白い面から、柔和な色が消え、澄みきった双眸に、煌っと妖しい光が走った。

「そうか、戻ったか――」

「押上村の龍勝寺という古寺の離れに居りまする。……が、おねがいと申すのは、貴方様とあの男との果し合いは、しばらく待って頂きたいということでございます」

「備前屋、おぬしは、眠狂四郎が好きだそうだの」

「左様、好きでございます。手前がこれまで会った人間で、あれ程小気味のいい男は一人もございませんな。なろうことなら味方に引入れたいと思いましたが、それが叶わぬとなれば……これは、ひとつ、白鳥主膳様が江戸へお帰りになるのを待って、一騎討ちさせてみたい――とまあ、今日まで腕を拱いていたわけでございますが、貴方様がお戻りになり、あの男もあらわれたとなると、この勝負しばらくあずからせて頂きたいと、考えなおしたのでございます」

「眠狂四郎を殺したくないのか？」

「いえ、そうではございませぬ。あの男が敵側に立っている以上、是が非でも、あの世へ送

らねばなりますまい。これはどうしても、貴方様にお願いいたさねばならぬ仕事でございます。……ただ、その前に――」

と云いかける備前屋を、主膳が右手をあげて押えた。そして、中仕切りの襖のむこうへ、鋭く、神経をくばった。

つと、刀を把って、膝を立てようとする主膳を、こんどは、備前屋が、何を思ったか、無言で、手をのばして、とどめた。

「きかせておこうではありませぬか」

備前屋の目は、そう云っていた。

主膳は、ちょっと不審な表情になったが、武鑑の席次から生れた権力を完全に軽蔑して、政道の裏面に立って、全土の経済力を一手に握ろうという野心を抱くこの底知れぬ剛愎な商人の働かせる知恵には、一目置いていた。

主膳が、刀をもとへ置くと、備前屋は、何事もなげな口調でつづけた。

「あの男の名を利用して、貴方様に、片づけて頂きたい人物が居ります。つまり、あの男が斬ったとみせかける――」

「誰だな？」

「北町奉行榊原主計頭様」

ずばりと云いはなって、備前屋は、にやりとした。

流石に、主膳も、思わず、備前屋をまじまじと瞶めかえした。

「われわれの仕事に邪魔なお方はたといお奉行であろうが、若年寄であろうが、一日も早く退場して頂く――これが、こちらが大きくなる秘訣(ひけつ)でございます。榊原様に退場して頂く理由は三つございます。田沼様御老中時代に、御公儀には、支那(しな)、西蔵(チベット)、安南、和蘭(オランダ)から金銀貨を輸入なされて居ります。金が百七、八十貫、銀が八千二百貫――と記録にございます。ところが、そのうち、金が六十貫、銀が一千貫あまり、何処(どこ)かへ煙となって消えて居ります。じつは、これが、最近にいたって、江戸の市中にかくされている事実を、榊原様はおさぐりなされたこと。これが理由の一。つぎに榊原様は、御公儀買上米に不正があったことを、御救米(おすくいまい)勘定書控によって吟味なさり、勘定奉行所摘発をお考えのこと。第三の理由として、榊原様は、その麾下の加役(かやく)矢部左近将監(しょうげん)のすすめによって、西丸御留守居と幾回かの密談をもったこと。すなわち、水野越前守様の野望に加担のおそれがあること――以上でございます」

「ふむ！」

主膳の美しい顔にふたたび微笑がのぼった。

「いつ斬るのだ？」

「さてと――」

備前屋は、襖のむこうに潜む者にきかせるために、その日時をはっきりときめるべく、しばらく思案していたが、

「なるべく派手な催しの日がよろしゅうございましょうな。左様、初午(はつうま)の日の夜……丑(うし)の上

刻あたり如何でございましょう？」
「よかろう」
初午には、江戸の町中、盛不盛の別はあっても、地所あれば必ず安置された稲荷社が、いっせいに祭りを行い、どんな裏長屋にも、路地や木戸口へ染幟を立て、地口絵田楽灯籠をかかげて、子供たちは太鼓をうち鳴らして踊るならわしであった。この日ばかりは、大名旗本の邸内の稲荷社も、屋敷前の町家の人々が勝手に入って来て参詣するのをゆるしたし、宵になると、長屋の武士や娘たちも町人の中にまぎれ込んで俄踊りに興ずることが黙認されたのである。
騒ぎ疲れたその夜の深更こそ、暗殺には最適であった。
「万事、手前の方で御膳立いたします故、貴方様は、ただ、その素晴らしい腕前をおみせ下さればよろしゅうございます。検屍のお役人が、その斬り口の冴えに舌をまき、胸に記しのこされた狂の一字を見て、さては！　と勢り立つ——はははは」
笑い乍ら、備前屋は、わざと音たてて立ちあがり、ゆっくりと、襖に進んで、さらっと開いた。
すでに、そこに人影はなかった。
備前屋は、素迅く、廊下へ出て、出口の杉戸へ身を寄せると、隙間から、庭をすかし見た。
多行松のかぶさった反橋を、ツツと小走りに渡って逃げる女の後姿を、じっと見送ってから、自分の座敷へひきかえした。備前屋は、太い眉の片方を痙攣させる例の癖をみせて、

「やっぱり、あの男の懇意の者でございました。常磐津文字若という女師匠で……貴方様を尾けて参ったとみえますな」

「常磐津文字若？　おれは、そんな女は知らぬな」

主膳は、訝しそうに小首をかしげていた。

三

――畜生っ！　あんなまっ白けの化けものに、先生の名を騙られてたまるかい！

ただでさえ血の気の多い辰巳女の気性が、いま、凄じい復讐心に燃えて、かあっと全身を燠火のように熱くしていた。

かけ声勇ましく、押上村への街道をとぶ四枚駕籠の中で、文字若は、柳眉をつりあげていたのである。

白鳥主膳に対する怨みは、文字通り、一生消えやらぬ傷痕となって、からだの中にのこっているのであった。

五年前――。

文字若が、江戸で選りすぐった腕きき揃いの掏摸組黒元結連に加わった頃、ある年の秋の会式に、鬼子母神前の往還で、手頃の「客」を物色していると、薄の木菟を手にした役者まがいの見えぼう風態のさむらいが通りかかった。その時も、亀屋頭巾をかぶって、目だけをのぞけていた。

連れの若い巾着切りが急に顔色を変えて、
「あいつだ！　あいつの懐中を抜こうとして、五郎次兄哥が、まっ二つに斬られたんだ」
と、文字若に囁いたものだった。
五郎次は、黒元結連四天王の一人だったのである。
「よし、あたしが仇をうってやる」
連れが止めるのを振りきって、文字若はあとを尾けて行き、とある辻で追いつくや、右手の掌にかくした鋭利な鋏で、紐を切って、素迅く印籠を握った——その刹那、手首をむずと掴まれていたのである。
しかも、さむらいは、依然として、目は前方へ向けたままで、歩調も変えなかった。外目には、むつまじげに、ぴったりより添うてあるく恋人同士に映ったろう。
「どうするのさ！」
ふて腐れて、小声でつっかかったが、
「さあ、どうしようかな——」
と、頭巾の中で、柔和に笑っただけであった。
とある料亭へ、文字若は、つれ込まれ、うむを云わせず、おさえつけられたのであった。
素通りお仙ともあろう女が、あっけなく屈服したのも、対手が頭巾をとりはらったとたん、その容貌のあまりの妖しい美しさに、思わずはっと息をのんで、抵抗する力を抜いたためであった。その隙に、男の片手は、残忍に、下着に包んだものを披いていたのである。

――勝手にしやがれ。

と、目蓋をとじて、顔をそむけた――そのあきらめの中に、あまりの美貌に魅せられた浮気の虫が動いていたのを、のちになって、文字若は、どんなにくやしがったことだろう。

誰にも信じられぬことだったが、文字若は、その日まで、からだは生娘だったのである。

それを契機として、からだもまた、その日その日の風まかせに、男から男へ移して行ったのであった。

――そうだ！　先生なら、あいつをたたき斬っちまう腕がおあんなさる！

文字若は、竹藪の脇で、駕籠をすてると、胸をはずませて、龍勝寺の境内へかけ込んで行った。

「先生っ！」

濡縁に腰かけて、迷い込んで来た野良犬へ残飯をくれていた狂四郎は、かん高い文字若の声に、蒼い翳の深い顔を擡げた。

文字若は、駒下駄で、尻尾を踏んで、野良犬を、きゃんと跳びあがらせるあわただしさで、

「ああ、よかった！　ほんとに、お帰りになったんですね、先生！　よかった、よかった！　美保代様が、どんなにおよろこびになったか――おや？　美保代様は？」

首をのばして、中を覗く文字若へ、

「お前のところへ行って居るのではないのか？」

と、狂四郎は、訊ねた。

「いいえ。今朝がたお出かけだったんですか？」

「一昨日、わたしが戻って来た時から居らぬ」

「なんですって⁈　和尚さんはご存じないんですか？」

「何処へ行くとも告げなかったそうだ。……どうやら、わたしと入れちがいだったようだ」

「せ、せ、先生っ！」

文字若は、かっと昂奮して、頬も唇も肩も手もわななかせた。

「先生は……そ、それで、平気なんですか！　あ、あたしんところへも、さがしにおいでにならずに――ここで、のんきに、こんな野良犬なんぞを相手に――ばか！」

いきなり、文字若は、太股まであらわに裾をひるがえして、野良犬を蹴とばした。

狂四郎は、苦笑して、

「五、六日前に、武部老人が来たというから、水野の屋敷へでも行って居るのだろう」

「そ、そんな、よそよそしい口をきいて――。美保代様が、どんなに先生を待ちこがれていたか、このあたしが、一番ようく知っていますよ。先生、よござんすか、女というものはね――女心ってえものはね……」

「わかって居る」

「わかって居るもんか！　今日という今日こそは、あたしゃ、先生に、ぶちまけるだけぶちまけて――」

舌頭へ火をつけてあびせかける文字若をそこにのこして、すっと部屋に入った狂四郎は、

刀を把って出て来た。
「水野の屋敷へ行く――」
短く云いすてて、すたすたと歩き出した。その横顔にしめされたひきしまった気色が、美保代の身の上を気づかうものであるのをみとめた文字若は、ふっと頬をゆるめた。
文字若が、白鳥主膳と備前屋の密談を告げたのは、堀川沿いの街道へ出た時であった。
「……でも、あいつらのことは、もうどうだってかまやしない。それよりも、美保代様の行方をつきとめなくちゃ。――ほんとに、美保代様は、どこに行っちまったんだろう？　一年も待ちこがれていたのに、先生が戻ったその日に、あの離れから出て行ったなんて、じれったいなんていうもんじゃないやね――」
「文字若――」
「なんです？」
「お前は、襖一枚へだてて、備前屋と白鳥主膳という男の話をぬすみ聴いたのだな？」
「あい、そうですよ」
「二人は、話の途中で、急に、口をつぐまなかったか？」
「ええ？　……そういえば――」
「お前がぬすみ聴いているのを、奴（やつ）らはちゃんと知っていた――そう思わぬか」
「えっ！」
「白鳥主膳は、備前屋がおれと一騎打ちさせようと待っていた程の人物だろう。お前が襖の

むこうに潜んだ気配をさとらぬ筈はない。わざと知らぬふりをしていたのだ」
「な、なぜです？」
「初午の日の丑の上刻に、榊原主計頭を暗殺するときめたのだな？」
「そ、そう備前屋が云ってました」
「――と、お前から、おれに報告させておく。当然おれが、その夜、その時刻に、奉行屋敷へ乗り込んで行くだろう。それより一刻(とき)前に、主膳は、主計頭を斬り伏せておく。おれがあらわれたのを見すまして、主計頭が殺されていることを人々に告げる。下手人は、おれときまる。そうさ、備前屋がつくりそうな筋書だ」

それから半刻ばかり後――。
水野忠邦の上屋敷内にある武部家の書院に坐った狂四郎は、用人(ようにん)から美保代が来ていないことを玄関できいて、暗い不安に駆られつつ腕を組んでいた。
「ほう……戻って来よったの」
あらわれた仙十郎は、にこにことうれしげに縦皺(たてじわ)横皺をふかめた。
「ご老人は、美保代の行方をご存じないか？」
その問いが、一年ぶりの挨拶に代えられた。
「知って居るよ」
「何処へ参ったのです？」

「教えるわけにはいかんな」
けろりとした口調で、仙十郎はこたえた。
「何故です？」
「美保代自身の希望じゃ。その理由も糺さぬがよかろう。……当分、そっとしておいてやることだの」
「そうですか――。ではききますまい」
「但し、雛の首が、左馬右近に奪いとられたことを、おぬしに報せておいてくれとのことであった。その右近じゃが、一昨日、白鳥主膳という男に斬られよったわい」
仙十郎は、右近と主膳を勝負させたのが自分であることを語った。
狂四郎は、黙ってきいていたが、不意に、
「主膳に家族が居るかどうか、ご老人はご存じか？」
「彼奴は、親もきょうだいもない独身者ときいて居るが――」
仙十郎は、狂四郎の顔に失望の色が浮くのを眺めて、
「どうかしたかの？」
「肉親が居れば、面白い趣向がやれたのですが……やむを得ぬ。今夜のうちにも、主膳のところへ押しかけて行って、片をつけて参ろう」
狂四郎は、無表情に云ったが、心はそのことにはなく、去って行った美保代への想いで微かに痛んでいた。

四

——まるで空屋敷ではないか。

陽(ひ)が落ちるやいなやのことで、残照を映した屋敷内は、すみずみまで見通せた。塀(へい)を乗り越えて、植込みの中に立った狂四郎は、すこしばかり唖然(あぜん)としたのである。

宏壮(こうそう)といっていい屋敷なのだが、大きな池のある庭園は荒れはてていたし、母屋(おもや)はどこも全部雨戸が閉ざしてあった。

樹陰から樹陰へと身を移して、近づきつつ、

——白鳥主膳は、ここへは滅多に帰らぬのだな。

そう直感した。

暗い寂寞(せきばく)とした屋内に忍び入った時、遠くの勝手の方で物音がした。

やがて、廊下をこちらへやって来る跫音(あしおと)をきいて、つと、部屋へ身をかわして、障子の隙間から窺(うかが)っていると、通って行ったのは白髪頭(しらがあたま)の用人らしい男であった。両手に食膳をささげていた。用人がこんな用事をするところをみると、女中も若党もいないのであろうか。長屋も幾棟かならんだ三千石以上の格式をもった構えなのに、これは、奇怪というほかはなかった。

廊下を幾まがりかして、用人が立ちどまったのは、こうした大きな屋敷には必ず設けられている貴賓を迎える室の前であった。用人は、襖をひらく前に、食膳を置いて、正しく両手

をつかえると、
「姫様、お食事を――」
と、告げた。
「はい」
明るい若々しい返辞があった。
用人は、襖をひらいた。
上段の間に、ぱっと目がさめるような絵羽模様の衣裳をつけた娘が、膝に本をひろげて、脇息に倚っていた。
長髢をつけたおすべらかし、広口振袖、提帯……これは、あきらかに貴族のうちでも余程身分の高い女人の姿であった。
年はまだ二十歳前であろうか。切れて長い眸子の大きなのと、かたちのいい唇の小さなのが、なんともいえぬきりりとした美しい調和をたもって、丸顔を活き活きしたものにしていた。
「宗右衛門、この偐紫田舎源氏はもうおしまいになりました。あとの本を持って来て欲しい」
「かしこまりました」
用人がひきさがって行き、姫様と呼ばれた娘は、ふた口ばかり御飯を口にしてから、ふと、人の気配に、その大きな澄んだ眸子をまわした。

いつの間にか、寝所側の襖を開いて、眠狂四郎がそこに佇んでいたのである。
ふしぎなのは、姫は、一向に驚きも怯えもせず、ただまじまじと見あげて、
「誰じゃ？」と、問うたことであった。
狂四郎は、静かに坐ると、
「名乗るに足りぬ素浪人です。……おうかがいしたいのは、貴女様の御素姓です。……こんな空屋敷同然の家に、上臈が客となって居られようとは――正直、狐に化かされている気分になります」
「そなたは、悪人ではないか？」
「無頼者ですが、べつに貴女様に対して危害を加えるこんたんは持合わしませぬ」
「わたしも、そう思う――」
姫は、にっこりした。なんのおそれも知らぬ清純な乙女の澄んだ感覚と、陰湿な虚無の業念を抱いた無頼浪人の冴えた神経が、ふと、なんとなくふれあったのである。
「わたしは、明子と申します。故あって、身分を明かすわけにはまいりませぬ」
「京からおいでになった？」
巧みなさりげない誘いに、しかし、姫は、乗らずに微笑しただけであった。
「白鳥主膳がこの江戸へおつれ申したのですな？　てまえの臆測をおゆるし下さるならば、貴女様は、主膳の妄言にお乗りになったか、それとも暴力によって無理無体にか――いずれにしても、貴女様は、お住まいの場所をまちがえて居られるようですが……」

すると、姫のこたえは、意外であった。

「わたしは、主膳にたのんで、江戸へつれて来てもらいました。誑かされたのでも、かどわかされたのでもありませぬ。……尼にされるのがいやだったのです」

「尼に？」

「あたまをまるめるなど、思っただけでも、ぞっとします。ね、そうではありませぬか？」

「左様――」

これは、狂四郎の方で、戸惑って、思わず苦笑したことだった。

「主膳は、気味のわるいさむらいだと思います。でも、わたしに対しては、下部のように仕えてくれます」

これをきくや、狂四郎は、この屋敷に忍び入ったことが無駄ではなかったのをさとった。

――これは羨望していいことだ。景清も花見の座には七兵衛――か。この美徳を、すこしばかり、こちらは利用させてもらうとするか。

五

初午祭で踊り疲れた江戸中の子供たちがその愉しさを夢の中へ持込んで……辻々に犬の遠吠えが起る亥の刻すぎ――。

北町奉行屋敷の奥廊下を、音もなく進んだ亀屋頭巾の黒影が、手順通りの落着きをもって、あるじの居間の襖を開いて、ずいとふみ込んだ。

闇(やみ)に目の利(き)く正確な歩度で、寝息もたてぬ睡(ねむ)りを包んだ夜具へ近づいて、すらりと腰の一刀を抜いて、ふりかぶった。

掛具をはねる。目覚めた榊原主計頭が、はっと起き上る。間髪を入れず、さっと斬り下ろす。

――その一颯の刃風を生むべく、片足を掛具の端へかけた。

刹那。――

「主膳！　斬ると後で悔むぞ！」

冴えた声が、武者隠しの小襖のむこうから発しられた。主膳がぱっと跳び退(すさ)るのと、小襖を蹴あけて眠狂四郎があらわれるのと同時だった。

「おあいにくだった。そちらが、備前屋の筋書をはこぼうとするなら、こちらは、武部仙十郎によって、その裏をかく――ごらんの通り、今夜の勝負は、こちらが頂戴(ちょうだい)した」

「庭へ出い！　勝負は、そこできまるぞ！」

「ところが……今夜は、残念乍ら果し合いを禁じられて居る」

「奉行などの支配は受けぬ！」

主膳が嚙(か)みつくように叫んだ時、掛具をはねて起きあがった就寝者が、高く透る声音で、

「禁じたのはわたしです」

と云った。明子と名のる姫であった。

狂四郎は、愕然(がくぜん)となる主膳をすかし見乍ら、

「その約束で、この姫君に、一役買って頂いた。果し合いは後日ということになる」
云いすてて、すっと廊下へ出た。
追おうとする主膳を抑える姫の声をききのこして、狂四郎は、
──行末は誰が肌ふれん紅の花、か。
と、芭蕉の一句を、胸で呟いていた。

将軍の微笑

一

荒れ庭へ、琴の音が、流れ出て、薄絹をはったような春の空へひろがっていた。陽(ひ)がすこし西に傾いた時刻で、広い武家屋敷の静けさは、澄んだ琴の音で、一層ふかめられたようであった。

と――。

するどい撥音(ばちおと)が高くひびいて、琴をひく手がとめられた。糸が切れたのである。

「この琴は、もう年寄りなのね」

明るくひとりごとをもらして、琴爪(ことづめ)を指から抜いたのは、白鳥主膳の庇護(ひご)を受けている明(さや)子(こ)という娘であった。

立って、広縁へ出て、曾(かつ)て名のある造園家の手になったであろう庭を、ひとりなんとはない微笑をうかべて、見やった。もう幾年間も放置された孟宗(もうそう)や寒竹やつわぶきや下草や雑木が、しかし、かえって思わざるわびの主調をつよめて、清雅な草庵(そうあん)風の野趣ゆたかな眺(なが)めをつくっていた。

尤も、まだ二十歳にもならぬこの乙女にとって、わびに心を移す風流があるわけではなく、ただ、春日遅々たる明るい空気が甘かったのである。

しかし、そのうち、ふっと、その美しい眉がひそめられた。

つよい香気が、漂って来たのである。

明子は、つい右手の奇巌を組んだ三段落しの空滝の陰に、つつましく咲いた沈丁花をみとめると、急に、

「いや！　沈丁花はいや！　匂いもきらい！」と、云った。

明子は、沈丁花にまつわる古い話を思い出したのである。

むかし――廬山というところに、ひとりの美しい比丘尼がいた。節操かたく、行いすまし、山また山の奥ふかくに棲んでいた。ある早春、渓谷のほとりで、岩にもたれて、うとうと居睡った。そのうち、ふと、えもいわれぬ香気に、身をつつまれる夢をみて、目がさめた。茫然として立ちあがると、その身がみるみるうちに一本の樹に変じて、紫色の花をひらいた。これが、瑞香（沈丁花）の、この世に生れたはじめであるという。

明子は、沈丁花が比丘尼の精である、というのが気に食わなかった。明子は、比丘尼にされるのがいやで、はるばる京からこの江戸へ逃げて来たのであったから――。

「じいや、じいや――」

明子は、沈丁花を伐らせようと思って、老いた用人を呼んだ。

使いにでも出たのであろう、返辞はなかった。ふしぎな屋敷であった。若党も女中も中間

もいないのである。用人ただ一人が、いっさいの仕事をとりしきっていた。尤も、主人の白鳥主膳は、十日に一度ぐらいしか戻って来ないのであった。明子をともなって京から帰還するまでは、四年間も留守であったという。

明子は、しかたなく剪刀をさがすべく、表座敷の方へ歩いて行った。

遠慮も知らぬ育ちかたをしていたし、主膳という男の得体の知れなさにも、ふと好奇心が働いて、明子は、あるじの居間へ、するりと入った。

もし、そこに、多くの調度品が置かれてあったならば、明子は、次の品を発見することはしなかったであろう。そこもまたまるで、空屋敷同然だったのである。

経机、厨子棚が、十五畳に、さむざむと据えてあるだけで、その上には何も置いてなかった。明子は、あきれて、見まわし、念のために、厨子棚の小扉をひらいてみた。すると、扇散らしの蒔絵文箱があった。蓋をひらいてみて、

「まあ――」

と、おどろきの声をあげた。

美しい雛の首がふたつ、ころんところがっていたのである。

「可哀そうに、どうして、お前たちは、こんなひどい目に遭ったの？」

明子の関わり知らぬことだったが、それは主膳が、斬り仆した左馬右近の懐中からひろって来た品にまぎれもなかった。

「あ――いいことがある。わたしがおまえたちにきれいな衣裳をつくってあげましょう」

明子は、京から、金襴裂(きんらんぎれ)を持って来ていたのである。この首に、どうやって、からだを継ごうかしら、と切りくちをかえしたとたん、明子は、目を瞠(みは)った。
女雛の首には、「狂四郎いのち」
男雛の首には、「美保代いのち」
と、美しい細筆で記されてあったのである。しばらく、じっと、二個の切りくちを眺めていた明子は、小声で、
「狂四郎……狂四郎……」
と、呟(つぶや)いた。それから、遽(にわか)に、顔をかがやかせて、
「ああ……わかった。あのさむらいは、このお雛さまをとりかえそうとして、この屋敷へ忍び込んで来たのだ。そうだったのです。きっと――」
この屋敷に、じぶんが住んでいることを、眠狂四郎は知らなかったのだ。だから、じぶんをつれ出して、北町奉行邸へ行き、榊原主計頭(さかきばらかずえのかみ)の身がわりにして、主膳の計画の裏をかいたのは、その時の咄嗟(とっさ)の思いつきだったに相違ない。
なんのために、あのさむらいがここに忍び込んだのか、明子には、ずうっと疑問だったのである。ただ、あの日以来、明子には、どうしたのか、あの冷たい風貌(ふうぼう)が、ふしぎに忘れられないものになっていた。たぐい稀(まれ)な美貌の主膳よりも、あのさむらいの印象の方が、つよく脳裡(のうり)にやきついて、なつかしかった。
主膳もあのさむらいも、どちらもおそろしい人物にはちがいない。しかし、二人の相違点

を、明子は、はっきりと意識している。主膳は、じぶんを高い地位の者として、この上もない鄭重な態度で扱ってくれてはいる。しかし、ときおり、視線がぶっつかる瞬間、蛇にでも睨まれたような悪寒が起ることがあった。眠狂四郎というさむらいの方には、それがなかった。主膳のように柔和な微笑など湛えて居らず、むしろ陰鬱な翳を刷いているにも拘わらず、眸が合うと、思わず、惹き込まれそうな、かすかな胸のときめきさえもおぼえたものだった。

じぶんが素姓を明かしたくないと拒むと、べつにたち入ってさぐろうともせず、また、主膳を怯ませる仕事が終れば、さっさと去ってしまったのである。

その奇妙な名前も、明子は、当人からきいたわけではなかった。北町奉行邸から、主膳につれられて帰る途中で、

「あのさむらいは、なんという人だったのです？」

と、訊ね、主膳から、

「貴女様は、名前も知らぬ奴に加担して、それがしにあの様な屈辱をお与えなされたのか！……彼奴こそ、それがしが討ち果さねばならぬ眠狂四郎と申す無頼の浪人者です。こん後は、かまえて軽々しい振舞いをめさるな！　困ったお姫様だ！」

と、きびしく叱りつけられたことだった。

明子は、主膳が北町奉行を殺そうとするのを阻むのだと云った狂四郎の方が——事実その通りであったので——正しいと信じていたし、じぶんのねがいを入れて果し合いをせずに去

った態度も立派だと思われたし、主膳の叱責（しっせき）に頷（うなず）くかわりに、そっと、その名を胸の奥にしまい込んでいたのである。

思いもかけず、こうして、意味ありげな雛の首を発見して、明子は、急に、もう一度、あのさむらいに会いたい衝動に駆られた。しばらく過ぎて、用人がやって来ると明子は、唐突に訊ねた。

「じいやは、武部仙十郎という武家を存じては居りませぬか？」

狂四郎が、主膳と相対した時、そちらが備前屋の謀略で来るのなら、こちらは武部仙十郎によって、その裏をかく、と云いはなったのを、明子は、ききおぼえていたのである。

「武部仙十郎？　……おお、西丸御老中様のお側頭役（そばがしらやく）でございますな」

「わたしはその武家に会いたいのです。案内して欲しい」

二

その日——。

水野越前守忠邦は、下城してくると、いつにない緊張した様子で、武部仙十郎を居間にともなった。

「仙十郎、弱ったぞ」

「何事か出来（しゅったい）いたしましたか？」

「節句に、上様が、ここへお成りになる」

「ほ――」

仙十郎は、口をとがらして、大きく目をひらいた。

――土方縫殿助あたりの膳立だな。

直ちにそう睨んだ。

上巳節句に、将軍家の来訪となれば、当然拝領のお小直衣雛を飾らねばならない。

「知恵を出せ、仙十郎」

「む――」

流石に、これは、返答しかねる難題であった。

「同じ型の雛は、ほかにないか？」

「左様。――あれは、雛屋杜園が入神の作でございましてな。ほかに、杜園が作った名品と申せば、浅野様の霞ヶ関御住居にあるぐらいなものでございますわい」

「芸州では、そっと借りるわけには参らんな」

「御意――」

浅野家のお小直衣雛は、将軍家斉の女末姫が同家十一世斉粛へ入輿した時に持参した品である。借りれば、すぐに露見することは火を見るより明らかであった。

「ほかに心あたりはないか」

「まず――」

仙十郎は、首をひねった。お小直衣雛は、民間にはない品であった。そしてまた、お小直

衣雛には、随身や官女や五人囃子などが付いていなかった。そうしたつけ雛は、下方（民間）に限られていたのである。そのかわりに内外二百番中の能人形が飾られた。したがって、上段のお内裏雛は、はっきりと目立った。似かよった程度の品では、一瞥で看破されるのである。

「そちにまかせる。うまく、きりぬけてくれい」

忠邦は、多くを云わなかった。お小直衣雛の首を自分に刎ねさせたのは、仙十郎である。当然、こういう危機に逢着した際これをきりぬけるのは、仙十郎の責任においてなさねばならぬ。忠邦は、この老いたる股肱の頭脳を高く買っていたし、信頼していた。

仙十郎は、わが家へ戻ると、袴もぬがずに、黙考した。

――弱ったわい！

一刻を費して、もらしたのはその嘆息であった。

当時、しきたりとして、いったん下賜した品を、もう一度将軍家でとりあげるということは絶対になかった。それが他家へ贈賄につかわれたり、盗難に遭ったりしない限り、家宝として永久に人目にふれさせぬことが出来たのである。だからこそ、仙十郎は、平気で、忠邦にその首を刎ねさせたのであったが……。よもや、雛の日に、将軍がこの上屋敷へやって来ようとは――、仙十郎も、敵に意表を衝かれた狼狽をおぼえざるを得なかった。

――やむを得ぬ。左馬右近が居候して居った茅場家の屋内を、捜さずばなるまい。

と考えたものの、どうも、雛の首は、右近のふところからすでに、本丸老中側に移ってい

るような気がしてならなかった。雛の首を手に入れたからこそ、土方縫殿助が、将軍家お成りをとりはからったのではないか？

この皮肉な老人は、たとえ雛の首がまだ茅場家に置いてあったとしても、それを奪いかえして、胴体へ継いで飾るのは、どうも面白くないという気持があった。これは、いかにも、狼狽してやった文字通りの弥縫策であり、敵がたから見すかされるような気がしてならぬ。癪である。

――さてと？

さて――どうしていいかうまい思案が泛ばぬままに、黄昏を迎えた。

明子が、白鳥家用人の案内で、訪れたのは、このおりであった。

仙十郎は、名も告げぬ娘など引見する余裕はなく、すげなく断った。

しかし、明子はひきさがらなかった。

「お目にかかるまでは、玄関先から動かぬと申して居りまするが――」

と、再度取次がれて、

「どんな娘だ？」

と訊ね、大層品がいい顔立で、躾も充分に受けているらしい、と告げられると、

「通せ」と、ゆるした。

書院に入って武家娘のなりをした明子へ一瞥をくれるや、どこかで見かけたような、と思ったが、すぐには記憶に甦らなかった。

「御用向きを、簡単に云わっしゃい」
「眠狂四郎殿に会わせて欲しい」
「なんの理由じゃな？」
「渡したい品がありまする」
「わしから渡して進ぜよう」
「断りまする」
——どこかの国主の娘のように尊大な口のききかたをするが……。
不審を湧かせて、こころみに、
「そなた、狂四郎に迷うたか？」
ずばりと訊ねてみた。
娘の表情は、なんの変化もみせなかった。云われた意味がわからなかったのである。
——はて？
この時、仙十郎の脳裡に、急しく働くものがあった。
意地悪な眼眸が、ぴたりと明子の顔に据えつけられてうごかなくなった。
「わたしは、狂四郎殿に、是非とも会いたいのです。ききとどけて欲しい。どうぞ、たのみまする」
かさねての願いに、しかし、仙十郎は、こたえるかわりに、突然、妙な呻きを発した。それから、急に、うれしそうに、にこにこ相好を崩すと、やさしく、

「貴女様を、誰が、この江戸へおつれ申しましたな?」

と訊ねた。いかにも、何気ない誘いに、ついつりこまれて、

「白鳥主膳です」

うっかりこたえた明子は、はっとして、まじまじと仙十郎を瞶(みつ)めかえした。

「いや、左様でござったか。ははは……成程な――。うむ、これはあり得ることじゃ。まさしく、一眼(いちげん)の亀浮木(かめふぼく)に逢(あ)う――有難き幸せでござる」

主君忠邦が、京都所司代に任じ、侍従をつとめたのは、三年前である。その時、仙十郎は、禁裏付となり、自由に御所に出入していた。いくども、この清らかな乙女を見受けていたのである。

「帰ります」

敏感に、明子は、不安に駆られて、立ちあがろうとした。

「おっと……姫様、この爺(じい)めを御警戒なさるにはおよびませぬぞ。眠狂四郎は、いわば手前の伜(せがれ)も同様、親爺(おやじ)の方もせいぜい御贔屓(ごひいき)にねがいまする。白鳥主膳の屋敷と、手前の家と、どちらが住み心地がよろしいか、おためし下されるのも一興かと存じますぞ。……たぶん、主膳は、貴女様を江戸へおつれ申したものの、いまだに何処(どこ)へも御案内はいたして居りますまい。貴女様ご自身は、広く世間が見たいとお考えに相違ございますまい。よろしゅうござる。この爺めが、明日よりおともつかまつる。江戸と申すところは――貴賤(きせん)貧富あらゆる階層がひしめいて居りましてな、下世話(げせわ)に申す、駕籠(かご)に乗る人、乗せる人、そのまた草鞋(わらじ)をつ

くる人……千差万別の世路のさまを御覧に入れましょうぞ。下駄も阿弥陀も同じ木のきれ、と申しまするわい。貴賤を問わず、若い女子のよろこぶものぐらい、この爺めは心得て居りまするぞ、はははは……」

三

眠狂四郎は、深川今川町の文字若の家の二階で、ごろりと仰臥して、目蓋をとじていた。下の稽古場から、いずれ粋とか通とかに憂身を窶しているに相違ない古店のあるじと文字若の、常磐津と長唄の掛合がきこえていた。

「仇な恋路の色里通い、夜は軒端に立ちつくす」

「エエ待つわいな。お部屋の目顔があるわいな。無理な首尾して逢うたが憎いかえ。さりとては、恋には粋も愚痴になる。これは五色の色の外」

「新発田五万石は荒そとままよ。新潟通いがやめらりょか――」

――何故、美保代は姿を消したか？

雛の首を失ったので絶望したのかも知れぬ、といったんは思いすてていたものの、こうしてあらためて考えてみると、それが身を匿さねばならぬ理由とはならぬような気がするのだ。

――左馬右近に奪われたとすると？

狂四郎は、ぱっと身を起した。脳裡に突如として来た直感が、錐を揉み込まれるような疼痛をともなった。

――そうか！　右近め！

狂四郎は、猛然たる血のたぎりを抑えるために、猫脚膳の銚子を摑みとって、口のみした。

右近はすでにこの世にはいないのだ。それが、狂四郎には、堪えがたかった。

「狂四郎、どうだ、ここまで追って来れまい」

と、あざけっている右近の悽惨な形相が、彷彿と泛んで来る――。銚子を摑んだ左手が、わなわなと顫えた。

ばしっ！

銚子が砕け、みるみる指のあいだから鮮血がしたたった。

――おれは、美保代に惚れている！　美保代はおれのものだ！

烈しく、心中で叫んだ。しかし、その声なき叫びは、出口をふさがれた洞窟の中の反響のように、ぐわんと渦まいて、おのれの孤独感を狂気へかりたてる作用しかなさなかった。そして、その後には、名状しがたいむなしい寂寥が来た。美保代は、もはや、手のとどかぬ遠くへ、小さく、かすかに、去ってしまったのである。

階段に、とんとんと跫音がしたと思うと、文字若が顔をのぞけて、

「先生、お手紙が――」

と、云いかけて、あっとなった。

「ど、どうなすったんです？」

走り寄って、血まみれの左手を覗いて、

「まあ、なんてことを！　銚子をにぎりつぶすなんて――」

と、狂四郎の横顔を見やったとたん、文字若は、はっと心に閃くものがあり、みるみるいたましそうに、まぶたをまたたかせた。

狂四郎は、その視線がわずらわしいのか、わざと手荒く、文字若の手から、封書をひったくった。

武部仙十郎からの手紙であった。火急、と記してある。文字若が、傷の手当を終えた時、狂四郎は、もとの冷たく冴えた無表情をとりもどしていて、

「爺さん、無理な注文をする」

と、呟いた。

「どんな注文なんです？」

「白鳥主膳を、傷も負わせず、生捕って来い、というのだ」

文字若は、息をのんで、狂四郎を瞶めていたが、

「どうなさいます、先生？」

「遊刃余地あり――と云いたいが、対手が聊か手強すぎる。まともに、たたかって、こっちが勝てるかどうかだ」

そう云いすてて、狂四郎は、ごろりと横になった。文字若は、しばらく、狂四郎の寝顔を、じいっと見下ろしていたが、

「あたしが、お手つだいしますよ、先生」

と、云った。

うす目をひらいた狂四郎は、文字若の顔が別人のように鋭くひきしまっているのを見出して、

「お前が——？」

「あい。ほかの対手ならいざ知らず、白鳥主膳なら、このあたしに、料理のしかたがござんす」

きっぱりと、云いはなったのである。

四

雛祭りを明日にひかえて、日頃は静かな大名小路も、御道具や白酒納めの御用達出入衆が急がしく行き過ぎたり、荷籠をらんまんと盛咲かせた花売りが、剪刀をチョッキン鳴らし乍ら呼び歩いたり、栄螺や蛤や焼串わかさぎを入れた黒塗桶をかついだ魚屋が威勢よくすっ飛んで来たり——絶え間ないにぎわいを呈していた。

その中を、目もあやな衣裳の亀屋頭巾の武士が、かろやかな足どりで行く——。

半町の距離を置いて、文字若が尾けていた。

主膳は、小路を幾曲りかして、大川端へ出た。

春の午さがり——。風もなく静かに晴れわたったこの明るさは、お雛日和にふさわしい。行き交う人々の顔つきも足どりも浮き浮きしているようにみえる。

白鳥主膳は、華やかな三味の音と唄声を撒き乍ら下って来た花見舟を、頭巾の陰から目で追い乍ら――たしかに、それに気をとられていたに相違ないが、背後から、すすっと寄って来た者が、ほのかな甘い脂粉と髪の香を漂わせて、つと、袖をこするようにして前に出ようとした刹那、もうその左の手首を、ぐいと摑んでいた。

吃となって振りかえった文字若の、眦を切った細面は、春陽の中に凄艶といっていい美しさであった。この冒険のために、特に念入りに粧うていたのである。

「どうするのさ、あたしを――」

この台詞は、五年前と同じであった。

すると、主膳の返答も、また、五年前と同じだったのである。

「さあ、どうしようかな――」

妖しく澄んだ双眸を、やさしく微笑ませると、文字若の手を摑んだままで、悠々と足をはこび出したのも、あの日と変わりはなかった。

ちがっていたのは、つれ込む料亭を物色する途中で、

「お前は、あの時よりも、ずんと綺麗になったな」

と、主膳が云ったことである。ちゃんとおぼえていたのである。

しかし、主膳は、この女が、先日、自分を尾けて、升屋に忍び込み、備前屋との密談をぬすみ聴いた女と同一人であろうとは、夢にも気がつかなかった。

――五年前の仕返しをしようとしたのか。

そう思っただけである。五年前よりも一層すっきりとした仇姿になっているのが、主膳にとっては、何よりの愉しさであった。手頃の料亭を見つけて、離れを所望し、女中がひきさがると、

「野暮な抵抗は無駄だ——と断る方が野暮かな」

と云って、主膳は、ふふふふ、と含み笑いをした。

この女が、五年前とちがって、そのからだに鋭い反撥力をたくわえているのを見てとったからである。

「旦那、あたしも、素通りお仙でござんす。ドジをふんだら、素通りはいたしませんさ。三度目の勝負と申します。この次こそ、見事に、お腰の印籠を頂戴してごらんに入れます」

「いい度胸だ。が——三度目も、たぶん、おれのものだろう。せいぜい、色わざの方を修業しておいてもらおう」

文字若は、その揶揄へ、にっこりと媚を満たした流眄を送っておいて、すらりと立つや、鼠の厚板の帯をするするとほどいた。蛇のようにうねって、足もとを巻いたその上へ、つるりと肩からすべり落ちた路考茶縮緬が、ふわっと音もなく舞いもつれて、一粒鹿の子の黒裏を拡げた。ついで、極上々の黄八丈の下着も脱ぎすてた文字若は、燃えたつような緋の紋縮緬の対丈襦袢に、爛熟した堅肥りの肢体の曲線をあらわにして、乱れた着物を無造作に踏みまたいで、主膳の脇を抜けると、襖をさらりとひらいた。

次の間には、すでに、ちゃんと花の夜具が延べてあった。

それから幾分かの後——。

文字若は、思いもかけず、からだの一部分から、満潮のように徐(おもむろ)に四肢のはしばしまで拡がって来る微妙な快楽の律動に、抗(あらが)い難くなっているじぶんを慙(は)じつつも、脳裡の片隅(かたすみ)では、

——あたしには、この男とこうなることに、ずうっと前から予感があった。

そんな意識をたゆたわせていた。

男の頬(ほお)は、ぴったりと文字若の頬に膠着(こうちゃく)して、その口は執拗(しつよう)に彼女の柔かな耳朶(じだ)を貪(むさぼ)りつづけていた。

やがて——。

波濤(はとう)が急速にうねりあげて来て……のみこまれ、身もだえ、気遠くなった文字若が、必死に呻きを嚙(か)んだ瞬間——。

襖がひらき、音もなく黒影がすべり入った。

主膳は、しかし、その時、波濤の頂上に乗って、全身を痙攣(けいれん)させていた。

眠狂四郎は、そのまま、彫像のように動かず、波濤のひき去るのを待った。

主膳が、侵入者の気配をさとって、総身に別の戦慄(せんりつ)をつらぬかせるのと、冷たい刃金が頸(くび)すじへあてられるのが同時だった。文字若は、非常な素迅(すばや)さで、主膳の下から抜け出て、座敷へのがれた。

「不粋のふるまい、てまえの本意ではない。釣針を含む魚は深き淵(ふち)に入って尾を振ると雖(いえど)も、遂(つい)には陸(くが)に上る憂(うれ)いあり——まんまとひっかかったとあきらめて頂くよりほかはない」

そう云って、狂四郎は、白刃を引くと、主膳の観念の所作を待った。

五

雛の日、将軍家斉の略式鹵簿(ろぼ)が、水野忠邦の上屋敷へ到着したのは、巳(み)の下刻であった。

ただちに、午餐(ごさん)になり、庭に設けられた能舞台における素舞、吾嬬琴(あずまごと)を愛(め)で乍ら、盃がかさねられた。

終って、忠邦より、吹上苑(ふきあげえん)へ初鶴献上の披露(ひろう)があった。

本丸老中代理土方縫殿助が、

「上様には、白酒を御所望あそばされて居る」

とつたえたのは、お発(た)ちの時刻が迫ってからであった。

忠邦は、心得て、下座にひかえた武部仙十郎に下知した。仙十郎が、扇子を挙げると同時に、二の間との仕切襖が、するすると左右にひらかれた。

人々の視線は、一斉にそこに飾られた雛段の上段へ注がれたが、そこには、水色の御簾(みす)がふかぶかと垂れていた。桜を描いた吉野紙をつけた燭台(しょくだい)が、二段目三段目で、あかあかと炎をゆらめかしているので、御簾の中は、見透しがきかなかった。

朱袴の侍女が、蒔絵(まきえ)のギヤマン徳利と盃をささげて、将軍の前へ進み出た時、御簾が、ひどくもったいぶって、一寸きざみに、そろそろとまきあげられていった。御簾が、天井までまきあげられるや、広間には、固唾(かたず)をのむ一瞬の沈黙ののち、異様な動揺が起った。

上段に並んだのは、まぎれもなくお小直衣雛ではあったが、それは、生きたお内裏様だったのである。

しかも、男雛も女雛も、作られたものより、はるかに、典雅佳麗の貌を誇っていたのである。

「無、無礼なっ！　越州殿、これは、何事でござる？」

縫殿助が、目をいからせて難詰したが、忠邦は、平然たる微笑をむくいただけであった。

縫殿助は、家斉へむかって何か云おうとしかけて視線をまわし、あっけにとられた。

家斉の顔にも、明るい微笑がうかんでいたのである。

女雛となった娘こそ、家斉が先年京に遊んで、桂離宮に泊ったおり、親しく宴席行楽をともにした皇女桂宮明子内親王だったのである。勝気で、もの怯じせず、活発な振舞いをして、お付きたちをはらはらさせた明るい少女であった。

——美しゅうなられた。……忠邦め、なかなか、突飛な趣向をこらすものぞ。

家斉は、つい前年まで京都所司代であった忠邦が、桂宮のねがいを入れて、お忍びの江戸見物をさせているのだと推測したのである。

——男雛の方は、公卿であろうが、見たことのない若者だな。

と思いつつ、家斉は、かるくお内裏様へ会釈しておいて立ちあがっていた。

男雛が、そのお小直衣の下で、手足をぎりぎりに縛りあげられていることを知っているのは、この広間では、武部仙十郎ただ一人だったのである。

湯殿の謎

一

上巳雛祭が終ってから程なく、水野越前守の上屋敷内で、わずか十三、四日ばかりの間に、奥女中が三人も急死する事件が起った。しかも、いずれも、湯殿で、冷たくなったのである。最初に仆れたのは、お手付中老のお綾という美女であった。これは、浴槽に凭りかかって、首だけ湯の中へ突っ込んでいた。お手付になったのはすでに数年前で、その後、忠邦の好みにあわず、ずうっとすてておかれた女であった。

部屋子が、浴衣をもって行き、

「お背中をお流し申上げましょうか？」

と、玻璃戸ごしにたずね、しいんとして返辞がないのを不審に思い、隙間をつくってそっと覗いてみて、あっとなったのである。

二番目に果てたのは、奥女中総取締りの老女琴瀬であった。三日後、これは、八畳敷のお板敷（流し場）の中央に、仰のけにながながと横たわっていた。五十半ばに達した文字通りのお年寄であったが、生涯を長局の中ですごしたからだは、二十代の豊満な肌をもっていた。

琴瀬は、脱衣する高麗縁の八畳敷の板戸へ内から必ず錠をおろす習慣があったので、部屋子は、廊下で待っていなければならなかった。琴瀬の入浴時間はいつも長かった。しかし、その日はそれにしてもあまりに長すぎたし、先日のお綾のこともあるので、部屋子は、急に不安に駆られて、板戸をたたいてみた。はたして、なんの応答もなかった。部屋子は、七つ口へ走って、宿直の士を呼んで、板戸を破ってもらった。

琴瀬の絶命ぶりは、公表をはばかるものがあった。彼女は、孤栖幽貞を保つ婦人がひそかに翫ぶ水牛製の具を挿入したなりに仰臥していたのである。必ず、板戸に錠をおろしていたのは、この秘密の愉しみのためであった。尤も、この行為は、当時にあっては、殊更に怪しむには足らぬことだった。

天明寛政の頃に書かれた「黒甜瑣語」という随筆に、

「今、東都に角先生、蝎師父を作り、大いに舗を開き……貴顕侯家の寡女孀婦、あらそいて購い、亡八に依託して、想う男に引逢う……」と記されている。明和版本「今様和談色」には、オランダから逸品を輸入したと出ているくらいである。

それは、ともかく、奇妙であったのは、お綾も琴瀬も、ほんのわずかな苦悶の表情もとどめていなかったことである。睡るがごとく、静かな死顔であった。もとより、裸身に、なんらの危害を加えられた痕跡はなかった。

以前にも述べたことがあるが、当時、大名屋敷の湯殿は、浴槽の下を焚いて沸かすのではなく、湯と水を、大きな玄蕃（桶）で運んで、加減を整えたのである。したがって、大層凝

った造りが可能であったし、殊に長局のそれは、琴瀬の死にざまがしめすごとく、鬱積の情熱を噴かせる場所となっていたので、贅をつくしてあった。

お年寄、中老たちは、午に入浴するしきたりであったので、今日の温室のごとく屋根の片側を瑠璃色の玻璃で張り、燦々たる陽光を採ってあった。そうした、何ものにもかえがたい愉しみの場所で、二人までも、死に絶えるとは——彼女たちの受けた衝撃が、どんなに激しかったか——他の世界の者の想像以上のものがあったろう。

ともあれ、不吉のその浴室は、閉じられ、忠邦夫人の好意で、夫人専用の浴室の使用がゆるされた。

ところで、大名屋敷奉公には、上った時の誓詞の中に、同浴同衾の禁制があった。いまわしい習慣をもたない若い女中たちは、たとえ新しい浴室とはいえ、一人で入るのを、なんとなく怕がったが、やむを得ぬ仕儀だった。

しかし、およそ十日過ぎても何事もないので、このところ長湯を避けていたお年寄、中老たちが、そろそろ物具恋しい気持を起しはじめた。

そのみだら心へ冷水をあびせるように——第三の犠牲者が出た。琴瀬と同じ老女だったが、これはまだ三十になったばかりの染村という勝気な女であった。武芸にもすぐれていたし若い女中たちの恐怖を嗤っていた矢先であった。

この時は、脱衣場には、部屋子が控えていたし、染村は、ゆっくりと入浴をすませて、玻璃戸を開けてあがって来て、白羽二重の腰のものをまとうて、鏡台の前に坐ったのである。

とたんに、ぐらりと前へのめり込んだのであった。

二

たちまち——長局中、騒然となった。

駆けつけた宿直の士が、死人を袿で掩うて運び出そうとした時、廊下にむらがっていた奥女中たちが、急に左右に退いて道をあけた。すっと、戸口に姿をあらわしたのは、黒の着流しの眠狂四郎であった。

「お側頭役の依頼によって、死因をしらべさせて頂く」

と、ことわって、屍体を置かせ、袿をとりはらった。

まず、仰臥の裸身を、顔から足先までずうっとひとわたり調べてから、ついでごろりと俯伏させて、背肌へくまなく視線を移した。

固唾をのんだ人々は、狂四郎の眉宇に、かすかな困惑の色が刷かれるのを見てとって、暗然となった。この蒼白い異相の浪人者の鋭く冴えた頭脳と水際立った腕前に対して、水野家の人々は、絶対的な信頼をおいていたのである。その男が、困惑したのである。これは、さらに一層の、ただならぬ恐怖感を、すべての胸中に湧かせる影響があった。

狂四郎は、つと立って、湯殿へ足をふみ入れた。

湯殿は、悲惨な死の翳のただよう余地のない、麗らかな春光が、玻璃屋根からいっぱいにさしこんでいた。のみならずえも云われぬ芳香が、むせかえるほど強く罩っていたのである。

狂四郎は、自身の大きな影法師を移して、板敷、板壁、玻璃屋根のすみずみまで見わたした。窓は、はるかな高処に二尺四方のがひとつだけ切られてあるが、中央は水沢瀉紋を透彫りにしたこまかな菱格子で、小鼠いっぴきくぐるのも不可能である。

浴槽をのぞき、真鍮の金盥で湯をすくいとってみた。ついで、白木の台にのせられた糠袋をつまみとった。白い真岡であった。しかし、ただの真岡ではなく、芳香はこれから発していたのである。幾種類もの花の香をまぜてあるとみた。ほんのわずかでも麻薬の匂いでも含んでいれば、狂四郎は敏感にかぎわけた筈である。

念のために、狂四郎は、女中の一人へ、

「この糠袋は、いつ頃から使用されているのだ？」

と、訊ね、筋目の通った御用達商人の手によって三年も前から納められている品だときかされた。疑うべくもないのである。

——麻薬であって欲しいところだが、……そうでないとすると、これは、どうなる？

あらためて、馥郁として花の香の満ちた湯殿をぐるりと眺めやって、狂四郎は、かすかな苛立たしさに駆られた。

他殺と推測すべき何ものもないのである。屍体には、一点の傷もつかず、湯殿に毒気はなかった。下手人が絶対に出入り出来ぬ密室において、三人の裸女が、春光と花の香につつまれて苦悶もみせず、息絶えたのである。

——負けたな。

狂四郎は、兜(かぶと)を脱いで、苦笑した。
黙って、数百の凍った視線に送られて長局の廊下を遠ざかった狂四郎は、武部仙十郎家の書院に戻ると、
「わたしには、与力同心の眼力も嗅覚(きゅうかく)もないようだ」
と、云った。
仙十郎の皺面(しわづら)には、流石(さすが)にいつもの微笑はなかった。
「殺されたことに相違はあるまい」
「下手人のない他殺ということに相成る」
「弱ったの」
「危険へ身を運ぶのは一向にいとわぬが、それをたぐって行く糸口が全く見つからぬのだから、話にならぬのです。ご老人、あなたに、解いてもらうよりほかはない」
「長局に怨(うら)みを抱く女を、先程から考えていたのだが――」
「…………」
狂四郎は、腕を組んで、じっと仙十郎を瞶(みつ)めた。
「一昨年の秋に、殿のお手付になろうとして小ざかしく陰にまわっていろいろ細工を弄(ろう)した女がいての。どうも、本丸側の廻し者くさいので、追いはらってやったが……波江と申したな、大久保の百人組の組頭菅谷康右衛門の娘だ。さしあたって、長局へ意趣返しをたくらむ者がいるとすれば、あれぐらいしか思いつかぬが――」

「かりに、その女が下手人だとしても、どんな手段で、三人までも、見事に殺したか――幽霊になって忍び入ったとすると、これは、わたしの剣より坊主のお経の方が役に立つ」
「ま、ま、そうさっさと匙を投げんでくれい」
仙十郎は、懐中から、蒔絵の小函をとり出して、狂四郎の膝の前に置いた。
「ご機嫌とりじゃ。おぬしへかえしておく」
狂四郎が、蓋を取ってみると、男雛女雛の首であった。
「桂宮様が、おぬしに渡しておいてくれと預けて行かれた」
桂宮明子は、目下、西丸大奥に移っていたのである。
「いずれ、おぬしから、美保代に渡してやるがよい」
「ご老人は、美保代の居処を教えて下さらぬではないか」
「おぬしが、一年余もすてておいた罰じゃ。時節到来までは、ひとりにしておいてやることだ。男女の仲というものが浮草に似ているのは、お主の方が先刻承知じゃろう。流れのままに行くが宿運――。岩に裂かれたり、瀬渦にまきこまれたり、滝を落ちたりするが、やがて落ちあうさだめがあれば、静かな清淵が行手に待ちうけて居ろうわい」
「そのお言葉、すなおに、頂戴しておこう」
狂四郎は、小函を袂にすると、一礼して立ちあがっていた。

三

麻布六本木の荒れ果てた茅場家は、左馬右近の姿が永久に消え去って以来、空屋敷のように、ひっそりとしていたが、今日は珍しく、三名の来客があった。

奥座敷で、その武士たちを迎えた静香は、終始面を伏せたままであった。

武士たちは、公儀庭番衆――。亡兄修理之介の朋輩であった。用件は、自分たちと一緒に京へ行ってもらいたい、というたのみであった。亡兄のあとを継いで、隠密の役を勤めなければならぬ身の静香に、これは当然覚悟しなければならぬことだった。

「そなたの清楚な気品こそ、御所の女官たるにうってつけなのだ。羽林家の猶子として、ただちに、主上御側付の今参――すなわち典侍として上る」

宮廷の女官の位は、典侍が最高であった。その下に、掌侍、命婦、女蔵人、御差があった。このうち、天皇と直接口をきく資格があるのは、掌侍までで、命婦以下は、お言葉があっても、黙って承り、返辞は典侍、掌侍に申上げておくことになっていた。天皇がお食事の場合、命婦はお末から御膳をうけ取って御側近くまで運ぶが、御陪膳は、典侍、掌侍がしたのである。

もとより、かかる高位の女官に、静香を一躍据えようとするには、公儀の深い謀計があるに相違ない。

「わたくしに、何をせよとの仰せでございますか？」

静香は、俯向いたまま、訊ねた。
しばらく、武士たちは、口をつぐんでこたえなかった。
「おきかせ下さらねば、おひきうけいたしかねまする」
「きいた以上、断ることは許されぬぞ！」
一人が、厳しい口調で云った。
「覚悟はいたして居ります」
「そなたに、天皇御璽（ぎょじ）を盗んでもらう——」
次の一人が、ずばりと云ってのけた。
「えっ？」
愕然（がくぜん）として、静香は、顔を擡（もた）げた。
静香は、宮廷へひそかに出入する尊皇思想の士の名でも記しとめておくか、あるいは公卿（くぎょう）のあいだにそうした動きがあるかどうかをさぐるのであろう、と想像していたのである。
御璽を盗め！
あまりにも意外な、おそろしい命令ではないか！
「わずか一両日の間だけ、紛失すればよいのだ。すぐに返す。そなたは、他人に見つからぬかぎり、なんの罪にもならぬ。その役目がすんだならば、それからは、まことの典侍となって、宮廷ぐらしをするがいい。われわれとも無縁となる——これは、かたく約束出来る。……兄が殺され、左馬右近のごとき狂徒を良人（おっと）にもち、そなたもつぶさに不幸をあじわった。

このあたりで、そなたの生涯の道をきわめてもよかろう」

「どうせ隠密として他家へもぐり込むのなら、典侍の栄誉を得るのは、女として冥利につきる。それに、ただそれだけの役目をはたせば、そなたは、自由の身になる。われわれからみれば、羨望に堪えぬというものだ」

「静香殿、たのむ！」

三名は、頭を下げた。

そのとたんであった。

「ことわった方がいい、静さん――」

その声が、庭さきから送り込まれたのである。

「何っ！」

庭番たちは、一斉に、刀を摑んで、立った。

袖垣の陰から、ふらりとあらわれた眠狂四郎は、ふところ手で、無造作に、矮鶏檜葉をまわって、縁側に近づいた。

「静さん、天皇御璽を盗む理由を、この御仁たちにかわって、わたしが教えようか。御璽を盗んで、将軍宛の贋勅状を作成する。桂宮明子内親王を、将軍にくれてやる、というしろものをだ。どうだ、おのおの方、わたしの勘は、こういう場合、自分で感心するくらいのものだ。土方縫殿助の仕組んだ狂言だろう。西丸老中邸で、生雛を見せつけられた縫殿助が、なんとかして越前守の鼻をあかしてやろうと思いついた――」

狂四郎が、明快にあばいてみせる間に、すでに、三名の庭番は、庭へ趨って、白刃を抜きつれていた。

午さがりの眩しい陽ざしを、狂四郎へまともに射かける有利の地歩を占めて、三本の切尖は、一貫の脈絡をたもって、一如一挙の勝利を挙げるべく、じりじりっと、闘志の環をちぢめて来た。

狂四郎は、平然として、総身に春光と殺気をあびて、まだ悠々と両手をふところに置いていたが、

「静さん――」

と背後へ呼びかけた。

「左馬右近への手向けに、この勝負には、わたしの目を使うまい。右近にかわって、見とどけてもらおう」

静香は、大きく目を瞠いて、息をのんだ。

四

「如法闇夜の円月殺法だ。来いっ！」

叫ぶや、狂四郎は、一足引いて、目にもとまらぬ迅さで無想正宗を地摺り下段にかまえていた。

双眼をぴったりとふさいだ虚無の貌は、やや前へ傾けられていた。

敵たちは、その場へ縫いつけられたように、きれいに影法師を揃えて、微動もしなかった。
狂四郎の瞑目は、かえってその静止相を凄絶なものにしたのである。
と——。
無想正宗の鋩子が、晃っと陽光を刎ねて、秘妙の殺法の緒についた。
その妖気こもる白刃の運行を、敵たちは、見まい——とした。
しかし、見まいとする意識が、戦慄を誘い、その戦慄を弾きかえす思念が、描かれる円月を凝視させずにはおかなかった。そして、その凝視に堪え得なくなった刹那が、闘魂の爆発であった。
「やあっ！」
正面の者が、ぱっと大上段にふりかぶった。無想正宗が、その凄じい気合を、刀背に吸いとって、ぴたりと、空間に停止した。
すると、正面の者は、充血した双眼をいっぱいにひき剝いたまま、おのれの姿勢の破綻した恐怖に襲われて、固着した。
「来ぬか！」
暗黒の世界の中で、狂四郎は、ひくく、鋭く、贄を求めて、切尖を、蜻蛉が空中をすべるがごとく、すうっと二寸あまり移行させた。
「ええいっ！」
右方の敵は、めりめりと亀裂が入らんばかりに力をみなぎらせた総身の筋肉から、全生命

力を沸騰させて、斬り込んだ。

びゅっ！

二条の閃光が、練絹のような明るい白昼の空気に、灼熱の刃金の匂いを撒きつつ、交叉した。

攻撃者は、血煙りと絶鳴をあげて、どどっと蟹這いに横の味方へ泳ぎ、この世の見おさめに、空の潤んだ青さをなつかしむかのごとく、かんまんに、顎をあげて、せわしく、まぶたを、またたかせた。

それから、摚っと地ひびきたてた。

「次は、どちらだ？」

狂四郎は、もとの下段の構えへもどり、盲目を、二人の敵の中間に置いた。

――魔神にひとしい！

朋輩を、一颯で仆された者たちの胸には、あり得ない奇跡をそこに目撃した自失感があった。

彼らは、狂四郎が、猛撃をどう躱したか――いや、躱しもせずに、袈裟がけに斬りはらった迅業を、いかなる流派にもない奇怪なものにみとめたし、静止にかえったその姿から濛としてゆらめき昇る剣気を、別の世界から来た化生の者がもつ妖しさとおぼえずにはいられなかったのである。

「どうした？」

狂四郎が、再び促した。

「こちらは間合をすてた盲だぜ。目あきの時の円月殺法とはちがっているのだ。……柳生流のお手前がたは、どうやら、青は藍より取って藍よりも青いということを知らぬようだな。教えてやろう。おれの盲目殺法は、じつに、お前がたの柳生流をぬすんでいる。すなわち猿飛と燕廻しの応用だ。わかったか！」

と、あびせられて、両名は、竦然として、脈搏を凍らせた。

もとより、柳生流免許の彼らが、それをわがものとしていない筈はなかった。いや、おのが流派の極意であるからこそ、かえって、対手にその秘術をぬすまれているなどとは、夢にも想像しなかったのである。

いわば、盲目の狂四郎よりも、彼らの方がもっと盲にされていたのだ。

猿飛とは――。

文字通り、猿猴の身軽さをもちいる業である。青眼の切尖と切尖が三尺へだてていても、この間には千丈の谷があると心得る。間合が詰まり、その一刹那が来る。その時、敵が、太刀をまいて、もし小手へ打ち込んで来るや、小手をはずして斬りかえすのであるが、業を急がず、遅速ともに、敵の動きにのっとり、その白刃の上に身を置く柔軟さをもって、石火の跳躍をみせる。あくまで、敵の攻撃にあわせてもちいる駆引の秘術である。

燕廻しとは――。

つばめ巡るともいう。猛鳥が一文字に来てつかみかかる一拍子に、飛びちがえてやりすご

す燕の身ごなしは、またたくよりも迅い。この呼吸で、猿飛から燕廻しに移って、まっ向に斬る。敵が、太刀を横にさげ、鎬に左手を添えて十文字に取揚もうとせんか、間髪に筋違えて、勢いをすてる。すなわち、敵に、太刀をとりなおす隙を与えて、こちらは、霞の構えになる。敵が猛然と斬りつけて来るや、霞をかえして、うけ流すとみせて、その胴を薙ぎはらうのである。いかに、飛燕の素迅さ、かろやかさで、刃と五体を巡らすかである。

まさしく、狂四郎は、このふたつの秘術を応用したのである。

——おのれっ！

——くそっ！

意表を衝かれ、嘲られたふたりの庭番は、くわっとまなこをひらきなおして、吐く息をふいごのように炎の波に乗せた。狂四郎は、さっと、左右にひらいた敵の動きを、柳生流乱剣を使うとはかって、にやりとした。

これは、当然の処置であり、序破急三拍子の正しい攻守の時は去ったのである。

縁側に佇む静香の遠いひとみに、次の瞬間からまきおこった疾風の斬りあいが、なにかふしぎな光と影の目まぐるしく躍り狂う自然現象のように、映った。そして、眩暈とともに、視力も薄れ……ただ、耳の底に、虚空をつんざく気合と刃風と、人肉の断たれる音と、断末魔の唸りが、とび込んだ。

はっと、意識をふるいもどした時、静香は、庭上に立ち残っているのが、狂四郎ただ一人であるのを見出して、崩れるように坐った。

狂四郎は、だらんと衂(ちぬ)れた無想正宗を提(さ)げて、まだ、くら闇の中にいた。

ようやく——なごり惜しげに、まぶたをひらいた瞬間、まず、狂四郎の目に映ったのは、荒廃の庭園に、生茂った雑草にかこまれて、一輪ぽっかりと咲いた白い薔薇(ばら)の、鮮烈な美しさであった。

その花弁の一片(ひとひら)が舞いたったようにいっぴきの蝶(ちょう)が、その上で、ゆるやかに双翅(そうし)を上下させていた。

とたん——。

——おっ！　そうか！

霊感に似た推理の働きが、狂四郎の脳裡に起ったのである。

——読めたぞ！　湯殿の女中たちの死因が——。

ひとり莞爾(かんじ)として合点した狂四郎は、やおら、むきなおって、静香を見た。

静香の血の気のない寂寥(せきりょう)の面貌(めんぼう)は、一種の痴呆(ちほう)の色を漂わせていた。

「挨拶は略させて頂く——。静さん、右近を斬ったのはわたしではない。そのことをことわりに来た」

静香は、かすかにうなずいた。狂気からも見はなされた者の、あまりにもいたましい静けさが、そのほっそりとしたすがたをつつんでいた。

「ついでにききたいことがある。右近は、美保代から雛の首を奪った時、あの女を犯したか、どうかということだ。……知らぬか？」

訊ねてみて、しかし、静香の表情がそのまま木彫のように動かぬのを眺めた狂四郎は、その放心のあわれさに、心をかすかに痛めつつ、かさねて、
「右近は、美保代を犯したのか？　知っているのなら、教えてもらいたい」
と、たのんだ。しかし、静香の眉宇が、なぜか、くるしげにひそめられた。それから、くちびるが、わなないた。静香は、狂四郎が返答を得るまでは、またすこし時間を置かねばならなかった。
「あのひとは、けだものでした」
その言葉に、狂四郎は、奈落につき落される悪寒をおぼえた。
「そうか――」
狂四郎は、一礼して、踵をめぐらした。
静香が、突如、名状しがたい苦悶の相と化して、
「ああ！」と、うめいたのは、それから数分後であった。
「わたくしは、嘘をついた！　狂四郎様をだました！」
つきとばされたように庭へ降りて、はだしのまま、表へ走った。しかし、往還には、狂四郎の姿はすでになかった。

五

次の日の朝、狂四郎の姿は、大久保の百人組の組頭菅谷康右衛門家に見出された。
「ご当家に、波江殿と申される御息女がおいでですな？」

挨拶をすませて、すぐきり出すと、主人は、憮然たる面持で、
「故あって、勘当いたした」
と、こたえた。一徹な、かたくるしい気性らしかった。
「只今は、どちらにお住いか、ご存じよりであれば、うかがわせて頂けますまいか？」
「はっきりとは存じ申さぬ。半年ばかり前に、若党が、どこからきいて参ったか、巣鴨の百花園にいるらしい、と申して居ったが、ききすてておいて、たしかめもいたさぬ」
百花園は、本丸西丸大奥に飾る花をつくる公儀直営の花園であった。主としては、花壇菊の培養に力をそそがれていたが、およそ、当時としては、ここで見出せない四季の花はないといわれていた。
狂四郎は、満足の微笑をうかべて、礼をのべて立ちあがっていた。

「ご老人、奥女中たちに、今日から安心して、ゆっくりと長湯を愉しむがよい、とおつたえ願おう」
ふらりと、武部仙十郎家へあらわれた狂四郎の最初の言葉が、それであった。二日置いての宵のことである。
「ほう——片づいたか」
仙十郎は、満足げに、にこにこした。
「どうやって謎を解いたな？」

「御当家の湯殿には、およそ百坪以上の花園に咲きみだれた花がはなつにひとしい芳香がたちこめて居る。玻璃屋根から日光は降りそそぎ、時刻も恰度真昼、となると、蜜をもとめて、小さなやつが、天窓から舞い込むにはまさしくこの上ない条件がそろって居る――」
「成程、下手人は蜜蜂めであったか」
「長局を追放された女が、復讐を企図して三年間、蜜蜂の飼育に精をこめた。十年前、わたしは、瀬戸内海の島に在った時、蜜蜂のふしぎな習性を丹念に眺めたことがあります。女王蜂を中心に数百匹の雄蜂と数万匹の働蜂のいとなむ巣脾の造営、食物の採集運搬貯蔵、蜜の醸造、蠟の分泌、外敵の防御――すべて、これは、人間もおよばぬ整然たる生活です。一国の経営――まさしくそれでした。ところで、働蜂の中に、花をもとめて単独に飛ぶ偵察蜂が居ります。これを捕えておいて、ひとつの目的のために訓育する」
「ほほう、どういう訓育じゃな？」
狂四郎は、微妙な皮肉な苦笑を泛べつつ、
「女体の幽谷に、花粉があると信じ込ませる訓育です。この訓育を辛抱づよくほどこした偵察蜂を、御当家の邸前で飛ばす。蜂は、花の香の満ちた湯殿へ舞い込む。そして、当然、花粉を欲して、幽谷ふかく侵入しようとする……」
「待った。女どもが、それに気づいて追いはらおうとするのではないか」
「心しずかに湯浴みしている女ならば、あるいは然らん。蜂を追いはらった女中も幾人かいたに相違ない。しかし、長局の湯殿がいかなる愉悦の場所であるか、ご老人の方が先刻承知

の筈ではないか」
「うむ！」
「意識を忘我の境に置いた女体は、蜂の侵入をやすやすと許す。……蜂の臀には、刺針があり、これは一度敵を刺すと、蜂もまた死ぬので滅多に使わぬが……。殺された三名は、蜂に侵入されてはじめてわれにかえって狼狽したか、あるいは、その蠢動に更なる快楽をおぼえたか、いずれにせよ、蜂の怒りを買う振舞いを犯した。憤然となった蜂は、針を刺しつらぬいておいて、そのまま、女体内に果てた。……ご老人、飼育者が、その蜂の臀へ、あらかじめ猛毒を塗っておいたとしたら、いかがだ？」
仙十郎は、狂四郎の途方もない推理に、ただ啞然として、目を瞠っていたが、はっと気がついて、
「で——おぬし、波江をどうした？」
しかし、その問いにこたえようとはしない狂四郎の脳裡には、むごたらしいひとつの光景が甦っていた。
昨日、夕陽の頃、巣鴨百花園の一隅において、無想正宗の切尖は、左様——二年前、西丸大奥の後苑において、女間者の衣裳をさいごの一枚までも剝ぎとったことがあるが、その残虐の光景を再現したのである。そして、一糸まとわぬ柔肌へ、奪いとった蜂蜜をあびせかけておいて、十数個の巣箱を蹴破ったのである。
わあああんと空中いっぱいに舞い立った数十万匹の蜂は、べっとりと蜜に濡れた裸身へ、飛

矢のように集中した。

撩乱（りょうらん）として咲きほこる百花の中を蜂の大群にまっ黒にまぶれて、のたうちまわる女の最期（さいご）のさまを、狂四郎は、氷のように冷やかな眼眸（まなざし）で、見とどけて来たのである。

円月決闘

一

暮六つ――。

水野忠邦上屋敷の裏門から、一梃の駕籠が出た。左右につき添うているのは、さむらいではなく、立川談亭と巾着切りつばめの金八の両人であった。

夕靄のただよう往還を、ものの十間もあゆまぬうちに、

「おうおう、師匠、今夜は、大まがきで、わあっと、こう、大尽遊びなんだろうな」

と、金八が大声を出した。

「云うにゃおよぶ。羅生門河岸で、鬼っ面を一分に値切るのたあ、足どりがちがいやす。拙の雪駄のひびきを耳かっぽじってきいてみな。げに花魁の、すすり泣きにぞ似たりける。これ、金八その方も、もそっと胸を張ってな」

どうやら、上屋敷の定府上役のお伴をして、吉原がよいとみえた。

「へへイ、胸も欲も張ってらあ。

ぞめきにごんせ　吉原へ

小野道風（おののとうふう）じゃあるまいし
　かわずに　柳を見てかえる

なんてえ、しみったれた道風とは、道風がちがうんだ。とうふにかすがい、御意見無用、この道ばかりは風まかせ、てんだ。ねえ、師匠、どうしてこう、男ってえ野郎は、こうなるとうきうきしやがるんだろ」

「怎生（そもさん）！　天地が開け、女の裾（すそ）が開けて以来、精気物を為（な）し、游魂（ゆうこん）変を為す、これ天下の理、夫は倡（とな）え婦は随（したが）い、牡は馳（は）せ牝は逐（お）い、雄は鳴き雌は応ず——。春色人を悩まして眠を得ず、月は花影を移して欄干に上る。かの、天上のたのしみも、身に白露の玉かずら、ながらえはてぬ年月も、終に五衰のおとろえの——迷うて来たやら、南やら、これを煩悩（ぼんのう）、六道の辻（つじ）と申しはべるな……」

「師匠、おらあ、ひとっ騒ぎしたら、やっぱり、へへ、情夫（まぶ）はひけ過ぎ——松葉屋の花紫のところへ行かせてもらうぜ。もう半月も、待ちこがれさせているんだ。

　まじらまじらと待つ夜は長い
　　思い出してはじれ酒の
　　逢（お）うて恨みも、明（あけ）の鐘、とくらあ」

「ほっ、あの大女めのどこがいいのか、とんとわからんの。おめえのような小男なんざ、まるで松の木に蟬（せみ）がとまったあんばいだて。おまけに、あの大女の性根と来たら、それこそ、松か柏（かしわ）か、気（木）の強い——これを、そも、奇縁というかの」

「おきゃがれ、足駄をはいて首ったけといわあ。松になりたや有馬の松に、藤のかずらに這いまつわれて、よれつ、もつれつ寝た夜さは、肌を合わして柏餅、って知らねえか、くそ爺い――」

ぽんぽんと、あたりはばからぬ陽気な駄洒落を投げ合いつつ、神田川の左衛門川岸を沿うて下って、御蔵前をまっすぐに過ぎて行った。

ところが――。

駒形堂の前のあたりまで来た時――。

急に、談亭が、鋭い気色をみせて、背後へ首をまわし、誰も尾けて来る様子のないのをたしかめて、

「金八、案ずるより生むが易しだ。うまくいったぜ。白鳥、掛とり、借金とり、とりにがしたる無念さは、か、主膳（崇禅）寺馬場の返り討、ときたの」

「ちげえねえ。さすがは、武部仙十郎、狸爺だけあって、だますテを心得てらあ。二本差のかわりに、講釈師と巾着切りを護衛につけるたあ、お目が高けえや。とんだ吉原土手八丁――」

「来たっ、こりゃ、さっさで」

「吾妻橋だあ。急げっ、駕籠屋っ！」

金八が、どなった。

駕籠は、いっさんに、吾妻橋をつききって、本所へむかって、ツッ走って行った。

二

駕籠が、とめられたのは、古寺龍勝寺の崩れた山門の前であった。

「ええ、お姫様、到着つかまつりました」

談亭が、腰を踞めて、駕籠舁きから受けとった草履を揃えた。

金八が垂れをあげると、あらわれたのは、桂宮明子であった。肩棒の端にさげられた提灯の明りを受けて、御殿女中のいでたちに、緋のお高祖頭巾を被った、すらりとした立姿の芳香春風に韻くといった楚々たる美しさに、思わず、金八の咽喉がぐびりと鳴った。

武部仙十郎は、明子を本丸老中側の陰謀の具にされることをおそれて、西丸大奥からまた水野邸へつれもどしたのである。土方縫殿助が、早くも、天皇御璽を盗んで、明子を本丸大奥に据えようとたくらんだ事実を、眠狂四郎からきいた仙十郎は、先手を打つにしかずと肚をきめたのである。

明子もまた、江戸城の奥ふかくとじこめられていることをきらっていた。

仙十郎は、明子の身柄をかくすにあたって、その役を狂四郎にふりあてることにして、談亭と金八をつき添わせ、此処へ送りつけたのである。

明子の姿が、西丸大奥から消えたことは、日を置かずして、本丸老中側の耳に達するに相違ない。いやもうすでに、さとられているかもわからなかった。明子を奪いかえし、虜囚の生き雛にされた怨みを霽らさんと決死の執念を燃やしている白鳥主膳をはじめ、公儀庭番が、

網をはりめぐらしはじめた予感が強い。

その危機迫る網の中へ、講釈師と巾着切りに護衛させて明子を放ちやったのは、いかにも仙十郎らしいやりかたであった。

「お姫様、むこうの離れでございます。灯が入って居りますから、御在宅でございます。どうぞ、お一人で、お行き下さいまし。手前どもは、ここで、御免を蒙らせて頂きます」

談亭がそう云うと、金八が、あわてて、

「お、おいっ、師匠、そ、そんな——、おれたちも一緒に——」

「下郎は黙ってろ」

「だって、おめえ——」

「ここまでおつれ申上げるのが、おれたちの役目だ。あとは、先生の肚ひとつ——。端役は、役目がすんだら、舞台でうろちょろするのは目ざわりだあな。へい、どうぞ、お姫様、お行きなさいまし」

「ご苦労さまでした」

ためらうことを知らぬ明子は、お高祖頭巾のかげで、微笑すると、かるく会釈をのこしておいて、境内へ入って行った。

「師匠っ！　やい！　駄講釈っ」

金八が、憤然となって、怒鳴った。

「てめえ、さっき、なんてほざきゃがった？　メスとオスとは、天地が開けた時から、春色

が花影をどうとかして、六道の辻で、走ったり鳴いたりするとぬかしたぞ。やい！　眠狂四郎には、美保代様というれっきとした女房があるんだぞ！　それを――こん畜生！　あんな途方もねえ搗きたて餅みてえな、柔かくってあったかそうな生娘を送り込んでみやがれ。先生の精気が物申して、游魂だか男根だかが変ちきりんにならあい。唐変木のももんがあめ！」

「御説ご尤もで――」

「ふざけるなっ！　やいっ、どうしてくれるんだ？」

「胴には首をすげかえて、もそっと血のめぐりをよくしてな」

「何をぬかしゃがる！　血のめぐりが人一倍よくって、指っ先までむずむずするから、こちとら巾着切りになったんでえ」

「ついでに、御婦人がたに対しても、その指っ先は大層御器用だと、もれうけたまわって居りやす」

「うるせえやい！　もしも、今夜、先生とあの生娘が、どうにかなったら、くそ爺い、てめえの薬罐頭をたたき割ってくれるぞ！」

「割ってびっくり、玉手箱――脳みそのあまりの多さに、腰を抜かしての、これだけの知恵の塊りをなぜ講釈師で終らせたか、と――」

「よおし！　おらあ、乗り込んで行って、一晩中床の上に大あぐらをかいていてやる！」

ずかずかと入りかける金八の手を、談亭は、むずとつかんで、

「金八！　おめえ、先生の気性がまだのみ込めねえのか。おれたちが、のこのこついて行ってみろ！　先生は、なんと云う？」

「なにっ？」

「貴様らは、さっさと姫をつれて帰れっ、ときめつけられるのが落だ。お姫様が一人でお行きになりゃ、先生も、追い出すわけにゃいかねえやな。……安心しな、眠狂四郎は、女郎も抱くし夜鷹とも寝るが、こうと肚をきめたら、楊貴妃がすっ裸になってしがみついたって、せせら笑って、金輪際ビクともしねえだけの度胸が据っていらあ……。教えてやろうか、金八。きいておどろくなよ。あのおかたは、実は、天子様のお娘御なんだぜ」

「えっ?!」

「どうだ、おいらの薬罐頭をぶち割らなくても、腰が抜けやがるだろう。先生も、そのことは、先刻御承知なんだ。だからこそ、武部の旦那は、先生にお預けなさるんだ。それに、もうひとつ、武部の旦那にこんたんがおあんなさる。あとでゆっくりきかせてやるから——そろそろ、ひきあげようぜ。おのぞみならば、松葉屋の大木に抱きつかせてみイん、みイんと鳴かせてやらあ」

「おきゃあがれ——」

二人は去った。

三

離れでは――。

案内を乞う声に、障子をひらいた狂四郎は、一瞬、はっと大きく目をひらいたが、黙って、明子を招じあげていた。

明子は、珍しそうに部屋を見まわしてから、

「そなたは、一人でここに？」と、あどけなく小首をかたげてみせた。

「左様です。武部老人が、貴女様をここへお送りしたと存じますが――」

「はい。手紙を持って居ります」

狂四郎は、その封書を受けとって、披いた。

姫宮様を、鎌倉の松ヶ岡東慶寺へ送りとどけてもらいたい、という簡単な文面であった。東慶寺の方へは、当方から通達しておく、という――。

松ヶ岡東慶寺は、正しくは、東慶総持禅寺という。総持とは、陀羅尼の訳語であるが、達磨大師の弟子の総持尼に因んでいる。すなわち、禅の尼寺の謂いである。世上、駆入寺として名高かった。親兄弟や良人の命令に背くことを許されぬ封建の世の女たちが、必死に逃げ込んで、一身の安全を保ち得る唯一の場所であった。

開山覚山尼は、秋田城介安達義景の娘で、十歳のおり、十一歳の北条時宗に嫁いだ。時宗が、文永、弘安の元寇に精根を傾けつくして、三十四歳の若年で逝くや、夫人は、落髪付衣、

覚山志道大師となった。そして翌年（弘安八年）東慶寺を開創したのであったが、その時、覚山尼は、わが子である執権貞時に、次のような意味の願文を呈出したのであった。

　女と申すものは、不法の夫にも身を任せることを尋常とされているために、事によって女の狭い心から、ふと邪の心をさし詰めて自殺などいたす場合があって不便の事に思います故、右の様な者がある時は、三カ年のうち、当寺へ召抱えおいて、何卒夫との縁をきらせ、いのちをながらえさせてやりたく、これを寺法としてきめたいと存じます。あなたのお力で勅許を賜りますようお願い申上げます。

本邦において、苦難薄倖の女人を救済する機関が、ここにはじめて創設されたわけであった。

爾来、当寺は、興亡常なき修羅輪廻の巷の外にあって、連綿として、女人救済の悲願をつづけて来たのである。

時の政府もまた、当寺を別世界のものとして、擁護したのである。足利幕府も、小田原北条氏も、秀吉も、家康も、禁制を下し、寺領を安堵せしめた。代々の尼も、為政者と縁が深かった。五世用堂尼は後醍醐帝姫宮であり、十六世渭継尼は古河公方足利政氏の子であり、二十世天秀尼は豊臣秀頼のむすめであった。

二十二世天淵尼が逝って以来、ずうっと無住持となり、法灯まさに絶えんとした時代もあったが、当時、ようやく尼僧庵主も来住し、駆入女取扱の手続書式等も整備されて、復興して来ていた。

現院代は、蕙堂法秀尼であり、水戸徳川の息女分であった。

——老人、うまいところを思いついた。

狂四郎は、手紙を巻きおさめてから、明子を、じっと見た。

「姫宮様には、この前、尼にされるのがいやで、京から逃げ出した、と仰せられましたな？」

「はい。わたしは、曇華院の門跡になることにきめられて居りました」

京には、直宮——皇女でなければ門跡になれない比丘尼御所が四カ寺あった。大聖寺（御寺御所）、宝鏡寺（百々御所）、曇華院（竹御所）、光照院（常磐御所）であった。

当時——。

皇室には、伏見、有栖川、桂、閑院の四宮家があったが、席次は三公の下であった。三公になるのは摂家（近衛・九条・二条・一条・鷹司）であったから、宮家はこれより位がひくかったわけである。今日の概念とはおよそちがっている。経済的にひどく貧しく、なんの権力も、もたなかったからである。だから生れる子供たちを門跡寺院に遣わすよりほかに、家計をうるおす手段が何もなかった。その子らが住職となれば、寺から、年々百石なり二百石なりのみつぎがあったのである。

「尼になるのはおいやでありましょうが、当分、尼寺にお住みねがわなければなりませぬ」

狂四郎は、無表情で云った。

「え？」

明子は、不審と不安を、その清純な眸にうかべて、
「なぜですか？　わたしは、この家に住むのではありませぬか？」
「ここは、手前のあばら家でございます」
「わたしはここに住みたい」
「御無理を申される」
すると明子が、
「あ――」
と、あかるい表情になった。
「わたしが、皇女という身分をすてればよろしいではありませぬか。もう、すてているのも同じことですけれど……。わたしが、そなたの妻になればよろしいのですね。そうすれば、ここに住まわせてもらえます」
真剣な面持で、そう云ったのである。
狂四郎は、苦笑して、
「そういうわけには参りませぬ。手前は、身分も地位もない一介の賤しい無頼の素浪人にすぎませぬ」
「ですから、わたしも、身分をすてると申して居ります」
「貴女様ご一人だけがそうおきめになっても、世の中のことは思い通りには参りませぬ」
「なぜです？　夫婦になるには、そなたとわたしがゆるし合えばよろしいのではありませぬ

か？」
「手前には、貴女様を妻にする存念は毛頭ありませぬ」
「わたしが、きらいなのですね？」
「好きとかきらいとか申す事わけとちがい、手前は貴女様のような清浄な姫宮様を妻にする資格のない男だからです」
「どうしてですか？　なぜ資格がないのですか？」
これは、徒労な問答というべきであった。
「ともあれ、貴女様には、鎌倉の松ヶ岡東慶寺にお行きねがうことに相成ります」
きっぱりと、狂四郎は、云いはなった。
明子は、すずやかな眸子を、狂四郎にあてて、まばたきもしなかったが、
「わたしは、そなたが好きです」
と、云った。
身分尊く生れた者の、心の動きをかくすことを知らぬ大らかさ、明快さが、暗黒の修羅道のみをえらんで辿って来た無頼の浪人者を、思わずたじろがせた。
視線をそらした狂四郎は、
「夜明け前に、武部老人が、早駕籠を寄越して参ります。お寝みねがいます」
そう云って、立ち上ると押入から夜具をひき出して、敷いた。
「どうぞ――」

一礼して、次の間へ下ろうとすると、
「いやです！　ここにいて下さい。一人でやすむのはいやです——」
明子は、さけぶように云った。
狂四郎は、やむなく、背を向けて坐ると、腕を組み、目蓋をとじた。
明子は、立って、かわいらしく小声でなにか独語をもらし乍ら、帯を解き、紅梅の大紋綸子の着物をすべりおとし、無地の緋縮緬の下着姿になった。
「やすみまする」
ことわって、床の中に入る様子を、耳にし乍ら、
——すぐ、睡り入るだろう。
と、狂四郎は思った。
ところが、数分経たずして、
「どうしたのですか？」
と、問いかけられて、狂四郎は、振りかえり、ぱっちりとひらいたまなざしでまじまじと見あげられているのに、こちらが不審げに、
「どうしたと申しますと？」
と、問いかえした。
「そなたは、なぜ、ここにお床をのべないのです？」
「夜具は、貴女様にお貸し申上げたのだけしかありませぬ。手前は、畳の上にごろ寝するこ

とになれて居ります。冬に野宿しても一向に苦にならぬようにからだをつくって居ります。お睡りを待って、次の間にしりぞきましょう」
「いやです！」
明子は、また、つよくくびをふった。
「そなたもここにやすまなければいやです」
「おん寝顔は拝見いたさぬようにして居りますが――」
「いいえ、そんなことではありませぬ。そなたも、この床にお入りなされればよい」
狂四郎は、とりあわず、もとの姿勢にもどった。
すると、
「そなたがやすまぬのでしたら、わたしも起きて居ります」
掛具をはねて、明子は起き上った。
狂四郎は、あやうく、一喝をあびせかけようとして、辛うじて怺えた。
静かに膝をまわして、
「貴女様が、そういう無謀なお方だから、尼寺へお送りしなければならぬのです」
「なぜ、無謀なのです？」
「手前は、無頼の浪人者だと、いくども申上げて居ります。ひとつ床にやすめば、いかなる仕儀に相成るか、手前はおのれを制御する力に乏しい男です」
「ですから……わたしを、妻になされればよろしいではありませぬか」

「男女のまじわりが、どの様なことか、貴女様は、まだご存じありませぬ」
「教えて下されば、随いまする」
「姫宮様！」
「姫宮と呼ぶのは止して下さい！　わたしは、明子と申すただの娘にすぎませぬ」
「どうか、手前を困らせないで頂きとう存じます。……手前は、それでは、この畳に横になりましょう。貴女様よりも早く寝息をたててごらんに入れます」
「いやです！」
明子は、三度び、かぶりをふった。
狂四郎は、だんだん腹が立って来た。
――皇女たる身分をすてかかっている娘に、なんのたじろぐ必要がある。眠狂四郎は、明日のために今日を生きては居らぬ筈だ。生命を、一瞬の現在にのみ使って居るのではないか。ころび伴天連の姦淫の子が、皇女を犯す――これも宿業因縁というやつだろう。神力も業力に如かずだ。
「よろしい。手前もその床にやすみましょう」
一瞬、狂四郎は、顔面を冷たく冴えたものにすると、そう云った。
明子は、にこっとして、頷いた。それからおとなしく仰臥して、狂四郎が、着流しのままで、脇に入って来るのを待った。
ゆっくりと……視線をまわして、一尺とへだてぬところに狂四郎の凝視をとらえた明子は、

急に、発作に駆られたように、はげしくからだを動かして、男の逞(たくま)しい胸へ、顔をうずめた。

狂四郎の手が、そっとその背へまわされると、明子の身もだえは、さらに狂おしいものになった。しかし、それが、恋慕の昂(こう)じたものでないことは、泪(なみだ)にむせびつつ、きれぎれにもらした言葉が、はっきりと証明した。

「……わたしは……さびしかったのです……一人ぼっちで……とても……とても……さびしかったのです……」

――そうか！　この娘も、孤独に堪え難かったのだ！

貴賤(きせん)貧富に拘(かか)わらず、人間を襲うこの寂寥(せきりょう)の感情を、この男ほど深く理解し得る者はいないのである。そして、その時、この男の精神は、爽(さわ)やかな水のように人間の善(よ)きものを映しとるようであった。

狂四郎は、そのまま、微動もせずに、高貴な無垢(むく)の乙女を抱いていた。

逞しいものによりすがった安堵で、美しく整列した皓歯(こうし)のあいだから、すやすやと寝息がもれ出はじめた時、狂四郎は、影のように身をどけて、臥床(ふしど)をすべり出ていたのであった。

四

狂四郎が、臥床を出たのは、しかし、明子が睡りにおちたからではなかった。雨戸に、かすかな音をたてて、小石があたったからである。

――来たな、白鳥主膳！

そう直感したのである。
武部老人が、明子をここへ送りつけるにあたって、巧妙な方法をとったには相違ないが、はたしてよく白鳥主膳の目をくらますことができたかどうか、と狂四郎は、明子が到着した時から心の中であやぶんでいたのである。
音を消して雨戸を一枚繰った狂四郎は、四間のむこうに、すらりと彳(たたず)んでいる影を見た。
空に、十六夜(いざよい)のおぼろ月があった。しっとりとした夜の光に濡(ぬ)れたその立姿は、あやな色彩こそ沈めているが、匂(にお)うような伊達(だて)な雰囲気(ふんいき)をただよわせて、華やかな幻影に似た美しさを浮きたたせていた。その片手には、ぽってりと厚い大きな花弁を開いた白木蓮(はくもくれん)の一枝を提げていた。
狂四郎は、雨戸を元通りに閉じておいて、跣(はだし)で、ゆっくりと、二間進み出ると、
「姫宮が、よく睡って居る故、場所は、こちらでえらばせて頂く」
と、云った。
主膳は、無言で、頷いた。
狂四郎は、先に立って、本堂前の、雪でも降ったように白い平庭へ、足をはこんだ。九尺をへだてて、向い立つや、狂四郎は、このふしぎな柔和な美しさを湛(たた)えている強敵を、あらためて、じっと見まもって、
——おれの生涯(しょうがい)での、指を折ってかぞえる危機のひとつだな。
と思った。おのれが、血煙りたてることも充分に考えられるのである。

　それでいて、微塵の戦慄も、背筋にも四肢にもつたわらないのが、奇妙であった。曾て、狂四郎は、この古寺で、むささび喜平太と左馬右近の二人の強敵を迎え撃っている。そのいずれの場合にも、戦慄が身うちを走るのをおぼえたものであった。

　いまは、それがないのだ。

　しかし、危機の比率は、この三番目の強敵の底知れぬ力によって放たれるであろうものの方が、前二者との場合よりずうっと高いのを、狂四郎は、予感する。

　思えば、喜平太も右近も、その不気味な出現の瞬間において、すでに凄じい殺気をあふらせていた。ところが、主膳は、礼儀正しく、小石ひとつの微かな合図によって、たたかいを宣告したのである。そして、狂四郎を誘い出し乍ら、その姿は、まるで月下の花見を興ずるために来たかのように、白木蓮で身を飾る風雅な静けさを保っていたのである。

　これは、主膳が、勝敗というものをすこしも心に置いていない証拠であった。おそるべきことであった。

『常静子剣談』に、次のような問答が出ている。

曰く「勝に不思議の勝あり。負に不思議の負なし」

問「如何なれば不思議の勝というや？」

曰く「道に遵い術を守る時は、その心必ずしも勇まずと雖も勝を得る。この心を顧る時は、則ち不思議とす」

問「如何なれば不思議の負なしというや？」

曰く「道に背き術を違（たが）う時は、敗れること疑いなし」
主膳には、けだし、この不思議の勝についての会得があったのである。
「たたかう前に、ひとつ、お手前にたずねておきたいことがある」
狂四郎が、云った。
「何か？」
「お手前は、姫宮を、桂離宮からつれ出し、江戸へともなう道中の間、また自身の屋敷に入れてより、何故（なにゆえ）に、わがものにしようとの野心を抑えつづけたか——その心中の程をききたい」
すると、主膳は、夜目にも白く、きれいな歯をひからせて、温雅な微笑を狂四郎に送った。
「わしは、おぬしのようなひねくれ者とはちがう。わしには、夢がある。下賤の女掏摸（すり）などを犯すことになんのためらうものではないが、姫宮の前では、わしは無抵抗な下僕と化す。姫宮がゆるすなら、その蹠（あしうら）も嘗（な）めるであろうし、姫宮がそれをのぞむなら、尿（いばり）でも飲んでみせる。姫宮には、わしをそうさせるけだかさがある。……おぬしと雖も、どうだ、姫宮にだけは、一指もふれられまい。わしは、姫宮のけだかさだけは、いかなる悪業の痴（し）れ者もこれを犯す能（あた）わず、と信じて居る。だからこそ、わしは、姫宮が、何処（いずこ）へ出あるくのも止めはせなんだ。何人もふれることは叶（かな）わぬからだ。わしの夢は、永久に、奪われることはない」
「左様か——」
狂四郎は、瞬間、ふっと、皮肉な冷笑を口辺に刷（は）いた。

「ところが、もう……この眠狂四郎が、姫宮を抱いた、としたら、どうだ？」

そうあびせられるや、主膳は、何か叫ぶかわりに黙って、左手の白木蓮を、地にすてた。

はじめて――月下の庭に、殺気が、さっとみなぎった。

「…………」

「…………」

二条の白刃が、月光を撥(は)ねて閃(ひらめ)いたあとの空間に、春の微風に送られて桜の花びらが、ひらっひらっと舞い落ちて来たが……そのしず心なき散りぶりは、かえって、この凄絶(せいぜつ)の対峙(たいじ)の「静」にふさわしい微妙の「動」を添えた。

両者ともに、地摺(じず)り下段――。

しかも、狂四郎の無想正宗が、ゆるやかに円月殺法の流れに乗るや、主膳の剣もまた同じく、それを写すがごとく、徐々に宙を移行しはじめたのである。

すなわち――。主膳は、一刀流極意にいう「敵の事を以(もっ)て我事とし、敵の利を以て我利とす」鸚(おう)の位(くらい)を用いたのである。

一刀流極意には、また、「術は、負くる所、勝たざる所を知るべし。負くる所というは先(ま)ず勝つ所なり。勝たざる所というは敵の能(よ)く守る所なり。その負くる所われに有り、勝たざる所敵に在り。……勝ちて負くる所を知り、負けて勝つ所を知るは術の達者なり」と。

孫子が曰(い)う、彼を知り己を知るは百戦して百勝し、彼を知らず己を知るは一勝一敗し、彼を知らず己を知らざれば戦う毎(ごと)に必ず敗る――これである。

主膳は、狂四郎の円月殺法に合わせて、おのれもまた円を切ったのである。

「…………」

「…………」

ともに――二本の剣尖が、完全なる円月を描き終った。

刹那――。月影おぼろなる静寂を劈いて、二声合する気合が発し――それが、遠く、中空へ吸いこまれていった時。

一方の黒影は、大地に伏し、一方の黒影は、かんまんなる足どりで、明子の睡る離れへむかっていた。一歩一歩、倒れた者から遠ざかるその距離に、ひとすじ、したたり落ちる血汐が、白い地面に黒い線を引いていた。

尼寺暮色

一

繊細な、とびとびの白い雲が、ふちを薄絹のようにぼかして、しずかに、動かず、春の空に浮いている午(ひる)さがり――。

鎌倉の七切通しのひとつ――山之内庄(しょう)へ抜ける坂道は、さきほど饅頭笠(まんじゅうがさ)の托鉢僧(たくはつそう)が、ひとり、通って行ったきり、ねむったようにひっそりとしていた。

やがて――。

えいほう

えいほう

掛声とともに、二梃(ちょう)の駕籠(かご)が、登って来た。

「おーい。ひと息入れるかやあ」

後の駕籠舁(か)きが、前の駕籠舁きへ、叫んだ。

ここまでが起伏甚(はなは)だしい険路で、あとは下りで楽になる。

四人の駕籠舁きが、杖(つえ)を肩棒にささえて、豆しぼりで汗をふいていると――。

数騎とおぼしい馬蹄のひびきが、自分たちの登って来た坂道から追って来た。

駕籠舁きたちが、あわてて肩棒へ肩を入れて、駕籠を、道端へ寄せるのと、先頭の一騎が、だだっと乗りあげて来たのが同時であった。

手槍を小脇にした若い武士であった。馬脚のあがきをそのままに——一気に駆け下るつもりか、手綱をしぼって、鞍の上でぐっと身を反らすや、はげしい勢いで迫って来た。

そして、いっさんに、駕籠のわきを駆け抜けて行ったのだが……駆け抜けざまに、手槍を、後の駕籠へ、ぶすっと斜めに刺しつらぬいて行った迅業は、凡手ではなかった。

駕籠舁きたちは、愕っと息をのみ……叫びをあげるいとまもなく、つきとばされたように一斉に、逃げ出した。

つづいて坂を乗りあげて来た三騎が、いずれも、手槍の穂先を、眩しく陽光に反射させつつ、馬からとび降りたのである。

駕籠舁きの一人は、逃げつつ、怕いものみたさで、首をねじまげてみて、

——おやっ？

と、目を疑った。

槍の突き通った駕籠の横に、いつの間に抜け出たのか、乗っていた客が、すらりと無事な姿を佇ませていたのである。

眠狂四郎であった。

常にも増して、その顔は、蒼白であった。一昨夜、龍勝寺境内で、白鳥主膳から受けた左

肩の傷は、かなり深いものだったのである。
三本の槍が、二間むこうに、ぴたっと、穂先を揃えるのを、じっと見すえ乍ら、狂四郎は、
「姫宮様、ごらんにならぬ方がよい」
と、背後へ声を送っていた。
前の駕籠の中の者が、出ようとしかかる気配を、察知したからである。
狂四郎にたしなめられて、明子は、それきり、ひそとして動かなくなった。
この時、いったん駆け過ぎて行った先頭の武士が、馬首をかえして来て、
「くそ！　しまった！」
と、舌うちしつつ、とび降りざま、抜刀した。
狂四郎は、ゆっくりと二、三歩あるいて、反対側の崖を背にして立った。
公儀庭番たちから襲撃されるであろうことは、明子をつれて龍勝寺を出る時から、予期していたことである。
というのは、しらじらと空がしらんで来た夜明け刻、武部仙十郎がさしむけた早駕籠が到着したので、狂四郎は、明子をのせておいて、自分は、本堂の前へ行ってみたところ、斬りすてておいた白鳥主膳の姿が、その場所から消えうせていたのである。
すでに死骸となっていたか、まだ息がのこっていたかは知らぬ。いずれにしても、主膳の身柄をひき取って行った者が、そのままにすませる筈はないのであった。
江戸から、ずっと尾けられている予感もあったのである。

突如として、この切通しで、騎馬で襲って来るとは、敵乍ら、なかなか周到であったとみとめてやってよい。ただ、こちらには、重傷の身乍ら、それを受けて立つ心構えができていたのだ。

「お手前がたは、京から戻ったのか？」

冷然として、殺気を噴かせた血相凄じい一人一人へ、視線を移し乍ら、そう云った。

この連中が、親不知組であることは、その陣形のとりかたでわかったのである。

もとより返答を求めての問いではなかった。

「江戸のかたきを長崎で討つ、というのはあるが、京のかたきを鎌倉で討つというのはきいたことがない。どうやら、お手前がたは、京の寺より鎌倉の寺で供養してもらいたくて戻って来た様子と見受ける。それぞれの宗旨をきいておけば、寺をえらんでさしあげてもよい——」

そのあざけりのおわらぬうちに、正面の敵が、

「ええいっ！」

と、一槍を電光の迅さに乗せた。

他の三名は、狂四郎の五体が、その必殺の一突きを、躱しもせずに、依然として同じ位置を保持しているのを奇怪なものに見た。

攻撃者は、狂四郎とわずか三尺の間隔を置いて、突いた姿勢のまま、木像のように固着していた。

その胸には、白刃が、まっすぐに、ふかぶかと突き立っていた。

狂四郎は、動いたとみせずに、敵の腰から、太刀を奪い取って、その迅業をみせたのである。絶妙きわめ難い無双の神技というべきだった。

白い地べたに、第一の犠牲者が、にぶい音をたてて俯っ伏すや、狂四郎は、再び、残り三名の顔へ、冷やかな眼眸を、しずかにまわして、

「ごらんの通り、今日は、わたしは、自分の差料は衂らせぬことにして居る。これから尼寺へ行かねばならぬので、心掛けが殊勝だと思って頂こう。但し、ふりかかる火の粉は、払う！」

「ほざくなっ！」

駕籠突きを失敗した庭番が、満身を憤怒の火焔と化して、躍り込んだ。

刃風は、正確に、狂四郎の脳天へ唸り落ちた。とみえたのは、狂四郎が、おのれの幻影をそこにのこしておく程の間髪の差まで、微動もしなかった証拠である。

次の刹那、狂四郎に、どうして、そのおそるべき手練が使えたのか——斬りつけた者は、仆れた第一の犠牲者が摑んでいた槍の穂先を、咽喉のまん中に、ぐさっと受けて、形容もない断末魔の濁声を、鮮血とともに、口腔からしぼっていた。

けだし、狂四郎の片足が、槍のけらくびを撥ねあげて、みごと、咽喉のねらいをあやまたなかったのである。

そして、狂四郎の姿は、両手を空けたなりに、その位置を、一歩も移してはいなかった。

二名に減らされた庭番たちは、狂四郎の正面を避けて、すすっと左右へわかれた。
二槍は、狂四郎を中点に据えて、糸をひっぱったように、一直線に構えられた。
狂四郎は、いずれへも視線を与えずに、宙の一個所へ焦点を置いた不気味な静止相で、秒一秒かぞえていたが、一瞬、
「来ぬかっ！」
と、一喝（いっかつ）した。
つられて、左方の敵が、びゅっとくり出した。
ぱっと、狂四郎のからだが、沈む。
それへむかって、右方の敵が、
「やっ！」
と、突き入れた。
その流星の白光を、眼前一寸あまりの空間に流して、むずと、柄（つか）をつかんだ狂四郎は、身を起しざま、左方の敵へむかって、さっと穂先をさしつけた。
文章にすれば、こういうぐあいにひどく間のびたものになるが、三者の動きは、しかし、石火の一瞬間で終ったのである。
「うっ！」
「ぎゃっ」
絶鳴は、同時に、ほとばしった。

左方の敵は、脾腹を、右方の敵は、額のまっただ中を——互いに、味方の武器によって、つらぬかれていた。

狂四郎は、重傷の身をいたわって、対手方の力を利用して、これを悉く外したのである。

二

鎌倉街道を、一騎、埃を舞いたたせて、掠め過ぎて行く——。

その馬上に、明子は、狂四郎の背中へ、ぴったりとすがりついて、うすくまぶたをとじていた。

逞しい男の体温が、ひたひたとじぶんのからだに流れ入って来る。血と血がひとつに融けあうこのよろこびは、たとえ様もないものであった。

——このまま、地の果てまで走って行けばよい。

明子は、心からそう思った。

そして、本能的な烈しい恋しさで、男の胴へまわした両手へ力を入れた時、馬が停められた。

「着きましたぞ」

冷たい声に、明子は、目をあけて、自分たちの前にある景色を眺めた。

どっしりとすわった山門に、後宇多天皇の勅筆になるといわれる「東慶総持禅寺」の額がかかげられていた。

寺院は、丘陵の中腹を領して、石垣と土居が築かれ、大鐘、観音堂、方丈、仏殿の屋根が、木間（このま）がくれに、だんだん高く、そびえたっていた。

——ああ、いやなこと！

明子は、また、ひしとまぶたをとじて、顔をそむけてしまった。

「お降り下さい」

さきに地上に立った狂四郎が、右手をさしのべた。

明子は、降りても、その手をはなさず、

「どうしても、ここに住まわなければいけませぬか？」

と、怯々（おずおず）と訊（たず）ねた。

「しばらくの御辛抱です」

狂四郎は、手を引っ込めると、総門へむかって歩み寄った。明子もしかたなくついて行った。

この門は、駿府（すんぷ）城から移建したものである。男子禁制の札が立ててある。駆入女にとって、その門こそ、地獄と極楽の境目であった。もし、ここまで辿（たど）りついて、あと一歩で捕まらんとする時は、櫛笄（くしこうがい）あるいは下駄（げた）など身についたものを門内に投込めば、寺に入ったことにみなされ、追手を逃れ得る、といわれている。

門のわきには、番所、寺役所があり、厳重な監視がなされている。北方方丈の裏は断崖（だんがい）絶壁であり、西方の裏山は、鬱蒼（うっそう）たる老杉（ろうさん）老松の密林となり、南方の鎌倉五山第四浄智寺と境

を接している。しかも、四周には、内外二重の垣が繞らされている。
「おねがい申す」
狂四郎は、番所の前にすすんで、声をかけた。
窓が開けられ、五十がらみの番士の顔がのぞいた。
「手前は眠狂四郎と申す者です。水野越州殿側頭役武部仙十郎殿の依頼により、さる高家の姫君をおつれいたしたとお取次ぎねがおう――」
すると、番士は、あらかじめ方丈からの達しがあったとみえて、頷くと、
「姫君を、ここでお受け仕る」
と、云った。
狂四郎は、明子をふりかえって、
「お入りなさい」
と、促した。
「そなたも一緒に――」
必死にすがりつく潤んだ眸子をそらして、狂四郎は、無言で、立札を指さした。
「いやです！　そなたも一緒に入って下さらなければいやです！」
「手前がついて参っても、なんの役にも立ちませぬ」
「いいえ！　院代殿に会うて、そなたの口から、わたしを絶対に尼にしない、と約束してもろうて欲しい」

「そのことなら、ご心配におよびませぬ。武部老人が、手紙でその旨をつたえてあると存じます」
「でも——そなたも、ぜひ、院代殿に会うて、わたしは、ただ、ほんのしばらく逗留するだけだから、と、ことわって欲しいのです。どうぞ、ねがいまする」
「しかし、役人は、手前を門内に入れてはくれますまい」
狂四郎がそう云った時、おもてから、婢女一人したがえた尼法師が、しずかな足どりでもどって来るのが見うけられた。
その頭巾の色で、
——院代だな。
と見てとった狂四郎は、つかつかとすすんで、声をかけた。
こちらをじっと見まもった目はすずやかであった。かなりの年配であろうが、なんともいえぬ清雅な美しさが、そのおもてにたたえられていた。
狂四郎が、名乗ると、その澄んだまなざしが、急につよく光った。知っていたのである。
明子を尼にしないでもらいたいこと、また、あまり長く滞在させるのではないことを、ことわっておいて、狂四郎は、一礼すると、そのまま明子をそこにすてて街道へむかって、あるき出そうとした。
すると、明子よりもさきに、院代が、
「眠狂四郎どの！」

と、呼びとめた。
狂四郎が、ふりかえると、院代の顔には微笑があった。
「おつかれのご様子とお見受けします。暫時、御休息なされますよう――」
「いや、手前は――」
「尼寺には、おもてなしの用意は何ひとつありませぬが、ただひとつ、患う人に与える薬だけはそなえて居ります」
院代は、狂四郎が病んでいるのを見ぬいたのである。
たしかに――狂四郎のからだは、並の人間なら立っていられないくらい悪化状態にあった。肩の深傷は烈しく疼いていたし、切通しのたたかいによる心身の消耗で、熱を発して、間断ない眩暈におそわれつづけていた。
明子が、駆け寄って、袖をつかまえた。
「狂四郎どの、おゆるしが出たではありませぬか。さ、はよう――」

三

総門を入って、高い石段を登ると、またそこに、門塀があった。
「あちらの小庵へご案内なさい」
院代は、婢女に命じた。
明子は、不安そうに、

「院代どの、あとで、もう一度、狂四郎どのに会えますか?」

と、訊ねた。

院代は、明子へ、やさしく頷いてみせた。

「ご安心なされませ」

「狂四郎どの、無断で立去ってはいけませぬえ」

そう云う明子の白い清純な面差(おもざし)が、狂四郎の熱に狂った視野の中で遠のいたり近づいたりした。

——ふたたびお会いすることもあるまい。

そう考えつつ、頭を下げてから、婢女のあとにしたがって、石垣沿いに、観音堂の方へむかった。

東慶寺には、中の門より内に、塔頭(たっちゅう)が五つあった。蔭涼軒方丈の北、海珠庵山門右、永福軒山門左、青松院仏殿東北、妙喜庵青松の北と。この各庵に、駆入女や逗留女が滞在していたのである。

狂四郎が、つれて行かれたのは、それらのひとつではなく、観音堂の裏手に、ひっそりと、忘れられたように建っている茅葺(かやぶき)の唐様庵であった。

弘安、開山の時から在るかとおもわれる程の古めかしい風趣をもったたずまいであった。

茶室としてつくられたものであろうか、狂四郎が、婢女に桟唐戸(さんからど)を開けられて、一歩入ってみると、四畳の間の中央に、黒漆塗の炉が切ってあった。

そして、それには、炭火があかあかと燃えて、自在にかけられた鉄瓶が、かすかに鳴っていた。

狂四郎は、炉端に崩れるように坐ると、炭火が雲母のように光を散らす幻覚を怺えつつ、

――眠狂四郎が、尼寺の中で痛み臥すとしたら、これは笑止の沙汰だろう。

と、自嘲した。

とたん――。

のどのかわきをおぼえて、茶碗はないかと、部屋のなかを見まわした。

狂四郎は、わが目を疑った。

これも、とっさには幻覚と考えられたことだった。

床の間に掛けられた小条幅の一詩――

　狂夫明月下
　沈酔不成歓
　猛気依何散
　剣鳴孤影寒

これは、まさしく、自分が作って、美保代にとどけた絶句ではないか！

――どうしたというのだ、これは?!

一瞬の惑乱は、しかし、すぐに鎮まった。遽に、脳裡の一隅が冴えた。

――そうか！

美保代は、この草庵にこもっているのだ。

武部仙十郎が、明子を自分にここへ送らせたわけも、瞭然（りょうぜん）とした。

老人は、男雛（おびな）女雛の首を渡してくれる時に云ったではないか。

「男女の仲というものが浮草に似ているのは、お主の方が先刻承知じゃろう。流れのままに行くが宿運——。岩に裂かれたり、瀬渦（せうず）にまきこまれたり、滝を落ちたりするが、やがて落ちあうさだめがあれば、静かな清淵（せいえん）が行手に待ちうけて居ろうわい」

——そうだったのか！

老人は、もし二人がめぐり会う運命にあるものなら、桂宮を送りとどけた時に会うであろう、と考えたのだ。

凝然として、おのれの漢詩を瞶（みつ）める狂四郎は、瞬間、肩の疼痛（とうつう）も忘れていた。

と——。

置石を踏んで近づいて来る跫音（あしおと）があった。

とっさに、狂四郎は、袂（たもと）をさぐって、小函（こばこ）をとり出すと、床の間の、この茶室にふさわしい侘助（わびすけ）の花を咲かせている枕草文刻みの古壺（こつぼ）のわきへ置くや、よろめく足をふみしめて、裏口から孤影を消し去った。

入れちがいに戻って来たこの草庵の主は、狂四郎の直感たがわず、美保代であった。仏殿の読経（どきょう）を終えて来たらしく、片手には、念珠があった。

炉端に坐って……そのまま、炭火へ目を落した美保代は、この閑寂のひとときに、なかば

放心の身をひたして、動かなかった。

この草庵に移り住んでから、もう一月になる。龍勝寺に在った時と、まったく同じ孤独の明け暮れであった。

何事にも耐え忍ぶことで生きて来た美保代であればこそ、この孤独地獄の中で気が狂いもせずにすごしていられるのであろう。

美保代は、これまで、ただの一度も、全身全霊で、情熱を奔騰(ほんとう)させたことがない。自由な、奔放な欲望の表明を知らないのだ。聡明(そうめい)な判断力や秀れた徳性は、彼女の美貌(びぼう)や挙措振舞いに品位を与えて来たが、しかし、それはかえって抜きがたい宿命観の中へ自身をとじこめてしまう不幸をもたらした。

恋というものに潑剌(はつらつ)と応じてゆく若い肢体の活動を抑えつづけたこの不幸な女性は、あたかも、現在の孤独に堪える力をたくわえるために、そうしたかとさえ思いなされるのだ。美保代の魂は、狂四郎に対して、愛情のすべてをそそぎつくした。しかし、美保代の官能は、いまだ、狂四郎から狂おしい悦楽を得てはいないのだ。

だからこそ、美保代は、希望の失(う)せはてた孤独の中で、宿命を呪(のろ)いもせずに、ひっそりと生きつづけられるのであったろうか。

奔騰を知らぬ情熱は、左様、この炉の中の熾火(おきび)のように、追憶の世界でのみ、音もなく燃えている。狂四郎の冷徹なまなざしだとか、暗い横顔だとか、抑揚を現わさぬ声の響きだとか、静かな鋭い身の動かしかただとか——それらの影像の断片を甦(よみがえ)らせることだけが、悲劇

の中に置かれた女性が、生きる手段としてえらんだ唯一(ゆいいつ)の哀(かな)しいいのちのいとなみとなっていた。

障害が恋を強固にする——この言葉は、美保代のような、自分とたたかわねばならぬ宿命の者にこそあてはまるのであったろう。

いつの間にか——。

障子から、陽の光が落ちて、すみずみにたそがれの翳(かげ)がしのび入っていた。

美保代は、われにかえって、花壺の水をとりかえるべく、床の間に寄って、ふとそのわきに、見おぼえのない小函が置かれてあるのに気がついた。

——どなたが、こんなものを？

何気なくとりあげて、蓋(ふた)をひらこうとしたところへ、戸口にすがたをみせたのは、院代と明子であった。

美保代は、あわててもとのところへ小函を置いて、二人を迎えた。

「このお方は——」

と、院代が紹介しかけたが、それをみなまで云わせず、明子は、室内を見やって、

「居りませぬ！　狂四郎どのが居りませぬ！」

と、悲しげに叫んだ。

美保代は、唖然(あぜん)として、明子を見まもった。

狂女ではないか、と思ったのである。

しかし、美保代は、つぎに、院代がかすかな困惑の色をみせて、口にした言葉をきいて、あっとなった。

「眠狂四郎どのは、もうお帰りになりましたか？」

息をのみ、大きく眸子をひらいた美保代は、すぐには声が出なかった。

「このお方は、桂宮明子内親王さまであられます。眠狂四郎どのが、西丸御老中邸よりおつれ申上げたのです。……狂四郎どのは、お加減がわるいように見うけましたので、下の者にこちらへ案内させておきましたが……」

院代は、武部仙十郎の手紙によって、狂四郎と美保代の間柄を知っていたのである。

なろうことなら会わせてやって頂きたい。という仙十郎の依頼を、院代は、実は、拒む心でいたのである。ところが、狂四郎が病んでいるのを見て、ふと、気持を変えて、黙って、美保代に会わせようとしたのであったが……。

「お会いなさらなかった？」

院代に訊ねられて、美保代は、必死に動悸を怺えて、おもてを伏せると、

「はい――」

と、こたえた。

髪毛も唇も指も膝も、からだのすべてが、瘧のようにわなわなと顫えていた。

――あの方が、ここへ、いらした！

奇跡としか考えられなかった。

　――本当においでになった！　そしてわたくしに会わずに、お帰りになった！
　絶望の悲しみが、怒濤のように、わが身をおしつつむのを、美保代は感じた。
　この時――。「あ！」と、明子が、声をあげて、すすっと床の間へ走った。
「狂四郎どのは、どうして、これをのこして行ったのであろう？」
　美保代は、顔をあげて、明子が、小函の蓋をひらくのを見た。
　男雛の首と女雛の首と――。
「あっ、それは、わたくしの――」
　思わず、その叫びを発した。
　明子は、美保代の異様なまでに驚愕と歓喜をないまぜて血の気を引いた臈たけた貌を、じいっと見据えていたが、
「そなたが、美保代――と申されるひと？」と、訊ねた。
「はい――」
　それから……なぜともなく来た沈黙の間に、明子は、けなげにも、胸の中で渦巻いた複雑な感情を、おし伏せた。
「狂四郎どのは、どうして、そなたに会わずに行ったのであろ？」
　沈黙をやぶった声が、それであった。

四

狂四郎は、夢の中にいた。

秋の末のようであった。

空には、地に影が映らない程、厚い高層雲が掩（おお）い、雁（かり）のむれが音もなく飛んでいた。

少年の狂四郎は、しずかに竹箒（たけぼうき）を動かし乍ら、銀杏（いちょう）の落葉を掃いていた。

母とともに住んでいる広尾町の祥雲寺山内のようであった。いや、公孫樹（いちょう）がそびえているところをみると、宮益（みやます）町の御獄（みたけ）神社の境内であろうか。

いずれにしても、掃ききよめた地面へ、また黄葉が、ぱらぱらと落ちて来る、蕭条（しょうじょう）たる木立の中は、仄（ほの）かに霧が流れて、世界は寂としている。

黄昏（たそがれ）どきらしい。樹や石や草が、ひとつひとつ、薄闇（うすやみ）の中へ、輪郭をぼかしていこうとし乍ら、しめった匂（にお）いだけを、狂四郎に送ってくる……。

ふと――。狂四郎は、自分の名を呼ばれて、竹箒を動かす手をとめた。

――母上の声のようだが……。

間を置いて、また、呼ばれて――その声が、現実のものであることを、狂四郎は、はっきりと耳にして、薄目をひらいた。

狂四郎は、まだ、東慶寺山内にいたのである。

美保代の住む草庵を抜け出て、そっと裏途（うらみち）を辿って、立去ろうとしたのだが、急に、烈し

い眩暈に捕えられて、二間余の崖を顛落し、それきり、葎の中で、昏々と意識を喪ったのである。

「狂四郎さま——」

と呼ぶ声は、美保代のものであり、崖の上からであった。しかし、それは、眼下の狂四郎を発見して呼びかけるのではなく、幻の狂四郎を夕暮の空の中にもとめている——、とわかった。

——おれは、ここにいる！

狂四郎は、胸のうちで、こたえた。

起きあがって、「ここだ！」と叫びたい衝動がなかったわけではない。

それを強くはばむ何かがあった。

耳の底に、不意にひびく声があったのである。先日、茅場家で、

「あのひとは、けだものでした」

と、こたえた静香の声であった。左馬右近が、美保代を犯したことを肯定したのである。

狂四郎のそれまでの心中には、美保代に会ったなら、

「不可抗の過失に自身を苦しめるのはおろかだぞ！」

と、強くしかりつけたい気持があったのだが……。

ところが、美保代がそこに佇むと知るや、突如として静香の声が甦ったのは、陰惨な出生によって虚無の烙印を捺された男の、犯された女を憐みつつも、烈しく嫌悪する矛盾した業

念の故であったろう。

——まだ、会う時節は来て居らぬ！

狂四郎は、石塊のように身を横たえ乍ら、自分に云いきかせた。崖の上から美保代の去って行く微かな跫音が、狂四郎の心臓に堪えがたくひびいた。

やがて——、のろのろと起き上った狂四郎は、無想正宗を杖にすると、宛然傷ついた牡獅子のように、ざんばら髪で、灌木の茂みをかきわけつつ、急勾配の斜面を、一歩一歩下って行った。

暮れた空に、星がふたつみつ、またたきはじめていた。

悲愁の丘

一

なまあたたかな靄のこめた黄昏の街には、種々雑多な騒音がこめていた。
……町内の木戸口を城門として挑み合う子供の金切声、普化僧の尺八の音、油売や吉井ぼくち売の呼び声、唐人飴の笛の音、定斎の薬筥の鐶のひびき、等々――。
一日の終らんとするあわただしさの中を、立川談亭は、のんびりした顔で、小唄を口ずさみ乍ら、今川町の横町をまがって行った。
「入れぼくろ、または指切り、神かけて……無理な口舌の肌と肌、世帯づくりのうれしさに、笑おとままよ、浮の空――と来たか。はい、ごめんよ」
がらっと格子を開けたのは、文字若の家であった。
しいん、として、人の気配もないようだった。
「はて、怪しやな、この静けさは――色の来るのを待つ宵は、床に手くだの奥座敷、明るいうちからそわそわと、寝まきのままの一重帯、裾も乱れてくれないの、湯文字、もじもじ、文字若は、いったい、どこかい、二階かい」

茶の間にも稽古場にも人の気配がないので、談亭は、とんとんと二階へ上って行った。

文字若は、窓の手すりに凭りかかって、ぼんやり、暮れてゆく空を見やっていた。

油気ない洗い髪をじれった結びにして、黄楊の木櫛を落ちかからんばかりに横ざしにしていた。白粉のない顔は、蒼く透けたように淋しげだったし、茶弁慶の襟もとへ、片手を入れて、だらしなくべったりと臀を畳に落した姿には、常日頃の文字若のすっきりした仇っぽさは薬にしたくもなかった。

「ほ――これは、おどろいた。主をのせたにわしゃのせられて……どうせふるなら雨も降れ、飛んでひと声時鳥、てな風情でげすな」

文字若は、もの倦げに立ちあがって、座布団を取って来ると、

「おあて遊ばせ」

「言葉づかいまで、上品になって――常磐津文字若、今日よりは、こころざしを改め、幼き時に読みおぼえたる女今川庭訓の厳しき教え、いまぞ恥ずかしく、迷う心を取直し、かの」

「胸の破琴や古糸の、露命をつなぐ悲しみも、昨日の春の宮鶯――」

「今日は鳴く音のうるむ声」

「憂きも辛きも忍川、むかしを思う桐壺に須磨や明石のうら長屋」

「住めば都の、蝦夷で暮すも、江戸で暮すも、同じ一生、ここが思案のしどころなり」

ようやく、文字若は、笑顔になって、

「女に生れて、いやだなあ、と滅入っていたんですよ。いっそ死んでやろうかと――」

「桑原、桑原——。黄泉の路上、老は少し。どうも、若いものは、すぐに死にたがる。わしぐらいの齢になるとな、そんな阿呆な了簡を起すひまがあったら、足の裏に飯粒をくっつけて、この地上にへばりついていたくなる」

談亭は、そう云ってから、じっと文字若を、瞶めた。

文字若は、白鳥主膳にからだを与えて、眠狂四郎に生捕らせて以来、妙に気鬱になって、弟子に稽古をつけるのも止めてしまい、化粧もせずに、ぼんやりその日その日をすごしているのであった。談亭は、そのことを知っていた。

「ほんとに、女って、いやだねえ」

「ま、そう云いなさんな。それだけの器量に生れて、ひとり暮しをしていると、気っぷが仇になって、つい、濡れたくない時にも濡れるはめにおちるが——、そこはそれ、夕立や知恵さまざまの被り物、と申してな、お前さんはお前さんらしいやりかたで夕立に遭って来た。すんだら、風呂にでも行って、さっぱりして、髪を結うて、紅鉄漿つけて、着物を質屋から出して——」

「ついでに、心中立てする主をさがして、かえ」

「そうそう。場合によっては、この立川談亭が押掛け聟になってやる」

文字若は、立ち上って、

「それでは、かための盃など——」

「その目つき、さわらば落ちん風情かな。金八に見せてやりたいのう」

茶の間に降りて、長火鉢（ながひばち）をはさんで対座したおり――。

格子が開いて、男の声がした。

文字若が出て行くと、渋い古渡胡麻柄（こわたりごまがら）の唐桟留（とうさんとめ）に博多帯をしめた小肥（こぶと）りの町人が、小腰を跼（かが）めて、

「手前、次郎吉（じろきち）と申す者でございます。失礼でございますが、こちらに、眠狂四郎の旦那（だんな）は、御逗留（ごとうりゅう）じゃございませんでしょうか？」

と尋ねた。

「いいえ、いらっしゃいませんよ」

警戒して、文字若は、そっけなくかぶりをふった。

「では、只今（ただいま）は、どちらの方においででございましょうか？」

「さあ――」

この時、襖（ふすま）の陰から、ひょいと顔をのぞけた談亭が、にやっとして、

「まあ、上んな、次郎さん」と、云った。

「おや、ご存じ？」

文字若が眉（まゆ）をひらいて、ふりかえると、

「ご存じの段じゃごわせんな。この御仁は、拙の飯の種でげす。すなわち、方今、日本中の大名屋敷を片っぱしから荒しまわっている、鼠（ねずみ）――しっ、声が高い――小僧次郎吉！」

立川談亭は、両国広小路の垢離場（こりば）の高座で、『鼠小僧大名屋敷荒し』を、時々読んで、喝（かつ）

采をあびていたのである。

次郎吉が、談亭から教えられて、古寺龍勝寺の離れをたずねて行ったのは、次の日の午後であった。

二

——妙なもんだな。江戸には、好きな女を三人ものこしていたのに、三年ぶりで帰って来て、まっさきに会いたくなったのが、浮世をすねた浪人者たあ、へっ、鼠小僧もいいところがあるぜ。

そんな独語が、胸にあった。

江戸へ舞い戻ったら、必ず捕えられて——捕えられたがさいご、小塚原で獄門になるのが目に見え乍らも、そうせずにはいられなかった次郎吉の心の隅には、もう一度狂四郎にめぐり会いたい気持があったからである。

障子のあけはなたれた離れへむかって、置石をふんで行く次郎吉は、柄にもなく、胸のときめきさえもおぼえた。

自分を眺めて、冷たい微笑を口もとに刻むであろう狂四郎の顔が、そこにあると思うと、次郎吉は、自然に、にやりとせずにはいられなかった。

「生きていたか、次郎吉——」

そう云う狂四郎の声音も、なつかしく耳にひびいた。

だが――。

沓脱ぎの上へ立ったとたん、次郎吉は、はっと、表情をひきしまったものにした。

意外にも、そこに――夜具に横たわった狂四郎の、別人ではないかと思われるくらい、凄惨な羸痩の寝顔が、あったのである。枕元の火鉢からは、薬草を煎じる鉄瓶が、湯気を噴き、つよい匂いが鼻を衝いて来る――。

いけねえや、こいつは！　旦那が病気だとは、夢にも考えなかった！

ひとり、いたましげに首をふった次郎吉は、そうっと上ると、一畳あまりへだてて、のびあがって、寝顔を熟視した。

窪んだ眼窩には、どす黝い隈取りができ、秀でた鼻梁はいっそう鋭く尖ってみえ、頬は削られたように殺げ落ち、土色の唇からもらす寝息は、荒くみだれていた。

次郎吉は、その病苦の窶れよりも、孤独な虚無の業念が眠りの中から滲み出させている夢裡の表情に、強く心をうたれたのであった。

――なんてえ、淋しい寝顔をしていなさるんだろう！　旦那の素姓はきいたことがねえが、屹度ご不幸な育ちかたをなすったに相違ねえ。そうだ、いつか、こんなことを仰言っていたっけ。「おれは、目を開けている間は、いつもおのれを欺いている。いや、それとも、おのれに欺かれているのかも知れぬ」と な――。おれのような無学者には、なんの意味だか、その時は、よくはわからなかったが……こうやって、淋しい寝顔を見ていると、あの言葉が、なんだか、じいんと胸にしみて、わかるような気がする……。

半刻あまり、次郎吉は、身じろぎもせずに、狂四郎の寝顔を瞶めつづけていた。

庫裡から住職の空然がやって来て、肩の傷の湿布をとりかえた時、狂四郎は、いちど、薄目をひらいたが、すぐにとじて、一声ももらさなかった。

「何か、あっしにできることがござんしたら、お申しつけ下さいまし」

次郎吉が、小声でねがうと、空然は、

「額でもひやしてもらおうかな」

と、云いのこした。早速、次郎吉は、黒塗の手携げ桶に、井戸水を汲んで来ると、手拭いをしぼって、そっと、狂四郎の額へのせた。すると、目蓋をとじたなりで、狂四郎が、

「次郎吉――」と、呼んだのである。

「へ、へい！」

次郎吉は、目をかがやかせた。狂四郎が、自分を一瞥したわけでもないのに、ちゃんと気づいていた――その衰えぬ鋭い直感力を知らされて、心に、ぱっと光をあてられたように、明るい気分になったのである。

――やっぱり、眠狂四郎の旦那だ！　五体は衰え果てていても、神経だけは冴えていらあ！

「江戸へどうして戻って来た？」

「べつに、どうってこともありゃせんが――」

――旦那にお目にかかりたかったんでさ。

とは、流石（さすが）に口に出せなかった。

「捕まるなよ」

ひと言、ぽつりと云う狂四郎の、瞑目（めいもく）の寝顔を見おろして、次郎吉は、目がしらが、じいんとなった。

で――声だけは、わざと陽気に、

「捕まりませんや、金輪際！　浮世にあきたら、こっちから名乗って出まさあ」

と、云った。

「それよりも、旦那。ここに旦那がお住いになっていることを、敵にまわしていなさる連中は、承知しているんでござんしょう？」

「うむ――」

「隠れ家を、別のところへお移しにならなけりゃいけません。京から、あの淫乱（いんらん）の高姫が、親不知（おやしらず）組一統をひきつれて、やって来ましたぜ。昨日、浜御殿に入りやした」

狂四郎は、べつに、これに対して、なんの反応もしめさなかった。

すでに、親不知組中の不羈（ふき）の才子白鳥主膳を、この境内で斬り伏せているし、さきに帰っていた四名を、鎌倉の切通しで仆（たお）しているのである。高姫が、出府して、親不知組全員を殺到せしめて来たとしても、あえて、おそるるにはあたらぬことだった。尤（もっと）も、この病軀（びょうく）では、たたかうすべもないが、高姫が生捕りを企図する以上、手厚い看護を期待して拉致（らち）されてみるのも一興かも知れぬ――そんな虚無の意識が、狂四郎の胸の底に湧（わ）いていたのである。

「ね、旦那、わるいことは申しませんや。今日のうちにも、ほかの場所へおかわりなさいまし」
「動くのが億劫だ」
「そんなことを仰言っている場合じゃ、ござんせん」
「心配するな。女というやつは、惚れた男の病気に対しては親切なものだ。それに、忍びの名人のお前もいる」
「同じ柳の下に泥鰌がいるとは限りませんぜ」
　曾て、京にあった際、高姫に生捕られた狂四郎を、次郎吉はまんまと救い出したことがある。しかし、あの時は、ひとたび、いましめを解かれれば、魔神にひとしい迅業を使える壮健を狂四郎は誇っていたのである。だから、悠々と、玄関から退散してみせたものだった。
　こんどは、たとえ次郎吉が、忍び入って縄目を切ったとしても、この病軀では、到底のがれることは至難ではなかろうか――。
　次郎吉が、不安をあおらせて見まもるうちに、狂四郎は、しかし、ふたたび、乱れがちの寝息をたてはじめたのであった。

三

……呪いと嘲りの無数の声が、中有の闇の中に、迸り、渦巻き、狂四郎に殺到してきていた。彼がこれまで斬りすてて来た人々の亡霊の声であったようだ。

そして、それは、だんだん、たかまってゆき、ついには、闇いっぱいの暴風雨のような凄まじい轟音となって、狂四郎をおしつつみ――あまりのおそろしさに堪えがたくなって、咽喉いっぱいに何か絶叫して、はっと、意識がかえった。

うっすらとひらいた目に、まず映ったのは、額の冷し手拭いをとりかえようとしてのばされた手であった。それは、次郎吉のものではなく、ほっそりとした白蠟のように滑らかな素腕であった。

訝しげに移した視線がとらえたのは、血の気のない静香の貌であった。

目が合うと、静香は、微笑しようとした。しかし、それは泡沫のように儚く、すぐ消えて、目蓋が伏せられた。

「次郎吉という男がいた筈だが――」

障子に映った木影の薄さに、黄昏が来ているのを知り乍ら、訊ねると、

「切創にいいお薬を取って来る、と申して、出て行きました。明朝までに戻るとか――」

と、静香は、ひくい声でこたえた。

静香が、ここへ来てから、もう一刻が過ぎている。狂四郎の病み窶れた寝顔は、次郎吉と同じく静香を愕然とさせた。

静香の受けた衝撃の異様な烈しさは、何も知らぬ次郎吉にも、二人がただの関係でないことを、すぐに推量させた。

「わたくしに、看護させて頂けませぬか？」

急にそう願い出られて、次郎吉の方が、狼狽したものだった。
「そりゃ、もう……どうか、よろしくおたのみ申しやす」
気をきかせて、次郎吉は、身を消したのであった。
「御用か？」
「は、はい――いえ……」
静香は、いったん擡げた眸子が、狂四郎の視線にぶっつかるや、あわててそらした。それから、呟くように、
「わたくし、江戸を去ろうと存じます」
と、云った。
「何処へ？」
「………」
しばらく、黙っていてから、庄内の鶴岡に父方の伯母がいるので、そこをたよって行こうと思う、とこたえた。
「あれから、公儀から、京へ行けという命令は来ないか？」
「いえ、べつに――」
かすかにかぶりを振る静香の横顔に、冷たい寂寥の色が刷かれているのをみとめた狂四郎は、それが懊悩の果てのものであるのを想像すると、遽に、脳裡を、不吉な予感が掠めた。
「静さん――」

「はい」
「わたしという男があらわれなければ、そなたは、こうまでに不幸にはならなかった。……わたしは、これまでに、女を幸せにしてやったおぼえがない。……母は、わたしを生むことで不幸になった。わたしは、この世に生を享けた時から、女を不幸にする宿命を背負わされたようだ」
「………」
「わたしは、そなたに謝罪しようとは思わぬ。謝罪など、なんの意味もなさぬ。これは、この前、盲目となった左馬右近をそなたにおしつけた時、云った筈だ。いまでも、同じ言葉をくりかえすことができる。ただ、これからさき、わたしにしてもらいたいことがあったら、云ってくれぬか。わたしにできることなら、なんでもしよう。そなたが、もし今よりも、ほんのすこしでも、明るい心を持つ日が来るなら……それは、どうやら、わたし自身のためでもあるようだ」
狂四郎の声音は、静香が、これまで一度も耳にしたことのない、穏やかな、やさしいひびきをふくんでいた。
長い沈黙の時刻が、流れすぎた。
静香が、ぽつりと云った。
「べつに……ありませぬ」
「そうか――」

狂四郎は、その返辞が当然のような気がした。いまとなって、この悲惨な娘に、してやれることなど、何ひとつありはしないのだ。

——所詮(しょせん)、おれは、不幸な者を、誰一人すくってやることはできぬらしい。

自嘲の中で、狂四郎は、目をとじた。

いつの間にか、静香の姿が消えはてているのに、狂四郎が気づいたのは、翌朝であった。手のとどくところに、『狂四郎様』と上書きした封書がのこしてあった。

開いてみると——

『静香は、貴方様のお手によって、この世を去りたく存じ、心に鞭(むち)うっておうかがい致したのでございました、御不例とは露存じあげず、おいたわしいお顔を拝見いたしましたら、もう心にきめたことを一言も申上げることが叶(かな)わず……、おんなのあさはかさをおわらい下さいませ、静香は、嘘(うそ)を申しました、美保代さまは、決して、右近によってはずかしめをお受けになっては居りませぬ、あの夜、わたくしは、右近のあとを尾(つ)けて参り、みにくい所業におよぼうとするのを、はばんだのでございました、美保代さまは、お気を失われたまま、朝をお迎え遊ばしたために、つい、あらぬはずかしめを受けたと、思いちがいをなされたのでございましょう、決して、決して、そのようなことはございませぬ、何卒御安堵(どうぞごあんど)あそばすよう、おつたえ下さいませ、でうす様に帰依した身で、このようなおそろしい嘘をつきました静香は、もはや、はらいそへ参ることはのぞ

まれませぬ、幾重のお詫びとともに、貴方様と美保代さまが、かたくむすばれて、お幸せに、すえ永くおくらし遊ばすよう、心からお祈りいたします。

かしこ』

狂四郎は、巻紙をつかんだまま、身を起すや、凝然と、宙へ、暗い眼眸を置いた。

──静香！ おれは、お前に謝罪はせぬ、と云ったのだぞ！ その様な非道の男に、なぜ詫びる必要がある！

──よし！ 美保代をすてる！ おれは、お前を妻にする！

数分の後、狂四郎は、われわれにお馴染の身なりになって、離れを出るや、よろめく足をふみしめて、山門へむかって歩き出した。

「だ、だんなっ！ いけねえ！」

庫裡からとび出した次郎吉が、血相変えて、追いかけて来た。

「そ、そんなからだで、外歩きは無茶だ！ 御用がおあんなさるなら、あっしが代って勤めやす。仰言っておくんなさい」

「おれ以外に勤まらぬ用だ」

「だって、そのからだじゃ、どんな大切な御用か存じませんが、おやりになれる筈がねえ。旦那、おねがいでござんす。あっしに、是非やらせていただきてえ──」

「馬だ、次郎吉──」

「え？」

「馬をしょっぴいて来い！　急ぐ！」
凜乎(りんこ)として、否(いな)やを云わさぬ気色と語気に、次郎吉は、一瞬、拒絶の声をのみ込んで、じっと瞶めかえしたが、無言で、ぱっと山門を走り出て行った。
狂四郎は、静香が自殺する恐怖で、焦躁(しょうそう)していた。
巻紙にしたたった泪(なみだ)のあとが、まだかわいていないところをみると、静香が去ったのは、夜が明けてからに相違ない。
——いま行けば、間に合う！
狂四郎は、恐怖をうち消すために、自分につよく云いきかせていた。

四

きれいに掃かれて、打水された江戸の朝の町筋を、風のごとく、一騎、駆けぬけて行った。
夜が更(ふ)けるのが早いかわりに、朝は、陽がさしそめる頃には、往還は、商いに忙しい町人や御用繁多の武士たちの姿で織るようになるのが、当時の江戸であった。
騎馬は、行人の多きを委細構わず、戛々(かつかつ)たる蹄(ひづめ)の音を撒(ま)いて、その音の迅さにおどろいた者が、あっとなって身をどけたとたんには、もう数間さきにある乱暴な疾駆ぶりだった。
ちらと馬上を仰いで、通り魔ではないか、と慄然(りつぜん)となった者も一人や二人ではなかった。
その蒼白(そうはく)な、病み窶れた形相の凄じさは、そんな錯覚を起させるに充分であった。
やがて、狂四郎が、馬を走り入らせたのは、渋谷宮益町はずれの、古い武蔵野のおもかげ

をそのままとどめている雑木林の中であった。
楽水楼隠宅は、二年前、狂四郎がはじめて訪れた時とすこしもかわらず、閑寂のたたずまいを、そこにわだかまらせていた。
ひらりと馬から降りた狂四郎は、瞬間、くらくらと眩暈に襲われて、馬腹へよろけかかったが、ぐっとふみこたえると、しずかな足どりで、冠木門をくぐった。
柿葺の土庇のふかい玄関の、古雅な、くすんだ美しさは、しかし、いまの狂四郎の苛立った心を鎮める力はなかった。いや、かえって、反撥をおぼえさせるにしか役立たなかった。
案内を乞う声に応じて出て来た女中は、狂四郎のあまりな悽惨な面貌に、あっと息をのんだ。
「御老体にお目にかかりたい。この玄関でよい」
松平主水正は、すぐに姿をみせた。
「お――、狂四郎、患うて居るのではないか？」
目を瞠った表情が、不用意に、肉親の慈愛をしめしているのを見た狂四郎は、わざと、そっけなく、
「静香殿は、ご当家へ立寄りましたか？」
「いや、寄らぬぞ」
「手前をたずねて参って、庄内の鶴岡にいる伯母のもとへ赴くと申して居りましたが――」
「静香の伯母は、五年前に身罷って居る」

それだけきけば、もはや、胸中の不吉の予感は、決定的なものとなった。

「失礼いたしました。ごめん――」

狂四郎は、さっと玄関を出た。

老人が、あわてて呼びとめたが、きこえぬふりで、跫音を遠ざけて行った。

馬のところへ戻った時、狂四郎の脳裡には、ひとつの直感が閃いていた。

――もしや、あそこではなかろうか？

狂四郎をのせた馬は、渋谷の丘陵のふもとをめぐる小川沿いの野路を、矢のように駆け抜けて行った。野は、いちめんの菜の花ざかりであった。微風がその匂いを、明るい春の陽ざしの宙に満たしている。のびやかな牛の声、青い麦、林にかこまれた農家――すべてが、平和で麗らかで、この風景の中に、死の翳などさす余地はないかのように思われる。

狂四郎は、自分の思いすごしであってくれることを念じた。

しかし――。

直感は、正しかった。

栗林の前で馬をすてて、その陰にある杣小屋に馳せ寄って、戸をひきあけた刹那、狂四郎の全身が凍った。

静香は、そこにいた。くびに青銅の十字架をかけ、膝をしばって、合掌して、粗朶束に凭りかかって――。

二年前の夏、にわかに襲って来た嵐に追われて、この小屋にとび込み……風雨が歇んだ時、

静香の身心は、狂四郎のものになっていたのである。静香は、女のよろこびを、生れてはじめて知らされた処を、終焉の場所にえらんだのだ。

「静香っ！」

抱きあげると、かすかに、麻薬の臭気が、鼻孔を刺した。

「静香っ！　ばかっ！」

烈しく、からだをゆすぶってみて、すでに死魔の手から脱し得ないと、さとった。しかし、せめてもう一度、意識を甦らせるべく、そっと仰臥せしめると、両手を、胸の隆起の下にあてて、活法の衝撃をくれた。

色褪せた唇がひらいて、すっと息を吸い込んだ。二度目の衝撃で、唇がわななき、微かな呻きをもらした。

「静香っ！　狂四郎だ！　わかるか？」

うっすらとまぶたをひらいた瞳孔が、必死に呼ぶ男の顔を映しとるには、ややしばし時間をかけなければならなかった。

「ああ……」

「わかるか？」

「う、うれしい——」

みるみる、泪が湧き出て、睫毛にあふれ、まなじりから、流れおちていった。

狂四郎は、刻々と生命を薄れさせてゆく儚い若い肢体を、しっかと抱きしめた。

静香の最後の努力が、両手を、狂四郎の頸にすがらせた。
「あ、あなたの……母さまの……」
「うむ?」
「おそばへ……あなたの、お手で……わたくしを……埋めて……くださいませ……」
「よし、きいたぞ!」
「……うれしい……」
なかば無意識に、静香は、狂四郎の唇をもとめた。
……しずかな、長い、口づけであった。
狂四郎が、顔をはなした時、静香の息は絶えていた。

五

狂四郎が、静香の遺骸と鍬をのせた馬を曳いて、丘陵をのぼって行くのを、とある林のわきから、七、八名の武士の群が、じっと見まもっていた。いずれも顔をつつんでいた。
それを気づいているのかどうか――狂四郎は、暗然たる眼眸を地面に落したきりであった。
頂上の、櫨の木の下までのぼりつくや、狂四郎は、遺骸をかかえおろして、そっと、青草へ横たえた。それから、鍬をつかんで、母の墓の前に立つと、
――母上、話相手ができましたよ。
と、胸のうちで云いかけておいて、そのかたわらの地面へ、ひとふり、ざくっと打ち込ん

だ。
打ち込んだ姿勢で、狂四郎は、頭をめぐらした。いつの間にか、覆面の武士たちが、半円形に散らばって、三間の近きに迫っていた。
病軀とはいえ、このまま、静香の遺骸をそこへすてて、逃げようと思えば、それができない狂四郎ではなかった。
穴を掘って、遺骸を葬り了える仕事をすませたならば、もはや、いかに狂四郎と雖もこの強敵の群とたたかう体力は残るまい。
——だが、おれは、静香と約束したのだ。
「親不知組の方々とお見受けする。武士のなさけに、手前が、この仏を葬るまで、お待ちねがいたい」
「よかろう」
指揮格の男が、頷いた。
「こちらも手つだってもよい」
「それは、おことわりする。わたし一人の手で葬ってやると約束したのです」
それから、約半刻を費して——。
ついに、狂四郎は、五尺余の深さの長方形の穴を掘りあけていた。
遺骸をかかえあげて、その穴の中へ入れる力が、狂四郎の体内にのこっていたのが、ふしぎであった。

両のてのひらに、すくいとった土を、穴の中に仰臥した遺骸の上へ、ぱらぱらとかけたとたんに、狂四郎は、崩れるように、その場に、俯(うつ)っ伏(ぷ)していた。

終始、黙然として、見まもっていた武士たちが、しずかに、そこへ、寄って行った。

地下牢の武士

一

墨を流したような闇の中で、眠狂四郎は、目をさました。

闇に利く視力を使っても、何も透かし得なかった。そのかわり、闇そのものが、黄泉の国のたそがれの微光のように、きらきらとかがやいているようであった。

からだの下は、冷たい敲土であった。ずいぶん長い間、仰臥していたとみえて、腹の底まで凍っていた。

起き上ろうとすると、四肢の関節に、疼痛があった。疲労の深さは、起き上った狂四郎を、しばらく、茫然と虚脱の状態に置いていた。

静香の遺骸を、母の墓のかたわらに葬りかけて、そのまま昏倒してから、どれくらいの時刻の経過があったろう。

——そうか！

急に、狂四郎は苦笑した。

丘陵上で、覆面の連中に迫られた時、彼らが将軍の女高姫の指嗾によって動いているとす

れば、また、阿弥陀ヶ峰の決闘で敗れた時のような待遇を受けるのではないか、と心の一隅に、その想像が泛んでいたことは、否定出来ぬ。
敵とたたかう意志を喪った者の、惨めにすがった藁というべきだった。甘かったのだ。
——このおれとしたことが！
おのれをあざけって、腕を組んだ——とたんに、本能となって磨ぎすまされた神経が働いて、この暗黒の世界に、ごく身近かに、人がいるのを察知していた。
殺気はない。こちらに危害を加える目的をもって、そこにいるのではない模様である。
「おい、そこの御仁——」
静かに、狂四郎は声をかけた。
「おぬしも、とらわれの身か？」
返辞はなかったかわりに、もそりと動く気配があった。
「わたしを警戒しているのなら、無駄な心づかいだ。同囚の誼みで、ここがどこか、教えて頂きたい。地下牢ということだけはわかるが——」
その問いにも、相手は、沈黙をまもった。狂四郎は、待ちくたびれると、ごろりと仰臥した。
闇の宙に眸子を投げて思ったことは、
——こうなると、生きのびたくなる。むざむざ、このまま葬られることはない。
そのことだった。

狂四郎は、ひくく、謡曲・咸陽宮を口ずさんだ。

「……七尺の屏風は、躍らば越えるべし。羅縠の袂をも、引かば、などか切れざらん――」

この時――。

かちっと燧石を打つ音がしたかと思うと、燭台に、ぼうっと灯がともった。

二

狂四郎は、そこに、襤褸にひとしい夜具の中に横たわっている人間を見出した。

ひどい年寄のようであったが、それは、この地下牢にとじこめられてから、ひとまたぎに老い朽ちたせいであろう。頭髪も髭も、苦難によって白くなったに相違ない。窪んだ眼窩の中は、まだ黒い光を帯びていたのである。それにしても、燧石を打った手は、骸骨にひとしい痩せさらばえかたであった。

狂四郎は、その秀でた額と鼻梁に、氏素姓正しい気品をみとめた。枕元には親鸞の『教行信証』六巻が積んであるほか、最小限の日常道具が置かれてあった。

囚人は、じっと天井を仰ぎ乍ら、

「貴殿は、よほど兵法に長けた御仁と思われる」

と、呟くように云った。咽喉に痰のからんだ、息苦しげな、しゃがれ声であった。

狂四郎が、しんの暗闇の中で、二間余へだてた場所に音もなく横たわった者の気配をさとった――そのことを、囚人は云ったのである。

狂四郎は、それにこたえず、地下牢内を見わたした。四周は、綿がとび散ったように白い黴のふいた石壁であった。天井は、檜板であったが、厳重にも、竿縁は鉄棒で、細かな組亀甲に作ってあり、たとえ跳躍してとびついても、これを破ることは不可能であった。窓はなく、石段の上に鉄格子の片引扉が閉めてあった。外界の空気がかようとすれば、そこからであろう。勿論、扉のむこうは隧道となっていて、地上へ出るには、さらにもうひとつの扉を開かねばなるまいと想像される。

「お手前は、どれくらい前から、ここに拘禁されておいでだ？」

「左様――。もうまる二年になろうか」

「公儀の牢にしては、聊か扱いかたがちがっているようだが――」

公儀の処置ならば、囚人に経典を与えたりなどしないし、皿に食べ残された料理がかなりぜいたくなのも不審であった。狂四郎の場合にしても、いつの間にか、左肩の刀創の手当がしてあったが、これにつかった薬が、かなり高価なものであることは、匂いでわかった。

「御推察通り、ここは公儀の牢ではない。備前屋という町人がつくったものだ」

「成程――」

狂四郎は、大きく頷いた。

親不知組をつかったのは、高姫ではなく、すでに奇妙な友情さえ、お互いにおぼえるくらい親しい間柄の宿敵だったのである。囚人は、つづけて説明した。

「貴殿も、ご存じだろう。もと洲崎にあった料亭『升屋』というのを――」

「いまは、柳橋の河岸に、代替りして華々しく営業している、ときいたが……」
「その二代目升屋が、この地下牢の上にある」
寛政期の大海嘯で消滅した江戸割烹界随一の料亭升屋が、二年前、さらにひとまわり大きな規模で再築された時、いったい経営主は何者だろう、と噂雀がかしましかったものである。
ついに、誰も、その主人をつきとめられないままになっていたのだが――。
狂四郎は、こうなるといよいよ死ぬことは御免蒙らねばならぬ、と自分へ云いきかせた。
と――。
天井に、微かな音がした。
きりきり、きりきり……と、地虫の鳴くに似たひびきのおこる個所を、目でさぐっていた狂四郎は、つと立って燭台を把りあげると、その下へ行って、高くかかげた。とたんに――、ぷつりと、檜板をつらぬいて、錐の先端が突き出た。そして、すぐ、引っ込められると、
「旦那――」
その小さな穴から、遠い、忍び声が落ちて来た。
普通の人間の耳では、到底、この声はききとれなかった筈である。狂四郎の五官が、どのように鋭敏に働くかは、もはやくりかえし述べる必要はない。
「次郎吉か――」
「へい」
鼠小僧次郎吉は、龍勝寺住職から、「眠さんは、たぶん、あの娘さんを追って行ったので

あろう」と、静香の家を教えられ、宙をとんで追いかけたのであった。茅場家には、もとより、二人の姿はなく、次郎吉は、用人をしめあげて、静香がほかに立寄るとすれば、渋谷宮益町はずれの楽水楼隠宅の筈だ、と白状させ、そこへむかって韋駄天走りしたところ、狂四郎がついさっき訪れて、すぐ姿を消したという女中の返辞であった。

そうなると、意地になって、どうでも、狂四郎に追いつかねばならぬ、と血眼になった次郎吉は、偶然、野道で出会った百姓から、それらしい浪人者が、気を失っている（と百姓は見たのである）娘をのせた馬を曳いて、あの丘へのぼって行った、と指されたのであった。で、――ついに、次郎吉が狂四郎をさがしあてた時、すでにおそく、親不知組にとりまかれて昏倒していたのである。

「お前の忠告は正しかったようだな、次郎吉――」

「この天井は破れませんか、旦那？」

「駄目だ。鉄の組亀甲だ。首だけ通すもおぼつかぬ。死体となって脱出するよりほかはあるまい」

「冗談じゃありませんぜ！」

「ほかに手段はない。お前は、これから、水野越前守上屋敷に行って、側頭役武部仙十郎という爺さんに会え。そして、おれがそう云っている、とつたえると、爺さんは、おれを殺す毒薬を調合してくれる筈だ」

「旦那！」

「早く行け！　こういう場所に二日も三日も黙って坐っているのは、おれの性分に合わぬ」

三

天井裏から、次郎吉が去るや、狂四郎は、明るい声で、云った。
「御同囚、どうやら、われわれは、陽の目が見られそうだ」
囚人は、しかし、微動もせずに、仰臥したなり、口をつぐんでいた。
狂四郎は、一瞬、なぜともなく、この人物に対して、強い好奇心をおぼえた。
「わたしは、眠狂四郎と申す、ごらんの通りの素浪人だが、自由の身になれば、波瀾の中にふみ込むことをあまり苦にしない男です。頭をおさえられる窮屈な地位についたことのないために、時折の気まぐれで、平気で生命をなげ出せるように自分をつくってしまったらしい。……お節介だと申されるかも知れぬが、お手前の御不幸が、備前屋の貪欲によってもたらされたものであれば、脱出したあかつき、目には目を、歯には歯を、の報復に一臂をおかししてもよいが……」
狂四郎は、つづいて、脱出の方法について、手みじかに説明してきかせた。
相槌も打たずにきいていた囚人は、やがて、淋しげな微笑を口辺に刷くと、
「貴殿に、もう半年ばかり前にお会いしたかった。そうすれば、拙者も、生きのびられたのだが……」
「生きる希望を、努力せぬ前にすてててしまわれることはない」

「拙者のからだは、拙者自身が一番よく知って居る」
囚人は、冷たくこたえてから、そろそろと起き上った。
それから、しばし、掛布団の上に置いた痩せさらばえたおのれの手へ、じっと目を落していたが、静かに、狂四郎へ視線を移すと、
「拙者には、百に一も、甦る自信はないが……貴殿の好意をしりぞける理由もない。どうせ、遠くない日に、ここで果てる心算でいたのだから――。貴殿の御指図にしたがおう」
狂四郎が、頷くと、囚人は、はじめて、素姓を明らかにした。
勘定所勝手方組頭・兵堂掃部――が、自由なりし日の官姓名であった。
勝手方というのは、金穀の収支、三季切米の支給、張紙相場、金銀座ならびにその吹方、代官所、委託地の皆済届、万石以上以下に対する貸金その他の事務を担当する職業であった。
勝手方組頭は、二人というさだめであったが、兵堂掃部が在任二十年間、同役の席はずうっと空けられていたので、その支配権は彼一人の手にゆだねられて来たのであった。
掃部は、固すぎる程固い人物で、松平定信が加判の列からしりぞいたのち、政治の主導権をにぎった松平信明の絶対的な信任を受けたので、あえて同役がえらばれなかったのである。
掃部が、在職期間中になした最大の仕事は、宝暦から天明へかけて外国から輸入した金を隠匿して銀の方のみ流出したことであった。
当時――。関東は、金勘定、関西は、銀勘定であった。定信時代、丁銀に対して金貨が下落し、物価の高低が生じ、経済界が混乱したことがあった。これは、田沼意次時代に、南

鐐銀をやたらに新鋳した弊害のあらわれであった。

掃部が、在職中も、金と銀のアンバランスはつづいていた。松平信明は、そこで、これを完全に均衡を保たしめるべく、金座に積まれた六十貫余の輸入金を掃部に隠匿させてしまったのである。

そして、その金の処置を明示することなく、信明は、在職のままで、十年前、卒然として逝去したのであった。

爾来、掃部は、その在処については、かたく口をつぐんだままで来たのである。

信明のあとを継いだ水野忠成が、まず考えたのは、財政困乏救済のための、金銀改鋳および新貨の通用のことであった。このために、信明がかくしたであろう金が、のどから手の出る程欲しかった。掃部は、きびしい糾問を受けたが、頑として、知らぬとつっぱねた。（輸入金隠匿のことは、信明と掃部の二人きりしか知らぬことであったし、水野忠成とその配下の勝手係は、ただ、そうではないかと推測しただけだったのである）

掃部は、信明が、金銀座から、しばしば提出された改貨の議を、金銀の質を落すことは国家の恥辱であるとして、一度も許さなかったことを、見知っていたので、断乎として、水野忠成に反逆する肚をきめて、それをつらぬいて来たのである。

「ふむ——。本丸老中にもつきとめられなかった秘密を、あの備前屋が、かぎつけた。そして、お手前をここに拘禁したというわけですな？」

「左様、拙者は、突如として失踪した、ということになって居るらしい。公儀の隠密どもは、

拙者を血眼になって捜索している筈だ。羽州殿は、飼犬に手を嚙まれていることを知らぬ。我欲の亡者どもの醜悪な騙し合いだ。金玉崇くして寇盗至る、か――」

「お手前は、その金を、永久に地中に朽ちさせるおつもりか？」

「直木が伐られ、甘井（雑木）が斧を免れる濁世に、黄金の輝きは愈々小人連の心を晦ますであろうからな。但し――」

そこで、いったん、言葉を切った掃部は、じっと、狂四郎を瞶めた。激しい眼光であった。

「貴殿に、その使途についての知見があれば、うかがった上で在処を打ちあけてもよいが――」

「あいにく、そんな大金には、あまり興味がない、とおこたえするほかはない。天下国家のことに一片の志も注いだおぼえはないし、窮民を救うてやりたいと思い立つ同情心もべつだん持合わさないし――その意味では、お手前はくだらぬ男に出会されたことになる」

狂四郎は、そう云って、笑った。

不意に、掃部が、

「もし、脱出に成功したら、ひとつお願いがある」

と、きり出したのは、それから、すこし経ってからであった。

「拙者に、ひとり、娘がある。百合枝と申す。盲目になって、目下、備前屋の監視の下にいる筈でござる。すくい出して、面倒を見て頂けまいか？」

「そういう仕事が、わたしの役柄だ、と申上げられる」

「忝(かた)じけない！」
掃部は、ちょっとの間、何事かを思い惑っている風であったが、
「娘が、もし、目あきになることがあれば自(おの)ずと埋蔵金の在処も判明いたそう」
と、謎(なぞ)めいた独語をもらした。
「お娘御が、承知して居られる？」
「いや、娘自身は、何も知り申さんが……」
それきり、掃部は、そのことについては口をつぐみ、狂四郎もきかなかった。
鼠小僧が、天井裏から、こつこつと合図したのは、どこからともなく朝の明りが忍び入って来て、顔の輪郭がおぼろに見わけられる頃合(ころあい)だった。
狂四郎は、ただちに、消えていた燭台に火を点じて、錐穴の下に立った。
「旦那、やりますぜ」
「よし――」
錐穴から、つうっと、絹糸のように、ひとすじの線をひいて、うすくれないの液体が垂れ落ちて来た。
狂四郎は、それを口中に受けて、ごくりと嚥(の)み下すや、急いで、掃部を、扶(たす)け起して、その下につれて来た。
「次郎吉、もう一度だが、こんどは、分量をすくなくしろ」
「へい、合点――」

狂四郎は、掃部を、そこに仰臥させて、錐穴のましたへ口を置く目測をあやまたず、その液体を、飲ませた。

この瞬間、掃部の面に名状しがたい寂寥の色が滲むのを見下して、狂四郎は、

——殺すことになるかも知れぬ。

と思い、かすかな痛みを胸におぼえた。

狂四郎と掃部が、息絶えて仆れているのを発見されたのは、その日の午後であった。

四

夜更けて、升屋の裏木戸がひらかれ、八人の非人が、白布で掩った棺をふたつ担いで、そっと、忍び出た。

外は、川波に洗われる石段になり、左右は芦洲がひろがっていた。空に細い月があったが、厚い夜霧にさえぎられて、光のとどかぬ水面は、くろぐろとひそまっていた。

非人たちは、黙々として、石段の下の杭からもやい綱を解くと、ふたつの棺をのせた屋形船を、岸から放した。

あぶらのようにねっとりと重い水を掻く艪の、単調な軋りだけが、この深夜の静寂を破る唯一の音だった。

船は、かなりの速力で、両国橋を潜りぬけた。やがて、すぐ前方に、新大橋が大きな黒い虹となって浮きあがった。

　この時、とある掘割から、一艘の猪牙が、非常な迅さですべり出てくると、ぐんぐん迫って来た。頭上に、新大橋がぐうっとのしかかったところで、屋形と猪牙は、並んだ。というより、猪牙が、ぴったりと屋形により添ったのである。
　ひらりと、敏捷な身ごなしで、猪牙から屋形へ跳び移ったのは、ぬすっと被りの、黒ずくめの男であった。
「おい、あにいたち。おめえたちは、品川の松右衛門の小屋の若いもんだろう。その棺ふたつを、佃島の沖で、水葬してくれとたのまれたんだな？」
　浅草の車善七、品川の松右衛門――これが、当時の江戸の非人小屋頭だった。
　非人の一人が、そうだとこたえると、
「おれは鼠小僧だ」
　ずばりと云ってのけてから、おどろいて息をのむ対手の手首をとらえると、そのてのひらへ、ぽんと、切餅（二十五両）ひとつ、のせた。
「仏を買った！　猪牙へ移してくれ。急ぐんだ」
　否やを云わさぬ、きびきびした語気だった。江戸随一のこの盗賊の姿は、非人たちの目に、お奉行様よりも、もっと尊敬するにあたいする颯爽たるものに映っていた。非人たちが、棺ごとかかえあげようとすると、次郎吉は舌うちした。
「莫迦野郎！　中身だけだ。おめえたちは、空っぽを、佃島の沖へすてて来な」
　そして、蓋がとられるや、次郎吉は、そのひとつを覗き込んで、

「成程。さすがは備前屋のしこみがいい奴等(やつら)だけのことはある。ちゃんと、無想正宗を添えてくれていらあ。おかげで、こっちは、とりかえす手間がはぶけたというもんだ」

その夜から十日ばかり過ぎて――。

飯倉(いいくら)新町の『地廻米穀取扱・備前屋』の看板をかかげた脇店の奥の離れ屋敷で、若い妾(めかけ)と、同じ衾(ふすま)で睡っていた主人は、

「おい、備前屋――」と、闇の中から呼ばれて、ぱっと目をさました。

しかし、そのまま――片手を、おんなの柔かな胸の隆起へ置き、片脚を、じっとりと汗ばんだ太股(ふともも)で挟(はさ)ませた姿勢を、微動もさせずに、備前屋は、呼吸(いき)をひそめていた。闇に、さらに濃く、黒影を滲ませて、うっそりと立っていた侵入者は、静かに、そこへ坐った。

「生きのびなすったか、眠さん――」

備前屋が、妾の睡りをさまたげぬ小声で、そう云った。

「まことの死骸か、仮死か、見破れなかったのは、おぬしらしくもない軽率というものだった」

「恰度(ちょうど)、あの前後四、五日、旅に出て居りました。戻って来てあんたと兵堂掃部さんが、頓死(とんし)したときいた時、どうも腑(ふ)に落ちぬ気がしましたが……。まちがいなく水葬にしたという話を信用して、片づけた者たちには一言も申しはしませんでしたがね。……わたくしは、まえまえから、あんたを先にあの世に送ったら、さぞかし、さびしい心持になるだろうと思

って居りましたよ。ところが、こんどは、それがなかった。予感というやつでございましたな」

　このおり、妾が、夢の中で甘えて、寝言をもらして、備前屋へ身をすり寄せた。それを、やさしく抱きかかえ乍ら、

「いや——どうも、あんただけは、わたくしの苦手だ。……ところで、掃部さんの方は、どうなさいました？」

「気の毒に、目をひらかなかった。尤も、当人は、覚悟をきめていたようだった」

「金のかくし場所を、旦那に遺言しておゆきになりましたか？」

「そこまで信頼してはもらえなかった……。備前屋、今夜たずねて来たのは、掃部殿の娘さんをこっちにひき渡してもらいたい用件だ。わたしに面倒をみてくれ、というのが遺言だったのだ」

「しかし、ありゃァ、盲でございますよ。わたくしの方も、べつに、粗略に扱っては居りませぬが——」

「遺言なら、やむを得まい」

「そうでございますな」

　備前屋は、二枚の敷布団のあいだにしのばせてある短銃を、さぐりとりたい衝動に、いくどかおそわれつつも、ついに、それをなし得なかった。

　短銃を摑んだ刹那、自分の首が刎ねられる恐怖があったのである。

備前屋は、敵意をあっさりとすてた。すると、急に、気が軽くなった。

「よろしゅうございます。お嬢さんをお渡しいたしましょう。但し、いつまた、とりかえすかわかりませんから、この点、充分に御用心なさいまし」

「承知した」

「どちらへお送りいたしましょう?」

「龍勝寺の方へたのむ」

狂四郎は、立って、すっと、廊下へ出た。

瞬間——障子の陰にひそんでいた不寝番の用心棒が、無言の抜打ちをあびせた。

次の刹那、狂四郎のからだは、風のような迅さで、一間むこうにあった。

首を喪った胴が、刀をささえにして、二歩あまりよろめき出て、がくんと俯っ伏した。その上へ、同じく両断された障子が、よじれつつ、ばさっと倒れかかった。

狂四郎は、ふりかえりもせず、ぱちりと冴えた鍔鳴りをのこしておいて、まっすぐに歩み去った。

五

翌朝、一梃の駕籠が、古寺龍勝寺の山門をくぐった。

離れの庭さきに、ふところ手で佇んでいた狂四郎は、駕籠舁きへ呼びかけて、ここまでかつぎ込ませた。

垂れがあげられ、おぼつかない手さぐりで、出て来た娘は、父掃部の気品をうけ継いだ美しい顔だちであった。細く高く通った鼻梁とかたちのいい唇が、狂四郎に、ふと、曾て、大奥医師・室矢醇堂の邸内にあった霧人亭で、まっ二つに斬りすてたびるぜん・まりあ観音像の貌を思い起させた。

だが、この美しい顔だちならば当然すずしかるべき双眼は、無慚にも、いちめんどんよりと白く濁って、黒い瞳というものが無かったのである。

狂四郎は、黙って、娘の手を把ると、離れへ招じあげた。

「備前屋から、備前屋さんに代って、わたしのことをきかれたか？」

「はい。備前屋さんに代って、お世話下さるお方とうかがいました」

「お父上のことは？」

百合枝は、訝しげに、首をかしげてみせた。

――そうか、父親が地下牢に拘禁されていたことは知らされて居なかったのだな。失踪したものとばかり思い込まされて居る。

「あの……貴方様は、父の行方を――もしや、ご存じなのでは？」

「お父上は、亡くなられた」

「えっ?!」

百合枝は、見えぬ目を瞠った。

その長い睫毛のあいだに、みるみる湧きあがる泪を、じっと見まもりつつ、狂四郎は掃部

の謎めいた言葉を思い出していた。

「娘が、もし、目あきになることがあれば自ずと、埋蔵金の在処も判明いたそう」

——はてな？

狂四郎は、百合枝の泣きやむのを待った。すでに覚悟はできていたのであろう、百合枝は、ほどなく、もとの穏やかな面持にもどった。

「そなたは、生れついての盲目か？」

「いいえ。二年ほど前に、突然、見えなくなったのでございます」

「二年前？　では、お父上が姿を消される頃ですな？」

「はい。三日前に——」

——わかった！

狂四郎は、心中で叫んだ。

「そなたは、一夜のうちに盲目になった。すなわち、朝、目がさめたら、何も見えなくなっていた。目は烈しく痛んだ。そうですな？」

「はい。その通りでございます」

——この盲目は、贋だ！　薄い不透明の玻璃を嵌めこまれたのだ！　それを、当人も知らぬ。二枚の玻璃に、金の在処が記されている！　これだ！

狂四郎は、莞爾とした。

しかし、その玻璃をむしりとって、もとの明眸にかえしてやることは、ためらわれた。も

しそうすれば、備前屋が、ただちに、その奇跡の真相を知ろうとして、娘の口からきき出すべく、拉致(らち)を企図するに相違ない。

——開眼してやるのは、時節を待って、おそくはあるまい。

狂四郎は、そう考えて置いてから、静かな口調で云ったことだった。

「盲目かならずしも不幸ではない。世間には、五体がそろい乍ら、心の片端者が、いくらでもいる——」

次郎吉日和

一

花曇りの、しっとりと空気の重たげな午さがり――。

灌仏会が来ていて、ここ神奈川台の街道沿いの木立からのぞく古ぼけた灌仏堂の屋根にも、牡丹、芍薬、百合、紫藤の花が葺いてある。

麗らかな陽気に誘われた旅人の姿は、街道をひきもきらぬ。伊勢参りの群、帰国の武士、出府の役人、巡礼親娘、御用飛脚、問屋駕籠等々――。

乗掛駄馬を曳いた雲助が、あたりはばからぬ大声で、悪たれ唄をうたい乍ら行くのも、のどかな景物のひとつといえる。

ええ、こらやあ
お国は大和の郡山、お高は十と五万石
茶代がたった二百文、こちゃえ
人のわるいは、鍋島、薩摩
暮六つの七つ立ち、こちゃえ

銭は内藤豊後守
袖からぼろが、さがり藤、こちゃえ

雲助は、『ここより保土ヶ谷へ一里九丁』と記された道標のかたわらに、腰を下ろして、煙管をくわえている小意気ななりの商人をみとめて、

「旦那、馬をやらんけえ」

と、すすめた。

ひょいと擡げた明るい顔は、鼠小僧次郎吉のものだった。

「わたしの情婦が、六郷川で一舟遅れてな、待っているのさ」

「川崎の立場で饅頭食い乍ら待ってやる親切はなかったのけえ？」

「痴話喧嘩をやってな、あいにく、財布をむこうに預けていたので、眺めのいいここらあたりで、ひとつ仲直りをしようと、思案をしていたところさ――」

「仲直りは四畳半でしんねこ、と相場がきまっているがのう。ここで、馬に乗せて、藤沢の宿で、ゆっくりと仲直りしてはどうかい」

「あいにく、情婦は、浜育ちでな、海を見ると機嫌が直る」

次郎吉は、そう云って、なにが愉しいのか、前方にひらけた渺茫たる景色に目を細めた。

点々と漁家のちらばる横浜の湾を足下にするこの地点は、布帆軽鷗の飛び行くままに、霞をへだてて、黛のような上総房州の遠山をみとめ――いずれ、広重の画心をそそるであろう美しい眺めであった。

雲助が去ってから、なおしばらく、次郎吉は、そこを動かずにいた。

次郎吉は、盲目娘百合枝を武部仙十郎（たけべせんじゅうろう）に預けて、箱根塔ノ沢に、病後の湯治に行っている眠狂四郎をたずねて行こうとしているのであった。

と——。

街道のむこうに放った次郎吉の眼眸（まなざし）が、急に、鋭く光った。そして、すっと立って、道標のうしろへ身をかくした。

やがて、そこを通りかかったのは、平べったい菅笠（すげがさ）をかぶり、路考茶縮緬（ろこうちゃちりめん）を裾短（すそみじ）かに着て、江戸褄（えどづま）の下から加茂川染の襦袢（じゅばん）をのぞかせ、手甲、脚絆（きゃはん）、白足袋、結付草履に、華奢（きゃしゃ）な竹の杖（つえ）を手にした女であった。江戸の大きな商賈（しょうこ）の若女房の湯山道中とみえる。次郎吉は、やりすごしておいて、道標のかげから、ぬっとあらわれると、

「姐（ねえ）さん——」と、穏やかな声をかけた。

何気ない態（てい）で、菅笠がまわされ、

「あたくしでございますか？」

と、ききかえした表情は、明るく、匂（にお）うように艶（つや）っぽかった。

次郎吉は、のっそりと前へ立つと、

「姐さん、こんな潮来（いたこ）をご存じでござんすか。……なまじなまなか、その手がなくば、こうも、こがれはせぬわいな。……へへへ、待ちこがれましたぜ」

と云って、すっと左手をさしのべると、女の右手の指四本を束にして、ぐいと摑（つか）んだ。女

は、みじんの怯じ気もみせずに、じっと見かえして、
「やっぱり、そうでござんしたか――」
「そりゃア、どういう意味だ？」
「お前さん、どうも普通の商人らしくないお仁だとは思いました。思ったからこそ、つい、こっちも、意地になって――」
「とうとう、おれのふところから、財布を抜いた。成程、ねらった場所は、わるくはなかった」
次郎吉は、この女に、六郷川の渡し場で――舟が、川崎宿に着き、河原に上ったとたんを、すられたのである。
「ただ、えらんだ相手がわるかった」
云いすてて、次郎吉は、女の指を摑んだまま、歩き出した。女は、ちらと、次郎吉の横顔を見あげて、
「旦那、あたくしは、御同業をえらんだのでござんしたか？」
「そういうことになるぜ」
ものの半町も進んでから、次郎吉は、つと杣道へ曲って行った。
すぐに、喬木が、厚い樹冠をひろげて、足もとから、陽をうばい、山肌を匍う灌木の茂みが深くなった。とある陽だまりをつくった草地を見つけて、ゆっくりとふみ入った次郎吉は、はじめて、女の指を離して、凄い眼光を据えつけた。

「おれは、いかにも、鼠小僧次郎吉だ！」

まず、ずばりと云ってのけておいて、はっと竦んだ隙をのがさず、素迅いひと蹴りで、仰のけに、ひっくりかえした。

赤い裳裾が、ぱっと刎ね散って、肉の盈ちた軟らかな脛から膝まで、すんなりと浮きあがった。

しかし、女は、そのみだらな仰臥の姿勢をそのままに動かさず、猫のように強く光る眸子を、次郎吉に挙げていた。

「てめえ、おれを鼠小僧とちゃんと知っていて、ねらったろう。どうだ？　どうも普通の商人らしくないお仁だと思いました——などと、ぬけぬけと白ばくれやがったな。ふざけるねえ！　鼠小僧だからこそ、一か八かの勝負を挑みやがったんだろう」

「…………」

「ひっ捕えてみて、あっさり本音を吐いたら、笑って勘弁してやろうと思ったこっちの肚まで、読みとれなかったのは、女の知恵は鼻の先、小ざかしゅうして牛売りそこなうというやつだ。おい、てめえ、鼠小僧のふところを、見ン事すってみせると、誰と賭をした？」

「…………」

「云いたくなけりゃ、強いてはきかねえ。……同業をねらって、やりそこなったら、一寸きざみ五分だめしにされようとも、文句が云えねえしきたりを、承知の上でやったことだ。覚悟はいいだろうな！」

女は、こたえるかわりに、ふっと、目蓋をとじるや、その寝顔を、菅笠で伏せた。次郎吉は、しばし、明るい白昼のみだら図を見下していたが、一瞬、にやりとすると、片足を、女の膝へかけて、その白い鋭角を鈍角に――ぐいと拡げさせた。

それから、幾分かが過ぎて――。

依然として瞑目したなり、仰臥をつづける女の、その部分から、細長い土筆が一本、ひょろりと生えていた。

次郎吉の姿は、すでに、そこから、女に感づかせない巧みな無足の術で消えうせていたのである。

二

次の日の午、鼠小僧の姿は、大磯のむこうの梅沢という間の宿の立場茶屋の床几に見出された。

間の宿というのは、本宿と本宿の間が遠い場合、旅人の便利のために設けられたところである。大磯小田原間、小田原箱根間、見付浜松間など、いずれも四里以上の距離を隔つ。どんな強健な旅人も肩や足を休めねばならないし、草鞋を取換えたり、駕籠を立てたりすることになる。本宿に大名行列が幾組も投泊した場合は、あふれた供の徒士は間の宿に分宿するのであった。

今日も――。

街道には、さまざまの人影でにぎやかである。松並木のむこうに、海がひらけ、名物鮟鱇汁の蔦屋の別邸が、白壁をくっきりと映えさせている。「駕籠の戸を明くれば夜の梅沢や、花は見えねど暗香（鮟鱇）はあり」と詠まれたところ——。平穏な時世の、のどかな春景色である。

「……浪たいらかに、街道の松並木枝を鳴らさず、往来の旅人たがいに道を譲りあい、太平を唄うつづら馬の小室節ゆたかに、宿場人足その町場を争わず、雲助駄賃をゆすらずして、盲人おのずから独行し、女同志の道連れ、ぬけ参りの童まで、盗賊かどわかしの愁にあわず、かかる有難き御代にこそ、東西に走り、南北に遊行する雲水のたのしみ、えもいわれず……」とは、『膝栗毛』の一節であるが、人間に色と欲との情熱がひそみ、虚栄が、一種の正義面をして、反感や羨望を足下にふまえる行為がくりかえされているからには、この駘蕩たる春風も、どうやら生ぐさい欲望のにおいをはこんで来るようだ。

左様——、いま、二梃の駕籠が、ゆっくりと、街道を過ぎて行くのを、何気なく見やったとたん、次郎吉のおっとりと旦那衆にみせかけた面持が、その円満の色を遽に険しい色に変えたのである。

二梃ともに、垂れをあげて、客の目は、海浜の春景色に奪われていたが、前の駕籠の女の横顔、後の駕籠の男の横顔——ともに、次郎吉とは、ふるい馴染のものだったのである。

日本橋本船町の八州屋といえば、江戸随一の地回りの油の問屋であった。関八州から出る水油（菜種）、白油（綿実）、色油（胡麻・荏・榧）の六割方を、この店がとりしきっていると

いわれていた。ほかに大阪方面から来る下り油も、扱っていた。前の駕籠の女は、その八州屋の後妻お浅にまぎれもない。もと吉原名代の総籬扇屋の呼出し花魁であった。次郎吉とは、幼馴染であった。

堺町中村勘三郎座の木戸番の伜に生れた次郎吉は、馬の足の娘に生れたお浅とは、兄妹のようにして育ったのである。次郎吉が、本船町の八州屋へ奉公した時、お浅は、吉原へ売られていた。

皮肉にも、それから十年過ぎて、お浅は、八州屋の主人に身請けされて、この大店の御新造におさまったのである。当然、次郎吉は、この屈辱に堪えられず、年季奉公の明けたのをしおに、八州屋を去った。一転して、町方鳶人足になり、博奕に親しみ、次第にぐれて行ったのであったが……。

——ふん。こいつは、どういう辻占だ？　八州屋の御新造が、吉原をごろついている地回りをつれて、遊山たあ、頷けねえ。

男は、江戸町界隈をうろつきまわって嫖客連に因縁つけて、小遣い銭をせびるのを仕事にしている御家人崩れの戸山直次郎という。

——直ざむらいの野郎、いつどこで、お浅をたらし込みやがったか！　よし！　てめえら、鼠小僧に睨まれたが因果だと思え。

次郎吉は、小銭を床几に投げておいて、身ごなし軽く、街道へとび出した。

三

箱根七湯（ななゆ）――湯本、塔ノ沢、堂ヶ島、宮ノ下、底倉、木賀、蘆（あし）ノ湯のうち、江戸の金持が泊るのは、主として湯本であった。

といっても、当時のことである。早川の渓流に沿うて、杉木立の中に、杉皮葺（すぎかわぶき）に石を置いた屋根と紅殻格子（べにがらごうし）が、ちらほらとしているだけで、樹々の梢（こずえ）を猿（さる）の群が、躁（さわ）がしくゆさぶる音もきこえるし、夜になると、路上を狐（きつね）が悠々（ゆうゆう）と横切ったりする未開の山峡（やまかい）であった。八州屋新造お浅と、直侍こと戸山直次郎が着いたのは、湯本の福屋という宿であった。

「直さん、やっと二人きりになれたねえ。うれしい」

三十半ばを越えた大年増（おおどしま）が、苦界鍛えのしなをつくって、浴衣（ゆかた）に着換えた直次郎に、すり寄った。直次郎も、作り笑顔で、鷹揚（おうよう）に、抱きとめて口を合わせた。

そのまま、ずるずると畳へ崩れて、しばらく、みだらな四肢（しし）のからみあいがあってから、

「直さん、おまえ、松葉屋の三千歳（みちとせ）という花魁の情夫（まぶ）になったというが、ほんとかえ」

「なにを、てんごうを――。三千歳っていやあ、昼三（ちゅうさん）のお職じゃねえか。ただ、今年の松内の道中に、ちょうど見物していたおいらの前で、三千歳が、三つ歯の傾城下駄（けいせいげた）を、内八字に踏みそこねて、ひょろついたのを、急いで、手を貸してやっただけのことだあな。つがもねえ」

「ほんとだと信じるよ。小遣いが欲しかったら、あたしに、云っとくれ――。かんにん！

婆さんの悋気なんて、ぞっとしないねえ。さ、湯に入っといでよ」
　起きあがって、お浅は、直次郎に、手拭いを渡した。直次郎が、手拭いを肩にして出て行くと、お浅は、急に、色気のない大きなのびをして、ごろりと腹這いになって、煙管の雁首を、煙草盆にひっかけて、ずるずると引き寄せた。
　一服すいつけて、ぼんやりと、早川の流れの音をきく——。
　鼠小僧次郎吉が隣室との仕切り襖を、すうっとひらいて、のっそりと足をふみ入れたのは、この時であった。すべて、音というものをたてない習練が積んである。腕を組んで、お浅の揃えた蹠の前に、ぴたりと坐った。
　煙管をすてて、ごろりと横臥しになって、立肱を枕にした——とたん、お浅は、小さな悲鳴をあげて、はね起きるや乱れた裾をかくした。
「な、なんだい、お、おまえは！」
「こっちの人相が変ったか、そっちの人柄が変ったのか——思い出してもらえねえのを、べつに恨みにする仲じゃねえ」
　そう云って、次郎吉は、にやりとした。その笑顔が、はっと、お浅の記憶を甦らせた。
「あ——おまえさんは……」
「次郎吉でさあ。ついでに、あたまに、鼠小僧とついている——」
「えっ！」
　お浅は、さらに大きな驚愕で、息をのんだ。

「お浅さん。お互いに変りやしたね。そっちは、江戸で指折りの大店の御新造になって、情夫をつれての湯山だ。こっちは、久離御帳外の兇状持ちで、湯につかるのにも肩をすくめていなけりゃならねえ。……だが、お浅さん、おめえ情夫にするに、よりによって、なんであんな、下司も下司、鼻もちならねえ悪足をえらびなすった！」

「………」

お浅は、ただもう、江戸で子守っ児も知らぬ者はない盗賊となった幼馴染に、不義の現場をおさえられた恐怖で、全身から血が引き去る白痴状態に陥り咽喉の渇きに、いくども生唾をのみ下すばかりだった。

「あっしは、八州屋の旦那が、本卦還りの、中風病みで、子供に戻ったときいていたのでね、閨盛りのお浅さんが、ひとりですごすのはさぞかしむつかしかろうと——まあ、同情はしていたんだ。しかし、目の前で、あんなぞろっぺいのなまず面といちゃついているのを見せつけられちゃ、小僧の時に、旦那から受けた恩を、人並に思い出さないわけにはいかねえやな」

「次郎さん！」

お浅が、突然、狂ったように、はげしくすがりついて来た。

「お、おねがい！　後生です！　見のがしておくれ！　そ、そのかわり……な、なんでも——あたしにできることなら、なんでも、す、するから——」

「なんでも？」

次郎吉の眸子が、ぎらっと妖（あや）しく耀（かがや）いた。

「あい、なんでも――」

お浅は、次郎吉の片手を把（と）ると、自身のはだけた前へはこぼうとした。

――一度あることは二度あるというが……。

次郎吉の脳裡（のうり）を、昨日の神奈川台の林の中の光景が、掠（かす）めた。

「ふざけるねえ！」

ねっとりと熱い内腿（うちもも）へふれた片手を、ぱっとひっぱずしざま、小気味よい平手打ちを、お浅の頬桁（ほおげた）へくれていた。

立ちあがった次郎吉は、声音を穏やかなものにして、

「お浅さん、わるいことは云わねえ。あの直ざむらいとは手を切りな。兄妹のようにして育った誼（よし）みで、野暮な意見をするんだ。あいつは、人間の屑（くず）だ。おかげで、おめえさんも、屑になりかけている。尤（もっと）も、こっちも屑だが、その屑に意見をされるような血迷うた真似（まね）は止（よ）したがいい。……と、意見してみたところでもう手遅れだろうが、せっかくの愉しみを、幼馴染の次郎吉にふみ荒されたのを、とんだ災難だったと腹を立てずに、ひとつ、これをきっかけに、了簡（りょうけん）を入れかえようと、大店の御新造らしい貫禄（かんろく）をみせてもらえないものか、ということさ。……おまえさんが、了簡を入れかえる肚組（はらぐ）みができれば、直ざむらいを引きさがらせる役目は、あっしが引受けてもいい」

「次郎さん！」

お浅は、両手を畳についた。

「あたしが、いけなかった。目がさめました。ゆるしておくれ！」

次郎吉は、じっと、そのしおらしい様子を見下していたが、

「人間、意見をされるうちが茄子(なすび)の花だ。仇(あだ)にはならねえ。見はなされたら万事おしまいだ。……じゃ、あばよ」

と、云いのこした。

四

夜に入って――。渓流へ、くろぐろとのしかかった山に、霧が流れ、嶺(みね)の梢におぼろ月が浮かんだ頃(ころ)あい、鼠小僧は、なんのこんたんがあってか、宿の裏手の小径(こみち)に、ひっそりと佇(たたず)んでいた。陽春とはいえ、山懐(やまふところ)には、冷気が降りる。

――ちょっ！　いつまで、待たせやがる。

という思い入れで、二階をふり仰いだ時、それにこたえるように、物干台に、黒影があらわれ、手すりをまたいで、廂(ひさし)へ立ち、さしのべられた老杉の太枝へつかまって、幹へとびつき、ずるずると、すべって、地上へ立った。

それから、いっさんに駆け出そうとした――その鼻頭へ、次郎吉は、ぬっと立ちふさがったのである。

「吉原の地回りをやめて、押込み強盗に転業しても、立派に勤まりそうだぜ、直ざむらいの

旦那――」
挨拶が、それだった。
悸っと立ち竦みつつも、直次郎が、本能的に、ふところの匕首を摑んだ片腕を、次郎吉は、しっかり抑えていたのである。
「じたばたしなさんな。相手を誰だと思う。鼠小僧だぜ。……直ざむらいの旦那、おぼえておきな。これをドジをふむというのだ。八州屋のお内儀にそそのかされたか、それともてめえの尻軽か、こっそり忍び出て、小田原の代官所へ、ひとっ走りして、鼠小僧が湯本の福屋に泊って居りますと、訴え出るという寸法は、おれがお浅に意見している時から見通していたことだ。おれがあらわれたら、色仕掛けで口をふさごうとしたあばずれが、どうせ了簡を入れかえる筈はねえと思ったから、こうして湯ざめを覚悟で、てめえの出て来るのを待っていてやったんだ。……おい、てめえは、この鼠小僧が、てめえらの浅知恵で、こんな山の中で年貢をおさめるとでも思ったのか！　嗤わせるぜ！」
出端を挫かれた直次郎は、小悪党のかなしさで、次郎吉の姿が巌のようにどっしりと大きく見えると、もう反撥の気勢を生む余裕もなく、ひたすら、きもをちぢめて、
「す、すまねえ――」
と、頭を下げた。
「なに、べつに、あやまってもらいたくて、ふんづかまえたわけじゃねえ。おめえさんも、まだ若い身空で、いい加減で、男いっぴきの仕事を見つけたらどうだ、と意見してやる柄じ

ゃねえが、成程、男に飢えた大年増に甘えて、小遣いをせびるのは、なまけ者には一番手頃な世すぎかも知れねえが、図に乗って、箱根くんだりまで足をのばすと、おれのようなお節介があらわれて、重ねて四つにされるおそれがある——」

「へい。ご尤もで——」

「と、口さきじゃ、そう云うが、肚の中じゃ、せっかくの湯治が台なしにされて、さぞかし、口惜しいだろう」

「親分、わるかった。かんべんしてくんねえ」

「そうビクビクするな。おれは、もともと、手荒なまねは好きな方じゃねえ。金は盗むが、人殺しはやったことがねえ、おめえさんの生命をもらったところで、八州屋から鐚一文貰えるわけじゃあるめえし、——おれの相談というのは、べつのことだ」

「…………?」

怯えた顔へ、月明りの笑いを送って、

「おめえさん、こういう話をきいたことはねえか。元禄のむかし、京の都万太夫座に坂田藤十郎という濡れ事師がいた。役者道の開山、やつし、傾城買いの元祖ともてはやされた名人だ。ところが、ある年、近松門左衛門から渡されたのが——それ、おさん茂兵衛の狂言だ。ところが、どうしても、茂兵衛とおさんの濡れ場の工夫がつかねえ。思案にあまった挙句、ふと思いついたのが、幼馴染の芝居茶屋のお内儀を口説いてみる、という一手だ。こいつが、まんまと図にあたった。芝居茶屋のお内儀が、藤十郎の口説を、真にうけて、濡れてみせた

風情と所作を、そっくり盗んで舞台にのせたら、やんやの喝采をあびたという話よ。……おい、直ざむらい。おめえさんも、ひとっぱしの濡れ事師だろう。ひとつ、この鼠小僧に、腕によりをかけて、こってりと濡れた仕出しを見せちゃくれねえか」

「…………」

「つまりだ。坂田藤十郎は、人の女房を口説いたんだが、おめえさんには、反対に、振ってもらいてえ。いいな、愛想づかしの一場を演ってもらいてえんだ。……お浅にむかって、こう云うんだ。お前は、おれが湯に入っているあいだに、鼠小僧のつまみ食いになりゃがったろう、年増女というやつにはつくづく愛想がつきたから、今夜限りで、きっぱり切れる、と な。いいか、そう云ったら、すぐさま、てめえの布団を、隣りの部屋へ運んじまえ。おれは、天井裏から、とっくりと見物していてやる」

「…………」

「もし下手に、狂言の筋書を変えやがったら、その時は、おれも、宗旨をかえて、てめえの赤い血を、道中差へたっぷり吸わせるぜ！」

五

やがて――。

直侍が、のそりと部屋へ戻ると、夜具の中にいたお浅が、目を光らせて、

「どうだった？」

「…………」

枕もとへあぐらをかいた直侍は、神経を天井へひきつけられていて、手ひとつ動かすのも、目に見えぬ枷(かせ)をはめられた息づまる思いであった。

「飛脚問屋の若い者は、鼠小僧ときいたら、血相かえて、小田原へ飛んで行ったろうね？」

「…………」

「どうしたのさ？　鼠小僧に感づかれやしなかったか、ということが心配なのかい？」

「…………」

「安心おし。宿の番頭を呼んで、そっときいてみたら、あいつ、湯から上ったら、晩酌(ばんしゃく)を三本空けて、すぐ寝ちまったそうだよ。……さ、早く、お寝な」

お浅は、じぶんの横を空けて、促した。

いざとなると、こうも女というやつは、度胸がすわるものかと舌をまきつつ、直侍は、

——ええい、くそ！

となかば自棄(やけ)になった。

「おかみさん、おめえ……さっき、鼠小僧と——あったろう？」

天井裏から鋭い視線が注がれている意識が、こう云ったとたん、一種の快感を加えたのは、奇妙であった。

「な、なんだって？」

「おめえ、鼠小僧に、じぶんを抱かせておいたから、もう大丈夫だという安心があるんだろ

う」

「直さん！」

お浅は、夜具をはねのけて、むっくりと起きあがると、膝小僧もあらわに、直侍へむしゃぶりついた。

「莫迦もやすみやすみにお云いよ！　あたしは、おまえさんと、無理な首尾して、こうして江戸から抜け出して来たんじゃないか！　だれが、あんなおそろしい盗っ人なんかに、身をまかしたりするもんか！」

直侍は、顔をそむけて、邪険に、お浅を押しのけた。

「おれは、こういうことには、ぴいんとカンが働くんだ。かくしたって、もうおそいやな」

「莫迦！　莫迦！　……ああ、なんてこったろう！　ほんとに、なさけなくなっちまうよ。おねがいだから――直さん、そんな途方もない邪推をしないで――。さ、寝ましょう！　後生だから、あたしを抱いて、機嫌をなおしておくれ」

遮二無二、床の中にひきずりこもうとするのを、

「止せ！」

と、烈しくふりはらったはずみに、肱がしたたか、お浅の胸を突いた。

「ひいっ！」

お浅は、悲鳴とともに、脚を空ざまになげ出して、仰のけに倒れた。

流石に、直侍は、なんとも処置にあまった当惑面で、

——勝手にしやがれ。鼠小僧、こうやりゃいいんだろう。

と、ふてた。

お浅は、はね起きるや、いきなり、直侍の横面を、ぴしゃりとひっぱたいた。

「だに！　むじな！　かったい！　おまえなんか、小格子の端女郎の噛りっかけの腐れ羊羹でももらっているのが分相応だい！　面も見たくないや！　さっさと隣りの部屋へ、行っちまやがれ！」

この凄じい夜叉の逆上ぶりを、天井のふし穴から、見おろして、鼠小僧が、にやりとしているのを、直侍は、うそ寒く感じていた。

ところが、その鼠小僧は、すでに、福屋から半町もはなれて、塔ノ沢の眠狂四郎をたずねるべく、さっさと杉並木の中を、急いでいたのである。

——ふふふ、いまごろは、お浅と直ざむらいめ、どんなざまでいがみあっていやがることか？

ひとり、にやりとした時であった。

「おい、待て！」

気合のこもった声が、背後からあびせられた。

屹っとなって向きなおると、樹枝のあわいから降る月光に総身を縞染めにして浪人者が一人、のっそりと立っていた。

「あっしに、なんぞ御用で？」

「用があったから呼んだ」
次郎吉は、浪人者から二間あまり後方の立木の陰に、ちらと動く影を、素迅くみとめて、
――はは あ、
と合点した。
神奈川台の草地で、土筆を植えてやった女掏摸にまぎれもない。
「おめえさんは、黒元結連の用心棒だね？」
「左様――」
江戸から追放された掏摸組黒元結連の頭株たちが、東海道を股にかけて荒していることを、次郎吉はきいていた。次郎吉の顔を知っているその一人と、女掏摸は、そのふところをすれるかすれないか、賭をしたに相違ない。
「気の毒だが、鼠小僧、今夜を、この世の見おさめにしろ！」
浪人者は、刀に反りをうたせて、一歩出た。
「そうは、問屋がおろさねえ！」
次郎吉が、身がまえた瞬間――。
「その対手は、おれにまかせた方がいいようだな、次郎吉」
冴えた声が、すぐ左の、渓流上の切岸から送られて来た。
眠狂四郎であった。退屈しのぎに、宿を出て、その崖ぶちの岩に腰かけて、月をながめていたのである。

——おれという人間には、湯治場まで修羅が追いかけて来る。
かすかな自嘲とともに、狂四郎は、やおら腰をあげていた。

恋やくざ

一

「政吉――」

一日中陽のささぬ、じめじめした薄暗い牢屋の中を、外鞘から、六尺棒をもった役人が、覗いて、呼びかけた。

ここは、小田原町代官所の陣屋であった。

「出ませい」

「へい――」

けもののように、もぞもぞとうごめく十数名の囚人の中から、のっそりと、立って来たのは、まだ三十前の、目つきの鋭い、苦味走った男であった。背も高く、浅黄の仕着せが膝までしかない。

外鞘を出ると、左右に並んだ倉の白壁に、夕陽が赤く映えて、政吉は、眩しげに、目を細めた。それから、前を行く初老の役人へ、

「旦那――。あっしは、打首でござんすか？　それとも、遠島で？」

と、訊ねた。覚悟は、すでにきまっている落着いた声音であった。

役人は、ふりかえって、

「その筈だったのだが、安心せい」

「へえ？」

「お上の御慈悲が頂ける模様だ」

「どうしてでござんすか？」

「知らぬな」

そっけないこたえだったが、その表情は、事情を知っていることをしめしていた。政吉は、代官所でこの老いた手付が、囚人たちを人間扱いにする唯一の役人であるのを知っていた。二十両五人扶持の乏しいくらしを三十年も勤めた挙句、さとった心境は、囚人となる者は、生れつきの悪党は別として、それぞれの不幸を背負っている運のわるい奴だ、ということであったのだろう。

べつに親切にはしないが、犯した罪の軽重によって扱いを加減することをせず、淡々として送り迎える態度は、囚人たちから好意を持たれていた。

だだっ広い吟味場の土間に据えられた政吉は、しばらく、一人にすてて置かれた。

政吉は、右手の壁に貼りつけられたやくざ禁制の法令を、読むともなく目を通した。

方今、関東在々において、同類を集め、通りものを唱え、身持不埒な者どもを子分などと号し抱え置き、あるいは長脇差を帯し、目立候衣服を着し、不届の所業に及び候者

これある由相聞え候、在方において右体の風俗にて徘徊いたし候ものこれあるにおいては、見あたり次第、その品とりあげ、支配ならびに領主役所に訴え出ずべき旨、役人共へ申さるべく候

右の趣、御料地は御代官、私領は万石以上の分は、右家来呼寄せ申し渡し、万石以下関東筋知行これある面々にも通達あるべく……

そのほか、近来在方で浪人者を逗留させて、百姓町人たちが武芸を学んでいるが、こんな不届きな稽古は、農業商業の妨害になるから取締らねばならない、といった法令もかかげられていた。

——ふん！　百姓を食えるようにしてくれりゃ、なんで、てめえでよろこんでやくざになど、なるものか！

政吉は、肚裡で吐きすてた。

政吉も、やくざであった。まともに働いていては、稗しか口に出来ぬ三石高の水呑百姓の次男に生れて、なまじの才気があったおかげで、ぐれて行ったのである。寛文度には、百姓一家の産は十石であった。それが、今日三石高に落ちたのであれば、次男、三男は、全くの邪魔者であった。しかも攻伐戦争の事は書に読み講談にきくのみとなった泰平の治下、尚武義烈の風が、武家階級から去って、仁侠の気が、庶民の中から生れている時世であった。義に勇んで、隻語の然諾を重んじ、一旦の知遇に感じて水火を辞せず、闊達物に拘わらず、倜儻卓落情に泥まず、一片の約をまもって生命をすてる——こうした心意気は、二百年の因習

にしばられた武家階級の惰弱を尻目に、非常な勢いで、市井の匹夫の間に、魅力となっていたのである。食いつめた農家商戸の次男、三男が、これに趨るのは、あまりにも当然であったろう。

所詮は、頭を武士の前に下げさせられた庶民が、刷毛先を左巻きに散らし、長脇差をぶち込む風体に、階級上の鬱をはらし、博奕の一瞬の運に、十年汗しても蓄えられぬ金額を夢見る――はかない猿真似と小ずるい盗心を抱き合わせたすがたにほかならなかったが、それを偽装する仁侠の意気が、気質的にぴったりと合った庶民階級の若者たちにとっては、たしかに魅力のある世界ではあったろう。

しかし、すすんでその中へとび込んでみれば、どうせ無頼が構成した仁義である。つくりあげた掟は残忍無慙なものであり、その掟に反逆することは、断じてゆるされず、いわば、ずるずるとはまり込む底なしの泥沼に似て、やくざの果ては、惨めをきわめていた。

政吉も、その一人であった。

陰鬱なまなざしを膝に落して、重い溜息をひとつもらした時――。まだ若い元締が、下役をつれて入って来た。

「相模無宿政吉、罪科を申し渡す」

政吉は、三和土へ両手をついた。

「その方、無宿の身分にて、当小田原市中において、不埒の所業を重ねた上、代官所手代辰造を殺害に及んだる始末重々不届至極に付き、獄門にいたすべき筈のところ、特におぼしめ

しをもって、百叩きの上、重追放に処す」
政吉は、わが耳をうたがった。
獄門と所払いとでは、あまりに刑罰の差がありすぎる。重追放というのは、御構い場所といって、武蔵、相模、上野、下野、安房、上総、下総、常陸、山城、摂津、和泉、大和、肥前、東海道筋、木曾路筋、甲斐、駿河――これだけのところへ出入出来なくなるのである。というのは名目だけで、実際には、三年ばかり草鞋をはけば、舞い戻って来ても、見て見ぬふりをされるしきたりとなっていたのである。
「有難う存じます」
あまりの寛大な処置を頷けないままに政吉は、平伏した。やがて、老手付にともなわれて、裏門を出ると、そこの広場の地べたに、政吉は、坐った。
老手付は、青竹をもって、形式的に政吉の肩へ、百振りをかぞえるや、その膝の前へどさりと風呂敷包みを抛った。半年前、牢入りの際脱いだ衣類であった。
「きかえろ」
「へい」
政吉が、手ばやく、身にまとうと、老手付は、左手に携げていた長脇差をさし出した。
「それ――」
「へ？」
当然没収された筈の長脇差をかえされて、政吉は、とまどった。が、次の刹那、はっと脳

裡にひらめく直感があった。

「旦那――。辰造は、生きて居りやすね？」

老手付は、それにこたえず、

「早々に、箱根を越えることだぞ、政吉」と、忠告した。

「へい。おなさけの程、お礼の申上げようもござんせん」

政吉は、目がしらに熱いものをおぼえ乍ら、ひくく頭を下げた。

政吉が、斬り殺したとばかり思っていた万歳の辰造は、生きていたのだ。辰造が、代官所の元締にそっとたのんで、政吉を釈放してもらったのだ。つまり、辰造は、復讐のこんたんをもって政吉を娑婆へ迎えようとしているのだ。

老手付が、政吉に長脇差をかえしてくれたのは、そういう危険があるからだったのである。

政吉が歩き出すと、老手付は、もう一度、

「よいか、政吉。一刻も早く箱根を越えるのだぞ」

と、云った。

二

政吉は、腕を組み、俯向いて、裏路地をえらんで、千度小路を抜けて、宮前町へ出ていた。

すでに、夕靄が降りて、店の檐の掛行灯の灯が、光を薄闇に滲ませている頃あいだった。

宵のうちに箱根へのぼることを考え乍らも、それを政吉にためらわせているのは、ひとり

の女の俤であった。
——会って行こうか？　会わずに行こうか？
いずれへとも心がきまらぬままに、政吉は、ふと、むこうに白馬（居酒屋）を見て、ふらふらと紺暖簾をはねて入った。
「姐さん、熱燗をくれ」
と、たのんで、奥の框に腰を下ろして、何気なくうしろをふりかえったとたん、ぎくっとなった。
衝立に凭りかかって、盃を口にはこんでいる黒の着流しの武士の彫のふかい蒼白な横顔は、政吉にとって忘れることのできぬ印象があった。むこうも、政吉の凝視を感じて、視線をめぐらした。
「旦那——旦那は、いつぞやの……」
思わず、政吉は、そう云いかけ——云いかけ乍ら、もじもじして、目を伏せた。対手が、無言でいるので、さらにばつがわるそうに、首をひくくして、
「旦那が、おぼえていて下さらねえのはご尤もでござんすが、あっしの方は、おぼえて居ります。旦那に、斬りかかったことのある三下でござんす。政吉と申しやす」
眠狂四郎は、政吉の顔に記憶はなかったが、——あの時のやくざかと思い出した。
二年前、この小田原で、博徒の用心棒をしている浪人者を仇討とうとした臆病な若侍を援けてやったことがある。妻を囮にして、敵の寝首を掻こうとした卑劣な計画が見破られて、

二人に心中されてしまった備前新田池田豊前守(ぶぜんのかみ)政善の家臣の話である。狂四郎は、敵の首と妻の遺髪を持ったその若侍を逃がしてやる際、追いかけて来たやくざ者の群のうち、二人ばかり斬りすてていた。

政吉は、あの群の中にいたのである。

狂四郎の剣のあまりの迅業(はやわざ)に、政吉は、茫然(ぼうぜん)となり、虫けら同然に地べたにころがった仲間の哀れな死骸(むくろ)を眺(なが)めて、全く無意味なことで生命(いのち)をすてなければならないやくざ稼業(かぎょう)に、ぞっとしたものだった。

結局、足はあらえなかったが、あの時をしおに、心のもちかたがちがったのである。いわば、狂四郎は、政吉に人生観を変えさせた存在だったのである。

「上って来い。一人で、退屈していたところだ」

狂四郎は、無表情でさそった。政吉が、茶袱台(ちゃぶだい)のむこうにかしこまると、

「お前、牢から出て来たばかりか？」

「へ、へい。よくおわかりでござんすね？」

「臭気がある」

それきり——長いあいだ、小座敷には、沈黙がつづいた。

お互いに、交わすべき話題は、何ひとつなかったのである。狂四郎は、べつに、どんな理由で牢に入っていたのかきく興味もなかったし、政吉の方は、盃をかさねるうちに、女の俤にたまらない恋しさをおぼえていたのである。

女は、政吉の元の親分の女房であった。親分が、ぽっくり卒中で逝ったのは、一昨年の暮だった。女房のおさわは、やくざ取締のおふれも出ていることだし、これを機会に、かたぎの商売をしたい、と云い出して、一の子分の政吉も恰度そんな気持になっていた折とて、反対する子分たちを納得させて、一家を解散したのであった。

かたぎの商売といっても、結局は、やくざに売れている顔を利用した方がいい、とおさわと政吉の意見が一致して、博徒の往来のはげしい甲州街道へ出る谷津口で、質屋を開いたのであった。つまり、普通の町人や百姓を相手にする十二カ月期限の脇質屋ではなく、請人のない一カ月限りの質をとる所謂鉄火質屋を営業したのである。この質屋は、儲けが大きかった。利息が高かったし、また下質といって、土産と称する博奕資金を貸出すこともしたのである。開店して、半年もたたないうちに、倉をもうひとつ建てようかという景気であった。その間に、自然のなりゆきで、おさわと政吉は、お内儀と番頭の垣をこっそり越えていた。おさわの方が、五つばかり年上であったが、床のうちで、

「お前さんによって、あたしは、はじめて、女になったよ」

と、はずかしそうに甘えられると、政吉は、年齢の差など忘れて、一生このままでいいと思いきめたものだった。だが、この幸せは、次の年の暮を越せなかった。

死んだ親分の義弟の万歳の辰造が、下総国香取郡から、子分を二十人ばかりひきつれて、小田原へやって来たのである。

当時、無宿の長脇差があふれていたのは、中仙道筋——鴻巣辺から秩父へかけての一帯と、

上野、下野、常陸、下総の銚子、佐原へかけての地方であったが、八州取締出役が急に厳重な回村をはじめてから、彼らは、徐々に、東海道筋へ移動して来たのである。万歳の辰造は、取締出役から手ひどい目に遭ったのにこりたので、早速代官所手代の株を買って、紫総の十手を手に入れたのであった。

つぎに、目をつけたのが、おさわの質屋であった。陰険で狡猾な手段が、絶え間なく迫って来たが、その都度、政吉の必死の抵抗で、きりぬけて来た。

突然、代官所から元締が乗り込んで来て、倉の中を調べて、預り品の四割が渡盗賊の入質したものであり、それを知っていて預ったに相違ない、という罪状をなすりつけて、営業停止を命じたのは、昨年の秋であった。

ついに――政吉のかんにん袋の緒が切れた。暴風雨の一夜、荒れ狂う天変に心をふるいたてて、単身、辰造の家を襲って、妾を抱いて寝ているやつを滅多斬りにしたのであった。

いったんは、箱根の山中にかくれたものの、おさわへの未練を絶ち難く、こっそりとたちもどったところを、はり込んでいた目明しに発見されて、呼子の鳴りひびく町中を逃げまどった挙句、とりおさえられたのであった。

――そうだ！　このまま、飛んだのでは、一生未練がつきまとう。おさわに会っていこう！

政吉は、決心した。

三

「旦那——。あっしは、これでご免を蒙(こうむ)ります」

政吉は、盃を伏せて、頭を下げた。

狂四郎は、何気なく政吉を見て、ふとなぜか、その顔に不吉な翳(かげ)がさしているような予感がした。

——べつに、おれの知ったことではないが……。

ひきとめて事情をきいてみたい気持をふりすてて、政吉が土間へ降りて、もう一度、

「じゃ、お別れいたしやす。お達者でおすごし下さいまし」

と、丁寧に挨拶(あいさつ)するのへ、無言で頷いただけであった。

ごろりと仰臥(ぎょうが)して、目蓋(まぶた)をとじる。

——江戸へもどるか？　それとも、また京へ行くか？

狂四郎の心もまた、さっきの政吉と同様、いずれともきめかねているのであった。

江戸へもどる、ということは、帰途、鎌倉の東慶寺へ寄って、美保代をともなうことを意味していた。狂四郎は、まだ、美保代に、左馬右近の凌辱(りょうじょく)をうけたと思い込んでいるのはあやまりだ、と報(しら)せていなかった。

「ふん……。男女の仲は、浮草に似て、流れのままに行くが宿運、か」

武部仙十郎の言葉を呟(つぶや)いてから、狂四郎は、美保代のすがたを追いやって、睡魔にさそい

込まれていった。
どれくらい、ねむったろう——。
ふと、かたわらに、人の気配がしたので、狂四郎は、細目をあけた。先刻のやくざ者が、またそこに悄然と坐っているのである。その面貌は、異常といい得るまでに歪んで、こわばっていた。
狂四郎は、起き上ると、手をたたいて、小女を呼び、酒を命じた。
外を通る跫音は稀になっていた。四つをまわったらしい。
酒が来るまで、政吉は、微動もせずに、茶袱台の一点を瞶めていた。
「おい——」
狂四郎が、銚子をつき出すとやっとわれにかえったように、政吉は、
「申しわけござんせん」
と、あやまりつつ、盃を手にした。
「何が起ったのか知らぬが、酒で忘れろ」
「旦那！」
じっと見かえした政吉の眸子が、一瞬狂的に光った。
「あっしは、これから、果しあいをやろうと思いやすが……見とどけておくんなさいますか？」
「対手はつよいのか？」

「なに、あっしと、どっこいそっこいの野郎でござんす」
「見とどけて欲しければ、見とどけてやってもよい」
「おねげえ申します」
政吉は、興奮でからからに乾いた咽喉へ、ぱっと酒をほうり込んだ。
小半刻すぎて、寝しずまった町筋をあるき出してから、政吉は、月光に濡れてまっ白い往還を長く匍うおのれの影法師へ、暗い眼眸を投げ乍ら、ぽつりぽつりと事情を話した。
おさわが、辰造に質屋を奪われて、谷津村の百姓家の離れに逼塞していることは、牢内できいていた。政吉は、辰造一家の者がはいり込んでいるのを警戒して、そっと、裏手の林をくぐって、忍んで行ったのである。障子に映った灯がこちらの胸の中をも活きかえすように明るくしてくれたものだったが……。
濡縁へ半間まで近づいた時、おもての方から、誰かが入って来る音がして、息をひそめて、耳をすませていると、おさわと交わす声は、かつて政吉の弟分であった重次のものだった。
いまは、かたぎになって蹴上坂の土産提灯屋の番頭をしている筈であった。
「おい、おさわ、政兄哥が、今日牢を出たぜ、代官所の番太が教えてくれたんだ」
「えっ！　じ、じゃ、こ、ここへ来るね？」
「うむ、きっと来るにちげえねえ」
「重さん！　いやだよ！　わたしは、もう、おまえと離れられないんだよ！」
「しかし、政兄哥が出て来たからには……」

「いいえ！　いや！　いや！　おまえと別れるなら、死んだ方がいい……。政さんには、ほんとにわるいけど、どうせ、もう、もどって来ないと、思っていたんだから——おまえと、こうなったのも、しかたがないじゃないか。あたしは、政さんが来たら、みんな、話して、ゆるしてもらうよ」

「政兄哥は、ゆるしちゃくれまい」

「ゆるしてくれなくったって……ゆるしてくれないでも、もう、あたしは、おまえと——」

そこで、会話がとぎれた。

政吉は、早鐘のように乱打する鼓動を抑えて、障子の隙間から、内を覗いた。

はだけた赤い下着と白い脹脛と、臀部へまわされた男の腕が、ちらっと見えた瞬間、われを忘れて、かっとなった政吉は、障子をひきあけて、敷居に仁王立ちになったのであった。

……訥々とした口調で政吉が語る光景を、想像しつつ、狂四郎は、心の一隅では、美保代が左馬右近に犯されたことを、静香から、いつわって肯定された時、奈落につき落される悪寒をおぼえた——あの経験を思いうかべていた。

政吉は、重次と、亥の下刻に、松原神社の境内で出会う約束をしたのであった。

ふと——。

狂四郎は、何者かが、後を尾けて来ているのを直感した。こっちを尾けているのか？　それとも、政吉を尾けているのか？

——どっちでも、まあよかろう。

狂四郎は、政吉に告げようとせず、平然として、ふところ手で、歩いて行った。

四

松原明神の大鳥居をくぐるや、政吉は、じっと、月明りをすかして見て、
「来てやがるかな」と、呟いた。
社前の御手洗池のわきに、神木の銀杏の大樹がそびえていた。その幹を背にして、ひとつの影が、すでに立っていた。
「ようし！」政吉は、闘志をたぎらせて、手拭いで頭をしばり尻端折りをした。
木下闇から、月光の中へ出て来た男も、喧嘩支度をしていた。
「政兄哥！　助っ人は卑怯だぜ！」
憎悪をこめた声がとんだ。
「安心しな。このお方は、おれたちの果しあいを見とどけて下さるんだ。おれが助っ人をたのむような男か！」
ふたりのやくざは、二間あまりへだてて、睨みあった。
狂四郎は、どちらも、もう、生命のやりとりの興奮で、頭髪から足の爪先まで、氷柱のようにこちこちに凍らせているのを見てとるや、ふっと皮肉な企てを思いついた。
「おい、政吉、斬りあいは止して、べつの方法で、片をつけてみたらどうだ？」
「どんな方法がありやす？」

政吉は、重次を睨みつけ乍ら、訊きかえした。
「ちょっと、待って居れ」
つかつかと社殿に上って行った狂四郎は、すぐに、奉納の一弓と二本の矢を携げて、ひきかえして来た。
「これでやれ――」
「旦那、ひとつしかありませんぜ」
「どっちかが、さきに射るのだ」
「だって、そりゃァ――」
「あとにまわったら損だ、というのか？」
「あっしは、かまわねえが」
「じゃ、お前、あとになれ」
狂四郎の冷たい言葉に、政吉は、一瞬、険しい気色をしめしたが、すぐ抑えて、
「ようござんす。おい、重次、てめえ、さきに射ろ」
「いや、それは片手落ちだ、籤びきにしよう」
重次が、かぶりをふると、狂四郎は、わざときびしく、
「果しあいの定法は、挑まれた方、あるいは目下の方が先手にまわるのだ」
と、云った。
「旦那の仰言る通りだ。重次、やれ！」

「………」

重次は、ためらっていたが、狂四郎に弓と矢をおしつけられると、しぶしぶ受けとった。

狂四郎は、それから、両者の立つ位置をきめた。

——これなら、よかろう。

射られる者、射る者の目には、ひどく近く感じられるが、実は、弓術を習わぬ者の手では、まぐれでないかぎり当らぬ距離であった。

狂四郎は、ふたりのやくざを、ともに生かしてやろう、と考えたのである。

政吉は、両股を大きく開いて、腕を組んだ。

「重次！　やりそこなったがさいご、てめえの生命はねえものと覚悟しろ！」

そう叫ぶ政吉を、狂四郎は、じっと見まもりつつ、

——勇猛硬直の武士道の吟味は武門から消えはてて、剽悍殺伐の気風が、無知な無頼の徒輩に生れている。悲しむべき滑稽だ。

と、胸の裡で、呟きすてた。

重次は、矢をつがえて、弓をきりきりとひきしぼった。

ぶん！

弦が鳴った刹那の政吉の態度は、まさに、戦国武士の豪気に比するにあたいした。かっと目を剝いたまま、ここだといわぬばかりに、顎をあげて、ぐっと喉頸をのばしてみせたのである。矢は、頭上一尺あまりの宙を翔けすぎた。

「まぬけめ！」
罵(ののし)って、政吉は、はじめて、おそろしい緊張から解放された大きな息をついた。こんどは、重次が、両股をふまえて、腕を組む番であった。
「兄哥！　どうせのことなら、苦しまねえように、うまくしとめてくれ！」
「催促されねえでも、合点だい！　てめえのぶるぶる腕とはちがうぞ！」
矢が弦から放たれた瞬間の、重次の態度もまた、政吉におとらぬ度胸をしめした。矢は、肩すれすれに掠(かす)め去った。
「ざまみろ！」
重次が叫んだ。この時、狂四郎が、
「政吉！　伏せろ！」と、叱咤(しった)した。
同時に、銃声がほとばしり、政吉のからだが、がくんと、前へのめった。
狂四郎は、銀杏の大樹へむかって、疾風のように奔(はし)るや、その陰から逃げ出そうとした男へ、目にもとまらぬ一閃(いっせん)をあびせた。男は、短筒を攫(つか)んだ手を大きくまわして、棒倒しに倒れた。
狂四郎は、重次にかかえ起された政吉のそばへ戻ると、その苦悶(くもん)の相をのぞき込んで、たすからぬとさとった。
「政吉！　辰造とやらは、この眠狂四郎が討ち果してやる」
耳もとで云いきかせてやると、こっくりと頷いた。それから唇(くちびる)をわななかせて、

「重次……」と、呼んだ。

「兄哥！」

「……お、おさわを……く、くれて、やらあ……」

それが、さいごの言葉だった。

次の日の早朝――。

酒匂川を徒渉りしようとしていた東海道の旅人たちは、突如、浜辺で起った凄惨な修羅場に仰天して、あわてて、堤へかけあがった。

喧嘩支度をしたやくざ者三十余をかぞえる群の中へ無造作な足どりで入って行ったのは、黒の着流しの浪人者ただ一人であった。

一人が、竹槍を背後から突き出すや、振りかえりもせず、薙ぎはらった血刀を、だらりと携げて、ふだんの歩調で、数人の護衛つきの親分へむかって、迫って行った。一間を進むあいだ一人平均で、子分たちは、斬られていた。

親分は、あとへあとへ、さがりつづけたので、死骸の数はみるみる増した。

ついに――。

親分は、何か喚いて、一目散に遁走を企てた。

しかし、ものの三間と走らずして、その首は、宙へ刎ねとび、くるくると舞って、うちよせる波の中へ落ち、そのまま、ずるずると海中へひきさらわれて行ったのであった。

犬公方図(いぬくぼうず)

一

江戸の深夜――。

風俗往来に、そのありさまを写して云(い)う。

「宵(よい)の口、雑沓(ざっとう)せる通り――一丁目、二丁目、三丁目をはじめ、その他毎夜混雑きわまれる町々、春秋により別もあれど、夜に入り、五つ半時より四つ時という時刻には、両側の露店、時刻の後るるを恥とし、われおとらじと、店を片づけ、わが家にいそぐ。同時に、講釈場寄席(よせ)もはね、通行の人も、次第々々に途絶えける、深更におよぶにしたがい、両側の商店の屋根の高く、間口のひろきをおぼえ、道路の幅もかくばかり広きかと知る。……夜明しという酒飯を商う露店、町内の大店(おおだな)の軒下を借用して、年中毎夜、店を張り、東雲(しののめ)つぐる前まで商いをなす。これ行客(こうかく)の便りをはかりてなり。夜の寂寞におよぶに、この店にて、皿丼(さらどんぶり)を扱う音の高くひびく。たまたまに、駕籠(かご)やの帰り行く影の遠く見ゆるなど、通り町深更の眺(なが)めなり」と――。

その森閑とした大通りに、奇妙な光景があった。

巨大な褐色の犬が、両耳をぴんと立て、尻尾を高く巻きあげて、大の男を三人もお供にして、威張って散歩しているのである。頸輪に、鉄の鎖がついているのだが、持っている人間の方が、ひきずられて、犬に勝手な方角をまかせてしまっているといったかたちであった。

いずれも、歴とした武士たちである。いわでものことながら、犬のお供はやりきれぬ不機嫌から、むっつりと口をつぐんでいるのである。

犬は、夜明し店の前を通り過ぎて行ったが、煮物の匂いにそ知らぬ顔をしたのは、よほど、栄耀栄華な主人の余光を受けている証拠であったろう。

「旦那、ごらんなさいまし、途方もねえ茶番でござんすぜ」

店の親爺が、燗のついた銚子をさし出し乍ら、宗十郎頭巾の客に、小声で云った。

頭巾のかげの、冴えた双眸は、眠狂四郎のものであった。

ふりかえって、威張った犬を眺めた狂四郎は、

「どこの屋敷で飼っているのだ？」

「本丸御老中様のふところ刀、土方縫殿助様のお犬様でさあ。猫脚の朱塗り膳で、うなぎの蒲焼を召上って、ねむくなって、ワンとひと声吠えたら、奥女中が、しんずしんずと御納戸縮緬の座布団をささげてやって来る――てな噂も、ああやって、おさむらいが三人もひょこひょこついてあるいているところを見りゃ、まんざら嘘でもなさそうだ、と云いたくなるじやござんせんか」

いまいましげな親爺の言葉に、狂四郎が、かすかに苦笑した――そのおり。

ぶん！

夜気を截る矢の唸りとともに、犬が凄じく吠えて、奔り出した。鎖の端を持っていた武士は、不意をくらって、五体がいっぱいに延びざま、したたか地べたへ曳き倒された。

「曲者っ！」

一人は、抜刀したし、もう一人は、あわてて鎖をつかもうとして、これもまた、みっともなく宙を泳いだ。

鎖をふりはなした犬は、とある路地口までふっとんで行って、吠えたけった。

「ど、どうしたんでござんしょう？」

不安そうに首をのばす親爺へ、

「犬も、蒲焼を食って縮緬の布団に寝る身分になると、人間の恨みを買うとみえる」

そう云って、狂四郎は、ゆっくりと立ちあがった。その床几の脚へ、犬を狙って、はずれた矢が、突き立っていた。

縄暖簾をはねて、一歩出ると、路地口で、犬を睨んでいる射手の姿が見えた。中間態の男で、小刀をかまえている。絶望の気色が、月明りに、ありありとその隙だらけな格好に滲み出ていた。

その絶望を、狂暴な発作に乗せて、中間は、犬めがけて、躍りかかった。

闘犬として鍛えられているけものは、修業を知らぬ腕で斬りつけて来た小刀を悠々と躱す余裕をみせたばかりか、その手くびへがぶっと噛みついた。悲鳴とともに、小刀は、地べた

へからんところがった。
だだっとあとずさった中間は、家の下見板へ背中を吸いつけた。その悲惨な恐怖の形相を、あざけるように、犬は、四肢（しし）を大きくふまえて、ぐっと首をたてるや、高くひと声吠えた。
武士たちは、やや離れた場所から、黙って眺めているだけであった。あながち、犬に贄（にえ）を与える残忍性に駆られているわけではなかったろう。たけりたったけものを抑えておいて、中間を捕えるだけの度胸も腕もない連中に相違なかった。それだけの人間どもだから、足軽でも御免を蒙（こうむ）りたくなる役目を命じられているのだとみることもできる。
犬は、すでにきまった勝利の快感をゆっくりと愉（たの）しむ小憎らしい落着きぶりで二、三度跳躍の姿勢をかまえてみせては、また、空を仰いで、ひくい唸りをあげたりしていたが——ようやく、喉笛（のどぶえ）をねらう不気味な気配をしめした。
と——。
跫音（あしおと）を消して、武士たちの背後へ来ていた狂四郎が、つと前へ出ると、中間の落した小刀をひろった。
犬は、敏感に、狂四郎へ向きなおりざま、その巨軀（きょく）を宙のものにして、猛然と襲いかかった。
狂四郎は、ごく無造作に、小刀をまっすぐに突き出した。犬は、まるで、好物の食いものにでもくらいつくように、その切尖（きっさき）を、口腔（こうこう）ふかく呑（の）んで、名状しがたい呻（うめ）きとともに、ごろごろと地べたをころがった挙句、ぐったりとのび果てた。

「貴、貴様っ！」

呆然としていた武士たちは、狂四郎が歩き出そうとすると、あわてて、ばらばらとかこんだ。狂四郎は、行手をふさいだ一人へ、冷やかに、

「犬が殺されると、お手前がたも腹を切らねばならぬとおびえておいでのようだな――」

「だまれっ！　貴様、こ、この犬を――」

「土方縫殿助の飼犬と知り乍ら、平気で殺せるわたしのような素浪人の境遇を、お手前がたは、うらやましいと思わぬか」

「ぬけぬけと、おのれっ――」

正面の男だけは、多少の勇気をみせて、刀をかまえた。狂四郎は、ろくに竹刀を握ったこともなさそうな隙だらけの身がまえに、苦笑して、

――剣の使いかたを全く知らぬ惰弱が、おのれの生命を救うことになる。

と、心で呟いた。

殺気を放つすべを知らず、闘志を起す力を持たぬ者に対して、こちらは、無想正宗の抜き様がないのである。

「お手前がたは安心されてよい。切腹の責を負う心配は多分ない筈だ。戻って、主君に、犬殺しの下手人は、眠狂四郎であったと報告されるならば、だ――」

この奇妙な仮名は、土方縫殿助の家中の者にとって、怖気をふるう疫病神にひとしいものであったことは、ことわるまでもない。

武士たちが逃げ散ると、殆ど虚脱状態でそこに佇んでいた中間が、ふらふらと犬の死骸へ近づいて、小刀を抜きとるや、
「こ、こいつ！　くそ！　くそ！　くそ！」
と、悲鳴ともきこえる罵り声をしぼって、狂気のごとく、滅多打ちをくれた。
黙って、見まもっていた狂四郎は、中間が、急に、どさっと地べたへ坐り込んで、啜泣きはじめるや、
「おい——。お前のなげきは、もうとりかえしのつかぬことか？」
と、訊ねた。
中間は、うつけた視線で、狂四郎を仰いだが、なんともこたえず、悪寒におそわれたように肩を烈しく顫わせたことだった。

二

その時刻——。
世田谷の鎌倉道に沿うたとある古びた屋敷の、だだっ広い居間で、一人の少年が、ひっそりと坐って、燭台のまたたく灯へ、放心のまなざしをあてていた。
吉良源吾という、この家の当主であった。今年十五歳を迎えたばかりであった。
目もとのすずしい、唇の赤い、美しい顔だちで、正座の姿に気品があった。それだけに、いま、眉宇に滲ませている苦悩の気色がいたいたしい。

源吾をつつむ居間の様子が、一種の荘厳味をおびた古い趣きをたたえていることも、深夜の静寂の中の孤影を一層悲痛なものにみせていた。

周辺の郷民たちから、千年屋敷と呼ばれている家であった。漆を塗ったように黒びかりのする巨大な柱に通した梁に、込み栓が打ってあるのや、丈の高い指し物などが、その古さをしめしている。竹模様の蟇股と木鼻、天竺様の放射格天井、吹寄菱の欄間、黒棚、厨子、大文箱、そして床の間に飾られた小梅縅の鎧——すべて、この家のながい伝統を語らぬものはない。

吉良家は、遠く、足利義氏の子義継（吉良東条左馬四郎）を祖とする。義継は、唐に遊んで、帰って来るや、遁世して奥州（藤谷庄）へ下った。のち、七代を経て、治部大輔治家にいたって、関東管領足利基氏から、この世田谷郷を賜ったのである。

治家の築いた世田谷城は、巨刹豪徳寺の隣りにそびえて、当時、鎌倉道の殷賑とともに、隠然たる勢威を、武蔵野の一角に誇った、という。

治家以降九代、この城は、一度も敵に襲われず、小田原北条氏の関八州征覇にあたっても、その藩屏として残るを得たが、豊臣秀吉の小田原攻略によって、はじめて陥落をみた。当主氏朝は、九代相伝の城をすてて、下総国へ奔り、家康の入府によって、所領を没収されたのである。城もまた、兵火に罹って烏有に帰した。

爾来、吉良家は、弦巻の里に、一郷士として世代を継いで来たのであったが、二百数十年吉良氏九代につかえた家臣、郷民は、徳川氏にいたってからも、その恩顧を忘れず、施政者

も、これを無視することは出来なかったのである。
源吾は、遠いむかしの勢威の格式がそのまま、四周の郷民によってささえられた、いわば、名門という幻影の中で育った少年であった。
徳川の天下となってからのまことの大領主は、井伊家で、世田谷領五十九カ村のうち二十カ村までは、特に彦根領と称えられていた。尤も、その間に、直轄地および旗本領が配置され、相互に監視の役割をふりあてられる、江戸周辺の統治方法がここにもとられていた。
吉良の屋敷のある土地は、近年になって、土方縫殿助の食邑に帰していた。
領主となった縫殿助が、はじめて、弦巻の里へ見まわりに来たのは、三日前のことである。
悲劇は、その日に起った。
朝、源吾と姉のお琴は、長屋門の前にひざまずいて、縫殿助一行の通過を迎送した。
そのおり、縫殿助は、馬をとめて、
「みごとな構えだが、ただの郷士か？」
と、供の代官に訊ねた。
「吉良と申します。もと小田原北条の属将で、世田谷の城主でございました」
「ふむ。吉良治家の末裔か。……吉良上野介の同族だの」
それをきいて、源吾は、屹っとなって顔を擡げた。
赤穂浪士に仇討たれた吉良上野介義央は、当時、佞奸邪悪の卑劣者の代名詞となっていた。
「ちがいます！　当家は、吉良上野介の同族ではありませぬ！」

きっぱりと云い放つ少年を、じろりと見おろした縫殿助は、

「わしは、そう記憶して居るぞ」

と云いすてて、姉のお琴へ、視線を移して、うすら笑いを口辺に刻んだ。その表情がみだらなものであるのをみとめた源吾は、叫ぶように語気を強めて、

「当家は、三河吉良東条より発したる東条吉良であります。吉良上野介は、吉良西条より発したる西条吉良であります。同じ足利家より出たとは申せ、今日、両吉良は、なんの関係もありませぬ。東条吉良家には、人にうしろ指をさされるがごとき、卑怯者(ひきょうもの)は一人たりとも出て居りませぬ！」

しかし、縫殿助は、きいているのかいないのか、ずうっと、お琴の美しい顔へ、目を食いつけたなりであった。

源吾は、もっと大声をはりあげたい衝動で、思わず、片膝(かたひざ)を立てた。すると、お琴が、あわてて、その袖(そで)を引いて、ゆるしを乞(こ)う眸子(ひとみ)を仰がせた。

縫殿助は、お琴と目が合うと、にやりとして、うなずいてみせ、代官に、

「大奥にも、これだけの美人は居るまいの。名門たるをみとめるぞ」

と、云いすてておいて、馬をすすめて行ってしまった。源吾は当主たる自分が無視されたくやしさで、代官がそばに寄って来て、軽はずみをたしなめるのに対してもむっと口を真一文字にひきむすんだなりであった。

午後になって、源吾は、不快を忘れるために、裏庭で、弓を引いた。

源吾は、弓道に天稟を持ち、日置流を習って、十三歳の時、豪徳寺の奉納流鏑馬にあたって、宙に投げ上げられた扇を、みごとに射ぬいたことがある。

剣道と同じく、弓道もまた、心気澄んで、はじめて、わざにいたる。まず足踏みにおいて、無想をたもち、胴造、取懸、手の内、弓構え、打起、延合、やごろ、離れ、残心にいたるまで、その静かな緊張感を一分も乱してはならない。

ようやく――。

三十本あまりの矢を放って、源吾の心がおちつきを得た頃あい――。

突如、門前にあたって、けたたましい犬の悲鳴があがった。それは、源吾が、物心ついた頃から、家の番犬をしている黒丸の啼き声であった。利口な犬で、源吾が川へ泳ぎに行くと、脱ぎすてた衣服のそばから、いつまでも動かずに、見はっていてくれたし、外で食物を与えられても、くわえてもどって来て、主人の前に置き、ゆるしがなければ食べなかった。

源吾が、門前へ走り出てみると、黒丸は、すでに、おのれの三倍もあろう巨狗に踏みつけられて、口から血汐を噴いていた。

「おのれっ！」

源吾は、無我夢中で、裏庭から、弓矢をとって、馳せ戻って来た。

その時、巨狗は、二人の武士をしたがえて、悠々と立去ろうとしていた。

源吾が、

「待てっ！」

と叫びざま、弓に矢をつがえて、きりりっとひきしぼるや、武士たちは血相変えて、
「たわけっ！　これは、御領主の飼われている犬だぞっ！　止めんかっ！」
と、喚いて、犬をかばうようにした。
領主の飼犬であると知るや、源吾の憤怒はさらに油をそそがれて燃えあがった。立ちはだかった二人の武士の隙間をねらって、犬の胴をつらぬくべく、矢を放ったのだが……心気が荒れて、手の内の調べが狂った。
矢は、武士の一人の高股へ突き立ったのである。

三

源吾は、老人のように緩慢な動作で重い腰をあげると、燭台を把って、仏間に入った。灯明をあげて、合掌すると、そのまま、長いあいだ、動かずにいた。
やがて、目蓋をひらいて、父母の位牌、そして先祖の位牌を、ひとつひとつ、なつかしむように見入った。少年の純粋なたましいは、それらの戒名を、胸の中で読んでゆくうちに、その世界へ自分も入って行きたいとねがった。
源吾は、この二日間、ろくに食事も摂らず、この広い屋敷に、たった一人ですごしたのである。
代官のとりなしで捕縛をゆるされ（それが詐謀であることは、いまにして明らかとなったが）謹慎の身となったことは、かえって、少年の心に、厭世の寂寥を芽生えさせたのである。

弟の代りに代官にともなわれて詫びに赴いた姉のお琴は、それなり戻らず、お琴が愛宕下の土方縫殿助の屋敷へ連れ去られたという噂に、真偽をたしかめに出て行った忠僕の宗平もまた、帰っては来ないのである。

──父上！

──母上！

声なく呼びかけてから、源吾は、脇差を抜いた。

灯影を吸って、煌く白刃の、つめたい肌色と切尖の鋭さが、異常に魅力のあるものとして、源吾の目に映った。刃文、匂い、しのぎ、かさね、ふくら、反り……白刃というもののいっさいの造りは、人間の内に潜む決断力をそそりたて、あおりたてる不思議な効果を蔵している。

源吾は、栄誉ある一死を賜った古武士のように従容たる態度で、着物の前をくつろげた。

切腹の作法は知らぬ。しかし、七、八歳の頃その凄絶な光景を目撃したことのある村の故老からきかされた記憶はまだはっきりと脳裡にあった。

左手で、腹の皮を左へ、ぎゅっとひき寄せておいて、右手にかまえた白刃を、切尖一寸の間に擬した。

──その刹那、

「止した方がいいな」

その声が、背後から降った。

いつの間に忍び入ったか、ふところ手の眠狂四郎は、凄艶(せいえん)とも形容したい少年の必死の面(おも)差(ざし)を、冷やかに見下して、

「腹を切らねばならぬ理由が、あんたにはない筈だ」

と、云った。

「無礼なっ！」

血走った眼光をこちらも鋭く受けて、座に就くと、

「後漢書(ごかんじょ)に曰(い)う。男子は死中に活を求むべし。坐(ざ)して窮すべけんや。ましてや、あんたは、進退谷(きわ)まったわけではない。ただ、翠(みどり)の羽をもって、自ら残(そこ)なっただけのことではないか。これを災難としてひきさがるかさがらぬかは、相手によりけりだ。相手が、飛ぶ鳥を落す土方縫殿助であるならば、一擲乾坤(いってきけんこん)を賭(と)す肚(はら)をきめてこそ、名門吉良家の当主ではないか。鸛(こう)のひと啄(つつ)き、鶴(つる)の一撃——若いあんたにのぞましいのは、これだ」

この男にしては珍しい熱意のこもった語気であった。

「きけば、あんたは、弓道に秀(すぐ)れた腕前だという。それがために、禍(わざわい)を招いたというならば、こんどは逆に、その技をもって一矢(いっし)を敵にむいてみるがいい。幸いに、ここに、どこに骨を埋(うず)めても一向に悔いない男がひとりいる。こういう冒険には、誰よりも役立つ——と当人が云うのだから、まちがいはなかろう」

「どんな手段でやるのです？」

「さあ、それは、相手の出様を待っての臨機応変ということになる」

「姉がとらえられて居ります」
「それを救うことが、同時に、一矢をむくいることになれば、これに越したことはなかろう」
不敵に、微笑してみせた。それから、少年の表情に、こちらの言葉を信じかねる不安の色があるのをみとめると、
「あんたの家来は、憎い犬を狙って見事にしとめた。その家来の忠義のてまえもある。こんどは、あんたが、飼主の方をやっつけなければなるまい。時と場所は、わたしにまかせて頂こう。都合のいいことには、相手の動静をさぐるには最も重宝な男が、わたしの仲間にいる。大名屋敷に忍び込んだ夜は、寝つきがいいという変った男だ」

四

三日過ぎて——。
土方縫殿助の屋敷へ、しのびやかに、非公式の略式鹵簿が入った。といっても、途上、心得ある人々の目は、供連の制規が、公方のものであることを一瞥でみとめていた。
白帷子を着用した者がさげた道具（槍）が四本であったこと、打物（長刀）の柄が紋散らし蒔絵であったこと、そしてそれをささげた者が猿田彦の面を被っていたこと——それだけで、ははあ、と頷けたのである。
道端に平伏した武士の中には、何故に、将軍家が、供侍を半数以下に減らして、こっそり

と忍び出て来たのか――それを訝(いぶか)りつつ、しずしずと土方屋敷の間口十間の矢倉門をくぐってゆく溜塗総網代(ためぬりそうあじろ)の乗物を、見送ったことだった。

公方お成りのお達しは、すでに屋敷内にゆきわたっていたのはもとよりのことであったろうが、しかし、なぜか、そのお達しには、厳しい箝口令(かんこうれい)が加えられていたとみえて、玄関わきに出迎えたのは、主人縫殿助以下わずか十名あまりの士だけであったし、殆(ほとん)どの使用人は、何処(どこ)かへ姿を消してしまったように、ひっそりとしていた。

だから、屋敷の一室にとじこめられていた吉良源吾の姉お琴は、客が訪れたことすら知らずに、木像のように坐っていたのであった。

陽(ひ)のささぬ陰湿なその部屋に入れられてから、すでに六日が経過しているにも拘(かか)わらず、お琴は、まだ一度も縫殿助の面前へひき出されていなかった。

もてなしは、決して、おろそかではなかった。世話する女中の態度も慇懃(いんぎん)であったし、几(き)上(じょう)の鈴を鳴らせば真夜中でも用を足してくれることになっていたし、食事も入浴も上臈(じょうろう)扱いであった。まとっている衣裳(いしょう)も、わが家を出て来た時のものとはくらべもならぬ、きらびやかな、金糸銀糸の辻(つじ)模様にかわっていた。

はじめの二日あまりは、あまりのうす気味わるさに、終始緊張のしつづけであったが、やがて、心もゆるみ、女中がたいてくれる香をきく余裕も生れていた。

そして、いまでは、女中に、習字の道具をたのもうか、とさえ考えていたのである。

廊下に、近づく跫音(あしおと)がしたので、お琴は、そうしよう、ときめた。

しかし、入って来たのは、身のまわりの世話をしてくれる女中ではなくて、年配の老女であった。

「殿のお召しです。こちらへ――」

冷たい切口上であった。

急に、心身のひきしまるのをおぼえてお琴は、立ちあがった。

ともなわれた広間の、上段の間に坐っている初老の人物の胴服の紋を見たとたん、お琴は、足がすくんだ。

平伏したお琴を、脇座(わきざ)の縫殿助は、意味ありげに、将軍家斉(いえなり)に目くばせしてみせてから、お琴の背後の襖(ふすま)をひらくように、侍臣に合図した。

するすると左右に引かれた――その次の間に、しつらえられたのは、奇怪にも、方二間あまりの円型の竹矢来であった。

その中に、うずくまっているのは、褐色(かっしょく)の巨狗であった。

侍臣が二人、お琴に寄った。

「立てい」

左右から、腕をとられて、はっとしたお琴は、しかし、上座の人物の視線を受けているじぶんの意識にしばられて、ふかくうつ向いて、曳(ひ)かれるままに、次の間へ入った。

竹矢来の巨狗を見出(みいだ)して、あっと竦(すく)んだ――その驚愕(きょうがく)と恐怖にあらがう力がうせて、お琴は、やすやすと、その中へ突き入れられた。

花びらを撒(ま)いたように裾(すそ)を乱して、両手をついて、顔をそむけたお琴を、犬は、一間余をへだてて、じっと見すえていたが、やおら、四肢(しし)を立てた。

のそりと、前脚をふみ出した刹那、お琴は、反射的に、ぱっと身を起して、竹へすがった。

犬の挙措は、きわめてのろくさかった。ひどい老いぼれでもあるかのごとく、矢来をつたって逃げるお琴を、のそのそと追いまわしたが、とうていそのまぬけなのろさでは、つかまえるのは叶(かな)いそうもないか、とみえた。

ところが、決して、老いぼれではなかったのである。

一瞬——。

犬は、前脚を、ひょいと挙げて、後脚ですっくと立ったとみるや、おそろしい敏捷(びんしょう)な跳舞をみせて、お琴に襲いかかったのである。

悲鳴がつんざき……お琴のからだは、犬の巨軀をのせて、仰のけに倒れた。

裳裾(もすそ)がねじれて、真紅の蹴出(けだ)しが散り、ひきむかれた白い脛(はぎ)から太腿(ふともも)へかけての曲線が、けものの胴を挟(はさ)んで、くっきりと浮き立った。

——すると。

次にしめした犬の振舞いは、いかにも畜生の本能をあらわしたごとき、正視に堪えぬ淫猥(いんわい)なものだった。だが、無理無体に、処女の下肢を拡(ひろ)げさせようとする力ずくのやりかたは、決して、畜生の知恵で出るものとは見えなかった。

食い入るようにこの奇怪な光景を瞶(みつ)める家斉へ、縫殿助は、ちらと狡猾(こうかつ)な一瞥をくれて、

にやりとした。
その刹那であった。
一本の矢が、庭から、陽光を掠め、広縁上を翔けて、竹矢来の中へ、吸い込まれたのは——。
「ぎゃあっ！」
ふかぶかと頸根へ射込まれて、大きくのけぞりつつ、犬がほとばしらせた絶鳴は、あきらかに人間の声であった。
「曲者っ！」
「出あえっ！」
侍臣たちが、庭へとび出し、縫殿助も、広縁へ奔った。
すると——。
「曲者は、ここにいる！」
意外にも、その声は、上段の間から飛んだ。
愕っとなって振りかえった縫殿助は、更に大きな衝撃で、息をのんだ。
家斉の背後に、黒の着流しの浪人姿が、異相に微笑をふくんで、うっそりと立っていたのである。その頭上の天井が穴をあけている。そこから、舞い降りたのである。
「このお方が、何様であるか——こちらは知らぬ、ということにしよう。お忍びなれば、お名乗りになる気づかいもあるまい。変な見世物にうつつを抜かされたのは、高貴のおん身として、恥にこそなれ、ほめた話ではない。いや、お方様も、犬が人間であったとおわかりに

なれば、興ざめはてて、いっぱいくわされたお腹立ちと拝察つかまつる。……土方殿には、まず、その罪を詫びられるがよかろう。そのあいだに、吉良源吾が、姉を引取って退散いたす。さあ、土方殿、お方様の前に、両手をついて、頭を下げて頂こう。こちらは、礼儀もわきまえぬ素浪人で、気が短いと来ている」

狂四郎は、縫殿助を平伏させ、庭の立木の陰から出た源吾がお琴の身柄をうけとって、こちらへふかい感謝の一礼をのこして立去るのを見とどけたのち、皮肉な結句を吐いたのであった。

「お方様、お立ち下さい。ついでのことに、途中まで、お送り申上げましょう」

異端の貌

一

当時――。

江戸の街には、さまざまの大道芸人が、徘徊していたものである。

鳥さし、普化僧、願人坊主、猿回し、乞食芝居、粟餅の曲搗き、太神楽、角兵衛獅子、葛西踊り、物真似、辻講釈など……。女の芸人は、門付という。(これは、正月十五日までを、鳥追い、といった)

若い女にかぎられていて、粗末な木綿の着物をまとっていたが、半襟と袖口に緋縮緬をのぞかせ、菅の端折笠に、浅黄の手甲、といういでたちだった。

門口に佇んで、三味線にのせて唄うのは、主として哀調をおびた二上り新内であったが、のぞまれれば、長唄、常磐津、清元、富本、など端物浄瑠璃も唄った。時に、巧みな唄い手は、座敷に招じあげられて、藤間、西川の踊りのあいてをさせられたものである。

今日も――。

肌がじんわりと汗ばむくらい眩しさを増した陽ざしの下を、一人の門付が、三味線を抱い

て、浅草稲荷町の往還を行く。きわだって、美しいすがたの女であった。色がぬけるように白いので、顎でむすんだ笠の紐の緋縮緬が浮きたって、なんともいえず、なまめかしい。仲の町芸者が、わざとこの扮装をしているのだ、と真顔でいえば、それでこそ、とうなずかれそうである。

きくや橋を渡って、右へ折れる。

宗円寺、永見寺、威光院などの寺院の塗籠の築地塀が、午後の明るさの中に白く浮きたっている。塀の瓦に、紫色の藤の花が垂れて、微風にゆれている。

人影もない、静かな通りであった。

と――。

女は、急に、神経を張る様子をつくって、その藤の花の下で、足をとめた。

宗円寺と永見寺との塀のきれ目の物陰から、五人の門付が、あらわれて、行手をさえぎったからである。

女は、とっさに踵をまわそうとしかけて、思い直した度胸を、その静止の姿にみせると、五人の同業に、前後をとりまかれるにまかせた。

「おい、お前――」

編笠をあみだにして、語気強く呼びかけた正面の門付は、いかにもこの仲間の姐御らしい大年増であった。せなかに、刺青ぐらいは散らしていそうである。

「だれにことわって、鳥追いになりゃがったんだい？」

「べつに……どなたに、おことわりもしませんが――」

落着きはらった声音をかえした。

「ふざけるない！　乙にすましかえりやがって、へん、鳥屋(とや)についた初女郎(うぶ)みてえな声なぞに、十年年期を入れたあたしたちの稼(かせ)ぎ場を荒らされてたまるかい。やい、鳥追いはな、地者(じもの)（堅気の女）にみせかけて客の同情にすがるのを大恥としているんだぞ。てめえは、それを百も承知で、もとはれっきとした御寮人だった、てな面(つら)をしやがって――こん畜生っ！」

「ちゃあんと知っているんだ、お前の素姓なんざ――。へん、御寮人面がきいてあきれらあ。裾(すそ)っ張りのおひきずりめ、人前に出せねえ化物を生みやがって、食いつめやがったんじゃねえか」

「仲間の掟(おきて)通り、二度と三味線を握れねえように、両手の親指を詰めてやるから、覚悟しやがれ」

数本の手がのびたとたん、女は、無言で、烈(はげ)しくふりはらって、塀を楯(たて)にとって、身がまえた。

「やろうっ！　さからいやがるってんだな！」

「おもしれえっ！　素っ裸に剝(む)いちまえ！」

どっとつかみかかった――瞬間、一人が、悲鳴をあげて、よろめいた。その頰(ほお)から血が噴いていた。

女は、いつの間にか、右手に、武器をかざしていた。鋭利な丸鑿であった。

「ちきしょうっ！　やりゃがったな！」

「やっつけろ！」

血をみてひるむような連中ではなかった。場合によっては、地回りのやくざを袋叩きにするぐらいのあばずれ揃いであった。ある者は、石をひろい、ある者は、簪を抜き持った。

しかし、なにしろ、鑿の刃のうす気味わるさは、この対峙を長びかせるか、と思わせた。

ひとりが、走って、橋袂に置いてある荷車から、天秤棒を摑んで戻って来るや、流石に、女は、ひくい呻きをもらして、たたっと、一角を突きかけて、逃げ路を開いた。

「にがすもんか！」

放りつけた天秤棒が、足をすくった。

泳いだ後姿へ、ひとりが、むしゃぶりついた。

鑿は、手をはなれて、掘割へ落ち、あとは死にもの狂いのもがきになったが、それは、いたずらに、白い肌を白日に曝すことにだけしか役立たなかった。

編笠がひきむしられるや、成程、同業のねたみを買うに充分の美しい貌であった。みるみる帯が解かれ、紐がちぎられ、揉みくちゃになった衣類のかげから、胸の脹みが、太腿が、むき出された。ふっくらと脂肪の乗った美しさは、あばずれたちを、さらに嫉みで逆上させた。

「こいつ！　天秤棒をねじこんで両国の垢離場の高小屋へつき出してやれ、蛇遣いや曲独楽

よりは、よっぽど大喝采だい」
「やれつけ、それつけ、臼の餅だ」
げらげらと、笑い声を撒きちらしたおり——。
「搗いているのは、お前らの焼餅だろう」
その皮肉な声が、あびせられた。
「なんだと！」
一斉にふり仰いだ女たちの目に映ったのは、冷笑をつくった眠狂四郎の顔であった。
ふところ手で、うっそりと立っていたのである。

二

門付たちを逃げ散らしておいて、狂四郎は、しかし、べつに、地べたに蹲った女へは声をかけようともせずに、歩き出していた。
「あ、もし——」
あわてて、前をつくろって、立ちあがった女が、呼びとめた。
振りかえって、目と目が合った刹那——。
狂四郎は、女が、急に、顔色を変えて、竦んだのに、
——この女も、おれを憎む一人か。
と思った。

そういえば、この女には、いつか、どこかで会ったようである。
思い出そうとしたが、むだだと知って、
「なんだ？」
「は、はい――」
女は、一瞬の衝撃が去ると、もじもじときまりわるげな風情になって、
「危ないところをおたすけ下さいまして、お礼の申上げようもございません」
と、ていねいにあたまを下げた。
狂四郎は、そのまま、しずかな足どりで、道をひろって行く。
女は、三味線をかかえて跟いて来るのである。
この新堀に沿うているのは、ずうっと寺塀であり、はてしがないくらいまっすぐな、御蔵前までの一筋道だった。
その距離を、狂四郎と門付は、一間の間隔をとって、沈黙のうちに、辿って行ったのである。ようやく、新旅籠町のまがり角に達した時、狂四郎は、無表情の顔をめぐらして、
「どうするというのだ」
と、訊ねた。
「お名前をおきかせ下さいまし」
「おれを知らぬ、というのか？」
知っていて、何かのこんたんで跟いて来たとばかり思っていたのである。

「はい。存じあげませぬが……ただ、なんとなく、ずうっと以前からお想い申上げていたような、おなつかしさで……ご免下さいまし。本当でございます」
女の表情も口調も、真剣であった。のみならず、そう告白しなければならぬ自分自身に当惑しているような不思議な気配をしめしていたのである。
「おれも、お前さんには、どこかで出会ったおぼえがある。思い出せぬが、それはまちがいなさそうだ」
「旦那！」
女は、必死の眸子をすがらせて、
「おねがいでございます。一刻――いえ、半刻で結構でございます。お話をうかがわせて下さいませんでしょうか？」
「なんの話をだ？」
「……………」
女は、喘ぐようにして、云うべき言葉があり乍ら、口に出すのをためらった。
狂四郎は、女の態度に、欺瞞がまじっていないのをみとめると、上等もろはくと看板をかかげた向うの小料理屋を、顎でしめした。
やがて、そこの二階でさしむかった二人は、酒と肴がはこばれるまで、重苦しい静けさの中にいた。天井も壁も汚染だらけで、赤っちゃけた畳には焼け痕が散っている侘しい小部屋は、異相の浪人者と門付のさしむかいにふさわしいものだったが、それにしても、双方のも

つ雰囲気は、膳をはこんで来た小女も背すじに、わけもわからずかすかな悪寒を餇わせるだけの異常さがあった。

狂四郎の放つ虚無の業念の妖しい気配はいわでものこととして、女の方も、何か胸中をかきむしっている焦燥感を、発作にしめすまいとけんめいに怺えているいたいたしさを、こわばった全身に滲ませているのだった。

狂四郎は、盃へ酒を注ぐ女の指が、かすかに顫えているのを見てとりつつ、無言で、つづけさまに、飲んだ。それから、おもむろに、感情を消した眼眸をあてて、促した。

「おれから何をききたいというのだ？」

女は、俯向いて、なおも、ためらった。

「しゃべるのは得手ではないが、嘘はつかぬつもりだ。但し、しゃべりたくないことはしゃべらぬ」

女は、顔を擡げた。みじめなまでに哀願の色をたたえた面持だった。

「旦那！　……もしや、旦那は——」

そこまで云いかけて、次の言葉をのみこみ、ふたたび、うなだれた。

そして、呟くような小声で云ったのは、

「まちがいましたらおゆるし下さいまし。……もしや、旦那のお父様は、異人さんではございませんか？」

狂四郎の、無表情は、易らなかった。

「それをきいてどうする？」

「そのために、どんなにお苦しみになったか……どんなにご不幸であったか……おきかせ下さいまし」

しばらく、沈黙があってから、

「お前は、あいにく、おれのいちばんしゃべりたくないことをきいた」

狂四郎は、ひくく、その返辞をした。

「申しわけございませぬ」

女の双眸に、あふれる泪を、狂四郎は見た。

「お前は、切支丹か？」

ずばりと訊かれて、女は、おそろしげにかぶりをふった。そして、遽に、陰惨ともいえる狂的な歪みを、目もと口もとに刻んで、云ったのである。

「伴天連には、恨みがございます！」

その刹那、狂四郎の脳裡に、ひとつの光景が、甦った。

——そうか！　あの娘のなれの果てか！

記憶のいい読者ならば、一昨年の暮に、小日向の元切支丹屋敷内で起った悲劇を忘れずにいる筈である。

おそるべき信仰の強さをもって、この国の切支丹禁絶に挑むべく、海の彼方から渡って来た布教師ヨハネス・セルディニイが、仏像師の父の危難を救うべく女夜叉となった一人の娘

のために、色戒を破って、ついにころび、狂四郎の憤怒の白刃をあびて仆れた——あの悲劇を、である。

娘は、お艶といった。この門付は、その後身だったのである。

狂四郎は、手酌で、二本の銚子を空にするまで、口をきかずに、沈思をつづけた。

お艶は、緊張のあとに来た寂寥で、なかば放心して、さむざむと肩を落して、身じろぎもしなかった。

ふいに、狂四郎が、云った。

「人間は、生きてゆくために生れて来たのだろう。時期が来なければ、死のうと思っても死ねぬし、また、生きようと思っても生きられぬ。それまでは、苦しくとも、生きることではないか」

この言葉は、お艶の胸へ、岩清水のせせらぎのように、しずかなひびきをたてて、注ぎこまれた。それから、それは、嗚咽となって、口からもれ出た。

狂四郎は、手をたたいて、小女を呼び、南鐐一片をはらって、立ちあがった。

泪のまなざしを仰がせたお艶へは、その膝へ、小判の包みを投げておいて、すっと出て行こうとした。片足が廊下をふんだ瞬間、お艶のからだが弾かれたように起って、その袖をとらえた。

「旦那！　たすけて下さいまし！　おねがいでございます！　月に一度、いえ、半年に一度でよろしいのです。お目にかからせて下さいまし！　ただ、こうして、お会いしているだけ

で……それだけで、よろしいのでございます。おねがいでございます！」

狂乱の形相を、冷たく見おろして、狂四郎は、一瞬躊躇したが、

「ことわろう」

と、云いすてて、袖をはらった。

「おねがいでございます！　……あたしは、おそろしい！　……あたしは、じぶんがおそろしくて……もう、どうしていいか――ああ！　いっそ、気が狂ってしまいたい！　……おねがいでございます！　どうぞ、たすけて下さいまし！」

「鎌倉に、東慶寺という尼寺がある。お前のような不幸な女を迎えるためにつくられたところだ――とおぼえておくがいい」

その言葉をのこして、狂四郎は、階段を降りた。

三

「ひでえや。まったく、ひでえや。話にならねえ」

大声で、そう云い乍ら、常磐津文字若の家の格子をひきあけたのは、金八であった。狂四郎が、お艶と出会ってから、十日ばかり過ぎている雨もよいの午後のことである。

「なにがどうひどいんだい？」

茶の間の長火鉢の前で、つくねんと、肱杖をついていた文字若が、訊ねた。

「どうもこうも、あるもんけえ。また、可愛い盛りのちびが、ひとり、殺られやがったぜ」

「え？　またかい」
文字若も、目を瞠った。
「心の臓を、ざっくりとひとえぐりだあな。可哀そうに、殺されるのを覚悟して、ちっちゃな手を胸で合わせて――」
「おお、いやだ！　よしとくれ」
文字若は、いたましげに眉をひそめて手をふった。
「これで四人目だぜ。師匠、おめえ、子供を持っていたら、真綿にくるんで、長持にしまって、押入へかくしておくところだ」
「いったい、なんだってんだろうね。つぎからつぎへ、罪もない子供を殺して――」
「大方、てめえの子供が神かくしに遭った母親が、血の道がのぼりやがって、見さかいもなく、他人の子供が憎ったらしくて、殺ったんじゃねえか、という噂だが――」
そこへ、婆やが、前掛けで手をふきふきあらわれて、
「金さん、そりゃァちがうと思うね。母親ってえものは、自分の子供が亡くなると他人さんの子供衆を見て、憎くなるかわり、悲しくなるもんだよ。あたしにおぼえがあるからね」
「ふうん。婆さん、それでも、子供を生んだことがあるのかい」
「それでも――はないだろう。あたしだって、三十年前は、若くて、きれいで――」
「淫乱で、親に内証で、近所の甚助をくわえこみ、ああしてこうして、こうなって、ついふくらんだ饅頭腹、か」

「おふざけでないよ。立派に仲人（なこうど）をたてて床盃を交わして――なにしろ、深山（みやま）の紅葉で、ちっとも色づいていないものだから、井手の下紐（したひも）ときかねて――」

「手をばもち添え、そうしてなにか、これをならえと教えられ――ってな」

この時、階段に跫音（あしおと）がして、三人は、狂四郎を迎えた。

「金八、子供が四人も殺された話をきこう」

「先生は、まだご存知なかったんでござんすか？」

「うむ――」

去年からつづいている事件であるという。

遊んでいた五、六歳の男の子が、行方不明になり、発見された時には、小さな胸を、鋭利な刃物で、えぐられていたのである。神かくしということは信じられていたし、人淩（ひとさら）いの話も別に珍しくはなかったので、三人目が殺されるまでは、噂も大きくはならなかった。

今年になって、淩われたのが、田原町（たわらまち）に大店（おおだな）を構えた江戸で屈指の両替屋の一人息子であったので、急に、この事件がやかましく人の口にのぼったのである。

手口が同じであったので、下手人は同一人ということだけは瞭然（りょうぜん）としていた。だが、なんの目的をもって、むごたらしい罪業を犯すのか、全く見当もつかなかった。

手がかりもつかめぬままに――今朝、ついに、四人目の子供が殺されたという。

「金八、お前、そのなきがらを、見たのか？」

そう訊ねる狂四郎の蒼白（そうはく）な面貌（めんぼう）が、内にみなぎった激情を滲ませているのを、金八も文字

若も、怪訝なものに見まもった。いかなる事に対しても、無感動な生きかたをしようとしている狂四郎が、このように胸中の動きをあらわにするのは珍しいことだった。

狂四郎の心を人間らしくなごませるものが、無心な子供たちの姿だけであることを、金八も文字若も知っていたならば、この不審はすぐ解けた筈である。

金八は、見て来た、と頷いてから、

「傷口は目立たねえくれえな、小さなもので、ござんしたし、ふしぎに、ちっとも血が流れていねえんでさ——。殺した野郎も、さすがに、気がとがめたとみえて、合掌させて、数珠をかけてやって居りました。まえの三人の子供にも、そうさせていたという話でさあ」

「血が流れていなかったというのだな」

「着物も、よごれちゃいませんでしたぜ。ところが、お玉ヶ池の佐兵衛という、岡っ引を四十年も勤めあげた爺さんが、ひと目見て、これは、匕首じゃねえ、鑿のようなものでひと突きしたに相違ねえ、と云って居りました。鑿で、ぶっつりやりゃア、どうしたって、血はとび散るし——かりに、なにか小布をあててやったとしても、心の臓だから、流れ出るのを止めようがなかろうが、どうにも合点がいかねえ、とあの腕っこきの爺さんが、腕を拱いて、思案投げ首と来ちゃァ、ほかの連中は、ただぽかんとしてやがるばかりでさあ」

狂四郎は、鑿ときいた瞬間、双眸に凄じい輝きをみせたが、それを峠にして、なぜか、表情を暗い冷たいものに渝えていったのであった。やや、しばし、時間を移してから、ぽつりと、

「血を取ったか……ばかな！」

と、吐きすてた。

「先生、いったい、どんなやつが、犯人だとお思いですか？」文字若が、訊ねた。

それにこたえず、

「金八――」

「へい――」

「芦部(あしべ)光源(こうげん)という仏像師の娘が、いまおちぶれて門付になって流している。その住処(すみか)をつきとめて来い」

「へえ？」

「それが、犯人だ」

四

陽が落ちて間もなくの時刻、狂四郎は吉原の大門(おおもん)を左方にのぞむ地点から、日本堤をつききって、田圃(たんぼ)の中をのびている野道を歩いて行った。

金八が、三日を費してお艶の住処をつきとめたその宵(よい)である、元吉町を抜けて、左に折れると、小塚原(こつかっぱら)の仕置場に至る。

玉姫神社のわきに住んでいると知れたのだが、人家が切れると、森が遠見をさえぎり、

――これは、金八をつれて来るのだった。

と、悔まれたことだった。
さいわいに、十三夜の月が、薄雲を縫って流れていて、道をひろうのに不自由はなかった。見当をつけて、ものの二町も歩いたろうか。突如、どこか、かなりの遠方で、吸号と物音が、静かな夜気を破って、月明にひろがった。
その吸号が、数人の女の声を集めたものときいた瞬間、直感があった。
狂四郎は、その方角にむかって、地を蹴って奔った。
森の中を駆け抜けると、前方に神社の屋根が、反りをうってそびえて、瓦は月の光を吸って白くかがやいていた。
左手に、築地塀に門構えの社家屋敷が並んでいる。こちらでないとすると——足は、右手へ飛ぶ。
ぽつん、と一軒だけ、松の木立の中に、開けはなった戸口から灯を流している家が発見された。
あの女の住んでいるのが、隣家から遠い一軒家であることは、あらかじめ想像していたことだった。その理由があるのだ。
風のごとくに、戸口まで達した狂四郎は、土間に俯っ伏している女を発見して、素早く、抱き起した。
撲られ、蹴られ、踏まれた痕が、顔にも、はだけた胸にも、めくり出された膝にも、いたるところに付いていた。そのうちの一個所が、致命傷となったのであろう、すでに死相を呈

している。
狂四郎は、かかえあげて、居間に上ると、灯のそばへ、仰臥させた。
お艶は、そうされるあいだに、意識をとりもどして、目蓋をひらいていた。
「……旦那！」
「来るのがひと足おそかった。ゆるしてくれ」
「いいえ……どうせ、あたしは……おそろしい罪を……人様のお子を、四人も……手にかけた鬼……」
「だから、たすけて、尼寺へつれて行ってやろうと思ったのだ」
「旦那は……あたしが、鬼と、わかっても……」
「憎みはせぬ。お前は、不運だったにすぎぬ。……お前の子供は、どうした？」
「……ああ、もう——」
「つれて行かれたのか？」
「ええ——。見世物小屋の、軽業に、売りとばす、といって……」
死にのぞんで、いっさいをあきらめたあわれさが、狂四郎の心を、ひしひしとしめつけた。
浚って行ったのが、あの門付たちであることは、きくまでもなかった。
「おれが、とりかえしてやる。安心して逝け」
「いいえ……もう……あたしの罪を、あの子が、背負って、くれるのですから……これで、なにもかも……」

お艶は、生き難かった人生にわかれを告げる安堵をおぼえるように、微かな笑みをうかべて、

「旦那に見とられて……あたしは、うれしい……」

と、それをさいごの言葉にして、目蓋をとじた。

この女が、禁制のびるぜん・さんたまりあ像を作った罪を問われている父を救うために、ヨハネス・セルディニイを、おのれの白い肌をもってころばせた——そのたった一度の秘密で、因果の子を生んだ無慙は、新旅籠町の小料理屋の二階から降りる時、狂四郎には想像がついていたのである。その子をかかえる苦悩に喘いでいたからこそ、お艶は、狂四郎の人相を、異邦の血を享けたものと見てとり、あの様に、悲痛な哀訴をしたのである。

そして——。

金八から、四人の子供が、鑿の一撃で殺され、血を流していなかった、ときいた時、狂四郎の脳裡に、閃いたのは、その罪の子のことであった。

仏像師の娘が、鑿を使うのに、なんのふしぎはない。げんに、門付たちから襲われるや、お艶は、かくし持った鑿をかざして反抗したではないか。

そのむかし、長崎にあって、伴天連の情を受けて、青い瞳の白子を生んだ娘が、その子にわが身の生血をすすらせたら瞳が黒くなり皮膚が黄色になった、という伝説を、狂四郎は、きいたことがある。お艶もまた、その話をどこかできいて、同邦の子の生血をぬすみとって、わが子へ飲ませ、その体内の異邦の血を消しさろうと企てたに相違なかった。妄執に憑かれ

た無知の罪業を、しかし、もし嗤う者があるとするならば、その者こそ、母というものの哀しさを知らぬ非情をなじられてもいたしかたがあるまい。

お艶は、その罪を、思いがけぬ別の方面の下種の恨みを買うことによってあがなったのである。

狂四郎は、深い憐憫の黙禱を終えて、外へ出た。

門付たちの溜りが、浅茅ヶ原のむこうの橋場町にあることを、狂四郎は、知っていた。

月の光に、身を染めるや、急に、狂四郎は、四肢のひきしまるのをおぼえて、小鷹の術をとって、非常な速さで、田圃道を、進んで行った。

浅茅ヶ原のてまえに、月空を映して、夜にも美しく澄んだ水面をひろげているのは、鏡ヶ池である。

池畔は、松の並木になり、その影に織られた往還を、数個の人群がかたまって歩いて行くのをみとめるや、狂四郎の足は、さらに速くなった。

二間に迫って、

「おい、待て——」

と、声をかけたのは、あいてを女たちと軽く見てとった狂四郎の誤算だった。いきなり無言で、とび込んでゆき、先頭の女が抱いた幼児を奪いとるべきだったのだ。

「あっ！　野郎、来やがったぞ！」

門付たちは、恐怖の叫びをあげて、逃げ腰になった。

　すると、幼児を抱いた女が、
「みんな、しっかりしろい！　こっちには人質があるんだぞ！　やい、浪人、そこから一歩でも出てみやがれ、この餓鬼を、池の中へたたき込んでやるぞ！」
　——しまった！
　ほぞをかんだ狂四郎は、
「たのむ！　子供をかえしてくれるなら、こちらは手向いはせぬ。金も出そう」
　狂四郎は、しかし、懐中に、一両足らずしか所持していなかった。やむなく、それだけを彼女たちの前へ抛った。
「莫迦野郎！　こんな端金で、餓鬼を渡せるか。面を洗って出直して来い」
「たのむ！」
　狂四郎は、無想正宗を鞘ごと抜いて、うしろへすてると、その場へ坐った。
「この通りだ。子供をかえしてくれ」
　地べたに両手をついて、頭を下げた。
　女たちは、子供を抱いた女だけをのこして、走り寄って来るや、口ぎたない罵詈とともに、狂四郎の頭を、肩を、胴を、膝を、腰を滅多打ちにし、蹴りまくった。
　されるがままに、歯をくいしばった狂四郎は、おのれの虚無が犯したこれまでの罪に、肉が哭き、骨が呻くのをきいていた。
　やがて——。

女たちの跫音が遠ざかった頃あい、狂四郎は、烈しい疼痛を怺えると、眼前でくすんくすんとすすりあげている幼児へ、もろ手をさしのべた。

「坊や、おいで――」

素直に、ちょこちょこと腕の中へ来た小さなからだをそっとかかえあげた狂四郎は、月のあかりの中に、自分と同じ悲惨な運命のもとに生れ出た貌を、食い入るように凝視した。

はじめて――左様、この長い物語がはじまってから、いまはじめて、この虚無の男の双眸から、熱い泪が、あふれ出たのであった。

愛母像

一

お江戸日本橋七つ立ち、初のぼり、行列揃えて
アレワイサノサ　高輪夜明けて提灯消す
恋の品川女郎衆に、袖ひかれ、乗りかけお馬の
鈴ヶ森

その鈴ヶ森を過ぎて、大森村の松並木に出る。
海から渡って来た爽やかな朝風が、光と影をまだらに織る樹間を吹きぬける——その街道を、大名行列が、しずしずと過ぎて行く。
槍の鳥毛が、まっ白くひるがえり、挟箱の金紋が、きらと耀く。
およそ千余の供回りが、沈黙をまもって、歩調正しくすすむのである。
参府交代の季節が来ていて、街道上に、大名行列が、毎日幾組か見受けられるのであった。
道端にうずくまった老若男女は、槍の鞘、箱の紋を望み見て、すぐ何某侯かを知る。
「会津葵だの。松平因幡守様だて——」

「会津葵が、どうして因州にあるんだ——はて心得ぬ」
「大方、鰐に乗った白兎が、くわえて行きゃがったんだろう。ぬしに会津にいられぬこの身、裾を葵で、開いて空けて、ほんにお前を松平、ってな」
「道理で、あの乗物は、腰が浮いてらあ」
「まぬけめ、ありゃ、腰板打揚げの網代駕籠といってな。おれの女房が、大奥に勤めていた頃、御台所御代参で、屢々乗ったしろものだ」
「てめえの嬶のは、腰巻まくり揚げの穴目駕籠ってやつだろう。大奥は大奥でも、吉原の大奥で、客を乗せっぱなしで、一晩十文とは安かったのう」
「なにをぬかしゃがる。実は、何をかくそう、わが妻は、あれなる因州侯が御落胤にて、千早なる神は出雲の巫女あがり——」
「ちいせえ時から、尻ぐせわるく」
「男の鼻毛を読むに長け」
「へっ、おれの女房がとびきりの別品なものだから——そねめ、そねめ。あまたある客の中から、このおれを選んで、起請して——知らねえだろう、無学文盲のやからは。いいか、起請ってえのはな、そもそも、いにしえのむかしは、盟神探湯と申してな、敬白いわく、梵天帝釈、四大天王、総日本国中六十余州大小神祇、伊豆箱根大権現、三島大明神、八幡大菩薩——八百よろずの神に誓いをたて——」
「とうとう、天神河岸（吉原最下等店）からひかされて、大工留吉の山の神になりたてまつ

りましたか」
「宿六は貧乏神で、これを相性といわあ」
行列が過ぎると、街道には、どっと、行人があふれ出る。
その群の中に、幼児を背負った黒の着流しの浪人者が、ゆっくりと歩いて行く――。
追い越す者、すれちがう者――すべての視線は、吸いつけられるように、その幼児の貌へ向けられていた。
青い瞳と褐色の髪毛をもった貌は、朝陽をあびて、思わず、はっとさせる程あどけない美しさであった。
けだし、すべての人々は、微妙な繊細な、彫りのふかい異国の造りに、はじめて接したのである。
行列にむかって軽口をとばしていた連中も、息をのんで、おし黙ったまま、じろじろと見乍ら、過ぎて行った。
無心な優雅を湛えた小さな貌とともに、それを背負う浪人者の面容が、また蒼白な、暗い異相であるのも、人目を牽く所以であった。
敢えて、眠狂四郎は、白昼を、この不幸な幼児を、衆人の好奇の目にさらして、行くのである。
――見たいやつは見るがいい。これだけの美しい貌が、日本中の何処をさがして、見当るか！　おれは、誇ってやる。おれはみじんもたじろがぬぞ。

その気概があった。

父は、その国にあっては崇敬される聖職に就き、しかも、邪宗門と看做(みな)してこれを封じたこの国に堂々と乗り込んで来た稀有(けう)の勇者なのである。母は、不世出の名工と称(うた)われた、仏像師の娘なのである。その子が、なんの慙(は)ずるところがあろう。たとえ、生を享(う)ける瞬間が、いまわしい事由によるものであったにせよ、生を享けた者に、みじんも罪のあろう筈(はず)がないのだ。

心中そう叫ぶ者が、同じ運命のもとに生れて、物心ついて以来、母が逝くまでの十余年間、ただ一人の遊び友達も与えられず、古びた寺の山内で、孤独で育った人間なのである。

——この子を、おれのようにはさせぬ！

と、誓う決意が、いかに熾烈(しれつ)であるか、われわれには容易に想像がつくところである。

さいわいに——。

好奇の視線に刺される苦痛を知らぬ幼児であった。

じぶんの青い瞳は、海原の上を舞うまっ白な都鳥へあげられていて、うれしそうに、かがやいている。

「おじちゃん、あれ……あれ、なに？」

小さな指が、肩からさしのべられると、狂四郎の頬(ほお)も、ほころびて、

「海のむこうから、とんで来た鳥だよ。……ほら、もしかすると、あの白い雲の中から生れたのかも知れないぞ」

二

大森宿に入ると、往還に沿うて、麦藁細工と和中散の店がならび、旅人の足をとめる。

曾て、狂四郎にとって、これらの店は、無縁であった。

いまはじめて、これらの名物が客を呼ぶわけに気づいて、まず、麦藁細工の店に入って、ちいさなもみじの指の差ししめすままに、彩色した動物玩具をいくつか買った。ついで、和中散の店へ立寄って、二袋を袂に入れた。和中散は、支那の薬で、明の沈惟敬が持参して豊臣秀吉に献上し、幼い秀頼の食傷を癒やして名をひろめたといわれている。この大森では、六地蔵和中散が権威があり、元和元年、津田是斎が、医師中井卜養の女を娶って、小児奇妙丸の薬方を授って江州草津六地蔵で開業したのが、はじまりだという。子供を持つ親は、旅の往き還りに、かならず和中散を買うのを義務としていたのである。

この些細なはじめての経験に、妙にほのぼのとした気分になって、狂四郎は、店を一歩出たとたん、来るべきものに備える鋭い神経が働いた。

店の軒先に——左方に二人、右方に二人、黙然として立っている武士たちが、そうさせたのである。

無視して、ゆっくりと、十歩あまり足をはこんだ狂四郎を、武士たちは、おしつつむように迫って来た。

と——ぴたりと立ちどまって、狂四郎は、その一人へ、冷やかな目をあてた。

「御用か？」

「左様――」

頷いた顔は、二月あまり前、静香の亡骸をはこんだ丘で、突如出現した親不知組の一人のものにまぎれもなかった。

こちらが仏を葬るまで待ってもらいたい、とたのむと心よく承知した指揮格の男である。

「備前屋の依頼によるものなら、わたしがこの子を、さるところに預けて戻るまで、待ってもらいたい、と申していたとおつたえねがおう。備前屋ならば、話はわかる筈です。日限は切って頂いてもよい」

「今日は備前屋とは無関係のことだ」

「お手前がたの意志であろうか？」

「いや、われわれは、われわれの意志だけで動いたことはない。依頼者は別にいる。同道を拒まぬならば、貴公は、招客として遇されることになろう」

狂四郎は、ちょっと考えていたが、

「場所は？」

「鳥見屋敷」

狂四郎は、承知して、歩き出した。

宿をはなれて、右折すると、むかしのままの武蔵野がひらける。

　小男鹿の夜半の草ぶし明けぬれど

　かへる山なき武蔵野の原
と、従二位家隆が詠んだごとく、蒼茫として、楢の林と草地が、新緑に萌えて、目路のはてまでひろがっている。冬ならば望み得る連山も、陽炎のかなたに溶けている。
　狂四郎の前後を挟んで、黙々として武士たちが歩む野路の彼方に、堤がつらなっていた。鶴寄土堤であった。すなわち、この一帯は、将軍家の狩猟場であった。
　——鳥見屋敷で待つ者だとすると、閣老か？　それとも、公方その人か？
将軍家斉はじめ、閣老のうち、この狂四郎を悪む人物は、十指をこえているといってもいい。
　白昼、堂々と、街道を歩いているのが、ふと妙なものだ、という気さえ屢々しているのだ。疾くのむかしに、暗殺に遭っていなければならぬ男なのだ、自分は——。
　——招客か……ふむ。これだけ、八方から憎悪を買うと、かえって、丁重なもてなしを受けることになる。
　狂四郎は、ふっと明るい微笑をうかべると、路傍に咲いた白山吹を手折って、麦藁細工の小馬のあまたに挿して、背中の幼児に持たせてやった。
　鶴寄土堤を過ぎると、楢林にかこまれた藁の葺き足の美しい大きな入母屋の屋根が見えた。鳥見屋敷である。平常は、鳥見役人が起居していて、遊猟地を監視し、時おり鳥の餌を蒔いて、寄り集う習慣をつけておくのである。
　広い平庭に入った時、

「子供を預かろう」
と、申出があったが、狂四郎は、きっぱりと断った。
死ぬなら、一緒である。
通された部屋は、将軍家休息の間であろうか、立派なつくりであった。
床柱の前には、大奉書折にのせた香炉から、ゆらゆらと香煙がたちのぼって、心気の澄むかおりを送ってくる。
それを、なにげなく、胸にすい込んだ狂四郎は、
――お！　そうか！
と、直感があった。この香は、以前、きいたおぼえがある。若草（煉香）である。
かたわらに、ちょこなんと坐った幼児が、もぞもぞとうごいたので、目を落すと、不安そうにまじまじと見あげて来た。
狂四郎は、ひとにぎりほどの小さな肩をたたいて、
「怕くはないぞ」
と、云いきかせてやった。
襖がひらかれた。狂四郎の直感は的中した。目をうばう豪華な打掛をはおって、すすっと入って来たのは、将軍家斉の女高姫であった。
上座に就くと、にっこりして、
「ひさしぶりに、そなたの冷たい顔が見とうなって、迎えをやりました。足労をかけまし

た」
「てまえごとき素浪人のことは、疾くにお忘れかと存じて居りました」
「それ……その小憎い口のきき様がなつかしい」
高姫は、媚をこめて、かるくにらんでおいて、幼児へ、視線を移した。
「その子は？」
「てまえのせがれ——と申上げておきます」
「きれいな顔だちをしていやる。ここへおいで——」
手まねきしたが、幼児は、狂四郎の袂をしっかとつかんでいた。
「てまえをおよびつけになったのが、それだけのことでございましたならば、これで、おいとまつかまつりとう存じます。陽のあるうちに、鎌倉まで行き着かねばなりませぬので」
「なんの用件じゃ？」
「この子を、東慶寺にいるてまえの妻に預けに参ります」
「わたしが預かろうではないか。まま子いじめはいたしませぬ。そなたの子と思うて、大切に育てて進ぜましょう」
「御厚意だけを頂戴いたします。てまえには、てまえの考えがあり、それを枉げたくはありませぬ」
「そうか——」
急に、高姫は、眦のあたりに、険しい色を刷いた。

「そなたは、京で、わたしに、女として堪えがたい恥をかかせました」
「御自分がおまねきになった――てまえの方では、そう申上げるよりほかはありませぬ」
「それをみとめての上で、くやしさは忘れませぬぞ。そなたから受けた槍傷の痕ものこっている」
高姫は、片膝を立てると、間召の立褄へ手をかけて、はらりとめくった。そして、その下の白羽二重の下着も緋縮緬の腰のものも――。
皮をむかれた春筍の滑らかな色とふくらみが、燃えたつ真紅の香羅の中に、鮮かな曲線を描いて、狂四郎に、思わず、固唾をのませた。
高姫は、妖しい微笑をふくんで、片手を、その膝がしらへかけると、徐々に、撚るがごとく股をひろげた。
内腿の雪膚に、ひとすじ、微かな一線がのこっていた。大津のはずれの橋の下から、橋板、乗物の底もろともに縫い貫いた槍が、ふれた痕であった。
「肌は、女のいのちじゃぞえ。このつぐないをどうする、狂四郎？」
高姫は、その嬌艶の姿勢を固着させたまま、詰った。狂四郎は、腕を組んだなり、黙してこたえぬ。
不意に――。幼児が、立ちあがると、ちょこちょこと走り寄って、
「ばか！　あほう！」
と、可愛い口いっぱいに叫んで、かかえた麦藁細工の白山吹をひきぬくや、その膝の内へ、

ぱっとなげつけておいて、大いそぎで狂四郎のところへもどってくると、もう一度、
「ばか！　あほう！」
と、ののしった。
「姫様、如何（いかが）です。てまえのせがれだけあって、風流を心得て居ります。池塘（ちとう）春草に花を咲かせてごらんにいれました。ごめん——」
さっと幼児をかかえあげて、風のごとく、広縁へ出て、庭へ飛んでいた。
「狂四郎っ！」
悲鳴のような呼び声に送られて、狂四郎の五体は、野猿（やえん）のごとく、野づらをかすめて行った。

三

鶴寄土堤を躍りこえた時、背後に殺到して来る剣気をあびて、
——これまで！
と、ほぞをきめた狂四郎は、素迅（すばや）く、幼児を、頭上たかく持上げて、楢の太枝の股へのせた。
「新太郎、しっかりつかまって居れ！　男の子だぞ！」
と云いきかせておいて、身を翻（ひるがえ）して猛然と、斜面を馳（は）せもどった狂四郎と、むこう側から、跳びあがって来た追手の先頭とが、その堤上で、ぶっつかった。

波濤と波濤が嚙みあう――その凄じさに似て、二本の白刃が、宙に煌いた。とみた刹那、ぱっと血飛沫が、陽光を吸って虹を描いた。

まっ向、まっ二つに截ち斬った無想正宗は、青草を抱いて伏した死骸の上で、次の敵のために備えて、ぴたっと円月殺法の構えをとった。

追手の頭数は、十五以上とかぞえられた。

斜面に、横列をとり、刃をつらねて、無言で、肉薄して来る。そして、その陣形が、左右へ、すこしずつ、岐れて行くのを見てとった狂四郎は、

――まずい！

と、さとった。

ここは、狭い堤上である。左右から対って来る敵を、刎ねかえすことは難事ではないが、その隙をねらう伏兵が、両斜面から狙って来るのは必定とすると、これをどう防ぐか、である。

伏兵の眼上に、こちらの全身が、曝されてしまうのである。

が、もう、堤をひきさがる機は逸してしまったのである。

逃路をひらくには、あまりにも肉薄されすぎてしまっている。

――よし！

決意はその瞬間の跳躍に表現された。

「おっ！」

「――うっ！」

疾風を起して、一身を竜巻と化した狂四郎が、ぴたっと、静止相にかえった時、すでに、数個の生命は、あの世に送られていた。

狂四郎の両手には、大小の白刃が、握られていたのである。

痩軀を根生えたごとく、すっくと佇立させた異相子は、双眸の光を宙に放ちつつ、左右の敵にむかって、その大小の剣を、地摺り下段から、ゆっくりとまわして、円月を描きはじめた。

ふたつの切尖が、半円の頂点を指した――刹那、前後に伏していた斜面の敵が、飛鳥のごとく、飛び立って来た。

ぱっと、狂四郎の体位が転じた。

颯、一颯――。

二名の伏兵は、扇がひらくように、のけぞった。

次の瞬間、狂四郎の構えは、もとにかえっていた。

この時である。

堤に沿うて、一頭の馬が、狂ったように奔駆して来たのは――。

――天佑！

狂四郎の脳裡に、その歓喜がひらめいた。

「ゆくぞっ！」

わざと、凄じい呶号をあげて、ふたたび、一身を竜巻と化すとみせかけて、敵の陣形を一歩退らせておくや、堤上の血染め草を蹴った。

かるがると、狂四郎の五体は、宙を翔けて、奔馬の上へ、移っていた。

「しまった！」

「やるなっ！」

喚く面々へ、ちらっと皮肉な微笑をのこしておいて、二刀を腰に納めて、たづなをとった狂四郎は、さっと乗り出しざま、楢の木股にしがみついている幼児を片手に抱きとって、蹄の音を地から噴かせた。

みるみる一町余の距離をひらいて、間道への曲り角に来るや、

――お！　あれは！

狂四郎の眼眸は、とある杣小屋の陰に彳む人影をとらえた。

女性であった。高姫の侍女――琵琶湖上の空中を飛んで、こちらの砧手花瓶を奪ったことのある綱代であった。

奔馬を与えてくれたのは、この女性だったのである。

阿弥陀ヶ峰の決闘で敗れて、高姫の虜囚となった時、綱代が、突然あらわれて、棕櫚縄を切ろうとした。それを冷たく拒絶すると、彼女は、蒼白になって、頬へ平手打ちをくれたものだった。

怨恨こそあれ、援けてくれる理由はない筈である。

狂四郎は不可解な女心を、そこにも見た複雑な思いをこめて、目礼した。
綱代も、目礼した。その白い顔は、なぜか悲しげであった。馬は、世に容れられぬ男と幼児をのせて、間道を、矢のように駛走して行った。

四

東慶寺の妙喜庵の一室には、いま、えもいわれぬ芳香が、たちこめていた。
新緑をそよがせる松風の音を、外にききつつ、十余名の女たちが、香道を行っていたのである。
明子も、美保代も、そのなかに交っていた。
その技は、古組香十品——名所香であった。香四種。四包みずつ三組にわけて、そのうち一包みずつ試みに出し終ってから、出香十包みをうちまぜて焚出すのである。一炷をひらきにして、立物をすすめ、勝負する。
盤は、五行に十目、中に勝負の場がある源平香のものを使用する。その盤でわかるように、もとは、源平にわかれて行っていたのであるが、寛永の頃、源平の争いを不吉であると忌みて、米川常伯がこれを改めて、紅白の旗を、花と紅葉にうつしかえたのである。
すなわち、吉野方と竜田方にわかれ、前者は桜、後者は紅葉を立てる。
源平香は、双方の旗がゆき当ると、負けた方をあとに退けて手前の旗をすすめて行くのであるが、名所香は、行き当れば、行きちがって行くのである。

明子は、吉野方、美保代は、竜田方――この二人が加わっているために、勝負は、いずれともつかぬ形勢であった。

みなは、明子と美保代に信頼を置き、そして、二人は、交わす微笑に、戦意をふくめた。

時刻が移り、ともに同点となった時、ついに、美保代が明子にかるく会釈(えしゃく)して、伏せた旗を、つと立てた。

一点差で、竜田方が勝ったのである。

「ああ、くやしい！　このつぎこそは、桜を咲かせてみせますぞ」

明子が、あかるい大声をあげたおり――尼僧が、跫音(あしおと)もなく入って来て、

「美保代どの――」

と、呼んだ。

みなに一礼して、外へ出た美保代は、婢女(はしため)が背負うている幼児を、庭に見出(みいだ)して、なぜとなく、はっとした。

勿論(もちろん)――この幼児が、江戸から当所までつれて来られる道中、目を瞠(みは)った人々と同じおどろきを、美保代も受けたのであるが、霊感といおうか、その刹那、つぶらな眸子(ひとみ)に吸いよせられるじぶん自身を意識したのである。

のちになって思えば、

――あの時、わたくしは、母になった。

それであった。

「お手紙です」
尼僧は、ただそれだけ云って、それを手渡すと、静かに立去った。
おもてに記された「美保代殿」という書体を一瞥(いちべつ)しただけで、美保代の胸はおどった。まさしく、うらには、夢裡(むり)にも忘れぬその人の名が記してあったのである。
美保代は、封書をふところにすると、婢女に、
「このお子に、お手紙が添えられてあったのですね？」
と、訊(たず)ねた。
「はい、左様でございます」
「ご苦労でした。あずかります」
美保代は、手をさしのべた。
幼児は、おとなしく、見知らぬ美しい婦人の胸に移ると、まじまじと瞶(みつ)めあげた。
「坊や、小父(おじ)さまに、なんといわれて来ました？」
幼児は、そう問われて、ちょっと不服そうに、あかい小さな唇(くちびる)をとがらしたが、
「小母ちゃんが、母さまになってくれる、って——」
「おお、そう申されたのですか！　はい、小母ちゃんが、今日から、そなたの母さまになります」
「小母ちゃん」
「はい——」

「小父ちゃんは、どこへ行ったの？」
「お手紙を読みましょうね。きっと、書いてありますよ」
観音堂の裏手の庵にもどった美保代は幼児を膝に置いて、かすかにわななく指で、封書をひらいた。
その内容は、左のごときものであった。
『そなたに預ける小児は、わたしと同じ宿運を背負うて生れた。父母すでに亡い。その父は、わたしの兇刃に倒れた。その母も、不測の厄に遭って、この世を去った。わたしは、その臨終において、小児をわが子とすると心に誓った。その時、そなたのことが思い泛んだからにほかならぬ。無頼を良人と思いさだめて、非運にあまんじるそなたに、さらに、大きな重荷をおしつける残酷をゆるしてくれるならば、何卒、小児をつれて、江戸へ帰ってもらいたい。武部老人が、万事心得て、そなたたちの身のおちつけ場所を用意してくれる筈である。
そなたが、わたしを避けて東慶寺にとどまる理由がないことは、同封の静香の遺書によって明らかである。わたしが、小児のみを預けて、会わずに立去るのは、他意はない。わたしの馴染みの御連中が、門前にて、この手紙の書き終るのを待っているからである。もとより、気づかいは無用。人の子の父親となった身は、大切にする。そなたたちに会わずにむざむざこの世を去るわけにはゆくまい。わたしが、はじめて、生命を惜しむのである。そなたのみがこの未練を、理解してくれるのであろうか。では、いずれ、近い

日に――』

美保代は、いそいで、静香の遺書をひらいた。

『……美保代さまは、決して、右近によってははずかしめをお受けになっては居りませぬ、あの夜、わたくしは、右近のあとを尾けて参り、みにくい所業におよぼうとするのを、はばんだのでございました、美保代さまは、お気を失われたまま、朝をお迎え遊ばしたために、つい、あらぬはずかしめを受けたと、思いちがいをなされたのでございましょう、決して、決して、そのようなことはございませぬ……』と記されたくだりを、美保代は、思わず、歓喜の叫びをもらして、むさぼり読んだ。

それから――。

美保代は、しばらく、幼児を抱きしめて、たとえ様もない幸福感の中に、じっと身をひたしていた。

幼児は、いつの間にか――旅のつかれで、美保代の胸に、頰を寄せて、すやすやとねむっていた。

二日後――。

一梃(ちょう)の駕籠(かご)が、鎌倉街道を、江戸へむかっていた。

垂れがあげられ、異端の貌(かお)の子をかかえた母の顔が、乳色の朝陽をあびて、人の世の幸せを一身にあつめたように明るく、美しく、かがやいていた。

義眼文字

一

「な、な、なにをこきゃがるんだ、こん畜生っ！　女房がなんでえ、女房が。女房なんざ、掃いてすてる程あらあ、べらぼうめ」

　職人ていの男が、酔っぱらって、ひとり大声でわめいていた。

永代橋(えいたいばし)を渡ったとっつきの佐賀町の居酒屋である。門口の、さけさかなと書いた行灯(あんどん)にあかりが入った頃あいであった。

　ほかの樽(たる)に腰かけていた連中が、笑い乍(なが)ら、

「春公、また女房に逃げられたらしいの」

「婆(ばば)あがああ因業(いんごう)じゃ、もう来る女はいねえだろう。これで五人目だ。後世(ごせ)ねがう余力で嫁をいびるなり、だ」

「春公もいけねえやな。ろくなかせぎもしねえで、朝っぱらから酔っぱらっていやがるんだから、たいがい愛想もつきらあ」

　きこえたとみえて、春公は、酔眼をあげた。

「愛想がつきたと――ふざけるねえ、
　鬢のそそ毛をかきあげて
　膝にもたれて、目に泪、
ってんだ。
　そうしたお前のかんしゃくは
　いつもの事とは云い乍ら
　わけも云わずに腹たてて
　せかずに訳を云わしゃんせ
　臥床で抱かれて、きくわいな
てなくどきを、てめえなんざ、きいたことがあるめえ。……へん、あいつは、嫁に来た時、未通女だったんだぞ、渋かろか知らねど柿の初ちぎり、とくらあ、てめえの嬶のような、吉田町の夜鷹あがりとはわけがちがうぞ」

「なにっ、おれの女房を、夜鷹だとぬかしゃがったな！」

「おお、云ったがどうした。てめえの嬶は、出臍で、客を乗せて、二、三べん、くるくるっと回す芸当を持っていやがったろう」

「やいっ！　春公、おれの女房の出臍を見やがったか！」

「見たことはねえが、もっぱら、そういう評判だい」

春公は、ふらふらと立ちあがって、盤台の茹蛸をとって、ひょいと頭へのせると、吊され

た八間の下の土間で、出鱈目に踊りはじめた。

ひとつひよどり
ふたつはふくろ
三つみずく
四つはよたか
日さえ暮れれば
あっちでこそこそ
こっちでもぞもぞ

そのうち、よろけて、片隅の台で、俯伏していた浪人ていの武士にぶっつかった。とたんに顔をあげた武士は、

「莫迦！　うるさいっ！　消えうせろ！」

と、怒鳴りつけて、突きとばした。

酔いで蒼白になった凄い形相であった。まだ若く、素姓もいやしくなさそうな面差であったが、なぜか堪えがたそうな焦燥の色をみなぎらしていたのである。

「な、なんでえ。こん畜生っ、二本差が怕くって、田楽が食えるけえ。野郎っ！」

とびかかろうとした春公を、あわてて職人たちが抱きとめて、無理矢理、おもてへつれ出して行った。

若い武士は、どうにもならぬ憂悶を酒でまぎらわしていたとみえて、さめかかったのをお

それる気色で、

「酒だっ！」

と、空の湯呑みで、台をたたいた。

その時、小女が、銚子を持って出て来たが、それを、小座敷の方へ運ぼうとしたので、

「こら――それを、こっちへ寄越せ」

猿臂をのばして、ひったくろうとした若い武士は、小座敷の衝立のかげに、ひとりの浪人者を見出して、はっと息をのんだ。

眠狂四郎であった。小肥りの町人とさしむかって、静かに飲んでいたのである。

若い武士は、一瞬、ためらったが、眉宇をひきしめると、狂四郎の横顔を鋭く凝視しつつ、寄って行った。

声もかけずに、そこにつっ立ったまま、睨みつづける若い武士を、狂四郎は平然と無視して、盃をかさねた。

むかいの町人――鼠小僧次郎吉の方は、

――なんだ、こいつは？

と、うさん臭げに、じろじろと見やったが、若い武士は、そちらへ視線をかえす余裕もない様子で、まばたきもしなかった。

やがて、若い武士は、切口上で、

「眠狂四郎殿に、おたずねしたい儀がある」

と、云った。
狂四郎は、しかし、依然として目もくれず、返辞もしなかった。
若い武士は、もう一度、同じ言葉をくりかえした。すると、狂四郎が、冷やかにこたえたのは、
「御自身のことなら自分ひとりで考えられるがよかろう」
つきはなしたその言葉だった。ちゃんと、この若い武士の憂悶のさまを見てとっていたのである。若い武士のこめかみに、青い筋が浮いた。
狂四郎は、はじめて、眼眸（まなざし）をその顔へあてて、ふっと微笑した。
「と云いたいところだが、さっきの職人の二上り新内ではないが、せかずに訳を云わしゃんせ――かな」
「拙者は、備前屋に飼われている用心棒だ。おぬしを狙（ねら）ったこともある。……ところが、最近になって、拙者は、備前屋を憎んでいる。斬（き）ってやりたい。斬ってやる理由がある！」
「斬ればよかろう」
こともなげに、狂四郎は云いすてた。
「ところが、斬れないのだ！　あいつの前に出ると、拙者は、手も足も出なくなるのだ。あいつの態度に、威圧されてしまうのだ。あいつの眼光を、はじきかえせぬのだ。……備前屋を斬るには、どうしたらいいか、それをうかがいたいのだ」
「無理な御相談だな。わたしは、いままで、斬りたくて斬った対手（あいて）は居らぬ。斬らねば斬ら

れるので斬って居る。……備前屋は、いかにも、むこうにとっても、わたしにとっても、斬らねばならぬ敵同士だが、どうやら、これ程までに古馴染になると、お互いに時々会いたくなるなつかしさをおぼえる。したがって、備前屋を斬るには、どうしたらいいか、これは、お教えするには、わたしという男は、甚だ不適任ということになる」

「………」

若い武士は、何か云いかけて、思いかえすと、

「おぬしだって、備前屋だけは斬れやせんのだ！」

と、いまいましげに吐きすてると、くるりと踵をまわして、出て行こうとした。

「おい――」

狂四郎は、呼びとめて、振りかえった陰惨な顔へ、

「斬れないと思っているあいだは、刀を抜くのは止したがいい。文字通り犬死になる」

「よけいなお世話だ！」

若い武士の姿が、縄暖簾のむこうへ消えると、次郎吉が身ごなし軽く立ちあがった。

「旦那――。あっしは、ちょいと……」

尾けてみる、というのであった。

「物好きだな」

「へへへへ、物好きが高じて、天井裏の鼠になりやした」

狂四郎は、苦笑して、

「気をつけたがいい。対手は、公儀の米蔵をねらっている大鼠だ、嚙みあうと、お前の負だぞ」

二

――斬ってやる！　断じて、斬ってやる！

初夏の夜風の渡る柳橋の橋板をふみ鳴らし乍ら、若い武士――岩佐栄太郎は、おのれをけしたてるように、心でくりかえしていた。

前年、琉球から、新たに就任した中山王が、将軍家へ使節を遣して来たことがあった。正使豊見城王子、副使沢紙親方にひきいられて、讃儀官、儀衛正、掌翰使、楽征、楽師、楽童子およそ百余名であった。その時の献上物は、御太刀、中央卓、石人形、籠飯、芭蕉布、大平布、久米嶋綿、泡盛酒などであったが、この荷船は、使節一行よりひと足さきに、深川中洲へ到着したのであった。

備前屋は、大胆にも評定所留役大目付および勘定所吟味役と共謀して、この荷船を利用して、抜荷買いをやったのである。岩佐栄太郎が、勘定所吟味役に呼びつけられて、

「中洲の川船改役の佐久間主殿は、その方の義弟だそうだの」

と訊ねられたのは、それより一月あまり前であった。

吟味役は、琉球使節の献上船に、抜荷がひそめてあることをほのめかして、これを極印打ちの川舟へ積み替える際に、栄太郎が、義弟主殿と、じかに交渉してうまく取りはからわせ

るように、と命じたのであった。栄太郎は、しかし、いったんは、きっぱりと断った。義弟主殿は、謹直の士であった。抜荷と知ったならば、身命を賭しても阻止しこそすれ、黙過する筈がなかったからである。

「いや、主殿には気どらせないで、そちの言を信用させるのだ。その方法があるのだ。……成功すれば、主殿を、勘定所御殿詰にとりたてることを約束しようではないか。主殿は、おのれの精励がみとめられたものと、素直によろこぶであろう」

栄太郎は、主殿の貧しい暮しを知っていた。妹が、昼も夜も、内職しなければしのげない有様をつぶさに見ていた。自分のような、放蕩無頼に身をもち崩した者の目には、そのつつましい貧しさは、やりきれないものに映っていたのである。

——主殿に気どられない方法があるなら……。

栄太郎は、つい、承諾したのであった。そして、その仕事は、成功した。

だが、主殿は、いつまで経っても、御殿詰にとりたてられる様子はなかった。

不運にも、栄太郎は、主殿が、御殿詰にとりたてられるかわりに、職務の手落ちを問われていることを、気がつかなかった。主殿が妻にも栄太郎にもかくしていたからである。

北町奉行榊原主計頭配下の市中取締諸色調掛の与力が、偶然、日本橋雉子町で短筒を所持しているやくざ者を捕えたことに端を発して、これが、琉球使節の荷船から出たものらしいと調査がすすめられるにおよんで、その日の改役佐久間主殿が、追咎されることになったのである。

鉄砲は、江戸の近隈十里四方の地域において私かに所持することを厳禁されていた。即ち、謂うところの十里四方鉄砲改めである。鉄砲方、鉄砲頭等の有司のほかは、猟師と雖も発砲一切を停禁せられていたし、町内においては、たとえ預り鉄砲であっても、梃数、弾丸の重量を明細に記載して、届出なければならなかったのである。かくし持っている者を捕えただけでも、賞銀三百枚という制令があったくらいであるから、いかに公儀が神経を鋭くとがらしていたか、明らかである。

佐久間主殿は、再度隠密裡の取調べを受け、いったんゆるされて、帰宅したその夜に、切腹して果てたのであった。

いま、栄太郎の懐中には、主殿の遺書がある。

……なにとぞ、兄上にお願い申上げます。奸商備前屋の私利私欲の手先につかわれて居ることをおやめ下さい。正道におつき下さるよう、主殿さいごの忠告をつかまつります。

主殿は、栄太郎が、備前屋の用心棒となって、自分の目を誑して、鉄砲を密輸入したことを知り、それをかたく秘したまま、責を一身に負うて死んで行ったのである。

くそ！　くそ！　おれは、備前屋を斬る！

栄太郎は料亭升屋の裏口から、跫音をしのばせて、入って行った。

三

このおり、泉中に組まれた寝殿造りの亭では――。

備前屋と、卓子をへだてて、むかいあっているのは、豪華な唐人服をまとった異人であった。水主（かこ）あがりの通弁がそばにひかえている。

炯々（けいけい）たる眼光が、ただものでないのを思わせる。剃刀（かみそり）のように細く尖（とが）った鼻梁（びりょう）と殆（ほとん）ど唇（くちびる）のないにひとしい、一文字の口が、性格の異常な酷薄さをしめしている。立てば六尺数寸はあろう巨軀（きょく）である。両手の指先まで掩（おお）うた赤毛は、見るもおぞましい。

「つまり、日本中の山をさがして石炭を掘り出して、平戸へ運べ、というわけだな」

備前屋は、通弁に云った。

「左様です。どんな品物よりも、これが一番交易の利を得ると申しております」

「いま、石炭をひろって、使っているのは、筑前（ちくぜん）の、嘉穂（かほ）、鞍手（くらて）、遠賀（おんが）、宗像（むなかた）、粕屋（かすや）あたりだったな。ふむ！」

腕を組んで、備前屋が、じっと思案を凝らしはじめたところへ、岩佐栄太郎は、のっそりと入って来たのであった。

その気配に、ふりかえった備前屋は、眉（まゆ）をひそめて、

「用がおありなら、飯倉新町の店の方でききとると申上げてある筈だが」

と、云った。

もし、備前屋が、そこに一人だけいたのであれば、栄太郎は、用意した激しい言葉をなげつけて、たじろがず、あるいは、対手の出様で、刀を抜きはなったかも知れない。対坐（たいざ）した人物が、生れてはじめて接する異邦人であり、しかも、大柄（おおがら）な備前屋が子供のように見える

巨漢であったことは栄太郎の出鼻を完全に挫(くじ)いてしまった。

——しかし、——斬る！　とおのれに吼(ほ)えたてた手前、黙ってひきさがる屈辱にあまんじるわけにはいかなかった。栄太郎は、むっつりとして、そこへ坐った。

「わからぬ御仁だな。この料亭に、あんたのような人は、出入してもらわぬという約束を、お忘れなのか」

「拙者は、今日は、おぬしの用心棒としてではなく、佐久間主殿の兄として参ったのだ」

そう云いはなつや、遽(にわか)に、栄太郎の全身に鋭気がこもった。備前屋は、黙って敵意の光を加えた栄太郎の眸子(ひとみ)を、受けとめた。

「主殿の遺族に、五百両出してもらいたい。おぬしには、そうする義務がある筈だ」

咄嗟(とっさ)の間に、斬る意志を、その要求に替えた栄太郎は、

——承知しなければ、その時こそ！

と、心で叫んだ。すると、意外だったのは備前屋が、あっさり、

「出しましょう」

と、こたえたことだった。

「五百両と申されず、千両とふっかけてもらってよかった」

てのひらをかえすような態度に、栄太郎はあっけにとられた。

備前屋の笑顔には、微塵(みじん)の陰険な色も含まれてはいなかった。肚裡(とり)の窺知(きち)をゆるさぬそのゆったりとした気色が、曲者(くせもの)だった。

「勿論、ただでは出しませんよ。あたりまえのことだ。私は、商人ですからね。取引きというものを考えての上でのことだ」
「なんの取引きだ？」
備前屋は、栄太郎の食いつきそうな形相を、じいっと見まもったが、
「あんたにやれるかな？」
と、じらすように呟いた。
「だから、なんの取引きだ、ときいて居るのだ？」
「かんたんな話だ。娘を一人、敵から奪いかえして来てもらいたい――」
「娘？」
「たしか、あんたが、目をかけて、いたわっていたと思うが……元勘定所勝手方組頭、兵堂掃部さんの娘百合枝。あの盲目だ」
栄太郎は、べつに、その素姓は知らなかったが、備前屋がどこからか拉致して来たらしい盲目の娘が、飯倉新町の店の離れにいたので、時おり、立寄っては、なぐさめてやっていたのである。もし白濁した目が癒るものならば、どんなにすばらしいだろう。ひそかにあわれまずにはいられない美しい顔だちであった。娘の方も、いつか、栄太郎のおとずれを心待ちにしている風であったが……。
それが……突然、姿を消してから、もう二月あまりになる。
――あの娘はどうしたろう？

と、折にふれて、思い出していた栄太郎であった。

「どこにいる？」

「水野越前守の中屋敷――西本願寺裏にある。……忍び込んで、首尾よくつれ戻せたら、千両、耳を揃えてさしあげるが、どうでしょうな？」

「つれ戻したら、あの娘をどうしようというのだ？」

備前屋は、ちょっとためらっていたが、

「そうだな。あんたに、水野邸へ侵入する勇気を出させるために、お教えしておこうか。あの娘の盲目は、どうやら、贋らしい」

「え？」

「こちらにおいでの方は、おらんだ人で、フォン・エックと仰言る。世界中を股にかけて歩かれた御仁だから経験も豊富で、面白い。寧波で、海賊につかまった話などは、私ひとりできくのはもったいないくらいのものだった。その時、エックさんは、大きな魚の鱗を、目玉に嵌め込まれて、にわか盲目にされたそうな。……その話をきいたとたん、私の頭にピンと来たのは、あの娘が、ある朝、目をさましたら世界が闇になっていたという事実だ。そうされる理由があったのだ。……流石の私も、そこまでは、気がつかなかった」

「…………」

「まず、十中八、九まで、私のカンは、はずれまい。……岩佐さん、あの娘をつれ戻して下さるなら、目あきにして、千両に添えて、あんたにさしあげよう、と云ったら、どうだね？

こりゃア、一番、勇気を出して頂かねばならぬというものだ」

この時であった、不意に異邦人が、すっくと立って、音もなく、床の間へ寄って、そこにたてかけてあった彼が携えて来たらしい洋剣をつかみとったのは——。

すらりと、抜きはなたれた、縫針の化物にも似た両刃細身の長剣(レピアー)を、栄太郎は、それが自分につきつけられるのではないか、という微(かす)かな恐怖をおぼえて、身をひきしめた。

ちがっていた。

フォン・エックは、いきなり、部屋の一隅へ走って、無言で、天井を、ぐさっと、刺し貫いたのであった。刺し口に、じわっと真紅が湧(わ)き滲(にじ)むや、血汐(ちしお)は刃をつとうて、鍔(キョン)にしたたり落ちた。

しかし——

そこに忍んだ者は、ついに、ことりとも物音も立てずに、消えうせたのであった。

四

内藤新宿を出て、成木(なりき)街道(青梅(おうめ)街道)をすこし歩くと、人家は絶えて、蒼茫(そうぼう)たる萱原(かやはら)に入る。昼ならば、青梅の近在成木、小曾木(こそぎ)からはこばれる石灰の次立(つぎたて)人馬や堀の内への参詣(さんけい)人の往来で、かなりにぎわう街道も、陽が落ちるとともに、人影が、ぱったりとなくなるのである。狐狸(こり)が跳梁(ちょうりょう)して、淀橋(よどばし)のむこうは、夜は歩けぬ、といわれていたのである。

星あかりの下を、狂四郎は、ひとりで、この成木街道をひろって行き、やがて、神田川に

架けられた淀橋の上に立った。旧名を面影橋(おもかげばし)ともいい、そのむかし、中野長者が、巨金を下男に背負わせて、萱原に匿(ひそ)ませ、その戻り、口外をおそれて、この橋の上で、殺して、流れへ突き落した話で有名である。

北方を、じっとすかして見た狂四郎は、くろぐろとわだかまった林のかなたに、塔のいただきが、闇の中にさらに濃く輪郭を截(き)ってそびえているのをみとめた。周偏法界塔という寛永の頃建てられた三重塔であった。

——あそこだな。

自分に頷(うなず)いて、橋を渡ると、右折した。

幾年前かに、道心が一人、塔のほとりに小庵(しょうあん)を結んで住み、毎夜たずねて来る狐(きつね)が携える小豆と米で糊口(ここう)をしのいだ話があるくらい、まったく草深いところであった。

狂四郎が入って行ったのは、塔の裏手にある屋敷であった。夜目にもそれとわかる凝った数寄屋(すきや)造りで、穂垣(ほがき)をめぐらし、梅軒門をくぐって、置石をふむと、ひろくとった庭には、羅漢槇(らかんまき)や女青(じょせい)や山茶花(さざんか)や樅(もみ)などの常葉樹がしげり、そのあわいに、石灯籠(いしどうろう)や、飾井戸やつくばいがのぞまれた。化生(けしょう)がつくった幻想の屋敷ともいえそうである。

武部仙十郎が、えらんでくれたすみかである。萱葺(かやぶ)きの母屋(おもや)から、漏れ出る灯影(ほかげ)が妖(あや)しくさえ感じられる、たたずまいであった。中門があり、それを抜けると、数間の敷石のむこうに、御輿寄(みこしよ)せみたての玄関の明り障子が、ぼうっとあかるく浮きたっていた。

沓脱(くつぬ)ぎに立って、案内を乞(こ)うと、すぐに人の気配がして、しずかに開けられた。

狂四郎は、そこに、つつましく両手をつかえた美保代の、﨟たけたすがたを、二年ぶりに見出した。美保代もまた、夢裡に描きつづけた彫のふかい貌を見あげた。

思わず知らず、内にあふれた感動が、口を衝いて出ようとして、はっとはじらった美保代は、美しく上気した顔を伏せると、

「おかえりなさいませ」

と、頭をさげた。狂四郎は、無想正宗を、その白い繊手に渡しておいて、

「この屋敷に、そなたとこどもと二人きりか?」

と、訊ねた。

「はい。ほかに、水野家より下男が一人参って居ります」

囲炉裏のある部屋に入り、杉戸の開けはなたれたむこうの座敷を見わたして、

「風雅すぎるな」

と、狂四郎が笑うと、美保代も、微笑して、

「お気に召しませぬか?」

「そなたのすがたは、このすまいにふさわしいとみた」

「まあ!」

美保代は、はじめてきく狂四郎のお世辞に、頰を染めた。

二年の歳月は、一瞬の間に過ぎ去っている。二人は、期せずして、もうずうっと前から、こうして静かな夜を、この風雅な部屋で対坐して、くらして来ているような気がしていた。

「こどもは、そなたに、なついて居るか？」
「はい。だだもこねてくれます」
「そなたのからだでは、こどもを育てるのは無理かも知れぬが――」
「いいえ――。かえって、毎日に張りがございます」
それから、美保代は、作法正しく茶をたてると、そっとさし出しておいて、うっとりと、狂四郎の横顔へ眸子をあて乍ら、小声で、
「わたくし、幸せでございます」
と、云った。
狂四郎は、楽茶碗を、袱紗へもどして、芙蓉の薫るに似た静淑な面差を眺めた。
「わたしは、明日になれば、ふうっと出て行って、また二年も戻らぬかも知れぬが――」
その言葉は、しかし、美保代の表情を暗い色にかげらせる威力はなかった。
「よろしいのでございます。どこへお行きなされても……いずれは、わたくしのところへおかえりなさいます。この前、江戸をはなれてお行きになりました時もそう信じて居りましたし、いまもその気持にかわりはございませぬ」
狂四郎は、なにものにも奪われぬ女の愛情の強さを、その華奢なすがたの中に見乍ら、それにこたえる言葉を持たぬままに、自在からつるされた鉄瓶のたてる松濤の音を、じっときいていた。

朝——。
狂四郎は、広縁に立って、芝生で小犬とたわむれている青い目の幼児を、眺めていた。遠くで、のどかに牛の啼く声がしたし、屋根では、雀たちが囀っていた。
芝生を割って流れる水は、ならべた小石にあたって眩しく光っていた。せせらぎの音もきこえるのである。
この平和な、静かな朝のひとときを、狂四郎は、微かなとまどいの気持で、受けいれている。
背後の畳に衣ずれの音がして、
「旦那さま——」
と、美保代の声がした。
ふりかえった狂四郎は、朝陽をあびたその麗しい顔を、ふしぎなものに眺めずにはいられなかった。昨夜、灯を消したのち、こちらの欲情にこたえて、歓喜にもだえ、のたうったしなやかな熱い肢体と、この気品たかい清楚なすがたが、同じものであろうか——。
「次郎吉と申す者が、参って居ります」
狂四郎は、うなずいて、すぐに入って行った。次郎吉は、囲炉裏の前で、窮屈そうにかしこまっていた。その左手くびに、巻かれた白い晒を見て、
「やられたか？」
「かすり傷でござんす」

にやっとしてから、次郎吉は、手短かに、昨夜、升屋の亭の天井裏でぬすみきいた一埒（いちらつ）を告げた。

腕を組んで、黙ってきいていた狂四郎は、あっさりと、

「すてておくんだな」

「だって、旦那、それじゃ、あの百合枝様がお可哀（かわい）そうじゃござんせんか」

「いや、ほかの悪党なら知らず、備前屋のやることだ。……おれは、あの男を、かなり高く買っているつもりだ。……もし、備前屋が、おれの評価を、自分で下げるような真似（まね）をしたら、その時こそ、斬る。たぶん、おれに、刀を抜かせぬ筈だ」

五

三日後、岩佐栄太郎は、水野忠邦の中屋敷から、百合枝をひそかに奪いかえすことに成功した。ただちに、備前屋は、升屋の亭で、栄太郎に固唾（かたず）をのませておいて、仰臥（ぎょうが）させた百合枝の双眼から、玻璃（はり）を、はぎとったのである。

狂喜するとばかり思った百合枝が、意外にもなぜか怯々（おずおず）した様子をみせるのにふと不審をおぼえつつ、備前屋は、いそいで、卓上へならべた二枚の玻璃の裏面へ、天眼鏡をかざした。

すると――。

みるみるうちに、備前屋の顔面がこわばり、太い眉の片方が、びくびくっと痙攣（けいれん）するのを、栄太郎は、見た。

玻璃の一枚には、
『猿猴(えんこう)月を取る勿(なか)れ』
と、刻んであり、もう一枚には、
『眠狂四郎』の四文字があったのである。
すなわち、狂四郎が、いつの間にか、百合枝の双眼から、埋蔵金の在処(ありか)を記した玻璃をはいでいたのである。再び贋盲目にさせておいたのは、この日あるを予測したからにほかならなかった。
息づまる長い沈黙がつづいたのち、突然、備前屋の口から、高い笑い声が発しられた。
「はっはっはっ、わしの負けだ！」
それから、栄太郎を、じろりと見やった備前屋は、
「とくをしたのは、あんただけだ、岩佐さん。わしは、いったん約束したことは守る男だからね」
そう云って、千両箱を持って来させるべく、呼鈴を鳴らしたのであった。
まさしく――狂四郎の予感は当っていたのである。

白鳥主膳

一

五月――夏至（げし）、半夏至、梅雨、竹酔日（ちくすいじつ）などあり、空には男児の絵幟吹貫鯉（えのぼりふきぬきごい）を見、地には乙女の田植あり、合歓（ねむ）の花、夕に咲き、葵（あおい）の午日に傾くより、たたく水鶏（くいな）をきき、公（おおや）けには、端午の御祝儀（しゅうぎ）あり。

とは、例によって、江戸の絵本にある文章を引いたのだが……。

その端午が今日であるしるしは、市中の賑（にぎ）わいとは全く無縁の、この荒れはてた旗本屋敷の内にも見うけられた。

庭にむかって障子を開けはなった座敷の天井から、幾個かの薬玉（くすだま）が、つりさげられていたのである。

絹縮緬（きぬちりめん）と絹糸でつくられた美しい品で、吹き込む風でゆらゆらとゆれるにつれて、ほのかないい香りがただよい出るのであった。中に、匂（にお）い薬がしこんであるのである。端午には、武家方大奥では、必ず、これを風みちにつるすならわしであった。

縁側に坐（すわ）って、柱に凭（よ）りかかり、うすくまぶたをとじているこの家（や）のあるじは、このゆか

しい匂いをきくにふさわしい妖しい美貌であった。

白鳥主膳である。

生きていたのである。氷のように冷酷な、浪漫派のこの剣客は——。

とじたまぶたのうらには、桂宮明子の清純な俤が、たゆとうている。

薬玉の香りが、その俤を甦らせたのである。

先程、用人が来て、

「姫宮様が、つれづれの手すさびにお作り置きになりましたので、つるしておきましてございます」

と、告げたのであった。

——そろそろ、東慶寺から、つれもどそうか。

その考えがわいている。東慶寺を荒らす行為など、この男にとって、べつだんの決意を要しないことだった。邪魔する尼僧があれば、平然と斬りすてるまでである。

つれもどして、どうしようというのではない。以前通りに、明子をこの屋敷に住まわせておき、ときどき、戻って来て、その顔を眺める——それだけでいいのであった。

——姫宮は、蛍が好きであったな。もうすぐ、この庭へはなつ夜が来るが……。

目をあけて、荒れた庭を眺めやった時、廊下をふむ跫音がした。

「すっかり、ご本復のご様子でございますな。結構でございました」

そう云って、一間をへだてて坐ったのは、備前屋であった。

眠狂四郎から瀕死の重傷を負わされた身が、こんなに早く治癒したのも、備前屋がとどけてくれた西洋薬のおかげであったようである。

主膳は、しかし、その礼をのべようともせず、軒下にさげられた鳥籠を指さして、

「鶯が、春を啼きすぎて、死んだ。もうひとつがい届けてくれぬか」

と、たのんだ。

「かしこまりました。目白も、いい音色のを手に入れましたので、ついでにさしあげましょう」

備前屋は、そうこたえてから、腕を組み、まじまじと、主膳の美しい横顔に見入り乍ら、

「近頃また、辻斬りがはやって居りまするな」

と、なにげない調子で云った。

主膳は、こたえず、眉毛一本動かさなかった。

――小鳥を愛でるやさしい心を持ち乍ら、夜な夜な、なんの理由もなく、藁束でも斬るように生き胴をまっぷたつにしている。生れ損いというよりほかあるまい、この若い男は……。

備前屋の胸のうちには、その呟きがあった。

主膳は、じろりと、備前屋を見て、

「おぬしのところへ、洋剣を使うおらんだ人が逗留して居る由だの」

「ほう――もうお耳に入りましたか」

「わしと、一度、試合をさせぬか？」

「そりゃァちと無理な御相談でございますな。あれは、手前の交易相手でございます。第一、貴方(あなた)様には、是非とも仆(たお)さねばならぬ対手(あいて)がほかにいるじゃございませんか」

「わしは、べつに、眠狂四郎に、敗(ま)けたからといって、遺恨は抱いて居らぬ」

「どうしてでございます？」

「お互いに堂々とたたかっただけのことだ。勝負は時の運——うらむ筋合はなかろうではないか。わしは、今でも、あの男に、業(わざ)において劣っていたとは思って居らぬ。こんどたたかえば、わしが勝つかも知れぬ。あるいは、また敗れるかも知れぬ。あの男の方も、そう思っているだろう。いずれにしても、わしもあの男も、剣理の要諦(ようたい)をきわめたい、という熾烈(しれつ)な思念に燃えているわけでなし、あらためて雌雄を決しなければならぬとは考えぬ。その点で、わしは、ほかの隠密(おんみつ)たちとは、聊(いささ)かちがう。果し合うまでは、必ず、あの男を仆す心算(つもり)でいたのだが……」

実は、主膳は、狂四郎の一策に乗ったために敗れたと、気づいているのであった。

あの夜——。

狂四郎は、対(むか)い立つや、

「たたかう前に、ひとつ、お手前にたずねておきたいことがある」

と、云った。

「何か？」

「お手前は、姫宮を、桂離宮からつれ出し、江戸へともなう道中の間、また自身の屋敷に入

れてより、何故に、わがものにしようとの野心を抑えつづけたか――その心中の程をききたい」

この質問は、主膳の胸中に、軽侮の念を生ませたものだった。

「わしは、おぬしのようなひねくれ者とはちがう。わしには、夢がある。……姫宮の前では、わしは無抵抗な下僕と化す。姫宮がゆるすなら、その蹠も嘗めるであろうし、姫宮がそれをのぞむなら、尿でも飲んでみせる。……おぬしと雖も、どうだ、姫宮にだけは、一指もふれられまい。わしは、姫宮のけだかさだけは、いかなる悪業の痴れ者もこれを犯す能わず、と信じて居る。だからこそ、わしは、姫宮が、何処へ出あるくのも止めはせなんだ。何人もふれることは叶わぬからだ。わしの夢は、永久に、奪われることはない」

云いはなった主膳は、すでに対手を圧倒しさった快感さえおぼえたのであった。

すると、

「左様か――」

と、こたえた狂四郎の顔には、意外にも、皮肉な冷笑があったのである。

「ところが、もう……この眠狂四郎が、姫宮を抱いた、としたら、どうだ？」

その嘲りこそ、驕った者の脳天をうちのめす霹靂であった。

刹那――、主膳は、叫びこそ発しなかったが、目晦む激怒で、全身を火のように熱くしたのであった。

――はかられた！

と、さとったのは、身うごきもならぬ床の中で幾日かすごした後のことであった。

はかった狂四郎に対して、あらたな憤りをおぼえるよりも、姫宮が清浄であったことに、大きな安堵があった。

「仰言ることはよくわかりました。しかし、眠狂四郎を仆したならば、金が六十貫、手に入るとしたらいかがでございます？」

備前屋の顔は、目の光だけ鋭いものにして、明るい微笑を湛えていた。

「金六十貫？……ああ、いつかきいた田沼時代の輸入金のことだな」

「左様でございます。埋蔵の在処を記した品を、眠の方にひと足さきに手に入れられました。この備前屋としたことが、不覚でございましたな。まさに、千慮の一失――。とんだところにかくしてございましたのでね」

備前屋は、埋蔵者の兵堂掃部が、娘百合枝の双眼へ玻璃を嵌めた一件について語った。

「では、もう手おくれだろう。金は、水野越州へ渡っているのではないか」

「いえ、それはまだ大丈夫でございます。掃部の娘に、はがした玻璃のことを問いただしましたところ、眠は、当分自分が預っておく、と申した由にございます。眠が、物欲に恬淡な男であることは、手前が一番よく存じて居りますし、べつに、西丸御老中様の野望達成のための軍資金にさし出す肚もございますまい」

「…………」

主膳は、しばらく、黙って、雑草の中から、高く咲きあがった立葵の淡紅、濃紅の花へ、

澄んだ眸子を投げていたが、やがて、ぽつりと、
「気が向けば——ということだな」
と、もらしていた。

二

雷鳴をともなった驟雨が来て、ここ数日の日照りでつもった塵埃をきれいに洗い流す役目を終えて、中空へ遠のいて行った時刻——五つ半を回っていたろう。単衣では肌がうすら寒い夜気であった。山谷堀にかかった今戸橋を渡って、東へ辿る影ふたつ——。
貧しい町屋と慶養寺という寺院の土塀にはさまれた暗い通りであった。雨でとだえたなり、人影はなく、大川から渡って来る風が、かすかに音をたてている寂しい場所であった。
「旦那も、だんだん凝りかたが病膏肓に入って来やしたねえ」
そう云いかけたのは、幇間らしい男であった。
「吉原のすががきでかきまわされた太耳を、富岡の八幡鐘で洗う——この味は、そこいらの野暮なとんちきにゃわからねえやな」
こたえた方は、大店の主人らしい。
粋の体得をもって通という。この時代の大店の商人たちは、通人だと称されることを、無上の光栄としていたのである。

吉原名代の総籬で、呼出し花魁を相手に流連した挙句、日本堤から今戸町をまわって、花川戸まで、ぶらぶらと歩き、竹町の渡しから、猪牙で深川の岡場所へ行って、鉄火な芸妓と遊ぶ——いわば、こってりと油っこい料理をたらふく食べたのちに、さらりとした茶づけをかきこむという段どりが、通の通たる所以とされていたのである。

幇間を供につれて、ふところ手で、微醺をおび乍ら、雪駄の音を三味がわりにして、ひくく小唄を口ずさんで行く旦那衆にとって、まさに、江戸はわが世の春であった。

　海女の身じゃとて、袖引く人も
　浪の浮寝の泊りぶね
　ささ、ほんにかえ
　とけてゆられて、いるわいな

その唄が、しかし、終るか終らないうちに、音もなく、すっと、行手をさえぎった影があった。

流れる雲のあわいに、いつか、冴えた月色があった。

もし、それが黒の着流しの浪人ていでもあったなら、通人とその供は、悸っとなったろう。

夜目にもそれとわかる、匂うように伊達ないでたちだったのである。亀屋頭巾に、長羽織、優腰にふさわしい思いきり細身の大小の落差し。そして、片手に、携げた一枚の白い花びらから、ほのかに匂うのは、梔子の香であった。

　これは、どう見ても、旗本大身の次男三男の気随の輩(やから)が、屋敷風の野暮をきらって、好んで町人の見えぼう風俗をつけた立姿であり、同じ通仲間と見てとれたのは、当然であった。
　だから、怪しみもせず、すれちがいかけて、
「おい――」
　と、呼びかけられても、気がるく、
「へえ、結構な宵(よい)でございます」
　と、愛想を添えたのであった。
　ところが、それに対して、
「あまり結構な宵ではない」
　その皮肉な挨拶(あいさつ)がかえされた。
「わしのことではない。おまえたちのことだ」
「と申しますと？」
「深川がよいは、やはり、唄通りに、猪牙で行くがよかった」
「好き好きでござんしてね」
　――吉原へは四手駕籠(よつでかご)、深川へは猪牙と、きまった相場が面白くなくなったこっちの大通ぶりがわからぬようじゃ、このさむらいもまだ青いやね。
　心のうちで、軽くさげすんで、にやっとした通人は、次の瞬間、その笑い皺(じわ)を、いびつに凍(い)てつかせなければならなかった。

「通も、へたに行きすぎると、地獄の一丁目へぶっつかったりする」

「………」

通人とその供は、ごくっと生唾(なまつば)をのんで、本能的に、二歩あまりさがった。

「気の毒だが、おまえたちは、もう来てしまった」

「だ、だ、旦那！　冗談じゃねえや！」

幇間が、嚙(か)みつくように叫んだ。

「まったく冗談ではない。理由もなしに、いのちがふたつ、飛ぶのだ」

「ふ、ふざけるねえ！」

「おまえたちが、毎夜、遊里の灯(ひ)を見なければ寝られなくなったように、わしは、生血を見なければ寝られなくなった」

「く、くそっ！　な、なにをこきゃがる！」

「痛くないように、あの世に送ってやる」

つと、遊士が一歩ふみ出すや、反射的に、通人とその供は、身をひるがえすはずみに、はげしく肩をぶっつけ合って、だだっと宙を泳ぐぶざまな格好で逃げ出そうとした。そのふたつの後姿へむかって、きらっきらっと白刃が躍った。

断末魔の叫びが、ひとつになって、虚空(こくう)に散り――その余韻が消えぬうちに、遊士の影は、二間のむこうを、何事もなげな足どりで歩いていたのである。

三

七十六間の吾妻橋が、くろぐろと、月下に墨絵の虹を架けていた。

橋の上に、この冷たい夜風に吹かれて、なにを見ているのか、二、三人、欄干に凭りかかって、じっとしている。

川面には、もう舟の影もなく、月光が波に砕けて、揺れているのである。

白鳥主膳は、悠揚たる足どりで、橋の中程まで渡った。

欄干に凭りかかっていた一人が、主膳の背後で、つと、動いた。

「旦那――」

呼びかけた。主膳は、きこえぬふりで、歩みを止めなかった。

前方の欄干にいた者が、すっと、まん中へ出て、主膳の行手をさえぎった。

「御用だっ！」

十手をひらめかせたこの叫びは、前後から、同時にほとばしった。

主膳は、しかし、そのままに、歩調もかえなかった。背後から、びゅっと鉤縄が来た刹那だけ、すべるがごとく、一間を逃げ躱していた。両袂の橋番小屋にひそんでいた捕手たちが、どっと出て、橋板をふみならして殺到して来た。

正面に――二間に迫った群の中から、すすっと進み出たのは、白髪の老人であった。この道で一生をすごして来た気魄と貫禄をみせた。

「奉行所に、盲ばかりはいねえぜ。辻斬りの下手人は、おめえさんだと、疾うから眼づけしていたんだ。旗本だろうと、寄合だろうと、容赦はしねえ。白鳥主膳、神妙にしろい！」

と、きめつけた。主膳は、冷然として、

「貴様、お玉ヶ池の佐兵衛か」

と、云いあてた。

岡っ引を四十年も勤めあげた、江戸でその名を知らぬ者はない捕物名人であった。

「おれが捕って来るのを承知の上で、罪もねえ人間を十何人も斬りゃがった極道ぶりは、犬畜生以下だぜ」

「佐兵衛、わしを手捕えられると思っているのか？」

「吼えるなっ！　お玉ヶ池の佐兵衛は、狙った獲物はにがしたこたァねえ」

「わしの場合は例外ということになろう」

主膳は、頭巾のかげで、ふふふふ、と笑った。

「第一、わしに揚屋縄をかけたところで、無駄だな。そこまで、貴様も裏を知ってはおるまい。わしが、ある方面にとって必要な人間であるかぎり、貴様がいくらやっきになって手柄にしようとしても、これは骨折損のくたびれ儲けになる。……嘘は申して居らぬ。引きさがったがいい。可愛い手先たちのためだ。わしが斬りすてているのは、遊蕩と金儲けしか知らぬ通面の大商人とそれにくっついている虫けらだ。汗を流して働いている貧乏な正直者を斬ったおぼえはない。……わかったら、おとなしくひきさがれ」

だが、それに対する佐兵衛の態度は、決然たるものだった。

「捕れっ！」

叫んで、まず、おのれの手練をみせて、早縄を、飛矢のごとく放っていた。

「莫迦っ！」

右手くびにからみついた縄を、居合抜きの迅業で、切断しておいて、主膳は、ツツツ……と進んだ。

佐兵衛の侠骨と剛愎の前に、生命をなげ出す意気に勇んだ江戸っ子たちであった。十手、突棒、差股をかざして、猛然と襲いかかって来た。

十手以外の武器を持つことを許されぬ掟を敢えて破ったところに、佐兵衛の悲壮な決意がしめされていた。

一人二人を傷つければ、怯気づいてさがるであろうと軽く考えていた主膳は、意外にも、橋板に俯っ伏した仲間をのり越えて、

「野郎っ！」と、喚いて、突棒を盲打ちにふり込んで来る勢いを見て、急に、烈しい闘志で四肢が燃えた。

「容赦せぬぞっ！」

呶号とともに、主膳の五体が、疾風を起した。十手が、月へ飛び、突棒が、川へ刎ね落ちた。欄干を血塗って、ずるずると崩れ込む者。差股を杖にして、冥土への道を、二、三歩よろめき歩む者。投げた鉤縄を、味方の頸へひっかけて、狼狽する者……。

主膳の影は、鶺鴒のようにかるやかに、血飛沫から絶鳴へ、絶鳴から血飛沫へ、と跳躍して行った。

そして――。ひらっと欄干上へ、飛び立つや、あっという間に、本所側の橋袂まで、奔っていたのである。

「逃がすなっ！」

「たたっ殺せっ！」

殆どのこらず、仲間の血汐をあびた手先たちは、その匂いと感触に酔い狂った鬼と化して、主膳を追った。

四

常磐津文字若は、ねむれぬままに、派手な花模様の夜具をはねのけて、起き上り、鳴海絞の湯帷子の上へ、黄八丈の半纏をひっかけて、一服吸いつけていた。

湯帷子の下の、火焔のように燃えたつ緋縮緬が、立膝へ、きゅっとひきしぼられて、ふっくらと降りつもった初雪のような太腿の線があらわに、なまめかしい。

――美保代さまも、とうとう、想いが叶って、幸せにおなりになった。

ぼんやりと、そのことを考えていた。

鳩尾のあたりに、微かな疼きがある。

――いちばん、ばかなのは、あたしさ。

そっと、じぶんに呟いている。美保代を狂四郎に添わせたい、と念じた気持に、いつわりはない。ほんとうに、心からそうねがって、まわりの人々にも云ったし、神棚(かみだな)に両手をあわせて祈っても来た。

「先生に惚(ほ)れているね、姐御(あねご)――」

立川談亭(たてかわだんてい)から、いつか、そう云われた時も、平気で、

「ああ、惚れているよ。先生のようなおひとに惚れるなっていう方がむりじゃないか――。なにを考えておいでなんだか……生きているのがなんにも面白くないような……とらまえ様のない、暗いあのお顔を眺めていると、あたしのような莫連(ばくれん)は、その刀でいっそひと思いに斬られてしまいたいような気分になっちまうじゃないか。だから、はやく、美保代さまと一緒になって、もっと人間くさい、生きているのが愉(たの)しいって顔をして頂きたいやね」と、こたえたものだった。

本音であった。これまで出会った男のうちで、狂四郎程、強烈な印象を、文字若の胸中へやきつけた男はいなかった。

――このおひとがなにかの拍子に、火のように憤(おこ)って、あたしのからだへ、刀をふりおろしてくれたら？

暗いその横顔をぬすみ見て、そんな想像を、本気でしたこともあるのである。想像した瞬間、全身がじいんとしびれるような、ふしぎな快感で、思わず、吐息をもらしたものだった。

「先生、たった一度でいいから、私のからだを抱いて下さいな」

目の冴えた真夜中、じっと闇（やみ）を瞶（みつ）め乍ら、ひとり、小声で、呟いてみたこともある。もし、目の前で、ほんとうに、そうたのんでみたら、あの冷たいうすら笑いを口もとにうかべて、

「お安い御用だ」

そう仰言（おっしゃ）って下さるかも知れない、と真剣に考えつめて、しらじら明けを迎えたのだった。

女であった。思っただけで、口に出せる願いではなかった。それどころか、その人をたすけるために、すすんで、他の男に身をまかせる無謀をやってのけて、その後に来た寂寥（せきりょう）感に、なにもかも面倒くさくなって、一月あまりを、蒼（あお）い素顔でぼんやりとくらした文字若であった。

「……さびしいねえ」

長煙管（ながぎせる）を、股（また）のあいだに立てて、そのなげきを、ふっと、声にした。そうして、内腿のひんやりとした羅宇（らう）の肌ざわりの部分から、徐々にひろがって、からだのうちうちで微かにうごめきはじめた哀（かな）しい女の官能を、じっとあじわっていると——。

急に、路地にあわただしい跫音（あしおと）がみだれた。素通りお仙（せん）と異名をとった女である。その跫音が、意味するものを、すぐに読んだ。

——追い込まれたらしいね。むかしの仲間なら、かくまってやらないでもないが……。

すると、宛然（さながら）それにこたえるように、階段が、みしっと鳴ったのである。はっと息をのんで、全神経を耳にあつめた。

ゆっくりと、のぼって来た者へ、

「だれ？」

こちらから、声をかけるのと、障子が開かれるのと、同時だった。

「あ！」

文字若は、一瞬、からだを石にして、大きく目を瞠った。

「おまえの家と知って、逃げ込んだ」

頭巾の中のすずしい目が、柔和に微笑した。とっさに、流石の文字若も、言葉が出ず、まばたきを忘れてまじまじと見あげているのみだった。

表格子が、はげしく、叩かれたのは、この時だった。

階下には、誰もいなかった。婆やは、かるい中風にかかって、千葉の妹のところへ厄介になりに行っていた。文字若は、半纏に袖を通して、立ちあがった。

白鳥主膳は、黙って、文字若の動作を見まもっているだけであった。

文字若は、身をすれちがわせ乍ら、対手の眸子の優しい色がすこしも変らないのに、微かなとまどいをおぼえつつ、何か云いかけたが、思いかえして、しずかに降りて行った。格子を開けると、入って来たのは、佐兵衛だった。

「なんだ、お前さんの家かい」

佐兵衛は、苦笑した。文字若が、黒元結連に入っていた頃、この老いた岡っ引に二度ばかり捕ったことがあるのである。

「なにが起ったんです、親分？」

怪訝そうに訊ねる文字若に、佐兵衛は、

「お前さんなら、わしに嘘のつけねえ義理がある筈だぜ。……血なまぐさいのが、逃げ込んだ様子はねえか？　人の気配には、敏感な筈だ」

「それが、まるっきり――。なんでしたら、捜してごらんなさい」

「いや、結構――お前さんを信用しよう。どうやら、わしも、カンがにぶったらしい。たしかに、この家だと、にらんだのだがな。起してすまなかったな。ごめんよ」

佐兵衛が出て行っても、文字若は、しばらく、そこに、じっとしていた。といって、何も考えたわけではなかった。ただ、いまになって遽に早鳴って来た動悸のしずまるのを待っていたのである。

二階へひきかえしてみると――。

主膳は、頭巾を脱いで、枕もとに、端然と坐り込み、文字若がいままでのんでいた長煙管から、ゆるやかな紫煙をたちのぼらせていた。

文字若は、半纏をすてると、まるで、そう命じられてでもいるかのように、床に仰臥すると、つむったまぶたまで夜具をひきあげた。これは、階段をのぼるあいだに考えた振舞であった。黙って立去る対手でない以上、こちらの態度をいさぎよいものにしておくべきだった。行灯が吹消されると、文字若は、ぱっちりと目をあけて、横へ入ってくる主膳を――その見えない顔を、じっと凝視した。

男の片手が、下へ延ばされた時、女の下肢は素直であった。

立川談亭が、いつにない堅い面持で、中野三重塔裏の眠狂四郎の隠れ家をおとずれたのは、次の日の午(ひる)であった。

ゆうべ、白鳥主膳が文字若の家へ押込んで、この手紙を書きのこして行った、とさし出したのは、逆封の果し状だった。

黙読した狂四郎は、そのことには、べつにふれず、無造作に、果し状を袂に落しておいて、

「師匠、お互いに女に生れなくてよかったな」

と、しずかにそう云って、立ちあがると、縁側へ出た。

談亭は、その後姿を見やり乍ら、今朝果し状を託する時の文字若の、いたましいまでに侘(わび)しげな様子を思い泛(うか)べた。

——ちげえねえ。女は、ひとりじゃ幸せになれねえんだ。

沁々(しみじみ)と、胸のうちで呟かずにはいられなかった。

庭のかなたでは、幼児をかたわらに立たせて、夏草の茂みの中に咲いた白百合を、截(き)りとろうと、及び腰になった若女房の美しい姿があった。

疑惑の棺(ひつぎ)

一

根岸の里。

上野山下から一里たらずのこの里は、文化年間に入ってから、なぜとなく、文人墨客たちが、都塵(とじん)をはなれて、幽棲(ゆうせい)の地とさだめていた。

『遊歴雑記』に、

「このあたりに住居(すまい)する徒は、多く隠者のみにして、市中に遠く、山水を楽しむには可なり、よろずの便は不可なりというべし」

と記してある。尤(もっと)も、前年春、神田佐久間町河岸(がし)から出火し、日本橋、京橋、芝までの長さ一里、幅二十町を延焼した大火で、焼出された者が、続々と、この里に入り込んで、だいぶ賑(にぎ)やかにはなっていた。

といっても、嵯峨(さが)天皇が御所を置いて以来、貴人の山荘が多くかまえられたという京の嵯峨にも似て、祇王祇女(ぎおうぎにょ)の結んだ庵(いおり)をしのぶようなたたずまいや、また小督(こごう)の局(つぼね)が隠れ住んで弾く琴の音かとうたがわれる優しいひびきももれて来る風雅な景色は、すこしもそこなわれ

ずに、田園と川と林の中に描かれていたのである。
御行の松は、この里の中央を流れる音無川に沿うた御隠殿通り、時雨の岡にあった。
幹の太さおよそ一丈余、高さ十余丈、頂上は雲中に入る古樹であった。
樹下に、不動堂が建っている。
眠狂四郎が、掏摸の金八をつれて、ぶらりと、御行の松へやって来たのは、両国の川びらきも終った頃の、晴れて暑いある日の午後であった。
すたすたと不動堂の裏手にまわって、ずうっと、地面へ視線を移した。
「先生、いってえ、なにをおさがしになるんです？」
べつに、どんな目的で、ここへやって来たのか、きかされていない金八は、怪訝そうに、狂四郎の様子を見まもった。
「石地蔵を掘るのだ」
「冗談じゃねえや。不動仏が、石櫃に入れられて、そこの根元に埋めてあったのは、この不動堂の建つ前の話でさあ。それがもったいねえ、てんで、いまは、格子の中に、鎮座ましましているじゃござんせんか。

　忍ぶ恋路のさてはかなさは
　格子細目にひきあけて
　ちらと匂うた薄化粧
まねくその手の菩薩ぶり

石の地蔵とみせかけて
　抱いてみやんせ、床の中
　　からんで、吸うて、いのちとり
てな、ねずみ鳴きして呼んでまさあ」
金八が、しゃがみこんで、のんきにうたっているあいだに、狂四郎は、棒きれをひろって、あちこち、とんとんと突いていたが、
「ここだな」
と、呟いて、掘りはじめた。
「おっと、そいつは、あっしの役目だ」
あわてて、金八が、棒きれを受けとって、土をはねちらした。
「おっ！　なるほどヶ谷は、武蔵と相模の国ざかい、と来た」
一尺と掘らないうちに、こぶし大の地蔵の頭がのぞいたのである。
「もうよい。埋めろ」
狂四郎に命じられて、金八は、きょとんとした。
「なんです？」
「金六十貫の埋蔵は、たしかだとわかった」
「えっ？　金——が六十貫！　金八は、十四貫」
金八は、目玉をくるくるっとまわした。

勘定所勝手方組頭・兵堂掃部が、松平信明に命じられて輸入金を隠匿した場所は、ここだったのである。

「ほんとですかい、先生？」

「お天道さまの下で掘り出したら、眩しくてお前の目がつぶれるといかん。夜の仕事だな」

狂四郎は、たしかめておきさえすれば、掘り出すのを急ぐ気持は毛頭なかった。

金八は、しかし、もう胸がわくわくして、早く、山吹色がおがみたくてしかたがないらしく、のぞいた地蔵の頭をなで乍ら、

「石の地蔵に願かけすれば、か——堅い約束したさの心、知らぬが仏と云わせはせぬぞ、とくらあ。なんまいだなんまいだ」

「はやく、埋めろ」

促されて、あわてて、土をかけた金八は、

「おどろきやした。先生、いつ、花咲爺におなりです」

「さしずめ、お前は、隣りのよくばり爺だ。どうよくばってみたところで、とどのつまりは、六道銭だけあれば、三途の川は渡れる」

そう云って、狂四郎が、視線を投げた音無川のむこう岸に沿うて、いましも、しずしずと葬列が進んで来ていたのである。

「ちょっ！　縁起でもねえ」

金八は、むなくそわるげに、首をふった。

二

それは、大層立派な葬列であった。

白張無紋の高張提灯を先頭に、迎僧数人、次に竜頭の六角灯籠、幡（紙製）、そして棺。

その棺も豪華な引戸駕籠である。白布を巻き、懸無垢（衣）を被い、天蓋をかざしてある。

棺につづいて、位牌をもったのは、三十前後の、大店の御新造らしい、おっとりした、美しい面立の女であった。そのあとに、香炉や上り物を持った近親者たちが、いずれも、そろいの編笠、麻裃、素足藁草履で、延々としてつらなっていた。

「ありゃア、江戸で指折りの商人でござんすぜ。……もったいねえや、あの色年増をあのまんま、すてておくのは——。つらで惚れるは未通女のうちよ、三十過ぎれば臥床のよしあし——丁度、いい頃合なんだ、ねえ、先生」

と云いかけた金八は、狂四郎の横顔を見て、はっとなった。怪しいものに対して鋭く神経を働かせる時の、冷たく冴えた表情が、そこにあったのである。

——きたぞ！

金八は、ぞくっと武者ぶるいした。

狂四郎の眼光は、棺を射ていた。

「先生、何かありやすか？」

金八にささやきかけられると、狂四郎は、ふっと、口辺をゆるめて、

「仏が棺の中に寝ていない葬式があるとは、さすがは、風流の根岸の里だな」

「え？　ほんとですかい、先生？」

金八は、目をまるくして、あらためて、棺を睨んだ。

「どうして、死人が入っていないとわかりやす？」

「担いかたを見ればわかる。あれは、空っぽの軽さだ」

「へへえ。こいつは、面白え。……一丁、尾けて行ってあばいてやりやすか？　先生、ちょいと、待っておくんなさい」

「うっかり、岡っ引の真似などすると、とんだ恥をかかぬでもないぞ」

「なあに、きっと、古のれんのことだから、陰々滅々のいわくがあるにちがいありやせんぜ。奇っ怪奇天烈てれつくてんだ、こん畜生！　ふざけてやがる。――仏のいねえとむらいなんか出しやがって、ようし、どいつもこいつもひとつ、墓場で、かんかんのうでも踊らせてやるぞ」

金八は、そっと、尾けはじめた。

行列は、音無川に架けられた水鶏橋を渡り、櫟林を抜けて行った。

樹枝で、佳い声で鶯が啼いていた。

春、その初音をききにやって来て、俳諧、茶の湯の会をひらく野が、このあたりであった。

　山の岸うぐいすまでが京の種

という古川柳もある。

行列が入ったのは、紫藤で有名な円光寺の墓地であった。
その立派な葬列にふさわしく、そこにならんだ墓碑も、よほどの富家であることをしめしていた。碑石はいずれも台石上に五尺余もそびえ、石墻をめぐらし、灯籠も建てられていた。
金八は、花が散って、嫩葉をしげらせている藤棚の下に入って、長たらしい誦経を、辛抱づよくきいた。
引導の声が、ひびいたとたん、
──よし！
臍の下へ力をこめると、たたっと葬場へ奔った。
いきなり、白衣束髪の内儀の前へ、ぬっと立ちはだかって、
「失礼でござんすが、仏様の御新造さんでござんすね？」
「ええ──」
「あっしは、仏様の御生前に、ひとかたならぬお世話になった者でござんす。はるばる長崎から出て来て、お目にかかれるのを愉しみにして居りましたところ、──お亡くなりになったときいてびっくり仰天、ようやく、ここまで追いかけて参りましたんで、へい。おねがいでござんす。どうかひとつ、旦那の死顔をおがませて頂きとうござんす」
まことしやかに、腰を跼められて、内儀のおもてにはみるみる当惑の色がうかんだ。
かたわらに立っていた番頭らしい男が、
「おいおい。おまえさん妙な云いがかりをつけにお出でたのかい？」

と、つっけんどんに、きめつけた。

「云いがかり？　つまり、棺の中が、からっぽだと知って、おいらが、云いがかりをつけに来た、と仰言るんでござんしょう。へえ、その通りでござんす。云いがかりでござんす。番頭さん、ことわっておくが、おいら、ゆすりたかりじゃねえぜ。あんまり世間にきいたことのねえ真似をしなさるから、ちょいと、そのわけをおうかがいしてえだけの話でさあ」

「阿呆らしい。仏様のいない棺など、わざわざ、ここまで担ってくるものか。仏様は、ちゃんといなさる！」

「じゃ、まちがいないところ、死顔拝見といこう」

「見も知らぬ赤の他人に、仏様をおがませるいわれはない」

「そうか。じゃ、たのまねえ。こっちは、こっちで、勝手におがむだけだ」

ずかずかと棺へつき進む金八を、あわてて、四、五人がさえぎった。

「なにをしゃがる！　はなせっ！　唐変木め！」

金八が、あばれまわろうとしたおり——。

掘られた墓穴の横に立っている石碑の陰から、すっとあらわれた狂四郎が、つかつかと棺へ近づくや、抜く手もみせず、煌っと、白光を閃かせた。

天蓋が、宙にはねとんだ。

ついで、棺は、無想正宗の切尖をぶっつり突き立てられて、かるがると持ちあげられるや、内儀の前へ、二間を躍ってどさっと抛りつけられた。

しーんと固唾をのむ静寂が来た。
狂四郎は、白刃を腰におさめると、ころがった棺をへだてて、内儀とむかい立つや、
「どういうのだ。これは？」
と、訊ねかけた。
まっ青になった内儀は、俯向いて、かぼそい声音で、
「申しわけございませぬ」
と、あやまった。
「いらぬお節介だが、贋葬式と見せかけた以上、その理由をはっきりさせておいた方が、こちらも、今夜の寝つきがいい」
「何卒、ご内聞におねがい申上げます。決して、てまえどもは、世間さまを誑かそうなどという了簡は毛頭ないのでございます」
番頭が、内儀にかわって、説明した。
姿なき死人は、大伝馬町一丁目の太物問屋「伊勢屋」の主人九左衛門であった。五年あまり前から、病み伏して、一時は絶望視されたものだが、昨年春頃からすこしずつもちなおして、今年になって、人の肩を借りてどうにか歩けるようになったのをしおに、根岸の別荘へ移ったのであった。
たまたま、この春、別荘に立寄った熊野の優婆塞行者が、九左衛門のために、庭に炉を掘り、薪を積み、柴を覆い、火を点じて、護摩修法を行なったところ、符呪作法が出した解答

は、「一度遐世してのち、蘇生すべし」ということであった。

そこで、九左衛門は、生き乍らに、盛大な葬式をいとなんだというわけだったのである。

冷笑をうかべてきいていた狂四郎は、

「では、蘇生のしかたはどうする？　念のためにきいておこう」

「はい、それは……九左衛門は、もうこの世にないものといたしまして、さいわい、幼い頃に行方不明になった弟に、勘兵衛と申したのが居りますので、勘兵衛が兄のあとを継いで当主になった——ということにいたすのでございます」

「成程、人間は生命が惜しいと、途方もないくだらぬ無駄知恵を働かせるものだな」

「旦那様、どうぞ、おねがいでございます。このことは、ご内聞になすって下さいまし。おたのみ申します」

べつに、他人に災難をかける事柄ではないとしても、贋葬式は、町奉行所にとりあげられれば、罪過として罰せられるのは目に見えている。見て見ぬふりをしてもらうために、番所に賄賂ぐらいはしてあろうが、他人から文書をもって正式に訴えられたならば、糺明を避け得ないことになるのである。

狂四郎は、そっとさし出された金包みへ一瞥もくれず、

「金八、岡っ引の真似は、これだから、止した方がいいと申したのだ」

と云いすてて、歩き出そうとした。

この時、不意に、ずっとうしろの方で、

「いいえ！　いいえ！　旦那さまは……ほんとうに、死んでおしまいになったのです！　そうです！　ほんとうです！」

と、金切声を噴きあげた若い女があった。

狂気のように走り出て来るや、泪だらけの歪んだ形相で、わななく指で、空棺をさし示して、何か、叫ぼうとした。

「これっ！　お千賀！　しっかりせんかい。旦那様は、家にちゃんといなさるじゃないか。莫迦なことを云うな！」

番頭が、きびしくたしなめた。

内儀も、寄ってやさしく肩をたたいて、

「気をしずめてな、お千賀。……あまり、旦那さまに可愛がられていたので、おまえ、葬式がほんとうのような気がして来たのではないかえ。心配おしでない。あとで、旦那さまから、おまえに、あやまって」

と、云いきかせた。

お千賀という女中は、色失せて唇をはげしく痙攣させていたが、崩折れるように、その場にうずくまると、袂で顔を掩うて、わっと慟哭した。

狂四郎は、お千賀をじっと凝視して、歩み寄ろうとしかけたが、すぐ、他人事に容喙する莫迦らしさに、憮然として踵をくるりとまわしていた。

金八は、いまいましげに、空棺をひと蹴りしておいて、狂四郎のあとにしたがった。

三

それから一刻（とき）あまりのち、狂四郎は、上野山下の小料理屋の二階で、ひとりで飲んでいた。

水茶屋の並んだ一郭からはすこしはずれていて、軒につるされた風鈴が夜風に鳴る音に耳をかたむける静けさがあった。三味線の音や嬌声（きょうせい）が、潮騒（しおさい）のように、波になってつたわって来ていたが、この静けさを擾（みだ）すほどのことはなかった。

時たま、打揚げ花火の音がきこえている。手すりに凭（よ）りかかった狂四郎のうしろの夜空で、美しく散っているのである。

——白鳥主膳と、果し合いをしようか、すまいか？

ぼんやりと、考えているのは、そのことだった。

主膳の業前（わざまえ）を、おそれるのではなかった。ひさしぶりに、全身全霊を、生死の間髪にさらして、あのおそるべき主膳の無形の構えに対する、円月殺法の不転の位（くらい）をもって、勝負を決してみたかった。

一刀流極意書に、

「威は節に臨みて、変ぜず。その備え正明にして事理に転ぜられざる全体を威という。動ぜずして、敵を制するは威なり。すでに動じて、敵を制するは勢なり。威は静にして千変を具す。勢は動じて万化に応ず」

とある。

威をもって敵を圧して、勢をもって、勝つ——これである。

狂四郎と主膳の決闘は、この威と勢との、おそるべき交流によってなされる。すなわち、狂四郎が、威の充足をみせて不転の位を持するや、主膳は、勢の奔騰をもって転化の位を発揮することになろう。そして、一刹那が去れば、両者の位は、全く入れかわっているに相違ない。

まさに、互いに毫末の隙もゆるされぬ好敵手であった。

いずれは、どちらかが仆れなければならぬ運命にあるのだ。

——ふん！　このおれとしたことが、生命を惜しむようになったのか。

微かな自嗤を、胸の中へ、酒とともに流した狂四郎は、盃を置くと、目をとじた。

この時、

「ごめんよ——」

根太い声とともに、襖がひらかれた。

入って来たのは、でっぷりと肥った坊主であった。

女ものらしい紺地の絣縞に、びろうどの襟を掛け、花色唐こはくの帯をしめたいでたちであった。顔の造りが大きく、女の肌のようにすべすべとした白さが、それら、ひとつひとつを浮きたたせていて、遠見でも目立つ男前であった。

「眠狂四郎さんと仰言る——」

にこやかに云いかけておいて、どっしりと坐ってから、語を継いだ。

「あたしは、そこの下谷練塀小路に住んでいる御数寄屋坊主の河内山宗俊という者だが――」

「噂はきいて居る」

「お互いさまに、悪名が通っていて、挨拶がかんたんにすむのは、重宝だね」

「用むきも、かんたんにねがおう」

「かしこまった」

宗俊は、狂四郎の冷やかな態度を、一向に気にかけぬ大様さをみせて、

「あんたは、さっき、根岸で、伊勢屋の贋葬式をあばきなすったそうだが、あの店のあるじとは、あたしが、むかしからごく懇意にしているんでね。ひとつ、あたしの顔に免じて、見なかったことにしちゃ下さるまいか」と、たのんだ。

狂四郎は根岸からこの小料理屋までの道程を、ずっとあとを尾けて来た者があったのを、ちゃんと知っていた。その者の注進で、河内山宗俊の出馬となったのであろう。

「おれが、番所へ訴え出る人間にみえるのか？」

狂四郎は、うすら笑いを泛べて、河内山を見た。

「いや、そんな真似をする御仁とは、露さらに思ってはいないが、念のためということもある」

「それだけのことで、河内山ともあろう大物がたのみに来るのが――かえって、おれを疑わせる、としたら、これは、藪蛇というものではないか」

するとと、河内山もさるもの、ふいに、はっはっはっ、と高笑いして、懐中から切餅(きりもち)（二十五両）四個をとり出して、いったん、畳に置き、

「そうまで、疑(うたぐ)いぶかいあんたに、この金をさしあげると云ったら、愈々(いよいよ)こっちは藪蛇になろう。……勿論(もちろん)、受取っちゃ、下さるまい」

狂四郎が、無言でいると、

「この金は、眠さん、あんたが時々行きなさる江戸町二丁目の半籬(はんまがき)『中まんじ』に預けておくわさ。びた一文持たずに半年流連(いつづけ)てもいいようにな。――いや、こっちが、勝手にやることだ。お気に召さなけりゃ、『中まんじ』の敷居を二度とまたがぬがいい。坊主頭を、こういう役柄で売り込んだてまえ、出した金をひっ込めたとあっちゃ、こん後の商売にさしつかえるのでね。この金の落し場所を、ここへ来る途(みち)みち考えて来たんだと思って頂きたいのさ」

そう云ってからまた切餅をしまって、

「とんだ野暮な初対面で、気をわるくして下さるな。かねてから、一度、ゆっくり会ってみてえと思っていたんでね。歯切れのわるい仲裁役を承知で引受けて来たんだ。……今夜は、早々に退散した方が、お互いに無難らしい。いずれ、後日あらためてご挨拶しよう」

金八が、息をはずませて、この二階へとびあがって来たのは、それから数分も経(た)っていなかった。

「先生っ！　大変だ！　花咲爺の仕事はあとまわしになりやした」
　金八は、闇にまぎれて、御行の松の根かたを掘って、金六十貫の有無をたしかめるべく、忍んで行ったのである。
「どうした？」
「えいやっ、とばかりふりあげた鍬が、ぶっつかったのが、なんだと思いやす？　だらりと下った足でさあ。正直の話、あの格好は、あんまり、いただけるものじゃありませんぜ。抱きおろす時に、どさっと肩へ来た重みが、まだのこってやがる」
「若い女だったのか？」
「え！　どうしてわかりやす？」
「でなければ、お前がそんな親切心を出すわけがない」
「図星。……だが、その女が、誰だか、そこまでは、おわかりじゃござんすまい。……先生、それが、ほら――あの墓場で、旦那は死んじまったんだ、と泣き喚いた、あの伊勢屋の女中だったんでさあ」
「なに？」
　狂四郎の顔が、さっと緊張した。
「気がおかしくなりゃがって、とうとうくびを縊った――と思いてえところだったが、そこは、江戸一番の巾――八さんでさあ。どうもくせえ、とピンと来たんで――」
「伊勢屋をさぐったか？」

「ところが、いけやせん」

金八は、しかめっ面で、かぶりをふった。

伊勢屋が二十年来の取引先である本町の糸問屋の番頭を、むりやりつれ出して、人でごったがえしている伊勢屋へまぎれ込み、施主勘兵衛の首実検におよんだのである。

するとその番頭は、

「すっかり本復なされて、色艶がよくおなりだが、九左衛門さんに、相違ございません」

と太鼓判を捺した、という。

「たしかに、仏が生きていやがったと、わかっても、どうも、この腕ンところがもやもやして、さっぱりおさまりがつきませんや。これからさきは、先生に料理して頂くよりほかはねえ」

それにこたえず、かなり長い沈黙をまもっていた狂四郎は、つと、刀を把って、立ちあがっていた。

——どうやら、河内山宗俊のおかげで、『中まんじ』へは、鼬の道切になりそうだな。

その独語は、胸のうちだった。

四

その夜更けて——。

伊勢屋の奥の主人夫婦の寝間で、突如、闇の中に、ひくい、しかし、異常な悲鳴が起った。

内儀のお徳が、蘇生した亭主九左衛門と、五年ぶりに、同衾して、しばらく過ぎた頃合であった。

「ち、ちがう！　……お、おまえさまは——ち、ちがう！」

その恐怖の顫え声に対して、お徳を抱いた九左衛門改め勘兵衛が、何か云うより早く、

「そのせりふを待っていた！」

と、冷やかな声が、べつの位置から発しられたのであった。

勘兵衛が、ぱっと夜具をはねのけて、起き上るのと、燧石がかちっと切られるのが、同時だった。

行灯から、ぼうっと、拡がった赤い明りに、浮かびあがったのは、いつの間にか、忍び入っていた眠狂四郎の姿であった。

名状しがたい歪んだ形相へ、冷やかな微笑を湛えた眼眸をあてて、

「はやまったな、勘兵衛。九分九厘まで双児の兄の九左衛門になりすますことにこぎつけ乍ら、惜しいことをしたものだ。亭主しか知らぬ女のからだまでだますことは、ちと無理だったようだ。……じたばたするな！　とんだ贋葬式の大騒ぎで、みんな疲れはてて、ぐっすり睡っているのだ。これ以上騒がせるにはおよぶまい。何十年ぶりかで、江戸へ舞い戻った貴様が、双児の兄の九左衛門を、根岸の別荘で殺して、本人になりすましただけではあき足らず、贋葬式とみせかけて、実は本当の葬式を出し、天下晴れて、おのれの名で伊勢屋をのっ取ろうとしたのは、念が入りすぎてあくどすぎたようだ。……おい、勘兵衛、貴様、河内山

の子分だろう。こんな悪知恵は、貴様の脳みそひとつだけでは働く筈がない。河内山が仕組みそうな芝居だ。……こんどこそ、死体の入った棺を、この家から出してやるから、悪党なら悪党らしく、覚悟をきめて、その、そっ首をさし出せ。斬り手が眠狂四郎だ。抱き首に落してやる！」

おろか妻

一

雨に追われて、仲町の往還から、不忍池の簗島の茶屋へ、駆け込んで来て、傘のしずくを切ったのは、お玉ヶ池の岡っ引佐兵衛であった。

「おおっ、ひでえ降りだ」

今朝から降ったり歇んだりの、いやな空模様であったが、降りしぶって、ためていた雨量を、一時にたたきつけるように、黒雲は、上野の山をなめるようにかぶさって来て、あたりを薄闇にしておいて、どっと落して来たのであった。

池は、いちめんに、雨脚を刎ねあげて、弁財天の祠をとりまく蓮の葉が、音たかくゆれさわいでいた。華やかな観蓮会には、まだ十日あまり間があり、花は、あちらにひとつ、こちらにふたつ、とまばらにしか咲いていなかったが、その紅白の色も雨の幕の中に包まれてしまった。

「おお、姐さん――」

がらんとした店の中を見わたして、佐兵衛は、呼んだが、緋縮緬の前掛をつけた茶汲女の

姿は、どこからもあらわれなかった。

朱塗竈にかけられた真鍮の鑵子が、音たてているところをみると、客のない所在なさに、となりへでも油を売りに行ったものであろう。

佐兵衛は、落間の床几のあいだを抜けて、展望のきく池中さし出しの座敷へ上った。

どっかとあぐらをかいて、目を雨中の景色へ投じた佐兵衛は、

「この雨があがったら、きれいに咲いて、それをさかなに、朝から夜まで、ここは飲めや唄えの騒ぎだぜ」

と、呟いた。

雨はますますひどく降りそそいだ。北は根津辺から茅町の裏手、山下の彼方まで、すっかり掩いかくされて、池の面だけが、白い飛沫を踊り狂わせていた。

ふと――。

衝立をへだてて、人の気配がしたので、佐兵衛は、何気なく首をのばしてみて、急に、眼光を鋭いものにした。

ごろりと寝そべって、脇息を枕にしている浪人者の、蒼白い異相は、佐兵衛が最近さがしていたものだったのである。

「旦那――失礼でございますが……」

声をかけると、眠狂四郎は、薄目をひらいたが、べつに起き上ろうともしなかった。

「あっしは、お玉ヶ池で、お上の御用をつとめて居ります佐兵衛と申す者でございます。お

見知りおき下さいまし」
いんぎんに挨拶して、相手がなんの反応もしめさぬのをべつに気にもかけず、
「ちょいとばかり、お耳を拝借いたしとう存じますが、如何でございましょう？」
狂四郎は、しかし、それにこたえるかわりに、やおら起き上って、沈んだ眸子を雨の中へ送ると、こちらから、
「お前さんは、十手をあずかってから、何年におなりだ？」
と、訊ねた。
「四十年になります」
「今年おいくつだ？」
「へい。丁度六十になります」
狂四郎は、ちょっと黙っていたが、視線を佐兵衛に移すと、微笑した。どことなく侘しげな翳をひいた面持であった。
「当人も他人も、あまりいい仕事とは思っていない稼業でも、四十年もつとめあげると、お前さんのように、慈味あふれた顔や態度になる」
「おそれ入ります」
「実は、さっきから、ここで、ぼんやり、自分という人間を、べつの鋳型で造りなおすことを考えていたんだが……」
「…………」

「所詮、無駄な思案らしい。迷えば煩悩、悟れば菩提——というが、わたしのような悪業の徒は、どう悩んでみたところで、風を繋ぎ影を捕うというやつだ。鎌の水切り、水母の風向い、か。尤も、凡夫盛りに神祟めなしで、当分は図迂々しく、生きて行きそうだが——」

狂四郎としては、珍しい述懐が、ふと、その口からもれていた。

「悟ろうと思うも迷い、と申すではございませんか。あっしは、無学文盲で、むつかしいことはよくわかりませんが、だんだん年をくらうにつれて、苦しいことや悲しいことは、なるべくその日のうちに忘れてしまうようになりました。どうせ、てめえのようなごみ屑のような野郎が、じたばたしたところではじまらねえ、起きて半畳、寝て一畳、天下取っても二合半、公方さまもてめえも、食って寝ることにちがいはありゃしねえ——とまあ考えて、仰せつけられた御用をなんとかつとめ終えて、せめて畳の上で往生させて頂けりゃ、これで思いのこすこたァない、と自分に云いきかせちゃァ居りますが——」

それから——しばし、沈黙があってから、

「わたしになんの相談だ？」

物倦げに、狂四郎は問うた。

「へい——。恥をしのんで申上げます。白鳥主膳という公儀の隠密を、旦那はご存じの筈でございます」

「うむ——」

「奴は、この二月あまりのあいだに、町人を十五、六人、夜途で待伏せて、斬り殺して居り

ます。べつに、なんの意趣があろう筈はないのに、これは、もう、悪鬼と申すほかはございません。……あっしのような岡っ引風情には、どうにも奴を手捕える方法はございません。くやしいのは、評定所のお偉方が、この一件については、そっぽを向いておいでなさることでございます。成程、考えてみれば、ご自分たちへ金を貸しつけて、じわじわと、頸を真綿でしめつける町人たちが、次から次へ殺されてくれるのだから、勿怪の幸い、というところでございましょうが、御用をつとめるあっしどもとしては、指をくわえて眺めているわけには参りませぬ。そっぽを向いている御歴々に対する意地もございます。白鳥主膳を捕えたならば、きれいさっぱり十手をお返しする肚をきめてかかってみて……どうにも、対手がしまつにおえぬ化物と来ては、匙を投げるよりほかには、といったんは思ったものの、それよりは、いっそ——」

「毒をもって毒を制す、か」

狂四郎は、憮然として、佐兵衛の言葉を引取ってみせた。

佐兵衛は、じっと瞶めかえして、

「いかがでございましょう。おききとどけ下さいましょうか？」

「わたしは、すでに、あの男から果し状をつきつけられて居る」

「おお、それは——」

「あいにく、こっちの心が、動かぬまでだ」

「と申しますと？」

「生命（いのち）が惜しくなっている」

「へえ、それは、まァ、人間だれでも、生命は惜しゅうございますが——」

「余人ではない、この眠狂四郎が、生命が惜しいと云うと、お前さんにも、おかしくきこえるだろう。それ程、無頼に生きて来た。ところが、女房が出来たり、子供が出来たりすると、春氷を渉（わた）る危険をなるべく避けたくなる。人情だな」

「ご尤（もっと）もでございます。……よくわかりましてございます。旦那にお願いしようとしたあっしの了簡（りょうけん）がまちがって居りました。これは、やっぱり、あっし一人の力で、やっつける仕事でございました」

「あきらめられぬか？」

「蟹（かに）の死ばさみというやつでございます。この白髪首（しらがくび）を賭（か）けて居ります」

二

狂四郎が、湯島天神裏の切通坂をゆっくりと登って行く頃、雨はあがって、頭上には、青空がのぞいていた。

もうたそがれが来ていて、赤味をおびた陽あしが、幾条（いくすじ）もの箭（や）となって、高い石垣（いしがき）の上の樹々（きぎ）にあたり、濡（ぬ）れた葉むらを光らせていたが、微風はすずしかった。

梢（こずえ）からしたたる水玉の音が、はっきりとひびく静けさがあり人影もなかった。

ここは、奥州街道の脇道にあたっていたので、平常は旅人の姿もかなりある往還であったが、この時刻になると、上野の山侍や小旗本の屋敷しかない一郭だけに、ひっそりとしてしまうのであった。

坂の中途の右側に、根生院があり、その山門前を行き過ぎようとした狂四郎は、無数の経験で磨ぎすまされた神経に、びりっとつたわる殺気をさとった。

そ知らぬふりで、二間あまり足をはこんだ。

音もなく山門をすべり出た殺気の主が背後へ――こちらが長く銜わせた影法師のあたまを、踏んだ時、狂四郎は首をまわした。

意外だったのは、それが、お馴染の親不知組でも、備前屋の用心棒でもなく、お高祖頭巾で顔をつつんだ武家娘であったことである。

二十歳ばかりであろうか。憎悪を燃やした双眸が、切れ長く、美しい。色白く、鼻筋が通って、気品がある。襟もとや肩のあたりの、初々しい清らかさが、花弁をひろげたばかりの香をふくいくと匂わせている。

「…………」

無言で、狂四郎は、しずかな眼眸を据えていたが、娘が、携げていた一刀を鞘走らせて、ぴたりと青眼につけるや、

――これは！

と、思った。

隙のないみごとな構えだったのである。
この時、山門から、三人の若い武士が、ぱっと走り出て来て、一斉に、抜刀した。
狂四郎は、ゆっくりと、左側へ寄って、石垣を背にした。
若い武士たちも、いずれも歴とした家の子弟らしい顔立ちをしていたし、なみなみならぬ修業と覚悟ができているとみてとれた。
足場をきめると、緊密な脈絡を張って、いずれも、微動もしなくなった。娘を中心とするこの陣形は、慎重に考えた挙句のものらしかった。
「わたしを、眠狂四郎と知って、討とうとされるのか?」
狂四郎は、依然として、平穏な態度で、娘に訊ねた。
「父の敵、眠狂四郎覚悟！　神尾清十郎の娘千世と知れ！　いざ！」
娘は、じりっと、間合をつめた。
「神尾清十郎?　おぼえがない」
「この期におよんで、卑劣なっ！」
これは、右端の若い武士の叫びだった。
「正直なことを申上げて居る。斬った方々の名前をいちいち記憶にとどめておく菩提心がなかった。……いつ、どこで、貴女の御父上を斬ったのか、思い出させて頂こう」
「今年正月七日夜、谷中天王寺の裏門前においてーー。おぼえがないとは云わせぬぞ！」
「正月七日には、わたしは、江戸へ帰って来て居らぬ」

「云うな！　父のおもてを、縦一文字に斬り、その血汐で、胸に、狂の一字を記しのこした悪逆無道の所行を、忘れたとは云わせぬ！　父のみならず、松永良輔殿、大須弥五郎殿も、なんじのために同じ非業の最期をとげられたのではないか――」

狂四郎は、合点した。

白鳥主膳のしわざであった。

――おれを江戸へ戻す手段として、江戸で屈指の町道場主をえらんで、勝負を挑み、むごたらしい兇行を演じているのがおれだとみせかけたことは、武部老人からきいていたが……。

――そうか、この娘の父親が、犠牲者の一人だったのか。

「千世さん――と云われたな。あの下手人はわたしではない。わたしという男は、対手が悪党でない限り、自ら進んで刀を抜いたことは一度もない。これは、無頼者のわたしが、ただひとつ、おのれの心をいつわらずに言明できることだ。御父上を仆した者は、ほかにいる」

そう弁明しつつも、狂四郎は、先刻の老御用聞きからきいた主膳の振舞を思い出していた。

――主膳は、この娘の父親らを討った血の匂いが忘れられずに、また辻斬りをはじめたのだな。

その納得があった。

千世の方は、狂四郎の眸子が、一点の曇りもなく冴えているのをみとめて、心の動揺を感じていた。

この異相の浪人者の目の色が、ふしぎな妖しい魅力を湛えていることは、最初に正視しあ

った刹那に、千世の胸を、はっとさせたものだった。

——こんなに澄んだひとみの持主が、父の敵であろうか？

言葉に表現すれば、そうとも云える微妙な直感があったのである。

そして、いま、はっきりと、自分は下手人ではない、と断言されると、千世は、わが直感の正しさに、安堵をおぼえるとともに、狂四郎の眸子の中にひき込まれそうなじぶんを意識して、かすかに狼狽したのである。

「千世殿っ！　誑かされてはなりませんぞっ！」

「仇は、こやつに相違ござらぬ！」

「臆されるなっ！　先生の御霊に誓って、刻苦された必死の剣法を、いまこそ！」

若い門弟たちは、口々に叫んだ。

千世は、そのはげましに、心をとりなおすや、

「眠狂四郎、勝負！」

と、間合をさらに、じりりっと尺余つめた。

たしかに、その切尖には、一流剣客のみが放つ鋭さがあった。こちらの動きで、どうにでも変化転移するしなやかな強い力を潜めている静かな構えが、その妍姿を、この上もなく爽やかなものにしていた。

「もう一度、申上げる。下手人は、わたしではない」

狂四郎は、ダラリと両手をたらしたまま、云った。

「問答無用っ！」
千世のうしろの一人が、怒鳴った。
「やむを得ぬ。少々、いたい目を、みるぞ！」
狂四郎は、雪駄をすてた。
「えいっ！」
華やかな匂いをまいて、千世の一刀が、斬り込んだ。
鏘然と、白刃と白刃が、嚙みあった。——
次の刹那、狂四郎は、千世の膝のあいだを蹴あげる行為を、斜横に身を移す動作へ継続させ、その跳躍をまた、右端の敵への一撃とした。
千世が、裳裾を乱して、ねり絹の下着を白脛にもつれさせ、内股のふくらみまであらわに、のけぞるのと、右端の門弟が、頸根を峰打たれて、ぐらぐらとのめり込むのが、同時だった。
石火の迅業とは、まさに、これをいうのであったろう。
脈絡は、あえなく粉砕された。
狂四郎は、のこり二名に切尖を揃えさせておいて、刃を上にした無想正宗を、やや高め上段の位にとって、じりじりと押して行った。
すでに、もう二名の呼吸は、みだれていた。
狂四郎は、ふっと、皮肉な微笑を口もとに刻むと、
「わたしを討つ決意をしたにしては、まだ稽古が足らぬな」

と、云った。

憤怒(ふんぬ)と憎悪と屈辱で、ふたつの面貌(めんぼう)が、荒いひと息ひと息で、幾色かに変じた。

狂四郎は、刀身を、つと、下げた。

誘いと知りつつ、もはや、五体を、その隙へ躍り込ませるよりほかはなく、

「やああっ！」

血も肉も骨も、その呶号(どごう)の攻撃に動員して、左側の門弟が、突進した。

右側の門弟は、身を捨てて自分の一刀へ勝利をたのんだ味方が、狂四郎のからだの脇へ、崩れ伏すのを、ちらと目にとめつつ、これまた、野獣の吼(ほ)えるに似た一声を宙に散らしつつ、むなしい一閃(いっせん)を描いたのち、石垣へ、だだっとわが身をぶちつけていた。

悶絶(もんぜつ)をまぬがれたのは、千世だけであった。

狂四郎は、しかし、大きく眦(まなじり)を切って見あげる千世へ、ちらと一瞥(いちべつ)をくれただけで、鍔鳴(つばな)りをそこにのこして、ふところ手になると、歩き出していた。

千世は、よろよろと立ちあがると、

「ま、まって欲しい！」

と、呼んだ。

ふりかえった狂四郎は、冷やかに、

「その腕前では、まだ、仇は討てぬ」

と、云った。

「まことの下手人は、何者です？」
「公儀隠密、白鳥主膳。……貴女に攻撃されたおかげで、主膳と勝負する決意がこちらにもできた」
「まことの下手人ならば、貴方様のお手をわずらわしませせぬ」
「主膳は、わたしが互角にたたかって、勝算はおぼつかぬ使い手だ。だから、貴女には討てぬ、と申して居る。……女には、ほかに、生きる道がある筈だ。死んでしまった者への義理だてよりも、まず、自分一身の幸せのことを、考えたがよい」
云いすてて、狂四郎は、歩き出し、千世が再び呼びかけても、もはや振りかえろうとはしなかった。

三

その時刻――。
中野の隠れ家の、囲炉裡（いろり）のある部屋で、美保代は、武部仙十郎と対坐（たいざ）していた。
「狂四郎が戻って来て、どれくらいになるかの？」
仙十郎はいつもの好々爺然（こうこうや）としたにこやかさで訊ねた。
「ちょうど、二月に相成りまする」
美保代は、つつましく、伏目勝ちに、こたえた。
「二月か。……そなた、またいちだんと、美しゅうなった。わしの生涯（しょうがい）で、そなた程の美女

には、二人と会わなんだの」
「おたわむれを——」
「いや、まことじゃ。狂四郎は、幸せな男だの。そなたのような絶世の佳人に、生命を捧げられ乍ら……まだ、何やら不服げな様子をいたして居る。罰あたりめが——」
「あの……、本日は、何か、御用でございますか？」
美保代のすずしい明眸をまともにあてられて、仙十郎は、ちょっと柄にもなく戸惑う気色で、視線をそらしたが、
「好事魔多しでの。いやな報せを持って来た。……白鳥主膳が、狂四郎に果し状をつきつけて居るそうじゃの？」
「え？」
「きいて居らぬか？」
「はい——」
美保代の不安の面持を見やって、仙十郎は、内心、
——狂四郎も、どうやら、人間くさくなり居ったわい。女房に、心配をかけまいと、心をくばって居る。そうとわかって居れば、口をすべらすのではなかった。
と、おのれの迂闊さを、ちょっと悔いたが、云ってしまった以上は、やむを得なかった。
仙十郎は、懐中から、一通の書状をとり出して、美保代に渡した。
それは、仙十郎宛の主膳の手紙であった。

去月、宿運の勝負を決すべく、十五夜戌の上刻、青山百人町教学院裏空地へ来れ、と眠狂四郎に通告いたしておいたにも拘わらず、ついに、卑怯にも姿を現わさず、これは、ひとえに、一婦女子と結ばれたる赤縄によって心身の自由を奪われたるものと解釈するよりほかはなく、笑止の沙汰と申すべきであろう。殺の報い、殺の縁、車輪のごとくにして、今更に、後生をねごうて、灰を飲み胃を洗うの愚は通じまい。尊台より、すみやかに、当人に伝言ありたい。今月十五夜こそ、必ず指定の場所へ来れ、と。もし来らざる時は、汝の心身の自由を奪っている赤縄を、当方にて断ってやることに聊かも躊躇するものではない、と。

そういった内容であった。

美保代は、読み了り、巻きおさめてからも、しかし、俯向いて、じっとしていた。

「如何いたそうかの？　狂四郎には、どうやら、挑戦に応ずる意志はないようじゃ。狂四郎も、運命に対する観かたが変って来たといたせば、それも重畳と申すものじゃ。命を知る者は、巌墻の下に立たずでの。……主膳め、また、すっぽかされたならば、やっきになって、この隠れ家をさがすであろうから、そなたは、ひとまず、わしのところへ難を避けていた方がよくはないかの？」

「あの人が戻りましたならば、相談いたしてみまする」

「なるべくそうした方がよいぞ」

美保代は、やがて、立去る仙十郎を送って玄関へ出たが、仙十郎の姿が中門のかなたに消

えても、なお、しばらく、そこに坐って、ふかく沈んだまなざしを、膝に落していた。

四

夜に入って、狂四郎が、ふらりと戻って来た時、美保代の態度は、常とすこしも変らなかった。

おそい夕食を摂り終えて、縁側に出た狂四郎は、月を仰いで、

「あすが十五夜だな」

と、呟いた。

——こちらから、明朝、果し状を、主膳のもとへ届けてやるか。

そう考えたのである。

すると、部屋から、

「旦那さま——」

ひくく、美保代が呼んだ。

「………?」

狂四郎が、視線をかえすと、美保代は、急に、おもてを伏せて、

「いえ、べつに……なんでもございませぬ」

と、云った。

狂四郎は、部屋へもどると、ちょっと沈黙を置いてから、

「わたしが、もし、死ぬようなことがあったら……覚悟はしておいてもらいたい」
「はい――」
美保代は、頷(うなず)いた。
その表情は、静かであった。
ふと――この瞬間、狂四郎は、美保代の態度に、もの足りなさをおぼえた。
――この女は、堪えることしか知らぬ。女のおろかさをあらわすことが、時として、男の心をつなぎとめ、わが身に幸せをもたらすことに気づいていない。
その独語は、憐憫(れんびん)ではなかった。苛立(いらだ)ちであった。
狂四郎は、美保代の両肩をつかみ、
「ばかっ！　お前は、もっとおろかな女になれ！」
と、どなりつけたかった。
しかし、たとえ、どなりつけたところで、美保代が、その品位をふりすてる狂おしい態度をとるとは、到底考えられなかった。
狂四郎は、その焦燥を、急に立ち上って庭へ出ることによって、美保代から、かくした。
庭から、そのまま、草道へ出て、およそ二刻(とき)も、狂四郎は、何処をさまようているのか、帰って来なかった。
三更を、まわっていたであろうか――。
狂四郎が、むっつりとした顔を、もとの部屋にあらわした時、美保代は、姿をみせなかっ

た。
遠くで、ざあっ、ざあっ、と水音がしていたが、これは、下男が、なにかを洗っているのだときいた。
狂四郎が床に就いてから、ほどなくして、襖がそっと開かれた。
狂四郎は、じろりと、美保代を見上げた。
その顔は、白蠟のように、冷たく沈んでいた。
ふいに、狂四郎の胸中に、残忍な獣性が来た。
「おい、ここへ入れ」
と、命じた。
しかし、美保代は、なぜか、怯ず怯ずと見かえして、ためらった。
狂四郎は、掛具をはねて、起き上ると、腕をのばした。
その白い細い、春葱に似た五指を、つかんだとたん、氷のようなつめたさに、はっとなった。
——あれは、水垢離をとっていた音だったのか！
「美保代——」
「はい」
「わたしが、白鳥主膳とたたかう決意をしたのを、どうして読みとることができたのだ？」
狂四郎の鋭い凝視を、かろうじて受けとめて、美保代は、なにかこたえようと、色失せた

くちびるを、わななかした。
突如――。
言葉のかわりに、その口から出たのは、いのちのかぎりの思慕を一時にほとばしらせる慟哭であった。
美保代は、無我夢中で狂四郎に、しがみついた。
狂四郎が、思わず、うしろへ倒れかかるほど、それは、狂おしい勢いであった。
「……いやです！　お死にになっては、いやです！　……美保代は、貴方より、さきに、死にとうございます！　……いやです！　いやです！　たったひとりに、のこされるなど、いや！　いや！　……」
慟哭のあいだに、美保代は、いっさいのつつしみをかなぐりすてて、身もだえつつ、かきくどいた。
――おろかなやつ！
狂四郎は、冷えきったしなやかな肢体を抱き乍ら、口のうちで、いとおしく、この一言を呟いていた。

剣の人々

一

白鳥主膳は、品川宿本陣の、上段の間付きの広間に、ひとり、しんとして端坐していた。

もう小半刻、待たされていたのである。

無署名の至急の手紙で、呼びつけられたのであった。呼出人が誰であるか、およその見当がついていたが、用件については、思いあたるところがなかった。

——あと、百かぞえるうちに、現われねば、立つぞ！

そう考えて、主膳は、胸のうちで、ゆっくりかぞえはじめた。

七十七までかぞえた時、入側（書院）の腰高障子が開いて、三十前後の、一瞥して公卿とわかる人物が入って来た。

主膳の想像は当っていた。三位権中将久我忠成であった。

久我家は、摂家に次ぐ清華という家柄の公家であった。

特殊の権利を持った家筋なので、公家の中では、かなり富有であった。すなわち、同家は、盲人に、官職、乗物、袋杖などを許す特権を専有しているのであった。琵琶法師、按摩は、

すべて久我家へ願い出て、同家の許可を得て、はじめて検校、勾当となり、網代輿に乗り、袋杖を用い得る。按摩によくある、なに市という市名も、勝手に称すこと出来ず、久我家の許可を必要とした。また、琴三絃の師の資格も、久我家の認可を受けることになっていた。そして、これには、相当の金子を出さなければならなかったので、久我家のふところはゆたかだったのである。

久我家は、代々源氏長者淳和奨学両院の別当であったが、それを徳川氏の懇望に任せて、譲ったために、右の盲人に対する特権を与えられた、という。

ともあれ、幕府とは一番親しい公家であった。その特権と富有が、当主をしてしばしば京と江戸を往復させていたからである。

「しばらくであったな」

忠成は、上段の間へ、主膳をさしまねいて、公卿にしては、気軽な態度で、挨拶を交わした。

二、三のなにげない言葉のやりとりがあってから、忠成は、そうした話のつづきのような口調で、訊ねた。

「桂宮様は、いま、鎌倉の尼寺にご滞在だそうだの？」

主膳は、ちらりと、すずやかな眸子を忠成へくれたが、黙って、肯定した。

桂宮明子内親王を、桂離宮から、禁裏に無断で、つれ出して、江戸へともなったのは、主膳のしわざであると知りつつも、忠成は、それを咎める気振りをみじんもしめさぬのである。

「その方、つれもどせぬか？」
そう促す表情は、ごく穏かなものだった。
「姫宮様は、東慶寺が大層お気に召したごとくでございます」
「その方なら、つれもどせるであろう」
「いかがなものでございましょうか」
主膳の白い頬に、皮肉な微笑がのぼった。
忠成が、明子を、つれかえるべく、京から出て来たとは、主膳には考えられなかった。明子の庇護役は、花山院家であり、忠成とは、犬猿の間柄であった。花山院家では、明子を無住の比丘尼御所曇華院（竹御所）の門跡にすることによって、寺からかなりのみつぎを得ようとしていたし、久我家としては、そうなるともともと曇華院が持っている琴三絃の師匠に関する許可権をかえさなければならないからであった。これは、痛手であった。
忠成は、明子の脱出をひそかによろこんだ人物だったのである。
「是非そうしてもらわねばならぬ」
ここで、はじめて、忠成は、真剣な面持になった。
「と申しますと？」
「うむ――」
忠成は、ちょっと、ためらったが、
「将軍家がの……」

と、それだけもらした。
主膳は、たちまち、忠成の役割を読みとった。
家斉将軍に、明子内親王を与えよう——と、本丸老中の寵臣土方縫殿助が企図していることは、すでに、主膳もさとっていた。だからこそ、主膳は、軽率に、明子を、東慶寺からつれもどさなかったのである。
この欲深な公卿は、土方縫殿助に、どうやら、鼻薬をかがされて、抱き込まれたらしい。
「三位様」
「なんじゃ？」
「てまえは、職掌柄、地獄耳を持って居ります。近頃、禁裏において、天皇御璽が紛失した、という噂は、まことのようでございますな」
これをきくや、忠成の面上を、狼狽が走った。
「し、しらぬぞ、そのような……考えられぬことじゃ」
「左様でございますか」
妖しい微笑を、眉目に刷きながら、主膳は、ふわりと、立ちあがった。
忠成は、不安と困惑で、身をちぢめた。
「御璽、頂戴つかまつる」
しずかに、主膳は、そう云った。
「な、なにを申す！」

恐怖をあおらせた忠成へむかって、主膳のからだが、疾風を起して、躍った。がっくりと当て落された公卿は、たちまち懐中にしていた古金襴の小袋を奪いとられてしまった。

主膳は、すばやく、小袋から、菊の紋章入りの螺鈿蒔絵の小函をぬき出して、蓋をひらいた。

純金製で、鈕に竜を彫刻した印章があらわれた。『天皇行璽』と読める。行璽とは、臣下に書を賜わる時に用いる言葉である。

土方縫殿助が明子内親王を将軍に与うという贋勅状を作成するために、この久我忠成に盗み出させた御璽なのである。

主膳は、ぶざまに悶絶している公卿へ、べっと唾を吐きかけた。

「たわけ！　わしの夢は、公方と雖も、ふみにじらせぬわ！」

悠々として、主膳は、奥書院を出て、畳敷広縁から、駕籠台石へ降り、奥庭の退口門から抜け出て行った。

二

その頃、眠狂四郎は、水野忠邦の上屋敷内にある武部仙十郎邸をおとずれていた。

「ご老人は、美保代に、白鳥主膳の果し状を見せられたそうだが、余計なことをされた」

その言葉を挨拶の代りにして、狂四郎は、この男に似気ない侘しげな遠い眼眸を、庭さき

に楚々として咲きこぼれている玉簪花へあてた。

「そうか、今宵は、十五夜であったな」

仙十郎は、狂四郎の深く沈んだ横顔を見やって、――死ぬ気だな、と、読んだ。

「主膳と試合することを止めぬか」

仙十郎は、そう忠告したかった。しかし、これは、さとして諾く狂四郎ではないとわかっている以上、口にするのは無駄であった。

狂四郎が、旅から帰って来て以来、すこしずつ、その虚無の心匠を易えつつあるのを、仙十郎は、感じていた。これは、興味のあることだった。

もとより、温良篤実の性格ではない。その変化によって、如何なる行状の人となるか、逆睹し難かった。それだけに、ここで、むなしく死なせたくはなかった。

「おぬしの方から、主膳へ、返報をしたのじゃな？」

狂四郎は、その問いに視線をかえした。

「わたしが果てたら、美保代と子供をおねがいしたい」

「それは、たのまれるまでもないが……、おぬし、主膳を倒す工夫があるか？」

「対手の工夫に、こちらの剣を合わせる――これまでのたたかいがそうであったし、今宵もそうなりましょう」

「おぬし生涯の危機かの？」

「まず――」

「善く勝つ者は、勝ち易きに勝つ、と孫子にあるがの」

「ところが、その孫子に、善く戦う者は、まず勝つ可からざるを為して、以て敵の勝つ可きを待つ、とあります。わたしの円月殺法がそれだとすれば、このあたりで、そろそろ無明住地煩悩の業から、不動神妙の理に入ってもよさそうです。敗れれば、まっすぐに地獄へ堕ちる——これもわたしの末路として当然のことでしょう」

そう云う狂四郎の面差を、冴々として美しい、と見た仙十郎は、

——生長しおったわい。善哉！

内心、うなずくところがあった。

「では、殿に挨拶していってもらおうかの」

狂四郎は、承知して、ひとり、本邸の奥へ入って行った。

忠邦は、狂四郎を見て、よろこんで、酒肴の膳をそろえさせた。

すぐにひきさがるつもりであった狂四郎は、意外に長い時間を、そこですごすことになった。

やがて、主膳との約束の時刻が、ここからその場所まで歩く時間を加えて、ぎりぎりになって、狂四郎は、いとまを乞うて、仙十郎邸へひきかえした。

上らずに、玄関で、別れを告げようとすると、出て来た仙十郎の面持は、ひどく当惑したものだった。

「狂四郎、おぬし、試合と、子供と、いずれが大切だな？」

訝しげに見かえす狂四郎へ、仙十郎は、いたましげに首をふってみせた。
「中野から、下男がかけつけて参って居る。おぬしが出かけてから程なく、子供が往来へ遊びに出て、川へはまったそうじゃ」
愕然として、狂四郎は、顔色を一変した。その下男が、おずおずと玄関へ入って来て、平伏するや、呻くように、
「死んだのか？」と訊ね、
「い、いえ……ま、まだでございまするが――」
とかぶりをふるのを見た狂四郎は、仙十郎へ、
「ごめん――」
と一礼しておいて、さっと外へ出て行った。
仙十郎は、にやりとすると、
「馬を引けい！」
と、叫んだ。

三

仙十郎が、馬を乗りつけたのは、三町とはなれていない大名屋敷であった。
平戸侯松浦静山の上屋敷であった。
諸大名中、剣道の造詣、嶄然として古今に秀出した人で、心形刀流の奥義をきわめてい

た。文学に於て、皆川淇園の弟子にして、静山と号し、識見頗る高く、剣に於て、伊庭是心斎秀厚の流れをくんで、常静子と称し、その著『剣談』及び『剣攷』は、剣の真髄を説いて、傑作であった。

煩瑣を承知で、その二著のうちの一、二節を紹介するならば――。

『剣談』に、次のような言葉がある。

「予、裸の剣術と謂うことを云う。此故奈何と思わん。裸とは空手なる者をいうなり。また、裸体をもいう。たとえば、裸体にも、手に物あらば勝つべし。身に金鉄をまといたりとも空手にては如何？　されば、裸の剣術といえり、空手の場に剣術あり。この工夫成就する者は、実に、その術を得し人なり」

また、

「剣術も、刃上に及びたるを大切の至極と思うべきが、これはかえって末の事にて、いまだ抜かず、いまだ手出しを為さざる前が大切なる場と思うべし。この意味を能く知る可き事なり。たとえば、鉄砲も堅甲を砕く物にて、大いに懼るべき事は勿論なれど、その堅を貫く場はかえって末なり。それ奈何となれば、中るときは堅も貫けり。中らざるときはみな空に帰す。故に、鉄砲の懼るべきも、いまだ打ち出さざる前こそ大切なる場と覚悟すべき事なり。意解るや否？」

と、ある。

『剣攷』には、丸橋刀、陽重剣、波切刀、切甲刀、乱車刀、獅子乱刀、青眼刀、柳雪刀、鷹

之羽、三心刀、中道下藤、無拍子など、およそ二十五の刀法が、微に入り細をうがって説いてある。

当時、剣を学ばんとする者は、あらそって、この常静子の二著をむさぼり読んだものである。

仙十郎は、この剣の大名と親しかった。

めずらしく、余裕をうしなった気色の仙十郎を見出した静山は、不審げに、

「どうしたな、老人？」と、訊ねた。

「されば――」

仙十郎は、顔を擡げて、静山の背後の床の間の天井のあたりへ目を置いて、

「今宵、天下無双を決すべき真剣試合が行われる筈でござった。片や白鳥主膳と申し、片や眠狂四郎と申す稀有の手練者でござる」

「両名は、以前に一度たたかって、眠狂四郎の方が勝ったときいて居るぞ」

「再試合の儀を、主膳が挑んだのでござる。ところが、眠狂四郎の小せがれめが、川にはまって重態となり申して、この試合、中止のやむなきにいたりましたるは、かえすがえすも残念至極でござる。……ねがわくば、狂四郎の代理となるべき剣客を、殿のお力にて、一人お貸し賜わるようお願いつかまつる。如何でござりましょうな？」

そう云って、仙十郎は、ひょいと首をのばして、静山を、じいっと瞶めた。

静山は、仙十郎が眠狂四郎の後見を自任していることを知っていた。また、狂四郎の行状

について、仙十郎の口から、おりおりきかされていたし、噂でも耳にしていたのである。
——狸爺さん、たくらんだな。
静山は、微笑した。
狂四郎に、事故が起ったならば、試合を延期することはできない相談ではあるまい。それを避けずに、代理を赴かせようとするのは、主膳と互角にたたかう者があることを思いついたからに相違ない。
「わしに貸せというのは、男谷精一郎のことかな、老人？」
「左様、左様——。あの若者のことでござる」
仙十郎は、静山が、本所亀沢町に道場をひらいている直心影流の団野真帆斎の門弟たる一人の天才児を、この上屋敷に住まわせて、自ら剣の奥義を授けていることを、ちゃんと知っていたのである。
「真剣試合などと申すものは、滅多にやれるものではござらぬ。……せっかく、殿が見込んで、一世の剣客にしたてあげようとなされて居るのであれば、ひとつ、白刃下に身を曝させてみては如何でござりましょうかな？　千の竹刀稽古よりも、一の真剣勝負でござるわい」
しゃあしゃあとして、仙十郎は、云ってのけた。静山は、しばらく、沈思していたが、手を打って、侍女を呼んだ。
「男谷に参るように申せ」
と、命じておいて、

「老人、眠狂四郎という男は、子供の病気ぐらいで、試合を放棄するような殊勝な心掛けの持主かな？」

「人間らしくない奴ほど、時として、人間くさすぎる行為をとるものでござる。狂四郎は、これまで、生命を途方もなく粗末にあつかい居って、いつでも泥溝へすててしまうような道を歩いて来た男でありまする故、かえって、真剣試合など、さまで重要に心得ぬのでござりましょうて――。いや、全く、彼奴は、あきれはてた無頼でござったが、それだけに、心中常に、孤愁を抱いて居りましてな、そこが、拙者のあわれをかける所以でござりましたわい」

それから、仙十郎は、子供というのは、狂四郎の実子ではなく、小日向の元切支丹屋敷内で起った悲劇によって生を享けた因果の胤であることを、手短かに語った。静山は、すでに、狂四郎の秘密の素姓を、仙十郎からきいていたので、この話には、痛く胸打たれた。

やがて、入って来たのは、二十五、六歳の、いかにも凜々しい風貌と逞しい長身を持った青年であった。

「男谷、どうだ、真剣勝負をせぬか？」

いきなり、静山にすすめられて、

「は？」

と、まなこを大きくして、見かえした。

「対手は、幕臣随一の使い手白鳥主膳じゃ。そちの天稟と、これまでの修練の全力を集めて、

はたして勝てるかどうかおぼつかぬ。もし、仆し得たならば、そちは、今日在る五百余の流派の上に卓然として、真の剣理を樹てることができよう」

静山は、数年前、神道無念流・岡田十松吉利の小川町の道場で、白鳥主膳が、そこの総監督たる麒麟児斎藤弥九郎と立会い、二合と打ち合わずして、その竹刀を天井へ刎ねとばした絶技を、見ていたのである。

今日、弥九郎は、韮山の代官江川坦庵の後援によって、独立して、飯田町に道場を開き、才俊を集めて、斯界屈指の盛観を呈しているが、しかもなお、「白鳥主膳を打ち負かさない限り、わしは、神道無念流の看板をかかげるわけにいかぬ」と云って、ただ、練兵館という額だけを、門に出しているという——。

「仰せお受けつかまつります」

精一郎は、片手を畳に置いて、こたえた。日常事を為すような静かな態度だった。

「よい。勝とうと思わずに、負けるな。太刀に順逆あることは、すでに教えてある」

「は——」

「白鳥主膳は、想像を超えた迅業をつかう。これに対抗する迅業は、そちには使えまい。だが業の迅きを心がける者は、おのれを頼むがゆえにかえって遅い、と知れ。必ずその法に依って為せば、業そのものは迅くなくとも、敵の迅業を砕き得ることは可能じゃ」

「いかなる刀法をもって、むかいましょうか？」

その返辞は、即座であり、明快であった。

「主膳が上段ならば、剣忍誠を使い、青眼で来たならば、右旋刀と左転刀を使いわけるがよい」

「かしこまりました」

この問答のさまを見まもり乍(なが)ら、水野忠邦の側頭役(そばがしらやく)は、

——はてさて、わしの謀計は常に成就するようになって居るわい。

と、胸中で満足げに独語(ひとりご)ちていた。

四

満月は、頭上にあった。

さっとひと刷毛(はけ)なでたような純白の吊し雲(つるぐも)が、その下に浮いている。月は、その中から生れて、昇ったかとおぼしい。

ここ青山百人町の、教学院と梅窓院観音と青山大膳亮(だいぜんのすけ)の下屋敷にかこまれた数千坪の空地の中央に、ひっそりと彳む(たたずむ)孤影は、皎(こう)たる月色に染められて、夜陰が送り出した化生かと見えた。

今宵も、その左手には、月の雫(しずく)のように白い花をひらいた一枝を携(さ)げている。

夕闇(ゆうやみ)や山梔子(くちなし)に白く風わたる

沈黙を象徴するこの花の香気は、いかにも、幻影に似たこの立姿にふさわしい。

すでに、約束の時刻は、すぎて、かなり経(た)っている。しかし、主膳は、すこしも苛立(いらだ)って

はいない。隠密としてきたえられていて、その必要があれば、朝までここに立っていることに、すこしの苦痛もおぼえぬ人物なのである。

——今宵あらわれなければ、その女房を拉致（らち）して、玩（なぐさ）んで、斬る。

その決意が肚（はら）の底にあるだけである。

亥（い）の刻を告げる寺の鐘が近くで鳴った。それにあわせて、かなたの往還で、犬が遠吠（とおぼ）えた。と。——教学院の築地塀（ついじべい）の角から黒い人影が、すっと歩み出て、立ちどまった。こちらのすがたを、すかし見てとるや、ゆっくりとした歩調で、空地に進み入って来た。

——はて？

主膳は、訝（いぶか）った。

「ちがう——」

これは、小声の呟（つぶや）きになった。

その衣服の柄を見わけ得る距離まで、対手を歩み寄らせた主膳は、正視し合った刹那（せつな）、この青年武士が、今宵の敵であることを直感した。

——またしても、武部仙十郎に一杯くわされたか！

自嘲（じちょう）があった。

今年の早春、主膳は、同じこの場所で、左馬右近と剣を交えている。武部仙十郎が、両者を、眠狂四郎の名をもって、おびき出し、嚙（か）みあわせたのである。

「白鳥主膳殿か？」

「左様――」

「拙者は、直心影流団野真帆斎の門弟男谷精一郎信友と申す。眠狂四郎殿に代って、試合に参った」

「おぬしの名は、かねてきいて居る」

団野道場は、天下道場の称があった。出入する者、今日まで二万に上っているといわれている。当時の内規であった他流試合法度(はっと)の禁を破った最初の府内道場としても有名であった。

男谷精一郎が、若年にして師を凌(しの)ぐ伎倆(ぎりょう)の持主であると、評判が立ってから久しい。二十歳で、遠縁の男谷彦四郎の養子となって、小十人頭(こじゅうにんがしら)の家を嗣(つ)いだ精一郎は、昨年、剣技の精妙をもって、部屋住みのまま新規召出し、御徒士組頭(おかちぐみがしら)、檜間詰(ひのきのま)五十俵高を仰付(おおせつ)けられていた。松浦静山の周旋があったにしても、これは、当時として全く異数の抜擢(ばってき)だったのである。

――狸爺め、わしの対手にふさわしい眠の換玉を寄越(よこ)した。

遽(にわか)に、主膳の五体に、剣気が満ちた。

精一郎は、絽(ろ)小紋羽織をぬぎすてた。すでにその下には革襷(かわだすき)をかけていた。

主膳は、くちなしの一枝を、背の帯へはさんだ。

両者が、草履をすてて、ともに、左へ一歩、つと位置を移すや、それまでくさむらで鳴いていた虫が、ぴたりと音を絶やした。

二本の白刃が、全く同時に、腰から抜きはなたれて、きらっ、と月光を撥(は)ねるや、虫とともに息をひそめていたらしい小動物が、非常な素早さで、草をかきわけて、逃げ去った。

間合九尺。

相青眼。

だが、この同じ青眼は、おのずから異っていた。

主膳の太刀は、敵の青眼に対する青眼破であった。すなわち、敵に撃たせず、こちらから進み、それへ乗って来た敵の境中（かまえうち）にふみ込む法をひそめていた。したがって、刀身からほとばしらせる鋭心は、異常なまでに圧迫的な表現をもってなされる。

尤（もっと）も、表現といっても、それは、精一郎の心眼が映しとるのみにとどまり、もし第三者が観（み）ていたとしても、ただの青眼でしかなかった。

これに対して、精一郎の太刀は師の教え通り、剣忍誠の構えであった。

剣忍誠とは、獅子反敵という太刀より出た、おそるべき忍耐の刀法であった。敵が、陽に構えるや、それを受ける中道の位をもって待つ。汐合（しおあい）がきわまって、敵が突如、撃って来るや、瞬間、こちらは、鋭気を脱して、片膝（かたひざ）を折り、身を踞（かが）め、首をひくめ、刀身を、頭上に水平にかざし、鋒（みね）を後に流し、柄（つか）を頭前に突き出す。すなわち、刃を上にして、敵の剣を受けとめる——その刹那、柄さきで、敵の胸を撞（つ）くがごとくに、胴を薙（な）ぎ斬るのである。

主膳の神速の業前（わざまえ）に対する忍耐の受太刀であった。

「む……むっ！」

主膳の唇（くちびる）から、ひくい呻（うめ）き声がもれた。

剣魂が満身から、噴騰（ふんとう）しようとした一瞬、聡（さと）くも、精一郎の剣忍誠を看破して、その一撃

を思いとどまるための呻きであった。
一歩すさって、主膳は、大上段にふりかぶった。
とみた精一郎は、ひたと、丸橋の構えをとった。右旋刀左転刀の刀法に変えたのである。
心形刀流の口伝秘書にいう。
「右旋刀左転刀二カ条は、馬上にて敵に向う太刀打ちなり。敵、我が右へ来るときは、丸橋を用う。敵、我が左へ来るときは、青眼を用う」
とあって、元来これは、馬上剣である。
この技法を、地上相対峙(たいじ)のたたかいにおいて、敵の迅業を防ぎつつ、斬りかえす術に変化せしめたところに、妙があった。敵が、自分の左に馳(は)せちがいざまに撃って来たら、丸橋にして之(これ)を受け、太刀を右に旋して敵の左を反撃する。敵が自分の右に来たら、青眼にとって、左転する。
ちょうど、精一郎の右側には、古樹を伐(き)った巨株が、草の中にのぞいていた。
当然——主膳が、左側へ奔(はし)ると見たので、精一郎は丸橋の構えをとったのである。
ところが——。
主膳は、両足を、右八字に開いて、綿でも踏むがごとく、すっすっと、精一郎の右側をのぞんで、間隔をちぢめはじめたのである。
——しまった!
精一郎は、背すじに、氷柱(つらら)をあてられたような戦慄(せんりつ)をおぼえた。

もはや、丸橋から青眼へ、構え直すことは不可能である。構え直せば、隙が生じる。
精一郎は、蜘蛛の糸にたぐりよせられる昆虫と化したおのれを感じた。
——どうのがれるか？
石火の間に、事理一体の心刀を魔神のごとく発しなければ、主膳の必殺の一撃をかわすことは叶うまい。
おそろしく長い秒刻が移った。
——くるぞっ！
その直感で、精一郎の肉体のいっさいの器官が、それへ備えて、動員された。
……瞬間、精一郎は、わが目を疑った。
主膳の凄絶な構えに、みるみる、亀裂のように、隙が生じたのである。
——八幡っ！
声なく絶叫して、精一郎は、敵をまっ二つにすべく、太刀をぱっと頭上にふりかぶった。
間髪を入れず、
「待てっ！」
鋭い一声が、後方からとんで来た。眠狂四郎のものであった。
狂四郎が、精一郎の横あいへ立った時、太刀を杖にした主膳は、その口をわななかせつつ、大きくひらいて、黒々とした血汐をがっと喀き出していた。
狂四郎は、精一郎へむかって、ていねいに、

「わたしの代理をつとめて頂いて、お礼の言葉もありません。……ごらんの通り、主膳は、胸を侵されていて、勝利を九分通りわがものにし乍ら、喀血したのは、因果と申すものです。……お引きとり下さい」

と、云った。

精一郎が、一礼して、遠ざかって行くや、狂四郎は、膝を折って巨株へ片手をつき、がっくり項低れている主膳へ、

「いま、駕籠を呼ぶから、寝ているとよい」

と、すすめた。

すると、主膳は、緩慢に首をたてなおして、狂四郎を見、

「眠！　おぬしが、先月の十五夜に、ここに現われなかったのが、わしに、この恥をかかせた」

そう云ってから、視線を、往還へ送り、

「あの馬は、おぬしのか？」

と、訊ねた。

狂四郎は、子供が健在なのを知るや、急遽馬をとばして来たのであった。

「そのからだで、馬は無理だ」

「わしは、鎌倉へ行かねばならぬ」

「……………？」

「東慶寺へ――姫宮に会いにな。死神には、それまで待ってもらう」

にやりとした主膳の面貌を、狂四郎は、この世ならぬ妖冶(ようや)なものに眺(なが)めた。

馬へむかって、まんさんと足をはこんで行く主膳の、匂(にお)いたかい白花を飾った後姿は、幽鬼に似て、影薄かった。

裸女変心

一

澄みきった空に、星が生れた時刻であった。

夏の宵(よい)らしく、地上には、靄(もや)が、しっとりと沈んでいて、路(みち)をひろって行く眠狂四郎の視野は、狭かった。

湯島聖堂の高い屋根が、右方に、靄の上へそびえている。長くつづいた塀(へい)から樹木が鬱蒼(うっそう)とのり出して来て、路面を木下闇(このしたやみ)にしている淋(さび)しい地点であった。

左側の崖(がけ)の下から、時おり、立てる水鳥の羽音が、高くひびくほかは、人の跫音(あしおと)も絶えた静寂が占めている。

狂四郎の足は、西へ向って、坂をのぼっていた。

塀がきれると桜の馬場の堤がつらなっている。

――まだ尾(つ)けて来ているな。

狂四郎はひとり、苦笑していた。茅町(かやちょう)の料亭から出て来たのだが、その時から、執拗(しつよう)な尾行がはじまったのである。手練(てだれ)の捕吏ならば、一定の間隔を保つことに妙を得ているのだが、

この追跡者は、馴れていないらしく、切迫した息づかいさえきこえそうな近くまで迫ってみたり、こちらが、つと町角を曲ると、距離を遠いものにしたのをあわてて、走ったりしたのである。

捕えてみる興味もないし、べつにうるさくも感じてはいなかった。

とはいえ、桜の馬場を過ぎたところで、追跡者が、急に右方の定火消役屋敷のある湯島五丁目への往還へそれて、あわただしく駆け去る跫音をきくと、首をまわして、そちらをすかし見るだけの関心はあった。

それから——。

水戸屋敷をかなたにのぞむ水道橋まで、何事もなかった。

地域をひろくとった旗本屋敷ばかりならんでいる場所なので、とある横道から数名の頭巾の武士たちが、立派な乗物をまもって、しずしずとあらわれたのをべつに気にもとめずに、行きちがいかけた。

とたんに、乗物の中から、鋭い異様な叫び声が、きこえたと思うと、引戸がはずれて、人の影が、路上へころがり出た。立ちどまって、ふりかえった狂四郎は、それが、全裸の女であるのをみとめて、眉をひそめた。

手足をしばられていて、木から落ちた青虫のように、四肢をちぢめたり、のばしたりして、ごろごろと回転する様子が、奇妙なものに眺められた。

靄を通した夜の光が、白い肢体の輪郭をぼかしていて、くねくねとうごく影を幻じみたも

のにみせたので、なまめかしさを感じるには程遠い光景だったのである。
武士たちは、あわてて、その裸身を、乗物におし込んだ。一人が、つかつかと、狂四郎へ寄って、
「見たな、貴様っ！」
と、叫んだ。
頭巾のかげの眼光に、殺気があった。
狂四郎は、黙って、離れて行こうとしかけた。
「待てっ！」
二人ばかりが、走って、行手をふさいだ。
狂四郎は、まだふところ手のままで、
「見てはいかんのか」
「いかん！」
「見せておいて、いかんとは、なんのこんたんだ？」
「同道せい！」
「ことわる」
きっぱりとはねつけるや、武士たちは、一斉に抜刀して、包囲の輪を、じりじりとちぢめて来た。
橋を渡って来て、おどろいて、立ちどまった通行人の提げている提灯のあかりが、地面を

はって来て、互いの姿をはっきりと、浮きあがらせた。
いずれも、どこかの大名の勤番者らしく、きちんとしたいでたちである。
――手のこんだ細工をするにしては、ふさわしくない連中だが……。
そう思いつつ、狂四郎は、おもむろに両手を、袖から出した。
「お手前がたは、わたしに斬られて悔いないだけの覚悟があるのか？」
その声のおわらぬうちに、背後の者が猛然と、斬りつけて来た。
さっと体をかわした狂四郎は、小鬢を吹きぬけた刃風が、相当の剣気をこめたものであるのをさとって、
「死ぬ覚悟のひと芝居なら、こちらも踊らぬでもない」
と、云った。
その右手には、体をかわしざまに、奪いとった刀が、握られていた。
峰を下にして、地摺り下段にとり正面の敵にむかって、ゆっくりと、円月殺法の刃光を、靄明りに描いた。

二

またたくうちに、全員を地に俯っ伏させておいて、狂四郎は橋袂で立ちすくんでいる町人から、提灯を借りて、駕籠に寄った。
赤い、柔かい光をあびて、裸身は、すべての部分で、羞恥の息づかいをしめした。

若い、美しい肌である。胴をねじり、肩をすくめ、首をまげて、顔をかくしている無理な姿態が、その肌を虐待して、さまざまの誇張した曲線や襞を描き、陰影をなやましいものにしていた。
狂四郎は、何も云わずに、引戸を嵌めてやってから、
「おい、黒看板――」
と、ずうっとむこうでうずくまっている駕籠舁きを呼んだ。
おそるおそる人足たちがもどって来ると、狂四郎は、乗物の屋根を軽く手でたたいて、
「そなたをどこへ送りとどければいいのだ？」と、訊ねた。
「もとのお屋敷へ、ひきかえして下さいませ」
意外に、しっかりした声音で、女はこたえた。
「やれ――」
狂四郎は、乗物について、歩き出した。
――どこへ、おれをつれ込もうというのか？
その興味がわいてきた。
湯島五丁目方面へ奔った追跡者の急報で、それっとばかり、この裸の女をおしこめた乗物をかつぎ出して来て、こちらの目の前で、外へころげ出させてみせたのである。そして、見たからはゆるせぬと斬りつけたのは、こちらの腕をためすためであったろう。
それらのやりかたが、ひとつひとつ、いかにも不器用で、しかも必死である。

——踊ってやると約束した以上、むこうの仕組んだ芝居を途中で幕を降ろさせるわけにいくまい。
黙々としてかついで行く人足の足が、春日町から小役人の屋敷町を過ぎ、菊坂をのぼりきっても、まだ停まりそうにないので、少々面倒くさくなった狂四郎は、莫迦々々しい気持を抑えるために、そう自分に呟いていた。
乗物が着いたのは、加賀屋敷の長塀の前を通り過ぎて、どうやら根津権現の裏手とおぼしい、かなり大きい屋敷であった。
門から玄関までの道も長かった。植込みは手入れがとどいていたし、砂もきれいに掃ききよめてあった。
——小大名の下屋敷らしいが……。
玄関を、数間むこうにして、
「おい、そこをくぐれ」
と、狂四郎は、右手の庭門を、人足に指示した。
しおり戸を開くと、すぐに樹冠が星空を掩うた築山があり、細径がその陰を通じている。
これは、敵の侵入をここで防ぐために考えられたむかしの造りで、この屋敷が、長い伝統をもっていることをしめした。竹や松や灯籠の配置が、すべて、風致よりも、敵に備えるためになされているのであった。
細径は、竹藪に入り、それを抜けると、母屋の前に出た。夜目にも、古い建物とわかる。

雨戸はなかった。広縁の奥に障子戸が、白く整然とたてきられている。
狂四郎は、人足をひきさがらせると、乗物の引戸を開けて、女のいましめを解いた。
乗物を出て、すらりと立った女は、背を向けている狂四郎へ、
「ご案内いたします」
と、云って、わるびれずに、沓脱ぎから広縁へあがった。
羞恥をおし伏せた強い意志力が、その裸身の動きに現われているのを眺めて、狂四郎は、ここでまた、おのれの役割に、おぞましさを感じた。
たしかに、これは、奇妙な光景に相違なかった。
しんとして、人の気配もない広い屋内へ全裸の若い女にみちびかれて行くのである。
入った部屋には、一脚の燭台が、蠟燭の焔をゆらめかせて、まん中に敷かれた夜具の花模様を、あざやかに浮きたてていた。光が、まわりにとどかぬせいもあるが、薄闇の中に沈んだ壁や襖は、すべてが古風でくすんでいた。
女は、燭台のわきに坐って、俯向いた。
きわ立った美しさではないが、目鼻立ちのはっきりした、伏せた睫毛の長い、品のいい面差であった。
それよりも、その白い肌の、ぽってりと肉のゆたかな、滑らかな綺麗さは、あらためて、狂四郎の目をうばわずにはいなかった。
「野暮なことを訊くが、わたしに、どうしろというのだ？」

「わたくしをご自由になさいませ」

感情を殺した、あらかじめ用意しておいた返答だった。

しばらく、沈黙を置いてから、狂四郎は、しずかに、

「寝るがいい」

と、云った。

女は、素直に立って、床の中に入った。

仰臥して、目蓋をとじて、冷たく、かたい無表情をつづけているその寝顔を狂四郎は、憮然として見まもっていたが、やおら、目をあげて、襖、衝立、欄間、障子、そして床の間と、順次に視線を移しつつ、鋭く思案するところがあった。

それから、無想正宗と脇差を腰から取って、枕元に置き、掛具をはねのけると、すんなりとのばされた白い肢体の上へ、わが身を乗せた。

瞬間、女の四肢が、ぱっと開くや、狂四郎の五体へまきついた。

腕は頸へ、脚は脚へ――あらんかぎりの力を、ふりしぼって、蛭のように裸身を狂四郎へ吸いつかせたのであった。

その瞬間をはずさず、襖が、障子が、ぱっとひきあけられて、手槍をつかんだ四人の武士が、躍り込んで来た。

だが――。

狂四郎は、女にしがみつかせたまま、微動もせぬ。

「眠狂四郎、この危機を、みごと、のがれてみるか」

その叱咤にもこたえず、狂四郎は、女の頬へ頬をあてたなり、双眼をふさいで呼吸も断ったかのごとくであった。

襲撃は予期したことだったのである。

武士たちの目に、その俯っ伏した姿はむしろ、不気味に映った。尋常一様の使い手でないことを、彼らもきき知っている。

四本の穂先が、隙のない気合をこめて、しずかに、じわじわと、狂四郎の背中へむかって、空間をちぢめて、集まって行く。

しかし――。

動かず、こたえぬ狂四郎の、置石にひとしい寝像は、かえって、突き手たちの心から、有利に立った者の余裕をうしなわしめていたのである。

この四名は、もとより、槍術にかけては、目録程度の心得はあったに相違ない。

宝蔵院流高田派の極意には、悦眼、水月、五月雨など十一カ条の技の至極が記されているが、つまるところの位は、「索めずして成る、睡中痒きをかき、心の欲するに随い、則を越えず」という心法にあって、追詰めに勝ちの突きを急げば、必ず虚が生じて、失敗する、といましめてある。彼らも、そのいましめを忘れたわけではなかったろう。充分の余裕をのこして、突くことができた筈である。もしも、狂四郎が反撃の気配を、ほんのすこしでもしめしていたならば、である。

ところが——。

狂四郎は自らすすんで、身を死地に曝してみたのである。いわば、おのれの円月殺法の秘術を、無手無眼のみならず、軀幹に蛇と化した女体をまきつけ乍ら、いかに使うか——おそるべき悲壮な決意をなしたのである。

円月殺法は、剣をもって空間に描くだけの技ではない。心気が描く一刹那の転化も、それであろう。

伊藤一刀斎のいう「体中の剣——無形の構え」も、常静子剣談にある「剣の奥義に達する道三路のひとつ心形刀」も、いずれ、この一心万刀の理を説いたものである。

狂四郎が、あえて、無想正宗をすてて、おのれを、絶体絶命の窮地に置いたところに、虚無の業念を断ち切って順逆をさとろうとする凄絶の神妙心があった。

円月殺法が、陰の構えから、陽刀に変化する法形であるとするならば、敵の動機を瞥て鞘うちですでに断っている居合の極意と、これは同じ理であり、すなわち、居を合わせる神気の発揮である。これが、無手でやれぬ筈はなかった。

よって——。

狂四郎は、おのれの五体を、完全なる無の状態に帰せしめたのである。

突き手たちが、そのあまりに静かな寝像にまどったのは当然であった。

ついに——。

「ええいっ！」飛電の突きが、心の逸りに乗って、狂四郎の背中の四個所を襲った。

次の刹那――。突き手たちが、手ごたえのなさに狼狽する余地すらもなかったのは、眼前を、白い裸形を吸いつかせた黒衣が、大きく舞う奇怪さに、眩惑されたからであったろう。はっと、彼らが、われにかえった時、狂四郎は、すでに、抜きはなった無想正宗を右手に携げて、床の間に、すっくと立っていた。

女の裸身は、二間はなれた衝立を倒して、その上へ、俯っ伏していた。

四本の穂先が、おのれの背中にとどくまでの――それは、わずか五尺あまりの空間を縫う間髪の動作であったが――その何十分の一秒かの間に、狂四郎は、全身の筋肉を強靭なばねと化して、鋼が撥ねるにも似た迅さで、足から跳ねて、逆立ちに、宙を回転したのである。そして、畳へ落ちる瞬間、女体を刎ねとばしておいて、無想正宗を掴みとるや、床の間へ飛んで、立ったのである。

茫然――四名の武士は、自失した。

狂四郎の、心気は、かつてない程、爽やかに澄んでいた。目の光も、清く冴えて、明るかった。

「お手前がたの役割は終った。舞台を退ってもらおう」

颯爽として、云いはなった。

武士たちが、うつけた面持で、引き取ろうとすると、

「忘れものだ」

と、狂四郎の指が、悶絶した女体を差した。

入れかわって登場したのは、六十がらみの、公私の形式儀礼の心くばりのみにその生涯を費して来たような老人であった。

三

老人の顔面が、夜目にも、蒼褪めはてたものであるのが、なみなみならぬ覚悟を、肚に据えていることをしめした。

にも拘わらず、用向きを、すぐにはきり出さず、客をもてなす法式に拠って、おのれの一挙手一投足を縛る厳しい応対をみせた。

自由放埒に生きて来た狂四郎にも、そのもてなしが、最上の賓客に対する作法であるとわかった。

ついでにいえば——。

この当時、礼儀三千威儀三百といわれたものである。

元禄の世に、水島卜也なる者が、京より出府して、室町家に於ける武家式礼——いわゆる小笠原流の礼式を普及して以来、社会の制裁として、これが上下の人士の自由を極端に束縛してしまい、下ってこの時代は、窮屈煩瑣ぶりは、今日の想像もつかぬていであった。

一例を云えば、殿中において、足袋の紐の長さを、二寸五分を三寸と改めるにさえ、目付衆の許可を仰がなければならなかったのである。

さて——。

滞りなく、老人が、用向きの口上を述べる前の作法を終えて、あらためて、平伏した時、ふいに狂四郎の方が、先手を打った。
「ご老人。おことわりしておくが、わたしは、一藩の沈浮にかかわる一大事などという泣き事なら、一切耳をお貸ししないことにして居る。また、君主を護らんとする赤心をくんでくれと申されても、興味がわかぬ。……そういう相談なら、他の御仁をえらんで頂かねばならぬ」
きっぱりと釘をさされて、老人は、みるみる当惑の表情になった。
「重々の御無礼の儀、お憤りはご尤もでござるが……」
「いや、ご家中ご苦心の計には、それと知って乗ってみたことだし、危機を脱するに多少さとるところもあって、これは、こちらからお礼を申してもいいのですが……ご依頼の儀が、いかなる事柄であれ、引受けるかどうかは、勝手にさせて頂きたい」
「お、おねがいでござる！」
老人は、はらわたをしぼるように叫んで、畳へ、額をすりつけた。
「御貴殿に、見はなされたならば……当藩は、も、もはや――」
「その泣き事は、おききしないとおことわりしましたぞ」
「眠殿！　おねがいでござる！　御貴殿に討って頂きたいのは、日本の剣客ではござらぬ！　おらんだ人でござる！　こ、これが、鬼神にまさる魔剣を使って、すでに、当藩の若者どもを五人までも仆し申したのでござる」

対手（あいて）が異人ときいて、狂四郎は、はじめて、心が動いた。

「そのおらんだ人というのは、フォン・エックという者ではありませんか！」

「おお——ご存じか！」

「会ったことはないが……その男なら、わたしの知合いの商人の仲間らしい」

料亭升屋の亭（ちん）の天井裏に忍んだ鼠小僧（ねずみこぞう）が、その人物のために、手くびを、洋剣で刺されている。

鼠小僧が、ぬすみきいたところによれば、備前屋と結託して、大規模な石炭の密輸をやろうとしているらしい。

この屋敷の主が、筑前四十七万石黒田長順の一門であることは、すでに、燭台についた藤巴（ふじどもえ）の紋で見てとっていた狂四郎である。

老人の応対を眺（なが）めているうちに、

——もしかすれば、この年寄は、黒田家の江戸家老だな。

と、察したのである。

いやしくも、黒田家ともあろう大藩が、一介の素浪人に、孤剣の援（たす）けをもとめる——その不甲斐（ふがい）なさが、狂四郎の心を、急に、頑（かたく）なにしたのであった。

しかし、対手が、備前屋の仲間の異人とあれば、話はちがって来る。これは、いかに黒田家と雖（いえど）も、しまつに終えぬ強敵に相違ない。

とはいえ、フォン・エックとたたかうことは、黒田家の困惑とは、別のこととして考えた

かった。玄界洋に臨む藩ならば、当然、密貿易者との諍いに備えての武力があるべきなのだ。縁もゆかりもない素浪人が一臂を仮すのは、滑稽に過ぎよう。
「仔細を、うかがわぬことにしよう。……てまえに、フォン・エックとたたかう予感がなくはなかった――それだけ申上げておきます」
そう云いのこして、狂四郎は、座を立った。

四

だが――。
廊下へ一歩出ようとして、狂四郎の脳裡に、ふっと、ひとつの不吉な予感がひらめいた。
「ご老人――」
狂四郎は、ふりかえって、口早やに、
「囮にされたお女中のところへ、ご案内ねがえまいか」
と、たのんだ。
訝しげに見かえす老人へ、おっかぶせて、
「急ぐことです！」
と、云った。
狂四郎の予感は、当っていた。
その部屋の襖をひらいたとたん、狂四郎は、女が、振袖を柄にまきつけた懐剣を、しごき

でしばった膝へ置き、ふかくうなだれている姿を見出したのであった。

女は、狂四郎をみとめるやいなや、反射的に、おのがのどへ、ぐさと、切尖を突き立てようとした。

無言で、たたみ二畳幅を跳んで、狂四郎は、その懐剣をたたき落した。

女は、わっと哭き伏した。

狂四郎は、後に立った老人へ、

「このお女中を、てまえに、頂きたいが、いかがでしょう？」

「どうなさる？」

「生きのびさせる方法をとります」

老人は、ちょっと逡巡していたが、つかつかと、女に寄ると、

「須美……眠狂四郎殿について参るがよい」

と、やさしく云いかけた。

幾分かののち、狂四郎は、ふかく俯向いた須美というその女をつれて、加賀屋敷の赤門の前を通りすぎて行った。

妻恋坂を下って、神田明神下の往還へ出た時、狂四郎は、はじめて、立ちどまって、須美へ声をかけた。

「これから、夜通しで、鎌倉へ、駕籠をとばすことになるが――」

須美は、鳥居わきの常夜灯のあかりを、顔の片面にあびつつ、

「鎌倉のどちらへ？」
「東慶寺という尼寺のことを、そなたもきいて居ろう。わたしは、手にあまる女人は、そこへ送り込むことにしている」
須美は、狂四郎の微笑を含んだ顔を、息をのんで、まじまじと瞶めていたが、突然、一歩すさって、はげしく、かぶりをふった。
「いやです！　尼寺へなど参りたくはありませぬ！　それより、いっそ、殺して下さいませ！」
「死ぬ理由がないのに死のうとする女人にとって、東慶寺は、もっともふさわしいところといえる」
「いいえ！　わたしは、あの役目を仰せつけられた時、死ぬ覚悟をきめたのでございます。女として、最大の恥をさらして、どうして、おめおめと生きのびられましょう。わたくしの亡き父は、かねがね、生き恥をさらすより、死をえらべと教えてくれて居りました」
「肌をみせたのが、死なねばならぬ恥か？」
「主命とは申せ、いずれ、家中のもの笑いに相成りまする」
「黒田藩のみが、そなたの生きてゆく世界ではあるまい」
「貴方さまは、わたくしをさげすんでおいでなされる故に、わたくしを、品物のようにおゆずり受けなさいましたのでしょう？　貴方さまのような、冷酷なおひとに、女の心など、おわかりになりませぬ！　わたくしは貴方さまの記憶の中に恥さらしの女としてとどまること

を思っただけでも、生きていたくはございませぬ！」

須美の興奮した語調は、剃刀のように、じぶんでじぶんを傷つける鋭利さがあった。

口をつぐんで、じっと須美を凝視していた狂四郎は、すっと出て、その片手くびを摑んだ。

そして、強い力で、須美のからだをひっぱって、明神の境内へ、入って行った。

構内をくぐって、右手の楊弓場をまわり、桜樹のならんだ瑞籬へむかった。

そこには、掛茶屋が崖に臨んでいて、昼間ならば、詣人を集めて、遠眼鏡などを出して、大変な賑いをみせている場所であったが、陽が落ちるとともに、茶屋の人々も、境内から降りてしまい、まったく人の気配が絶えて淋しいのである。

狂四郎は、その掛茶屋の一軒の板戸を、無造作にひきあけると、がらんとした茣蓙敷きの板の間へあがった。

崖側には、障子もなにも立ててなく、星空の下に、夜靄に、模糊としてけむった江戸の町が、遠く広く、ひろがっていた。

起伏する黒い屋根の陰で、灯影が、靄に滲んで、静かな柔かな色を、散らばせていた。

狂四郎は、なんの説明もせず、この夜景へむかって、須美を、佇ませた。

いくばくかの時が移るにつれて、須美の心もまた、重いものから解き放たれて、涼しい夜気の中に、からだが溶けてゆくような気分に移っていた。

なんとなく……眸子を狂四郎へまわして、その視線にまともにぶっつかると、遽に、須美の頬に、血がのぼった。

それを待っていた狂四郎は、もろ手をさしのべて、須美をひき寄せた。

須美は、まぶたをとじて、からだから力を抜いた。

こんどは、男を乗せても、四肢をからみつかせる勇気は、須美にはなかった。

唇（くちびる）に唇をうけた恍惚（こうこつ）感で、処女のからだは、ぐったりと、無抵抗であった。わずかに、下着もめくれて、柔肌が夜気にふれた瞬間、びくっと痙攣（けいれん）が、股（もも）から脛（はぎ）へ走っていたのである。

半刻（とき）あまり過ぎてから――。

同じ場所に胡坐（こざ）して、腕を組んで、自嘲（じちょう）の眼眸（まなざし）を夜景に投じている狂四郎の背中へ、須美は、そっとすがって、嗚咽（おえつ）をもらしていた。夢魔に翫（もてあそ）ばれたに似たこの空茶屋でのできごとを、女としての唯一（ゆいいつ）の思い出として、尼寺に行く決意をした――その泪（なみだ）であった。

おらんだ殺法

一

江戸の旅立ちは、夜明け前の真暗な時刻に、家を出たものである。高輪(たかなわ)の大木戸をくぐって、朱引外（市外地）を踏んで、ようやく、しらじらと、周囲の景色が浮きあがる。

大木戸の内と外とは、眺(なが)めが一変して、旅人の気分もおのずからあらたまる。いよいよ江戸をはなれる——その心が、はっきりと、あたりの風光によって、さだまるのであった。

往還は、片側町になり、海に沿うて、牛町、車町など、荷車を挽(ひ)く牛の宿屋が並んで、汐(しお)香(か)に、そのにおいをまじえる朝風が、吹きぬけて行く。

　芝浦や車のうえにはつ霞(がすみ)

この一句がすべてを表現し得ていよう。

むかしは、高縄手(たかなわて)といい、伊皿子(いさらご)より二本榎(にほんえのき)に通ずる高台であった。泉岳寺や五智如来(ごちにょらい)のほかに、浮巣の森は、大むかし、水鳥の浮巣を作った渚洲(なぎさす)で、詩人画師の好材料であったとか……。

この浮巣の森はずれの立場(たてば)茶屋の床几(しょうぎ)に、しょんぼりと腰を下して、明けはなたれた淡々(あわあわ)

した海へ、うつろな眼眸を送っているのは、黒田藩江戸家老江藤頼母の侍女須美であった。

連れの眠狂四郎は、駕籠をたのみに、問屋場へ行っていた。

須美は、鎌倉の東慶寺へ送られようとしている。そこで、幾年すごせばいいのか、じぶんにもわからないのである。

魂が抜けた——その形容がふさわしい、蒼い蠟色に沈んだ顔であったし、からだは他人のもののように力を失くして、指一本うごかすことも忘れている風情であった。

ただ、からだの一部分に、かすかな疼痛をともなう羞恥の痕跡があり——それを、須美は、ぴったりと腿を合わせて、秘めている。

脳裡は、何かがいっぱいつまっているようであり乍ら、思考の力が全く働かないでいる。

勝気を誇りにして、薙刀を把っては家中の若ざむらいたちに敵を持たなかった昨日までのじぶんが、嘘のように、遠い存在になってしまっていた。

と——。

須美の面前を、急ぎ足に、一人の旅装束の武士が通り過ぎようとした。

茫然と、送るともなく送ったまなざしが、その一文字笠の陰の横顔につきあたったとたん、須美は、反射的に、床几から立ちあがって、

「諏訪さま！」

と、呼んでいた。

さして高い声ではなかったが、武士は、きっとなって、振りかえった。

須美をみとめた眸子(ひとみ)が、急に、険しく光ったのは、心が烈(はげ)しく荒れている証拠であったろう。

黒田藩でも、名門に属する家柄(いえがら)の子息で、代々定府(じょうふ)であった。定府の士が、国許(くにもと)へ帰ることは、当時として先(ま)ずあり得ないことだった。

のみならず、須美は、この諏訪俊吾の許嫁(いいなずけ)である城代家老の娘琴路が、三月前に出府して来ているのを知っていた。二人は、七年ぶりに逢(あ)ったときく。

夢見るような幸せが、おとずれた筈(はず)なのに、許嫁をすてて、定府の士たる者が、帰国しようとするのは、余程の事由がなければならない。

ふらふらと、俊吾へ歩み寄った須美は、しかし、なんと云えばいいのか、あせればあせる程、口は膠(にかわ)づけされたように開かなかった。

俊吾は、須美の悲痛な面差(おもざし)へ、侮蔑(ぶべつ)の視線をあてていたが、無言で、すっと、身をかわして、歩き出した。

「諏訪さま！　な、なぜ、お帰りになるのでございますか？」

須美が追いすがると、俊吾は、きりすてるように、

「あんたは、もう黒田藩とはなんの関(かか)わりもない。眠狂四郎とやら申す浪人者へ呉(く)れられた女だ。余計なことをきくな！」

「で、でも……」

須美は、喘(あえ)いだ。須美は、俊吾に許嫁があるとあきらめつつ、思慕を寄せた一時期があっ

たのである。

七、八歩、そのまま進んでから、不意に、俊吾が、頭をまわして狂的な目つきで、須美を睨んだ。

「それとも、そなたは、眠狂四郎を指嗾して、フォン・エックと闘わせる自信があるというのか？」

その語気の凄じさに、須美は、息を引いた。

「なぜ、死ななかった？　たわけ！　売女！」

俊吾の右手がおどり、須美は、頬の痛みにまぶたをとじて、よろめいた。

「死ね！　死ね！　恥を知れ！」

いままでおさえていた激情を一挙に爆発させた俊吾は、平手打ちだけでは足らず、足をあげて、須美の腰を蹴った。

そして、なお口ぎたない罵声を数言、あびせておいて、踵をかえした。

その行手に、いつの間にか、眠狂四郎が、うっそりと立っていた。

愕っと、全身を凍らせた俊吾は、しかし、次の瞬間、絶望的なみにくい歪んだ形相と化すや、いきなり、

「やああっ！」

と、喚きざまに、抜打ちかけた。

躱すともみえぬ身ごなしで、その一撃を肩さきに流しておいて、狂四郎は、俊吾の右手く

びを摑んだ。
強い圧力を加えられたとも思えぬのに、俊吾は、指がしびれて、柄をはなした。
「斬れ！」
ふてくされて、地べたへ、どさっと坐った。
狂四郎は、血の気をうしなった俊吾の顔を、じっと見おろし乍ら、
「生命を粗末にする理由をきこう」
と、訊ねた。俊吾の一撃は、あきらかに、敢えて狂四郎の一閃を受ける覚悟によるものだった。
江藤頼母邸において、手槍を突きかけた一人である俊吾が、狂四郎を討てる自信のあろう筈がなかったのである。
俊吾は、顔の筋肉を、びくびくと痙攣さしたなり、こたえなかった。
「わたしが、フォン・エックとの試合を拒絶したことへの憤怒のみで、斬りかかったとは思えぬ様子だが――」
「…………」
「それとも、それだけの憎悪で、逆上したのか？」
狂四郎は、訊ねるだけ訊ねて、対手の頑なな態度がほぐれぬと見てとるや、そこへすてて、須美へ、ついて来るように、目で促した。
すると、須美は、じぶんでも思いがけない興奮に駆られて、

「眠さま、おねがいでございます！　この諏訪俊吾さまは、定府のおつとめでございますし、琴路さまと申される許嫁のかたも江戸に出て参られて居ります。だのに、国許にお帰りなさろうとするのは、ふかい仔細があるに相違ございませぬ。きいてあげて下さいませ！　おねがいでございます！」

と、必死に嘆願した。

すると、俊吾は、ふふんと自嗤した。

「もう、手おくれだ！　琴路は、出て行ってしまった。二度と戻っては来ぬ！」

「え？　ど、どこへお行きなされたのでございます？」

「フォン・エックのところへだ。人身御供だ！　死にに行ったんだ！」

これをきいて、はじめて、狂四郎の冷やかな異相に鋭い緊張が来た。

二

鎖国の時代にも、その時世によって、外国船に対する処置は、厳令が敷かれたり、緩和されたりしている。

寛政三年の異国船取扱い方については、なるべく穏便な態度をもって接し、布教交易ともに不可能である旨を諭して退去せしめる方針がとられている。

ところが、それから三十五年後の文政八年には、大阪の同心高橋作左衛門の建白によって、イギリスはじめ、南蛮、西洋の儀は、ことごとく禁制邪教の国であるから、いずれの浦方に

おいても、異国船が乗寄せて来たならば、うむをいわせず、打払ってしまうべし、という寛永度の法令に逆戻りさせてしまっている。

当時、日本においては、和蘭(オランダ)一国のみ、長崎出島に商館を置いて、交易を許されていたことは、周知のごとくである。

そのために、日本へ正式入国するためには、和蘭人といつわって、和蘭商館の甲比丹(カピタン)の随員とならなければならなかった。独逸(ドイツ)人たるシーボルトが、和蘭人といつわったのは、その故である。

だが、密貿易によって巨利をむさぼろうと志す外人は、長崎入港がのぞめないので、やむなく、漂流者をよそおって、見知らぬ浜辺へ辿(たど)りつき、囚獄に拘禁される難をまぬがれる手段をとらなければならなかったのである。

フォン・エックも、その一人であった。

しかも、フォン・エックのやりかたは、さらに巧妙であった。

三年前の夏――。

筑前遠賀(ちくぜんおんが)郡の東偏の海湾洞海(くきのうみ)(大渡川)へ、深夜、一艘(そう)の小舟が、漂着した。乗っていたのは、月代(さかやき)を子供のようにして、中髪ばかり長く三つ組に下げた唐人であった。すぐに、村役人のところへ引立てられると、与えられた筆紙で、

「大清乾隆、中国広東省広州府新寧県大澳港漁船、風ニ漂イ流レテ此国ニ来リ、上下(東西)ヲ知ラズ、国王肯引ニ到(いた)リ正ニ国ニ回リ家中ノ父母妻子ヲ悦(よろこ)バス可(べ)キヲ得ンコトヲ求

ム」と記した。
それから、広州は、玄仙老爺、天后聖母、水仙老爺の三神を拝し、決して、ばてれんではないと主張したのであった。
陳江徳と名のるその唐人は、福岡城へ護送され、月番の国家老の吟味を受けることになったが、彼がただものでなかったことは、大手門をくぐるや、たちまち、態度を、別人のように昂然たる威容にあらためたのであきらかであった。
彼は、城代家老とじきじき面談したい旨を申入れ、それがゆるされるや、人ばらいをねがい、いつの間にひろったのか、長服のかくしから、一個の黒石をとり出して、膝の前に置き、流暢な日本語で、
「この燃石が、御当家の財政を、二倍いな数倍にする宝であることをご存じでござりましょうや？」
と、きり出したのであった。
筑前の地下にねむる石炭を掘らせるべく密入国して来た大胆な貿易者だったのである。自分は、一使用人にすぎず、この計画者は、フォン・エックという和蘭人で、来月早々、袖湊の西北四海里の大島に、ひそかに船を寄せる筈であるから、それまでに、石炭を用意して、運送してくれるなら、まず珍奇重宝を呈上する、という申出であった。
密貿易は、たしかに、どこの藩にとっても、非常な魅力であった。
寛永十三年の禁令以後、主たる密貿易者は、その背景に、大藩を仰いでいる。寛文の伊藤

小左衛門も、延宝の末次平蔵も、享保(きょうほう)の先生金(シャンスイ)右衛門も——。

幕府もまた、抜荷買いは、禁制宗門改めとは性質を異にする故に、死罪とはしなかった。ただ、享保以後、家財欠所追放遠島、などに課すと老中連署を出したが、法度(はっと)は空文にひとしかった。

城代家老宗像郷左衛門(むなかたごうざえもん)は、剛愎(ごうふく)で決断力に富んでいたし、黒田藩の財政も、他藩同様、決して楽ではなかったので、陳江徳の申出を、公儀隠密に気どられぬ程度に、という条件で容(い)れたのであった。

その結果、黒田藩がつぎつぎと手に入れたのは、緞子(どんす)、繻子(しゅす)、天鵞絨(びろうど)の織物、羅紗(らしゃ)、猩々(しょうじょう)皮、豹(ひょう)、虎(とら)の皮、南京の焼物、時計、玻璃(はり)、珊瑚樹(さんごじゅ)、瑪瑙(めのう)、象牙(ぞうげ)、麝香(じゃこう)、伽羅(きゃら)、沈香(じんこう)、白檀(びゃくだん)、黒檀(こくたん)などであった。

爾来(じらい)、フォン・エックの指揮する船は、三月に一度ずつ大島にあらわれるようになっていたのである。

宗像郷左衛門が、フォン・エックと面接したのは、それから、一年後であった。

フォン・エックは、真珠をちりばめた鏡台と、洋酒を土産にして、博多袖湊へ、軽舸(けいか)を乗りつけて、宗像家別邸へ入った。

六尺数寸もある巨軀(きょく)の持主だけあって、酒は強く、二升を空けて、平然たるものだった。

やがて、フォン・エックは、突然、のっそり立って、床の間へ行き、刀架けにのった郷左衛門自慢の最上大業物(おおわざもの)陸奥守(つのかみ)忠吉を無造作につかみとって、しきりにひね

くりまわしていたが、露骨な冷笑をうかべて、もとへかえしたことだった。
その直後、通事役の陳江徳が、
「日本の刀は、実用には不便で、腰の飾りにすぎない、と頭領は申して居りますが、異議のおありなさる御仁は、ひとつ、頭領と試合をされては如何でございましょう？」
と、きり出したのであった。

三

居ならんだ若ざむらいたちは、眉をあげて、フォン・エックを凝視した。
エックは、大盃を一息に干してから、大袈裟な哄笑を噴きあげ、若ざむらい一人一人へ、指をさしつけ乍ら、何か大声で云いはなった。
あきらかに、自分たちを嘲罵しているとわかった。
陳江徳が、にやにやして、
「もし、自分に勝てば、船にある銀二函二貫を進呈すると申して居ります」
と、告げた。
幕府では、五匁銀を鋳造し、時価に拘らず十二枚をもって金一両に通用させていた時代であった。まして、大阪以西は、銀相場である。銀二貫とは、おそるべきねうちであった。
「よかろう。……どうじゃ、銀二貫を儲けたい有志は居らぬか。申出い」
郷左衛門が、促すと、即座に、五名が、名のり出た。

するとエック、私語を交していた陳江徳が、ひどく真剣な面持をつくって、
「御家老様に申上げます。エックは、もし、名のり出られた五名の方々を、ことごとく倒したら、まことに失礼ではありますが、そこにおいでの——」
と、郷左衛門のわきにひかえた息女琴路を指さして、
「お嬢様を頂戴いたしたいと申して居ります」
「無礼なっ！」
その叫びは、五名の有志のうち三名までが、同時に、その口から発した。
「こちらは、銀二貫を賭けて居りまする。ならば、そちら様も、それに相応する品を賭けて頂きとう存じまする」
陳江徳は、冷然として、そう云いはなった。
「承知した」
郷左衛門が、きっぱりとこたえたのは、勿論、異邦人たちの驕傲に対する日本の武士としての意地であったろうが、恰度、公儀より当主長順に、長崎の番所に備える大筒を鋳造するように命じられていたので、銀二貫が、のどから手が出る程欲しかったからでもあった。
琴路は、郷左衛門の娘たるにふさわしく、わずかに頬を蒼ざめさせただけで、眉毛一本動かさなかった。
「大田主馬、立合え！」
郷左衛門に命じられて、立ったのは、江戸勤番中、特にえらばれて、当代無比と称せられ

た戸ヶ崎熊太郎の道場へ行き、神道無念流の免許をもらって来た藩中の麒麟児（きりんじ）であった。

試合は、広縁につづく白砂の平庭でおこなわれた。

陳江徳がはこんで来た長剣を、フォン・エックが、すらりと抜きはなった時、一同のうちから、失笑が起った。

それは、竹の杖（つえ）ほどの太さもない両刃細身の長剣（レピアー）であった。

剣というものは、斬るものであると思いきめている人々の目に、たしかに、この洋刃は、なんとも頼りない武器に映った。

エックが庭に降り立って、その剣尖をつまんで、弓なりに、しなやかに撓（たわ）め乍ら、大田主馬へ、冷たいうすら笑いを送るのを眺めた一同は、いよいよ、それを玩具（がんぐ）じみたものに感じないではいられなかった。

エックが、剣尖をはじくや、それは、秋風になびく薄（すすき）の穂にも似て、こまやかに、ふるえたのである。

「――いざ」

主馬が白刃を青眼に構えるや、エックの方は、わざと大袈裟な身振（ジェスト）で、敬礼（サリユウート）をなして、両脚を大きくひらき、剣身を、眸子（ひとみ）と水平に挙げ、右腕を伸べてぴたりと突き出し、左腕を曲げて、頭の高さまでにもちあげた。すなわち、フェンシングのメトオド・プレミイエの優美な型であった。

「隙（すき）だらけではないか」

広縁で、だれかが、小声で云い、その相槌もうたれた。
主馬自身もまた、この構えに対して、かなりの軽蔑を感じたことだった。
――これは、棒術の扱きの残心……斜の構えに似ているが、片手とは、笑止！
そう考え、棒術の突きを受ける心得を備えつつ、じりっと間合をつめた。
ところが、エックは、そのままの位置で、剣尖を、左から右へ、くるっくるっとまわして、丸い円を描きはじめた。
読者は、すでに、眠狂四郎の円月殺法によって、切尖が円を描くことにお馴染であるが、エックのしめす剣尖の回転が、それと全く異った点は、かなりのスピードをもち、且つ、しだいに輪を大きくしていくことであった。この回転の剣義は、フランスの有名な剣士ネランのあみ出したもので、対手は、これにまどわされて、パスとかランジといった突きの手を封じられてしまうのであった。
――なんの児戯ぞ！
主馬は、非常な速度で回転する洋剣に対して、なおも、一寸きざみの肉薄をつづけていたが、
「えいっ！」
威嚇の一撃を送った。
すると、エックは、鮮かな敏捷さで、ぱっと飛び退った。
主馬の追い打ちは、エックを、そうして、三度び、飛び退らせた。巨軀は、見えぬ翼を持

っているように軽やかであった。
主馬が、胴を薙(な)ぎはらった時、エックは、その一閃に吹きはらわれるように横へ跳んだし、主馬が、陰の構えから、千鳥の小霞みに踏んで袈裟斬りをはなつや、エックは、氷上をすべるがごとく、一間をしりぞいていた。
なんの反撃(リポスト)もみせないのであった。
主馬は、ついに、侮蔑に苛立(いらだ)ちを交えて、きわめて大胆に、充分に、体を延ばして、きえーっと宙に刃風を唸(うな)らせて、エックへ横面討ちをあびせた。
広縁の人々は、そのまま、主馬の姿勢が、巫者(ふしゃ)の不動縛りに遭ったごとく固着したのに、どきっとなった。
主馬の胸には、洋剣の切尖が、ふかぶかと、突き刺さっていたのである。
エックが、ぐっと引き抜くや、主馬のからだは、朽木のように、芝生に倒れた。
「それがし、二番手！」
のこり四名のうちから、そう叫んでつッ立ちあがった者を、郷左衛門は、
「待てっ！」
と、とどめた。
「本日は、これまでじゃ」
エックは、陳江徳から、これをつたえられるや、憤然として、抗議した。
しかし、郷左衛門は、

「五番勝負を、本日この場でやると約束したおぼえはない」
と、はねつけた。
「よし！　それなら、自分は、船を大島へ碇泊させるたびに、この屋敷を訪問して、一人ずつ倒してみせるであろう。そして、その令嬢をわがものにすることを誓う」
そう云いのこして、エックは、去ったのであった。
だが、エックは、その手間をかける必要はなかった。
次の日の夜半、エックと陳江徳が、袖湊から軽舸をこぎ出そうとしたところへ、覆面の士四名がかけつけたのである。
翌朝、近くに住む漁夫は、浜辺に俯っ伏している四つの死骸を発見した。
いずれも、胸に、みごとなひと突きを受けていた。
郷左衛門が、エックからの一書を受け取ったのは、その日のうちだった。
「はからずも、一挙に五番勝負をかたづけることができて、この上のよろこびはない。ただちに、御息女を頂戴いたしたいところであるが、当方としては、あまりに弱い敵をえらんだ遺憾なしとしない。よって、来春まで、御息女を、おあずけいたしておくゆえ、それまでに、日本無双の剣士をさがしておかれたい。その試合によって、当方が敗れれば、銀二貫呈上、勝てば約束を履行して頂くことにしよう。なお、試合の場所は、江戸にしたい。というのは、幕府の実権者たちの御用をつとめる備前屋なる商人と、当方は、正式の交易取引をする約が成って、以後は、江戸に、居をさだめることになったからで

ある。御息女を、来年春までに、江戸へ連れて行かれておくことを望む。もし、この条、違約の節は、黒田藩を対手どって、一戦を交える決意であり、またその自信があることを明言する。当方に、備前屋が味方し、したがって、本丸御老中寵臣土方縫殿助の後楯があることをお忘れなく――」

諏訪俊吾が、眠狂四郎に語ったいきさつは、以上のような事柄であった。

フォン・エックは、三日前にいよいよ、六番目の試合の儀を申入れて来たのである。

江戸の黒田屋敷は、狂四郎に、フォン・エックとの試合を拒絶されて、ついに、絶望のどん底に落ちてしまったのである。

ところが、昨夜、突然、琴路が、姿を消したのであった。じぶん一人が生贄になることによって、藩の安泰が保たれるのであれば――という書き置きがのこしてあった。

俊吾は、この悲惨を、宗像郷左衛門に報告するために、帰国しようとしていたのである。

四

その日の黄昏刻のことである。

金八に櫓をこがせて、眠狂四郎は、舟を大川から、まっすぐに、海へ出していた。

石川島をまわって、土地つづきの佃島の、漁船の避難場になっている掘割に入り、住吉神社下の石垣に着くと、

「ここで待っていてくれ」

と、云いのこして、掘割に沿うた道を、海の側へむかって、歩いて行った。

左方に、人足寄場のだだ広い空地をのぞむ掘割の出口に立つと、そこに、千石あまりの船が、寄せられていて、艫から石垣に、歩み板が架けてあった。

舷の下へ、横書きで、

「広州府新寧県大澳港」

と、彫りつけてあるのが、読めた。

狂四郎は、逡巡わず、すたすたと、歩み板を渡りかけた。

唐人の水主が、何か喚き乍ら、艫で、渡って来てはならぬ、と両手をふったが、狂四郎は、かまわなかった。

あと二歩で、舷へ達するところで、狂四郎を立ちどまらせたのは、水主の背後から、こちらの胸へ狙いつけた短銃の筒口であった。

握っているのは、長服の唐人であった。

「御用がおありなら、そこで述べられるがいい」

流暢な日本語をつかうのをきいて、

「おぬしが、陳江徳か？」

と、訊き、頷くのを見てとるやいなや、狂四郎の五体が、風のように奔った。

銃声がとどろいた瞬間、狂四郎は、弾丸の唸りを、頭上に掠めさせる低い姿勢で、無想正

宗を、居合抜きに、陳江徳の胴へ送り込んでいた。

斜横へ駆けた時、陳江徳は、脾腹(ひばら)をおさえて、膝(ひざ)をつき、陰惨に歪めた形相を、徐々に俯向けていた。

狂四郎は、おびえあがった水主へ、手真似(てまね)で、船内へ、自分がここにいることを報(しら)せろと命じた。

黄色の襟飾(えりかざり)のついた青い襯衣(しんい)、黒い天鵞絨の上衣に、やわらかそうな羅紗のズボン——というでたちの巨漢が、洋剣を片手にして、船上にあらわれたのは、それからものの三分も過ぎてはいなかった。

狂四郎は、巨漢のうしろにしたがった水主の群へ、

「通弁できる者がいるならば、黒田藩より、六番目の試合に参った、とつたえろ」

と、云った。

フォン・エックは、その旨に合点するや、にやっとして、いかにも恭々(うやうや)しく、長剣を抜きはなって、把柄(グリップ)を鼻先へひきつけ、剣身を直立させ、片足を引き乍ら、上半身を折りつつ、剣尖を、足もとへ下げた。

狂四郎は、衂(ちぬ)られた無想正宗をダラリとさげたなり、エックが身構えるのを待った。

エックも、また、狂四郎が切尖をつきつけて来るのを待ったが、いつまで経(た)ってもその静止相をかえぬ狂四郎に、凄(すご)い睥睨(へいげい)をあびせて、さっと、構(ガード)えをとるや、例の目まぐるしい剣尖の回転を開始した。

狂四郎は、しかし、微動もせず、いっそ、物倦（ものう）げにさえみえる半眼で、エックの烈（はげ）しく燃える眼光を受けとめていた。

当然――エックは、大田主馬とたたかった時とは、その立場を逆に、おのれの方から、稲妻のような突き（スラスト）を発揮しなければならなかった。

すると、狂四郎の方は、エックが主馬に対して、そうしたように、軽やかに、後へ飛び移った。

パスあるいはランジと称する突きの合間に、びゅっ、びゅっと、宙を截（き）るカットが加えられたが、狂四郎は、これらの攻撃をことごとく、はずした。

ついに――。

猛獣を襲った隼（はやぶさ）が、新たな鋭気をとりもどすべく、翼を一時やすめるように、エックは、もとの構え（ガード）にもどって、かっと、狂四郎を睨みすえた。いたずらに、むなしく、空気ばかりを衝（つ）きまくり、搏（う）ち払った焦燥による力の消耗が、その鼻腔（びこう）の喘（あえ）ぎとなっていた。

狂四郎は、この時、はじめて、ゆっくりと、一歩出て、無想正宗を、地摺り下段にとった。

敵の描く円が、水面に拡（ひろ）がる波紋であったとするならば、狂四郎の描く円は、その称（とな）えのごとく、水面に映ったまろやかな月であった。

無想正宗が、完全なる円月を描き終った刹那（せつな）、エックは、阿修羅（あしゅら）のごとく褐色（かっしょく）の髪を逆立てて、飛矢よりも迅（はや）い白い閃光（せんこう）をはなった。

同時に、狂四郎が、ぱっと小手をひるがえして、一颯（いっさつ）、円端からさらに新しい円線を生ん

で描くや、洋剣は、鍔(キヨン)さき一寸あまりの個所から切りとばされて、空中へきらきらとはねあがっていた。

次に——。上段へ舞った狂四郎の白刃は、燕(つばめ)がえしに、エックの頸根(くびね)へ、ざくっと嚙(か)みついていたのであった。

首領を仆(たお)されるや、たちまち、蛙(かえる)のように平伏して、点頭する水主たちをしり目に、狂四郎が、胴の間へ降りて行った時——。

異邦人の、毛むくじゃらな巨軀によって、一夜中弄(もてあそ)ばれた黒田藩城代家老の娘は、自ら、おのがのどを、懐剣で突いて、すでに、そこの臥床(ふしど)で、こときれていた。

「二人狂四郎」から「円月決闘」までは『眠狂四郎無頼控㈢』として昭和三十二年四月、「尼寺暮色」から「おらんだ殺法」までは『同㈣』として昭和三十二年八月、新潮社から刊行された。

表記について

新潮文庫の文字表記については、原文を尊重するという見地に立ち、次のように方針を定めました。

一、旧仮名づかいで書かれた口語文の作品は、新仮名づかいに改める。
二、文語文の作品は旧仮名づかいのままとする。
三、旧字体で書かれているものは、原則として新字体に改める。
四、難読と思われる語には振仮名をつける。

なお本作品中、今日の観点からみると差別的ととられかねない表現が散見しますが、作品自体のもつ文学性ならびに芸術性、また著者がすでに故人であるという事情に鑑(かんが)み、原文どおりとしました。

（新潮文庫編集部）

眠狂四郎無頼控（三）

新潮文庫　し－5－8

昭和三十五年十月十日発行
平成五年五月十五日四十四刷改版
平成六年六月十日四十五刷

著者　柴田錬三郎

発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　営業部(〇三)三二六六―五一一一
編集部(〇三)三二六六―五四四〇
振替　東京四―八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社三秀舎　製本・加藤製本株式会社

ISBN4-10-115008-7 C0193